

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers King Seon
g clone of another

【作者名】

炎狼

【あらすじ】

白雲・聖（しらくも・ひじり）はなのははやてと同じ地球出身の魔導師である。彼は本局クロノ・ハラオウン直属の執務官の青年である。そんな彼が八神はやてが新たに設立する部隊「機動六課」に配属が決まった。だが彼にはある重大な秘密があった。果たして彼は「機動六課」でうまくやっていけるのか？そして彼に隠された秘密とは？
二作目というか同時進行というかとりあえずは二つ目です。駄文になってしまっておそれもありますが、どうか温かい目で見てやってくださいお願いします。暁でもやっていますのでそちらもどうぞ

6月2日 タイトルを変更しました。どうもしっくりこなかったので。

プロローグ

「異動命令い!？」

時空管理局本局のクロノ・ハラオウン提督の私室で一人の青年が素っ頓狂な声を上げた。青年の名前は白雲聖（しらくもひじり）若干長めの黒髪と真紅の瞳が特徴の青年だ。

「ああ。そうだ」

聖の驚いた声とは正反対の冷静な声音でクロノが言った。そしてクロノはこう続けた。

「聖、君に異動してもらうのは機動六課という部隊だ」

「機動六課？聞いたことないツスね。新部隊ですか？」

「ああ、実は僕の友人の八神はやてがその部隊をつくってな。僕もそれに少しかんでいるんだよ。他は以前君も会ったことがあると思うが聖王教会のカリムも一枚かんでいてね。ところではやてについては知っていたかな？」

「ええ。まあ、本人に会ったことはないツスけど」

「そうか。でははやてのことは後々本人にでも聞いてくれ」

「えー……」

「とりあえず、今決まっている六課のデータを送るから見えてくれ」

クロノがそういつと聖の前にモニターが現れデータが表示される。それをしばらく無言で眺めていた聖が口を開いた。

「クロノさん？かなり言いにくいですけどこれ……」

「……やはり君もそう思うか。」

クロノも椅子に座りながら苦笑いをしている。

「ずいぶん突っ込みどころ満載の部隊ですね……」

そうなのだこの部隊明らかに突っ込むべきところが多々ある。あげるとすれば本局でも有名な白い悪「ソモ」とい「エース・オブ・エース」の称号を持つ高町なのは一等空尉とクロノ提督の義妹にあたるフェイト・T・ハラオウン執務官そして部隊長である八神はやての存在。他にも守護騎士やらなんやらいっぱいあるがそれはさておき。

「っーかこれでよく査察通りましたね……」

「ああ、そこは隊長たちのランクをリミッターで制限しているからなそれで何とかなった」

「なる」

聖もそれで納得した様子だ。そう機動六課はなのは達のような強力な魔導師の過剰保有オバホルドの状態であるため、隊長たちにはそれぞれ能力リミッターというものがかかっている。ちなみになのはとフェイトは2ランクダウンではやては4ランクダウンだ。

「そういつとで君もリミッターをかけさせてもらっぞ。いいな聖？」

「はあ!？」

「当たり前だろう。今の時点でかなりギリギリの状態なんだ君も能力リミッターをかけるのは至極当然なことだ。ちなみに2ランクダウンだ」

「えー……。今明かされた衝撃の事実に僕びっくり（棒）」

聖はクロノに初めて明かされた事実に魂が抜けかけている。それもそうだろうリミッターをかけられてしまうということは自分の能力が最大限発揮できないのと同じだ。

「まあ、安心しろ。必要なときはちゃんとはずしてやるから」

聖の驚愕とは裏腹にクロノはいたって冷静だった。さすが提督までいくとかなり度量も広くなるようだ。

「はあ……。まあいいですよ。それで？ いつから配属なんですか？」

「ん？ ああ、言ってなかったか六課が本格的に動かすのは二週間後だが君が配属されるのは明日の午後三時だ。」

「はや!! そして何より急!! なんでそんなことをもつと早く言ってくれないんですか!？」

さすがの聖もあまりに急なことなので座っていたからソファから思わず立ち上がってしまった。それもそうだ普通ならば3日くらい前に通知がくるものだろう。それなのにこないとはおそらく聖ではなくても驚くだろう。

「いやあ……最近忙しくてなすっかり忘れていてなすまんすまん。でも今から準備すれば明日の朝十時にはミッドに着くだろうっ。」

「それは……そうですね。」

確かに今の時刻は午前十時今日の夜の便で行けば明日の朝には着くだろう。今から部屋の私物を整理したりしなければならぬが……。

「というわけで君は現時刻を持って我が隊から除隊とする。急いで準備を整えておけよ。」

「へーい。……ったく誰のせいで急がなきゃならぬーと思ってんだが……。」

「何か言ったか？」

聖の文句が聞こえたのかクロノが聖をジト目で睨んだ。

クロノの視線に聖は首を横に振りながら言った。

「いーえ何も。それでは俺はこれで世話になりましたクロノ提督。」

「ああ、ではまたな聖。たまには連絡をしるよ。」

「へーいへーい。さじゃ。」

そういつと聖はクロノの部屋を後にした。

クロノの私室を後にした聖は自分の部屋に急いでいた。聖の部屋は本局の居住区にあるためクロノの私室とは結構離れているのだ。

「はあ〜。まさかリミッターをかけられるとはな。」

歩きながら聖は一人ごちるがそれに答えるものがいた。

いいではありませんか。修行だと思ってみて楽しめば

声の主は聖の腕に巻かれたブレスレットからだった。そうこのブレスレットこそ聖の持つインテリジェントデバイス「安綱」だ。

「そうはいっけど安綱よ〜」

はいはい。弱音をはかない！さっさと自分の部屋にもどって夜の便のための準備をしろよ！

「わーってるよ。オメーは俺の母さんかよ」

ええ。あなたのお母様によく頼むと言われておりますので。はいはいちゃっっちゃと動く〜！

「そう急かすなってるの・・・ん？」

ふと聖が歩くのをやめた。その目線の先には二人の女の子がいた。一人は青髪の短髪の女の子でもう一人はオレンジ髪をツインテールにした女の子だった。よく見ると二人とも陸士部隊の制服を着ている。友人同士なのだろうかしかし、どうにも様子がおかしく見えた聖は。

「声は遠くて聞こえないけどあの様子からして迷ってんじゃないかな？」

助けてあげるんですか？

安綱が聞くと聖は「くんと頷いた。

「そりゃまあ、目の前で困ってる人がいるんだから助けてやらんわけにはいかないだろ？」

フフ。あなたのそういうところはとてもいいと思いますよ？

聖は二人の下へと小走りに駆けていった。

近づいていくにつれて2人が言い合っている声が聞き取れるようになった。

「だからスバル！こっちだって言ってるでしょ！」

とオレンジ髪の子がスバルと呼ばれた子に対し声を荒げる。

「え〜、だってそっちさっき行かなかった？ティア？」

二人の会話を聞く限りどうやら本当に迷ってしまっているようだった。

「ちよいちよい、そこのお二人さん」

「え？」

聖が声をかけると二人とも振り返ったそして聖の制服が執務官の

ものだとわかるとあわてて敬礼をした。

「は、はい！なんででしょうか!？」

見事にハモった。二人は驚き半分不安半分といった顔をしている。それもそうだろういきなり本局で執務官に話しかけられれば誰でもびびる。それが女の子だったらなおさらだ。

「いや。敬礼は別にいいよ。なんか二人とも迷ってるみたいだったからさ。本局は初めて?」

聖が聞くとスバルと呼ばれた子の方が答えた。

「はい……。実は第一訓練場に行きたいんですけどどこにあるのかわからなくて」

「第一訓練場ならすぐ近くだよ地図貸してみ」

するとティアと呼ばれた子の方が持っていた地図を聖に渡した。

「えっと今此処だから、ここの角を右に曲がってまっすぐ行ってつきあたりを左に行けばすぐに着くよ。こんなことでいいかな?」

「はい。ありがとうございます。行ってみます。」

「ああ。がんばってな。バイバイお二人さん。」

そういつと聖は踵を返し自分の部屋への道を急いだ。すると後ろから声をかけられた。

「ありがとうございますー!!」

どうやらスバルのようだしかし聖は振り返らず手を振った。

部屋に戻った聖は急いで部屋を整理し荷物を六課に送った。そして夜。

「ちよつとこれでこの部屋ともお別れか」

荷物をまとめた聖はがらんとした自分の部屋を見回した。

その様子に安綱が「聖様？」と疑問を浮かべた声を出し続けた。

「感慨深いですか？」

「ん〜。どうだろうな。まあでも俺が本局に入ってから世話になった部屋だからな多少は寂しいかな」

「そうですね。それはそうとそろそろ行かないとやばくないですか？」
「？」

「へ？」

時計を見ると結構ヤヴァイ時間になっていた。

「おいしいいい!!なんでこんな時間になるまでなんもいわねーんだよ安綱ああああ」

「ちよつとしたお茶目ですよ。気にしない気にしない」

驚愕の声とは裏腹に安綱はえらく平坦に答えた。

「んなお茶目いらねえええ!!!」

聖は叫びながらミッドチルダ行きのポイントに急いだ。

さてはてこんなことで本当にやっついていけるのかこれから先ちょっと不安ではあるものの白雲聖の物語始まります。

到着そして六課入り

ミッドチルダ 機動六課 部隊長室

機動六課の部隊長室で高町なのは、フェイト・T・ハラウン、八神はやての三人が集まっていた。

そしてはやてが口火を切った。

「二人が集まってもろたんは、今日な新しい隊員が六課に来るんで、知らせ」と思ってたな。」

「新しい隊員？」

「ずいぶんと急だね？はやて。」

はやての言葉に対しなのはとフェイトは疑問とも動揺とも取れる声を上げた。確かについ先日スバルたちの入隊試験があったばかりでそのすぐ後だ、しかも六課が本格的に動き出すまであとおよそ二週間というこの時期にまた新しい隊員が増えるというのはあまりないことだろう。

「そうなんやけどな。実はクロノ君の隊の執務官でな。名前はえつと、白雲聖君、年齢は19歳で私達と同じやね。ランクはSS。」

はやては二人に空間モニタを見せた。

「名前の響きからして、私達と同じ地球出身？」

「せや、私やなのはちゃんと同じく地球出身の魔導師やね。ちなみに

執務官試験は一発合格したらしいで？」

「そうなの!?すごいなあ。ねっフェイトちゃん!・・・あ。」

「・・・執務官試験・・・一発合格・・・。」

なのはの問いかけにフェイトはうなだれていた。無理もないフェイトも聖と同じく執務官だが、フェイトは執務官になるのに二度も試験に落ちてしまったのだ。落ち込むのも無理はない。

「そ、そんな落ち込むことないでフェイトちゃん!えっとほら!フェイトちゃんのほうがこの子より先に執務官になってるんやから。ね!なのはちゃん!」

「ふえ!?う、うん!そっだよフェイトちゃん!自身持つて?」

急に自分に振られたことにより一瞬固まるのはだったがすぐに落ち込むフェイトをフォローした。

フォローにより落ち込んでいたフェイトは若干顔を上げなのはたちに聞いた。

「・・・本当?」

その様子になのはとはやては首が取れるんじゃないかというほど首を縦に振った。

そんなかいあってかフェイトは持ち直したようだ。

「・・・それで。その子は今日の何時くらいにくるの?」

「今日の三時やね、でもたぶんその前くらいに来るかもしれへんから
「時間前くらいにはきといてくれるか？」

「うん。」

「了解。」

「ほな。一時解散やねじゃあまた、二時くらいに頼むわ。」

ミッドチルダ 首都 クラナガン

本局からやってきた聖はミッドの地に下りた。

「ふ〜。着いた着いた。今何時だ安綱？」

聖は伸びをしながら安綱に聞いた。

「はい。今は午前十一時ですね。時間にはあと4時間ほどありますが
どうしますか？あまり早く行き過ぎても迷惑でしょうし」

「そうだな……。とりあえずまずは飯にするかぁ。腹減ったわ。あ、
あと六課までどれくらいで行けるかわかるか？」

「はい。とりあえず二二、クラナガンから電車でおよそ30分くらい
でしょうが」

安綱の情報に聖は頷いた。

「ん。了解、じゃあ飯にありつきますか」

聖は都市部に向けて歩き出した。

「此処にすっか。」

聖が止まったのは赤と黄色の看板が特徴的な。某ハンバーガーショップそっくりの店だった。名前は「メアクトウネアルドハンバーガー」といつらしい。名前までそっくりだ。

「またジャンクフードですか？体に悪いですよ？」

「いいじゃん。好きなんだから」

「まあいいですが。食べ過ぎないようにしてください」

聖の返答に安綱は若干あきれながら言葉を返した。

インテリジェントデバイスである安綱からも聖のジャンクフード好きには思つところもあるのだろう。

「へいへい」

中に入ろうとすると聖が止まった。見ると聖の視線の先には一人の女性に群がる三人の柄の悪そうな男三人組み。明らかにわかるだろうナンパだ。しかも悪質なしつこいナンパだとわかった。

「はあ。ああいうのもどんな次元世界でも共通なのかね？それとなんでああいう輩は、大体三人組みなの？そんなジंकウスでもあるの？そこんとこ教えてほしいよ俺に」

「そんなことより、助けてあげたほうがいいんじゃないですか？結構女の人のほう困ってるみたいですし」

「ああ。そうだな」

聖はナンパ三人組のところに歩いていった。

近づくとテンプレな台詞が聞こえてきた。

「なーなーおねえちゃんよう。オレ達とあそばね〜？」

「やめてください!!」

「お〜う。拒否る声もかわいいね〜。」

「めんどくせーから。かっぱらっちまおっせ〜？」

なんともあれな感じた。馬鹿はこの世界に行っても馬鹿なんだと聖は思っていた。だがさすがに傍観するわけにも行かないので。

「お〜い。その馬鹿三人組」

聖が呼ぶと一番後ろにいたリーダー格のような男が聖を睨み怒声を撒き散らした。

「あん!? あんだてめえ! 馬鹿ってのは俺達のことかよ?」

「それ以外に誰がいるか?」

肩をすくめながら聖が言いつと。

「なめてんのかテメェ!」

端にいたちよつと太めの奴が殴りかかってくるが聖は、それを軽くよけた。聖がよけたことにより重心がぶれてよろめいた男Cに聖は踵落しを叩き込む。

「かつ!？」

後頭部にクリーンヒット。男Cは一発で昏倒し倒れふした。

「まだやります?？」

「ちっ!おい。二人でやっちまっぞ!」

「おう!」

残った男二人は聖を二人ではさんだそして、二人してナイフを取り出した。

「へへっ!どつださすがにビビっちまっだろ?」

「ナイフ・・・ね。それを取り出したってことは、自分達は何をされてもかまわないってことでいいのかね?」

そついつと聖は目の前の男を静かに睨む。

「ぬかせ!!」

前方の男Bが聖にナイフを振り下ろした。振り下ろされたナイフを持っている手首を掴むと一気に力をこめる。

「いでいで!!」

あまりの痛さに男Bはナイフを落とす。

「ヤロオ!!」

後ろの男Aが聖に切りかかるが、聖は男Bが落としたナイフを空中で掴み後ろの男Aに投げつける。投げつけられたナイフは男Aの頬を掠めた。ナイフはそのまま後ろの壁に深々と突き刺さった。

「ひいっ!!」

男Aは尻餅を着いてしまっていた。聖は掴んでいた男Bの腕を放す。痛みから解放された男Bが屈もつとしたところを、聖は右足で回し蹴りを放つ。右足は的確に顔面に入り男Bは鼻血を飛ばしながら男Aの元へ吹っ飛んだ。

「どう?これでもまだやりたいかい?」

「い、いや!悪かった。すぐに消えるから!!」

「ああ。すぐに消えてくれ。あと俺に謝るんじゃないってそっちの女性に謝れ。」

男Aは女性に謝るとB、Cをつれてそそくさと逃げていった。

「大丈夫ですか?」

聖は立ちすくんでいた女性に声をかけた。

「え。あ、はい。ありがとうございます!」

「いえいえ。それじゃ」

そういつと聖がきびすを返したところで後ろの女性から再度礼をされた。

「はい。本当にどうもありがとうございました」

その言葉に聖は軽く会釈を返し、聖は女性と別れた。

昼飯後

昼食を終えた聖は時間を確認するために聖に時間を聞いた。

「今何時かわかるか？」

「はい。午後一時半ですね。後10分後に電車が出ます」

「うし。じゃあ行くところかね」

「はい」

聖は駅に向かって歩き出した。

駅に着くとちょうど電車が来たので聖はそれに乗り込んだ。

六課の近くの駅到着

「よつと。これで後は六課まで歩くだけだな」

「そうですね。歩けばおよそ10分くらいです」

「じゃあ、十分間に合うな」

聖はそのまま歩き出す。歩きながら聖は空間モニターを呼び出した。モニタを操作しながら聖は改めて機動六課の異常性を目の当たりにした。

部隊長、フォワード部隊の隊長副隊長は全員オーバーSランク。

そして八神はやて独自の部隊、夜天の主を守護する騎士達、通称ヴォルケンリッター。さらにロングアーチもルーキー揃い。

確かに頭の固い上の連中が目の敵にするのはうなづける。特に地上部隊のレジアス中将などはそうだろう。そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか六課に到着してしまった。

「到着か、さてと部隊長室まで行きますかね。」

そのまま聖は六課の中に入った。

中に入ると真新しいものだとはよくわかった。

「ええと。部隊長室はっど・・・」

案内図で部隊長室を探していると不意に後ろから話しかけられた。

「おい。そこのお前、見ない顔だがこんなところで何をしているっ。」

振り向くとそこにいたのは陸士部隊の制服を身にまとい、ピンクの髪をポニーテールにした、凛々しい感じの女性が立っていた。

「あ、えっと。確かあなたは、ライティング隊のシグナム副隊長？」

「そうだが、おまえは？」

聖の問いにシグナムの鋭い眼光が光った。

その様子に内心ビビリながらも聖は姿勢を整えた。

「申し遅れました。自分は今日からこの部隊に配属になった白雲聖執務官であります」

聖はシグナムに向かい敬礼する。

「そうか、それはすまなかった。部隊長室を探しているのか？では私が連れて行く」

先ほどまでの疑念を抱く目ではなく優しさを含んだ声でシグナムは言った。

「本当ですか。ありがとうございます!!」

聖はシグナムに深々と頭を下げた。

「ああ。」

聖はシグナムの後に続いて歩き出した。

シグナムの後ろを歩いていると、不意にシグナムが話しかけてきた。

「時に聞くが白雲。貴様剣術をやっているのか？」

「え？はい。戦闘スタイルは刀を使った剣術です。よくわかりましたね？」

聖の問いにシグナムは「フッ」と笑い言葉をつなげた。

「なに。私も剣術をやっているからな。わかるのだ。今度一度手合わせを頼めるか？」

「はい。いいですよ」

「それと、お前は私より上官だ。敬語でなくてもいいんだぞ？」

シグナムはいたずらっぽく視線を聖に向けた。

その視線に若干たじろぎながらも聖は言った。

「いや。いいですよ。さすがに自分より年上の人には、敬語を使わな
らう」

「フッ、そうか。っと着いたぞ此処だ」

シグナムが立ち止まると隣に扉が見えた。するとシグナムが扉をノックした。

「主はやて。シグナムです。今日から入隊する、白雲執務官をおつれ
しました」

シグナムが言うつと中から。気のないような声が聞こえてきた。

「はいってええよ。もちろん白雲執務官もな」

「では。失礼します。」

先にシグナムが入った。続いて聖となる。

「失礼します。」

聖が中に入ると、中にいたのは。高町なのは、フェイト・T・テスタロッサ、八神はやて、シグナムをはじめとした守護騎士達だった。聖ははやての正面までいくと。はやてに敬礼し、続けた。

「本日付けで此処、機動六課に入隊になりました。元本局クロノ隊所員。白雲聖執務官であります」

「はい。承認します。私がこの部隊。機動六課の部隊長、八神はやてです」

言つとはやては聖に手を差し出してきた。

「はい。よろしくお願いします。八神部隊長」

聖がそういうとはやては先ほどまでの緊張感と打って変わり。碎けた感じになった。

「まあ、堅苦しい挨拶はこんくらいにしていって。これからよろしゅうな聖君。あ、あと私のことははやてでええから。あと敬語も禁止やで？」

柔らかな関西弁をしゃべりながらはやてはにやりと笑った。

「え、あ、はい」

突然のことについて敬語が出てしまった。

「禁止」

「あ、ああ」

聖が言うとはやては納得したのか頷きながら言った。

「うん。それでええ。ほんならこの場にいるメンバーから紹介するな？手前からフェイトちゃん、なのはちゃん、シグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラの順番や。おぼえたかな？」

はやての紹介の仕方に若干こけそうになった聖だがこらえた。

……アバウトすぎるだろ大丈夫かこの人？

聖が考えているとフェイトから聖に話しかけてきた。

「聖？あのね、さっきはやてが言ったことだけど、私やなのはのことも呼び捨てでいいからね。いいよねなのは？」

「うん……だって同じ年なら敬語にならなくても全然いいからね。よろしくね聖君」

そういった二人は聖に握手を求めた。

聖は握手に答えながら二人に言った。

「ああ。よろしくな、フェイト。なのは」

一人と握手を交わした後。シグナムが口を開いた。

「我らのことは呼び捨てだろうと敬語だろうとかまわないからな、白雲。」

言つとシグナムと聖は握手を交わした。

「ヴィータだ。よろしくな聖」

「子供？」

目の前のどう見ても子供にしか見えないヴィータを見ながら言つと聖はヴィータにガンを飛ばされた。

「ああん？言つとくけどなアタシはお前よりずっと年上だかな？覚えとけよ。」

「お、おう。よろしくなヴィータ。」

若干キレられながらも聖はヴィータとも握手を交わした。

「じゃあ、つぎは私ですね。シャマルです。医務室でみんなの体調管理や怪我の治療などをやっています。私のことはシャマル先生って呼んでくださいな。」

「はい。お願いします。シャマル先生。」

シャマルは聖にそう言われたことをかなり喜んでいた。

「最後は私が、ザフィーラだよろしく頼むぞ白雲。」

「ああ、よろしくってしゃべった!」

聖はザフィーラがしゃべったことに一番驚いていた。全員と挨拶が終わったところではやてが聖に切り出した。

「聖君?今体調とかに問題ないか?」

「いや、ないけど。どうしてだ?」

突然の質問に聖が疑問を投げかけるとはやては一瞬にやりと笑った。

「ん?それはな……。聖君にはこれから模擬戦をやってもらいたいんですよ。」

「模擬戦?別にかまわないけど。誰とやるんだ?」

「ふっふっふ。聖君が刀を使って戦うことはもうわかっとなる。せやから戦うんは、シグナムや!!」

はやてがシグナムを指差す。それに対しシグナムはいたって冷静に。

「いいでしよう。というわけだよろしく頼むぞ白雲」

「マジっすか……。?」

……はやてって結構いたずら好きっばいな。

驚愕と同時に内心で思っているとフェイトとなのはが優しく声をかけてきた。

「大丈夫だよ。戦うって言うっても本気でやるわけじゃないから。それにこれは聖君の強さを見ることもあるからがんばって。聖君」

「うん。自信持ってがんばって聖」

「・・・そうだな。んじゃがんばりますかね」

肩を落としていた聖だが二人のがんばれという言葉に後押しされ、シグナムとの模擬戦をやることとなった。

クラナガン 某所

一人の女性が空間モニタで男としゃべっていた。

「はい・・・はい。こちらは特に問題はありません」

「そうかい。ではそのまま潜入を続けてくれたまえ」

男の方は絡みつくような声をしていた。

声音はとても優しいがその瞳には狂気の光が宿っていた。

「はい。わかりました。ドクター。それと妹達は元気ですか？」

「ああ。皆元気だよ。では期待しているよドゥーエ？」

「わかりました。では」

ドゥーエと呼ばれた女性はモニタを切った。

「うん。昼間のあの子……。どこかで見た気がするんだけど……。気のせいかしら？」

そう、この女性は昼間聖が助けた女性その人だった。彼女は聖のことがかかっていた。

「まあいいわ。管理局の人みたいだったから。データベースにアクセスすればすぐに割り出せるでしょう」

だがドゥーエはもうすぐ知ることとなる、あの青年が誰でいたいなんなのかを……。

模擬戦

模擬戦のため聖とシグナムは訓練場にいた。

その二人を訓練場の外からはやてたちが見つめたいた。

「さて、シグナム相手にどこまでやれるかな聖君は？」

はやてが疑問を浮かべるとなのはが補足した。

「聖君の戦闘スタイルはシグナムさんと同じだね。それでランクがSSなら相当な使い手だと思っよ」

「せやろな。だけど踏んだ場数はシグナムも負けてへんからな。どうなるかわからんで？」

そういうとはやては面白そうに笑った。いや笑ったというよりニヤついたのほうか正しいかもしれない。

はやての様子になのはが若干苦笑いを浮かべていると隣にいたフェイトが声をかけてきた。

「二人ともそろそろ始まるみたいだよ」

フェイトの言葉になのは達は相槌をうちながらシグナムと聖に向き直った。

……さて聖君。君の力見せてもらっつで。

聖とシグナムは互いにデバイスを武器状態にして向かい合っていた。

「制限時間は5分だ。それを過ぎれば引き分けとなる。勝ち負けはどちらかの意識がなくなるか参ったといえればそれまでだ」

シグナムが言つと聖はそれに頷いた。

「よし。ではバリアジャケットを互いに展開し10秒後に開始だ」

「了解」

そういつたシグナムは愛機レヴァンティンを構える。

するとシグナムが一瞬光に包まれたかと思うと、シグナムは騎士甲冑もといバリアジャケットを展開した。

それを見た聖も安綱を構える。

先ほどのシグナムと同じで聖の体が魔力の光に包まれその光がなくなつた後、聖もバリアジャケットに身を包んだ。

聖のバリアジャケットは黒を基調とし、ところどころに赤が入り混じっている。

「では今から10秒後だ。準備はいいな？」

「ええ。大丈夫です」

二人は互いの愛機を構えて睨み合つ。

二人の間に訪れる沈黙。

だがその沈黙開始を告げるアラームで破られた。

戦闘が開始された。

二人はほぼ同時に動いた。

そして二人が互いの愛機を抜き放つとぶつかり合う刃で火花が散った。

するとシグナムが口を開いた。

「ふむ。思い切りがいいのだな白雲」

「褒め言葉として受け取っときますよっ」と!!」

聖は後ろに跳ぶとそのまま空中に躍り出た。

シグナムもその後を追尾する。

そして二人は再度打ち合うと今度は互いに打ち合いながら空中を飛び回る。

まだ二人とも様子見のようだ。

すると打ち合いが止み二人は再度距離をとるとシグナムが口を開いた。

「探りあいはいれくらいでいいだろう。次は本気でいくぞ」

シグナムが言うと聖もそれに頷いた。

二人の口元はわずかに笑っているように見えた。

シグナムがレヴァンティンを掲げ命じる。

「レヴァンティン…ロードカッターリッジ」

レヴァンティンの刃の根元、つばの部分から赤色をした弾丸が吐き出される。

その姿を見ていた聖をシグナムが一瞥するとシグナムが消えた。

否、消えたのではなくカートリッジによる魔力の瞬時増幅による高速移動だ。

聖が身構った瞬間シグナムが聖の眼前に躍り出る。

「くっ!!」

……いくらカートリッジ使ってるからって移動早すぎだろ!?

内心で聖は毒づくがそんなことをシグナムが分かってくれるはずもなく

「はっ!!」

気合の声とともにレヴァンティンが振りぬかれる。

聖も喰らってはならないと安綱を構えるがカートリッジで増幅されたシグナムの斬撃を受け止めらるはずもなく、聖は後ろに吹っ飛ば

された。

吹っ飛ばされた聖は訓練場のビル群に激突した。

「いっつ〜……。やっぱりこっちもカートリッジ使わなきゃ無理か」

一人ごちると握っていた安綱から怒号がとんだ。

当たり前です!!何やってるんですか!打ち所が悪ければ大怪我ですよ!?

「わーってるよ。だからそんな怒るなって」

安綱の怒声に軽く返すと安綱もあきれたような声で言った。

いいですか?相手は副隊長ですよ?それにカートリッジなしで勝とうなんて……聖様は馬鹿なんですか?死ぬんですか?

「お前……たまに容赦ないよね」

責められげんなりとする聖だったが「まあいいや」というと聖は安綱を構える。

「安綱。ロードカートリッジ!」

最初からやってくださいまったくもう

いまだに毒づきながらも安綱は黒のカートリッジを排出する。

そして聖はシグナムに向き直る。

「安心したぞ白雲。この程度で終わられては張り合いがないからな」

「……はは。ちょっと油断してましたね。でも今度はそうはいかないからいっすよー」

聖は言うのとビルの壁を蹴りシグナムに再接近する。

その早さにシグナムも多少驚いたようであったが、シグナムは受け流すために構えを取ろうとしたがそこで聖がにやりと笑った。

聖は安綱を振りぬきざまに先ほどのロードで纏わせていた魔力を一気に放出した。

「っ？」

シグナムはそれを間一髪ぎりぎりでかわす。

通り過ぎた聖はシグナムに向き直り悔しそうに歯噛みした。

「くっそー。あたると思ったんだけど」

「だから相手を考えてください」

安綱のツッコミに若干むくれながら聖はシグナムを再度見やる。

「フッ……。やはりお前はいい太刀筋をしている。もう少し見たいものだがそろそろ時間だ。次で最後にさせてもらおう」

聖がタイマーを見ると確かに残りは1分を切っていた。

それをみた聖はシグナムに提案した。

「どっちが競り負けるか勝負といきましょう、シグナムさん」

「いいだろう」

シグナムも乗り気だったようで二人はそれぞれの愛機を鞘におさめる。

「レヴァンティン!!」

「安綱!!」

二人が同時に叫ぶとカートリッジが同時に吐き出される。

またも訪れる沈黙。

それは二人の声とともに破られた。

「紫電一閃!!」

「聖龍煌牙!!」

同時に繰り出されるそれぞれの技。

シグナムの斬撃は紫色の炎を帯びながら聖を飲み込もうとする。

対する聖の斬撃は銀色の光の牙のようなものが生み出される。

二つの技がぶつかり合った瞬間すさまじい轟音が辺りを包んだ。

「魔力がぶつかり合いそれが炸裂したのだ。」

「ぐう!!」

「くあ!?!」

その衝撃により飛ばされた二人だったが再度体勢を立て直しそれぞれを見て、再び剣と刀がぶつかり合うところで終了を告げるアラームが鳴った。

するとシグナムは笑みをこぼしながら聖に言った。

「いい戦いだった。また手合わせ願いたいものだな、お前とは」

シグナムの言葉に聖も若干嬉しくなったのかポリポリと頭をかきながら苦笑した。

「い、いえ。こちらこそよろしくお願いします」

そういつと二人は地上に降りた。

地上に降りるとはやてたちが待っていた。

「いや〜。お疲れさんや二人とも。怪我ないか？」

「いえ。大丈夫です」

シグナムが答えると聖も「大丈夫だ」と答えた。

「そかそか。それにしても二人の戦い見ごたえあったなあ。なあなのはちゃん、フェイトちゃん?」

はやてが二人のほうを見ると二人とも頷いた。

「うん。最初のほうはシグナムさんが押ししてるかなって思ったけど聖君も最後のほうで巻き返してきたよね」

「そうだね、紫電一閃とぶつかり合ったときの技もただ強いだけじゃなくてなんていうか……すごくきれいだったし」

それぞれの意見を出しながら二人は戦闘に感嘆していた。

すると聖の横にヴィータがやって来て小声で言ってきた。

「おい聖。シグナムには気をつけとけよ……あいつ見かけによらず戦闘好きだからまた吹っかけてくるぜきつと……」

そこまで言ったところでシグナムが口を開いた。

「ヴィータ。……何か言ったか？」

「なんでもねーです……」

シグナムの視線でさすがのヴィータも尻すぼみになってしまった。

その様子に聖が若干苦笑いを浮かべているとははやてが声をかけた。
きた。

「なんだよはやて？」

「ん〜となさっきの模擬戦は一種の適性検査だったんよ」

「適性検査？」

聖が聞くとはやては「せや」といって続けた。

「実はな。聖君にはあるひとつの特殊な役職についてもらいたいんだよ」

「じゃあそれを調べる検査だったのか」

聖が返すとはやては頷き真剣な面持ちになる。

それに気がついたのか聖を含めたその場にいた全員が気を引き締めた。

そこではやてが口を開いた。

「聖君には遊撃手として働いてもらいたいんだよ」

「遊撃手？」

「せや、自分で考え行動し戦況がきつい場所に行くってな感じな。まあでもほとんどは私が指示を出すからそんな必要はないと思うけどな」

そこまで言った所ではやてが「ただ」と区切った。

「ただなんだよっ」

「うん。もし現場でやむおえない場合は聖君の独断でやってもらってかまわんよ」

その言葉に聖が驚く。

確かに現場で好きに行動していいなどと言われれば隊に所属しているものなら誰でも驚く。

部隊というのは縦社会だ。

上官の命令は絶対。もし破れば処罰され最悪の場合脱隊もありうるだろう。

驚いていた聖だがはやての顔を見ていった。

「……わかった。やむおえない場合は俺の独断でやらせてもらう。だけどそれ以外のときはお前に従うよはやて」

「そらとーぜんや！まあというわけでよろしくな。コードネームはクラウドーや」

「クラウドーね。了解したぜ部隊長殿」

そこまで行くと先ほどまでの硬い空気はやわらかくなり皆の顔にも笑みが戻った。

とそこではやてがにやりと笑った。

「まあそんなことも決まったわけやし、この後は聖君の歓迎パーティーでもやるか！」

その言葉にその場にいた全員がずっとこけそうになった。

だがはやても負けじとみんなを説得し始めた。

はやてがみんなを説得しているとき聖はなのはとフェイトに軽く耳打ちした。

「……もしかなくてもはやてって思いついたら即行動タイプ？」

「そう……だね」「うん。かもしれない……」

そう答える二人は苦笑いをしていた。

結局はやてに言いくるめられその日の夜みんなでパーティを開くことになったらしい。

その日の夜寮の食堂で散々騒ぎ倒した一行は0時をもって解散となった。

そしていま聖となのはとフェイトは三人で寮の廊下を歩いていた。

「まったく。誰だよ酒持ち込んだの……」

「じゃはは……」「本当に疲れたね……」

そうつぶやいた三人はげっそりしていた。

なぜかというと誰かがパーティに酒を持ち込みそれをはやてが飲んでしまいはやてが暴走したというわけだ。

「これからはやてに酒は飲ませないようによつにしよう」

「「同感」」

するとそこで聖が立ち止まった。

どつやら部屋の前に到着したようである。

「じゃあ俺ここだから」

「え!?そこ聖君だったんだ!」

なのはが驚きの声を漏らした。

それに続きフェイトが言った。

「私たちは隣の部屋なんだよ」

「そうなのか。じゃあ部屋変えてもらうか。二人とも嫌だろう男が隣にいたんじゃない」

聖の言葉に二人は一瞬きよんとするがすぐに笑顔になってやさしく言った。

「そんなことないよ!全然私たちは大丈夫だし。ねっ!フェイトちゃん」

「うん。ホントに嫌じゃないからそんなに気にしないでいいよ」

二人の気遣いに涙が出そうになったが何とかこらえ二人に頭を下げた。

だがなのはが唐突に言った。

「……でもねもし聖君がHなことをしようとして私たちの部屋に入ったら……O H A N A S H Iだからね？」

そういったなのは目には口からが宿っていないように見えた。

それを見ていたフェイトも若干苦笑いというか引いていたが……。

「き、気をしけます」

聖が言うとなのはも先ほどまでのやんわり顔に戻り「それじゃあおやすみ」というとフェイトとともに戻っていった。

部屋に入り聖は星を見上げていた。

そこで安綱が話しかけてきた。

「いじわるですわね」

「ああ。みんな優しいしな。だけど……」

そこまで言ったところで聖は黙った。

……まだ気にしているのですか？「自分のことを

「そりゃあ……な。でも今はここに居ることを幸せに思わなきゃな」

聖はそういって立ち上がるとベッドにダイブした。

そのまま聖は目覚めることなくその日は眠ってしまった。

次の日から六課の中の整理などをしながらすごい業務もしっかりこなしていった。

そして2週間後。

六課が正式に活動を開始する日を無事に迎えることとなった。

同時期管理局内 某所

ドゥーエは管理局の局員リストを調べていた。

「あった。えっと……シラクモ・ヒジリ。第97管理外世界地球出身の魔導師で役職は執務官。ランクはSSね。ふーんなかなか面白いボウヤね」

そういった彼女の目は怪しくだが美しく光っていた。

「でも、どことなくあの子と面影が似てるのよねえ。……まあ考えすぎね」

ドゥーエはそのまま局員リストの聖の部分だけをコピーした。

……用心することに越したことはないからね。

そして彼女は部屋を後にした。

新人初訓練

六課の活動が開始された初日、聖は廊下を歩いていた。

既に六課の挙行式は行われており聖もそれに参加した後だった。

「つか初日から新人達は訓練って結構スパルタだななのは」

そうですね。ですがそれだけ新人達には強くなってほしいのでしよう

聖の言葉に一安綱 やすつな は感慨深げに答えた。

「そんなもんかねえ」

愛機と話しながら聖は新人達の訓練の様子を見に行くため訓練場に向かった。

訓練場につくと既に新人達へのしごきが始まっていた。

「おーやってるやってる」

聖の視線の先には廃ビル群の中で訓練する新人達四人の姿が見える。

……本当に容赦ないなのは。

内面で思っていると後ろから声をかけられた。

「よう。聖お前は参加しなくていいのよ」

「ヴァイスか。まあ俺が行っても全然デバイスの形違うしな」

聖が振り向いたところにいたのは作業服に黒いジャケットを羽織った長身の男性だった。男性の名前はヴァイス・グランセニック。六課のヘリパイロットだ。

歳はヴァイスの方が上な物の聖はヴァイスと呼び捨てにしている。

聖の答えに「そんなもんか」と言うと聖と同じく新人達に目を向けた。

「まあ確かになのはさんとフェイトさんがいりゃあ大丈夫か」

「ああ。俺は多少口出すだけにしとくよ」

二人が話しているとまた声をかけられた。

二人が振り向くとそこにいたのはそこにいたのはシグナムだった。

「ありゃ。シグナム姐さんも見物ツすか？」

「ああそんなところだ。私のレヴァンティンも新人達の中の戦い方にはそぐわないからな」

シグナムも聖たちの横に来ると新人達の訓練を眺め始めた。

しばらく無言で見っていた三人だがふと聖が口火を切った。

「ガジェット使い始めましたねシグナムさん」

「そうだな。まあこれから新人達が戦っていくのはガジェットが中心となってくるだろうしな」

シグナムの言葉にヴァイスが軽めに言う

「でも少し早すぎやしませんかね？」

「なに、何事も早めに対応力を身につけておくことは大切なことだ」

「そうだな。しかもガジェットにはAMFついてるしな。アレに対処する方法は身につけといて損はない」

聖とシグナムの説明をヴァイスは苦笑しながら聞いていると先ほどまで聞こえていた訓練の音がやんだ。

「ん。終わったみたいだな」

「そのようだ」

シグナムが言ったところでシグナムに連絡が入った。

「シグナム今空いてるか？」

連絡の主ははやてだった。

「はい。大丈夫ですが」

「よかった。じゃあ今から来てくれるか？」

「わかりました。そういつわけだではなお前達」

シグナムはそういつと隊舎に戻っていった。

シグナムを見送ったあとヴァイスもへりの整備があるとのことでへりの置いてある屋上に戻っていった。

「じゃあ俺も新人達のところに行ってみようかね」

おや。行かないのではなかったのですか？

「別に行かないとは言ってねーよ」

聖の返答に安綱はそれはすいませんでした、といったところで聖は訓練場に駆け出した。

……まあ本当はあの子たちがいるからあいさつしてくるだけなんだけどね〜。

訓練場の中に入った聖はなのは達を見つけ声をかけた。

「おーいなのはー」

「あ、聖君！どうしたの？」

「ん。ちよっとな新人達に顔合わせだよ」

そついつと聖は新人達の前に立った。

するとそこで彼らは聖に敬礼した。

「ああいいよ敬礼しなくて。まあスバルとティアナは知ってると思うけど改めてな、白雲聖だ階級はフェイトと同じ執務官。コードネームはクラウド1だよろしくな」

「はい！」

四人が同時に返事をする。聖はうんうんとうなずいた。

そこでなのはが口を開いた。

「あれ？聖君はスバルたちを知ってるの？」

「ああ。こいつらが本局で迷ってたところを案内したんだよ。な？」

聖が二人に目を向けると彼女らは少し恥ずかしそうにうつむきながら聖に礼を言った。

「あの時はお世話になりました」

「ありがとうございます」

苦笑しながら言う二人だったが聖は気にした風もなくにこやかだった。

「そんなことがあったんだ」

「まあな。……それでこの子達がライトニングの方が」

聖がもう二人の方赤毛の少年と桃色の髪の少女に目を向けると二人は少し緊張した様子で聖を見た。

二人を見ていた聖は二人の目線の高さまでしゃがむと二人の頭をワシヤワシヤとなでた。二人は何が起きたのか理解できずに目を白黒とさせていた。

「よろしくな。えっとエリオとキャラで合ってるかな？」

「は、はいー」「お、覚えていただきありがとうございますー！」

唐突に名前を言われたので二人はがちがちに固まっていたが聖はそれに優しく答える。

「そんな硬くならないでいいって。それにこれから仕事を一緒にこなしていく仲間なんだから名前覚えんのは当然だろう？」

いいながら聖は再度二人をなでる。

それが少し恥ずかしかったのかエリオたちは顔を赤らめた。

「ところでなのは四人のインテリジェントデバイスはまだやらねーの？」

「うん。でももうすぐだよ今回はみんなの癖とかそういうのも解析するための訓練だったからね」

なのはの問いに聖は「なるほど」と頷く。

頷いたところではなのはが聖に提案した。

「聖君の安綱ってさやっぱりモードとかあるの？」

「おつあるぜなま安綱っ？」

はい。私は通常時は刀ですがあと2つほどあります

安綱の返答になのはが頷いた。

と、そこでキャラが声をかけた。

「あの、質問よろしいでしょうか？」

「ああいいぜ。あとまだ硬すぎらないんだぜフェイトと同じ感じに話してくれて」

「は、はい。えっと聖さんは名前の響きが高町教導官と似てらっしゃいますがもしかして、同じ世界の出身なのですか？」

その質問はどうかやら四人全員が聞きたかったようで全員が視線を聖に向けた。

その様子に若干聖はたじろいだがすぐに答えた。

「ああ。俺はなのはたちと同じ世界の出身だよ他に何かあるか？」

聖が聞くとそれを皮切りに多少の質問攻めにあった。

途中スバルの「好きな食べ物」とか「好きなアイスの味」とか聞かれたのは意味不明だったらしいが。

質問が終わると聖はなのはに向き直ると告げた。

「じゃあ今日は戻るわ。何かあったらいつでも頼ってくれよなのは」

「うん。また後でね」

「おう。じゃあお前らががんばれよ」

聖はそういつと踵を返し六課の隊舎に戻っていった。

「さて、さすがに初日だから仕事がなくて暇だな」

隊舎に戻ってきた聖は一人廊下を歩いていた。

では部屋に戻って読書でもしていたらどうですか？

「まあそれもありか。じゃあ行くかねっと……お？」

安綱の提案に従い部屋で本でも読もうかと思った聖だが歩みを止めた。

聖の視線の先には大荷物を抱えたフェイトの姿があった。

「はあ。まったくあんな大荷物一人じゃ無理だろ。どれ手伝ってやるかね」

ため息混じりに聖はフェイトの下へ行った。

近づくとも明らかにふらついているのがわかった聖はフェイトに声をかけた。

「おいフェイトー！」

「わひゃあ!?!」

いきなり声をかけられたことに驚いたのかフェイトは素っ頓狂な声を上げながら、バランスを崩し荷物ごと前のめりに倒れこみそうになる。

「ちょ!?!」

それを聖はすかさずフェイトと床の間に滑り込むと仰向けの状態で、倒れてきたフェイトを抱きこみ上から落ちてくる荷物から守った。

「いつつ……! 大丈夫かフェイト?」

「あ、うん! ありがとう聖」

聖の胸の中でフェイトは礼を言っが聖はそれを訂正した。

「いや。いきなり声をかけた俺も悪かった」

「そんな! 聖は守ってくれたし……!!?!」

するとフェイトは顔を真っ赤にしてうつむいた。どうやら今の状態に気が付いたらしい。

「ああ悪いフェイト」

聖もそれに気づいたのかすぐにフェイトから手を離した。

するとフェイトも真っ赤の顔のまま聖の腕から抜け出し立ち上がると聖もそれに続き立ち上がった。

「けがないかフェイト？」

「う、うん。ダイジョブ……」

若干片言になりながらもフェイトは聖を見る。

すると聖の頭から血が流れ始めた。

それを見たフェイトの顔から一気に血の気が引いた。

「ひ、聖！血が!？」

「ん？ああ、大丈夫だこんくらい」

聖が軽く流そうとするとフェイトが聖の腕を掴みずんと歩き始めた。

「お、おいフェイト!？」

「いいからついてきて」

フェイトの言葉に聖は軽くビビリそこはおとなしくついて行くことにした。

フェイトに連行されたのは医務室だった。普通ならシャマルがいるはずだが用があったのかいなかった。

「そこに座って」

「お、おう」

静かにいい放たれ聖は素直に椅子に腰掛ける。

フェイトはそれを確認すると傷薬や包帯の入った箱を取り出すと聖の前に座った。

「動かないでね」

消毒液を脱脂綿に拭きかけそれを聖の傷口にあてがう。

「いつっ」

「あ、ごめん。痛かった？」

「ああ、でも大丈夫だ」

聖がそういったのい頷くとフェイトの処置は続いた。

処置が終了し頭に軽く包帯を巻かれた状態の聖を見てフェイトが再度謝った。

「いじめんね聖」

「だからお前が謝ることじゃないって！俺が急に声かけたのが悪いんだからな」

「でも」

いまだに食い下がるフェイトに対し聖は軽めのでこピンを放つ。

「くどい。そんなんじや好きな男ができたとき嫌われるぜ？」

「す、好きな人って何言ってるの聖!!」

顔を真っ赤にして否定するフェイトに聖は軽めに答えた。

「ハハッ！冗談だよ。さてそんじや置いてきた荷物運んじまおうぜ」

「い、いいよ。私一人でやるから！」

そういつてフェイトは聖を止めようとするが逆に聖に腕をつかまれ連行された。

「だーから、こんな傷大した事ねーから」

フェイトの不安そうな顔をかき消すかのような笑顔で聖が言うとフェイトも先ほどまでの暗い顔ではなくぱっと明るい顔になった。

その後は二人で荷物を分担してはやての部屋まで運んだ。

頭のけがのことをはやてに聞かれたが。

「上からハンマーが落ちてきたんだ」

ということまで聖はそれ以上聴かれることはなかった。

その日の夜聖は寮の屋上に出て空を見上げていた。

すると安綱が聞いてきた。

聖様？傷の方は大丈夫ですか？

「おう。つーかお前俺の体質知ってんだから聞かなくてもわかってんだろ？」

そういつと聖はフェイトにまかれた包帯を取る。

そこにあつたのは傷口ではなく、何の傷もない頭だった。

ですがさすがに一日で直るのはおかしいと思われるので2日ほどはつけておくことをお勧めします

「<u><u><u>

軽く濁しながら聖は安綱に聞いた。

「なあ安綱？やっぱりあのガジェットってあれだよな」

はい。おそらく聖様が想像してらっしゃるとおりかと

その返答に聖の顔が神妙な面持ちになった。

「やっぱり……レリックを集めてんのはあんたなのか……」

そこまで言ったところで聖の言葉をさえぎるように一迅の風が吹いた。

「
」

風の音で聞こえなかったが聖の口元は確かにこういつていた。

「スカリエッツィ」と。

出撃

新人達も訓練に慣れ始めた頃聖ははやてに呼ばれ、部隊長室に顔を出していた。そこにいたのはフェイトとはやてだった。

「急に呼び出して、なんか急な用事か？」

ソファに座りながら聖が聞くとはやてが頷いた。

「実はこれから私は聖王教会に行くんやけど聖君にも付いて来てほしいんよ」

「……聖王教会」

その言葉を発したかと思うと聖が黙った。急に黙った聖を心配したのかフェイトが肩を少し叩いた。

「どうしたの聖？」

叩かれたことに我を取り戻したのか聖ははっとした様子ではやてたちに向き直った。

「悪い。昨日少し遅くまで本読んでてな寝不足だった。それで何で俺が聖王教会に？」

「そらまあカリムに新しい隊長クラスのお披露目と言っかそんな感じやな」

はやての言葉にフェイトが補足を入れる。

「それで私が車を出すことになったんだ」

「なるほど。じゃあ俺はバイクで行けば言い訳ね」

そうフェイトの車は二人乗りなのだだからどうがんばっても聖が入ることは出来ない。だが聖は既にバイク免許を取得しているため所持しているバイクをハンガーに入れておいたのだ。

「ほな決まったことやしいこか」

はやてが立ち上がると同時に二人も立ち上がりハンガーへと足を運んだ。

「ほえーなかなかかつこええバイク乗っとるんやなあ聖君。それにおきいな〜」

ハンガーに着いたはやての目の前においてあるのは灰色を基調とした普通見かけるバイクより少し大きめのバイクだった。

「大型バイクだからな。結構スピード出るんだぜコイツ」

「でも、法定速度は守らないとだよ聖？」

「くっくっ」

フェイトに釘を刺されげんなりとした聖だったが、それを無視しはやてが続けた。

「向かうのは6番ポートやからな」

「りょーかい」

そういうと聖はバイクに乗り込みキーを入れる部分に安綱を差し込んだ。安綱はデバイスとしてではなく聖のバイクのキーとしても役に立つのだ。

シャッターが上がりフェイトはやて組。そして聖の順でハンガーを出て行った。

出て行ってすぐのこと訓練が終わり六課の隊舎に入ろうとしていた新人達となのはがフェイトの車に気付き声をかけた。すると後ろに止まった聖にも皆が声をかけてきた。その中でもスバルが一番最初に声をかけてきた。

「これ聖隊長のバイクなんですか!？」

「ああ」

それに続くようにエリオとキャラロが言う。

「かっくいいー!」

「すっくくおっきいですね!」

新人達に感激の声を上げられ聖はふふんと鼻高々げだがそこでふとティアナに声をかけた。

「今度乗ってみるかティアナ?」

「え!？」

いきなり声をかけられ驚くティアナだったがそれを聖はニマニマとした様子で眺めた。

「バイク好きなんだろう？」

聖が言つとそれに反応したのはティアナではなくスバルの方だった。

「はい！ティアはバイク好きですよ！！」

「ちよつちよつとスバル！何勝手なこと

」

「えー！別にいいじゃん教えたつてー」

「うっさい！勝手に何でもかんでも暴露すんなんて言ってるのよ！」

ティアナがスバルの顔を引っ張りながら抗議の声を上げる。

「まあ気が向いたらこいちゃ。手が空いてたら乗らせてやるよ。はやてそろそろ行かないとやばくないか？」

聖がはやてに言つとはやてとフェイトはそれぞれ変える時間を告げると車を発進させた。聖も続いためエンジンをふかし始めたところでなのはが声をかけてきた。

「聖君！帰ってきたら話があるから私のところに来てね！」

「りょーかい！じゃあ行つて来るわー新人達ちゃんとなのは言つこと聞いてがんばれよー」

そついい残すと聖は先に行ったはやてたちを追いかけるため多少

法定速度を無視して二人を追いかけた。

はやてたちに追いついたあたりでフェイトから通信が入った。

「なんだよフェイト」

聖が軽めに答えると回線から飛んできたのはフェイトの怒声だった。

「なんだよじゃないよ!! まったくさっき法定速度を無視しないで運転しないようにって言ったよな!? なんになんでもう破ってるの!!」

「いや〜……それはまあそうしねえとお前らに追いつけねーし?」

「そうなら連絡入れるとかあったでしょ! 何で危ないことするのまったくもう!」

フェイトの怒声を若干汗をかきながら聞いていた聖だったが通信の方からはやての笑い声が聞こえたのではやてに話を振った。

「おい。なに人が起こられてんのに大爆笑してんだはやて」

「ハハハっ! あーごめんなつい笑ってしもうた。でも聖君だってフェイトちゃんの言うことときかへんから怒られるんやで?」

痛いところを突かれ聖はため息をつく。まあ確かにフェイトがいったことを無視し危険な高速走行をしたのは聖なので反論できないのは当然だが。

だがそこでまたフェイトから通信が入った。

「聖！勝手に話をそらさないで！まだお説教は終わってないんだよ！！？」

「わかったわかった！！だからそんなでかい声出すな！」

結局フェイトの説教は6番ポートに着くまで続いた。その間はやてはひたすら大爆笑だったが。

聖王教会に着いたはやてと聖は渡された外套を頭からかぶると中に入っていた。中に入るとなにやら案内役のような人がやって来て二人を案内する。

ふと聖がはやてに聞いた。

「なあはやてなんでこんな外套着るんだ？」

「管理局の局員がこんなところろついとったら変やる？だからこういつ風にしてるんよ」

はやての返答に聖は頷くことで納得したようだ。すると目的の部屋に着いたのははやてが立ち止まる。そしてはやてと聖はその扉を開けてもらい中に入ってしまった。

中に入り二人を待っていたのは金髪を紫色のリボンで軽く結った修道服を着た女性だった。

「カリム久しぶりやねー」

「ええ、はやてもひさしぶり。……えつとじゃあそちらにいるのが」

カリムと呼ばれた女性は聖の方に視線を向けた。

「うん。六課の新しいメンバーの1人でクロノ君の元部下の白雲聖君
や」

はやてが言つと聖も挨拶をする。

「機動六課所属の白雲聖執務官であります」

「フッフ。そう硬くならなくても大丈夫ですよ白雲執務官。いえ聖さん。私の名前はカリム・グラシアといいます。以後お見知りおきを」

そういつとカリムは聖に手を差し伸べてきた。聖もそれに快く応じた。

「まあ聖君のことはいったん置いて……これからのことについて話そうかカリム」

「ええ。そうね」

そして二人はこれからのことについて話し始めた。聖はとうとうさすがに六課の今後のことには口を出せる立場ではないので端の方でもらった紅茶をすすっていた。

少し話し合いが行われたあたりで突如アラートが鳴り響いた。

「まさか!?おいはやて!!」

「わかってる!」

聖がはやてに声をかけると同時にはやても六課にいるのはや新人達そしてロングアーチに連絡を入れていた。

「はやて！俺も今から現場に向かう！悪いが帰りは1人で帰ってくれ！」

「大丈夫や私も今から帰るから！ほんなら聖君みんな頼むで!!」

はやてが言うと同時に聖は部屋を飛び出し廊下に出ると一目散に屋上に駆け上がりバリアバリアジャケットに身を包み飛び上がった。

「安綱！現場までの時間は!？」

全力で飛べばおよそ15分で到着します

「上等!」

安綱に確認した聖は一気に速度を上げた。その姿たるや彗星のようだった。

現場到着まで残り数分となったところで聖はヴァイスに通信を開いた。

「ヴァイス！今どのあたりだ」

「今モノレールのケツが確認できた！あと1分ぐらいで追いつける！そしたら新人達をモノレールに降下させる」

「了解だ。こっちも今へリが確認できた今から援護に回る!」

「おう！頼んだ！」

通信を切った聖はモノレールの上空を飛ぶガジェット 型にス
ピードはそのまま突っ込むと通り抜けざまに三機を切り裂いた。

「次だ!!」

言つと聖はまだ残っているガジェットを叩きに向かったところで
なのはから通信が入る。

「聖君！私も今から向かうから」

「おう。よろしく頼むぜ！でも新人達をほっぽって大丈夫か？」

聖が聞くとなのは静かに首を縦に振った。それを確認した聖も無
言で頷く。

「じゃあ新人達が安全に行動できるようにさっさと制空権を奪っちな
いますか！」

向かってきたガジェットを切り裂きながら聖が言つとなのはもへ
りから飛び出しバリアジャケットに身を包む。それと殆ど同じ時に
フェイトがやって来て二人も聖と同じようにガジェットを撃墜して
いく。

あらかたのガジェットを片付けたところで通信が入る。

「今から新人達を降下させるからな！」

声の主はヴァイスだった。聖がそれに答えるとほぼ同時にまずス

ターズの二人が降下しそれに続いてライトニングの二人も降下を始めた。

既に空にいるガジェットは聖、なのは、フェイトの三人が殲滅し制空権を奪取している為、残るはモノレールの中にいるガジェット型がメインになってくるだろう。ここからは新人達の戦いになる。

「大丈夫かー新人達？」

なのはに通信で聞くがなのはから帰ってきたのは自信に満ちた答えだった。

「もちろん！みんなのデバイスだって新しくなったしね」

「ふーん。っとおいおい危なっかしいなスバルのやつは」

聖の視線の先には勢いがつきすぎてモノレールから落ちそうになったもののウイングロードで何とか持ち直したスバルの姿があった。

「あのウイングロードはスバルのデバイスのマッハキャリバーが自己生成することができるんだよ。でも確かに今は一瞬ヒヤッとしたねー……」

なのはが説明するもその声には多少の不安も入り混じっていた。だがそのときロググアーチから連絡が入った。

「ライトニング3と4！大型ガジェットと接敵しました！」

その通信に皆がエリオとキャロがいる後部車両に目を向ける。

「エリオ！キャロ！！」

フェイトが心配そうな声を上げるたそのときだった。後部車両の中からエリオが外にほおりだされたのだ。気を失っているのか動く気配がない。しかもその後何に思ったのかキャロがモノレールから飛び降りたのだ。

しかしそれを見てもなものは動くことを見せない。先ほど心配そうな声を上げたフェイトも今はキャロそじつと見つめていた。

二人に習うように聖も二人を見つめているとキャロを中心に大型の魔法陣が展開された。その形はベルカ式ともミッド式とも違う魔法陣だった。そしてその中から一体の巨大な白い竜が現れた。

「これが召喚魔法……」

ロングアーチの誰かの声が聞こえた。

「じゃああれがキャロのとなりにいるフリードの真の姿ってことか？」

聖がフェイトとなのはに聞くと二人は頷いた。さらにフェイトが付け加えた。

「キャロは古くからある召喚士一族の1人なんだ。でも力が強すぎて里を追われてしまったんだよ」

「それで施設にいたところをフェイトが引き取ったのか」

聖が聞くとフェイトは「うん」と答える。エリオを救い出したキャロはフリードを駆り新型ガジェットのアームを破壊し、その隙を狙い

エリオがキャロの援護を受け新型を破壊した。モノレールの中にあつたレリックもスバルとティアナが回収し、初出撃は大成功となつた。

六課に戻つた聖は六課の寮の前にいたなのは元を訪れた。なのは一人前に広がる海を見つめていた。

「よう。待つたかなのは？」

「ううん。待ってないよ。ごめんね呼び出しちゃって」

「いいさ。どうせ今日はもうやることもないし。それで話つてなんだ？」

聖は買ってきたコーヒーをなのはに渡しながら聞いた。なのははそれを受け取ると一口に含んでから話し始めた。

「実は聖君に折り入って相談があるんだけど……。ティアナのことどう思つてる？」

「ティアナのこと？まあ新人達の中だと一番状況判断能力が高くてスゲーと思つぜ？ただ」

「ただ？」

「言いよんだ聖の顔色を確認するかのようになのはが覗き込んだ。

「たまに焦つて言つか後がなさそうな顔してる時があるなと思つてね」

「やっぱり?」

「ああ。でもまあ辛くなったら相談してくるだろうさ。それがなくてもスバルがいるし、お前だってついてんだから大丈夫だよ」

安心させるように言うとなのはもう少し気持が軽くなったのか先ほどまでの心配そうな顔から安堵の表情へ戻った。

「ありがとうね聖君相談にのってくれて」

「「ちうこそ、でも何も俺じゃなくてもフェイトとかでもよかったんじゃないかねーか?」

聖が聞くとなのはは首を横に振った。

「フェイトちゃんは多分遠慮しちゃって本当のことを言わないと思ったんだ。でも聖君だったらズバッと言ってくれそうなのがしたんだよ。それに個人的にお願いもあったしね」

そういったのはは少し悪戯っぽい笑みを見せながら聖に言った。

「個人的なお願い?」

怪訝そうに聞くとなのはは聖のほうを見ながら少し顔を赤らめながら言った。

「えっとね……今度でいいんだけど一緒に模擬戦してもらえないかな?」

その問いに聖は口に含んでいたコーヒーを盛大に吹き出した。咳ごむ聖の背中をなのはが動揺しながらさする。

咳が止まると聖はなのはの方を見て言った。

「……まさかお前も戦闘好きだったとわな」

「え!? ち、違うよ!! 聖君の力を私も直に見てみたくなっただけだもん」

「……それを戦闘好きって言うんじゃない。」

「今何か失礼なことを思わなかった……?」

なのはが光の灯っていない目で聖を見つめる。

「いーえ思ってますんよー。まあ手が空いた時だな、近いうちにやろうぜっ」

冷や汗をかきながらもなのはに提案するとなのはも納得したのか頷いた。そしてなのはは満足したのか手を振りながら寮に帰っていった。なのはの姿が消えたのを確認すると聖は大きいため息をついた。

「まったく。この部隊はバトルマニアしかいなーのかったの。まさかフェイトもそうじゃねーよな」

どうでしょうねー。もしかしたら申し込まれることもあるかもしれませんがせんから覚悟を決めたおいた方がいいですよ聖様

「なんかお前若干声のトーン上がってね? 面白がってね?」

いえいえ。そんなことはありませんよ。ところで聖様? バイク置い

てきたまんまですけど?」

安綱の言葉に聖が固まった。

「速く言えや………!!!」

大声を出しながら聖は渋々バイクを取りに行った。

スカリエッティ研究所

「それにしてもすばらしいものだな彼女達は。それにこの二人、プロジェクトFの残滓が生きて動いているなんて素晴らしいよ。そう思わないかいウーノ?」

「はい。そうですね。ですがレリックはよろしいのですか?」

ウーノと呼ばれた女性は淡々と聞くがスカリエッティはにやりと口角を上げた。

「確かにレリックは惜しいが。今回はこれでよしとしよう………それに」

そういったスカリエッティの前に映し出されたモニタの中には聖が写っていた。

「この彼も気になるところだ。後でドゥーエにデータを送ってもらおうとしよう。微かだが彼を一度見た気がするんだ」

「わかりました。後でドゥーエに伝えておきます」

「よろしく頼むよ……フッフ……ハハハハハハハハ！」

研究所にはスカリエッティの狂気に満ちた笑いが響いていた。

それぞれの訓練

聖は訓練場の中に訓練着を着た状態でフェイトと並びエリオとキャロの前に立っていた。

「今日は回避訓練だったか？」

「そう。エリオとキャロはポジション的に回避行動は必須だからね」

聖の問いにフェイトは頷きながら答える。聖たちの前に並ぶのは障害物の森とその周りに浮かぶ攻撃用スフィアが数機だ。

するとフェイトが障害物のところに行き手本を見せ始める。

「ホラ、最初はこんな風にゆっくりでいいからやってみよう。……そしてこれを早くすると」

そういうとフェイトが消えた。その光景にエリオとキャロが驚いた様子だったが聖は後ろを振り向きながら話す。

「やっぱりな……。今のがブリッツアクションってやつかフェイト？」

フェイトは聖たちの後ろにいたのだ。聖が先ほどまでフェイトがいたところを見ると地面に大きな溝が出来上がっていた。

「そう聖の言つとおり。今のはエリオに教えたソニックムーブの地上版だと思ってくれればいいよ。でも二人ともこれは必要になってくるから確実にものにして行こうね」

言いながらフェイトはエリオとキャロの方に手を置いた。そこに聖が声をかける。

「ちょっと俺もやってみていいか？」

「いいよ。どれくらいの速さにする？」

「最速で頼む」

「えっ？」

さすがのフェイトもこの発言には驚いたようだ。このトレーニングに使われているスフィアの攻撃の最速といえば先ほどのブリッツアクションとほぼ同じぐらいの速さになる。

「さすがにやめておいた方がいいよ。いくら訓練弾っていつてもアレだけの速度で打ち出されると気絶するぐらい痛いよっ。」

「大丈夫だって。全弾避けてみせるから」

聖は言いながら先ほどフェイトがいた場所へ立つと、フェイトに合図を送った。

「もっ。どうなっても知らないからね！」

半ば投げやりにフェイトはスフィアを設定する。そして一瞬の後スフィアから一気に攻撃が放たれ始める。

だが聖はそれを焦ることもせず全てを紙一重で避けていく。その様子をフェイトたちはハラハラしながら見守っていた。まあ確かに殆ど当たるか当たらないかのスレスレの位置で避けているのだ。ハ

ラハラするのも当たり前だが。

そして最後の一発を避ける時聖は先ほどフェイトがやったのと同じように三人の後ろに回った。

「こんな感じでいいのか？」

「すっ……。速すぎて全然見えませんでしたけど凄かったです聖さん!!」

エリオが聖を賞賛するがキャラロの方は若干不安げだ。

「どつしたキャラロ？」

聖が怪訝そうに聞くとおずおずと聞いて来た。

「私達もアレぐらいできるよつにならないとだめなんですよっか？」

「だそっだぜ??どつだフェイト？」

「うっん。あそこまで出来なくてもいいよ。アレは結構異常な例だから真似しなくていいよ」

フェイトは若干ジト目で聖を見据えつつ言っ。

「異常って何だおい。ひどくね？」

「ひどくないよ。あんなのを一人が出来るわけ無いでしょ?もっと隊長として二人に合ったよつにしてあげてよ」

あきれ声で言うフェイトを尻目に聖はエリオの頭をワシヤワシヤ

となでた。

「そういつなつてー。エリオはアレ見て喜んでたもんなー？」

「え？はい！凄くかつこよかったです!!」

「ホラそうやってすぐに子供を味方につけようとするー!」

言いながら聖の手を掴もうとするが聖はそれをひょいッと避ける。それがフェイトの心に火をつけたのかしばらくそれを繰り返すうちにただの追いかけっこに発展してしまった。

少し起こった風を見せながらフェイトは聖を追い掛け回す。聖はつかまってはなるまいと軽やかにフェイトの追跡を避けていく。

「逃げるなー!!」

「そういつて止まるやつがいるかってーの！ほれほれ捕まえてみるー」

「むー!!」

次第にフェイトは本気になって追いかけ始めた。しかし結局聖がつかまえることは無かった。

「まあ以上が真似してはいけないことだな」

「ぜえ……ぜえ……。聖がやらせたくせに……」

肩で息をしているフェイトが聖を睨むが聖はそれを気にした様子もなくその場を立ち去った。

フェイトをいじめて満足したのか聖はスターズの二人のところに向かった。まず最初に言ったのはスバルとヴィータのところだった。

「どおりやああああああ!!」

「:!!」

見るとそこにはプロテクションを張ったスバルに思いっきりグラーファイゼンを叩きつけているヴィータの姿があった。

「ずいぶんとスバルなことやってんだなヴィータ」

「ん？聖か。フェイトのところはもういいのかよ？」

「ああ。ちょっといじめてたけど……。ところで今の訓練は？」

聖が聞くとヴィータは腕を組みながら答えた。

「フロントアタッカーは防御もできねーとだからな。バリア・シールド・フィールドの三つがうまく使いこなせなきゃ話になんねー」

「なるほどな」

頷いたところで衝撃で後退させられたスバルが戻ってきた。聖はスバルに声をかける。

「おう、おつかれさんスバル！」

「聖さん!!お疲れ様です。今日はどっしってっつちひっ」

「なんとなくな。それより腕とか大丈夫か？」

そう聞くとスバルは大丈夫であることを表すように腕をぶんぶんと回し始めた。

「大丈夫ですよ!! 私結構体頑丈ですし!」

「そうか。でも無理はすんなよ。……悪いなヴィータ邪魔したな」

「いや。別にいいぜそろそろ休憩入れようと思ってたところだな。おいスバル!あと5分したら再開するぞ!」

ヴィータの言葉にスバルは手を上げながら答えた。聖もそこを後にし今度はなのはたちのもとへ向かうことにした。

なのはとティアナは射撃訓練を行っていた。ティアナは聖に気付かず完全に集中している。

「なのは。どんな感じだティアナの様子は？」

「聖君。そうだね結構動きも射撃の精度も上がってきてるよ」

「ならよかったな。それにしても凄い集中力だな」

打ち出される魔力弾をしつかりと打ち落としていくティアナの姿に聖は感嘆の声を漏らした。先ほどから一步も動くことをせず安定した弾を打ち出していく姿は賞賛に値するだろう。

「邪魔しちゃ悪いか。じゃあなのはまた昼に」

「うん。またね」

聖は踵を返し訓練場の誰もいないところに歩を進めた。

「さてここら辺までくればいいだろ」

私達も訓練ですね？

訓練場の一角まで来ると聖は安綱を起動した。安綱も聖が訓練するとわかったのか声をかける。

「まあそんなところだな。じゃあまずは居合いくらいからやるか……」

聖は言うともニタを操作し訓練用のダミーガジェットを出現させた。

目の前に現れた1機のガジェットを見据え聖は大きく深呼吸をし、腰を落として抜刀の姿勢を取る。

その瞬間聖の目から光が消える。

一瞬の沈黙。

だがその後ガジェットは真つ二つに切り裂かれたいた。

まさに刹那のことだった。

切り払い安綱を納刀した所で安綱が声をかけた。

腕は衰えていませんね。いいことです

「まあな。でもこれだけできたんじゃないし次はっと……」

今度は動くガジェットを出した聖は構えもせずに次々になぎ払っていく。一見して乱暴になぎ払っているようにも見えるものの中にはしっかりとした流れが存在した。

そのまま聖の訓練は一時間にも及び続いた。

「じゃあ「イツで最後にすっか」

そうですね。やはり最後は抜刀で締めますか？

「そうだな。じゃあ今度はこの前出てきた新型をと」

モニタを操作し大型ガジェットであるガジェット を出現させるとまたも安綱を一度納刀し構えを取る。

そして再度沈黙が流れる。

今度は先ほどとは違い響は抜刀をしながら駆け抜ける。

大型のガジェット はたちまちにただの鉄くずへと姿を変えた。

すると後ろの方から拍手が聞こえた。聖が振り向くとそこにいたのは訓練場で訓練をしていた全員だった。

「まさかみんな見てた？」

聖の問いに皆が一様に頷く。

「すごいねー！聖君！最後のやつなんてフェイトちゃんのは速さ以上出てたんじゃない？」

なのはは素直に聖を賞賛した。他のメンバーを見ても皆目を輝かせていた。ただ1人ティアナだけは若干難しそうな顔をしていたが。

「ほらほら。見てねーでさっさと飯行くぞお前ら!!」

若干気恥ずかしくなったのか顔を赤らめながら聖はずんずんと進んでいった。

六課の隊舎あたりまでわいわいと話しながら来ると車に乗ったはやてに出会った。

「出かけんのかはやて？」

「うん。ちょっとナカジマ三佐のところにー。スバル。なんか伝えとくこととかあるか？」

「い、いえー！大丈夫です」

スバルが答えるとはやては柔和な笑みを浮かべながら言う。

「そうか。まあほんならみんな留守番よろしくなー」

そついい残すとはやては車を発進させた。

「ちてじゃあ俺達もちゃっちゃと飯食っちゃまおつぜ？」

聖が言うと新人達は声を合わせ食堂に入ってしまった。

昼飯を食べた後も訓練は続き新人達は疲れきった表情を浮かべていた。

午後の訓練が終了したところで聖はフェイトに声をかけた。

「フェイト今日シャーリーと調べ物しにいくんだろ？俺もいいか？」

「いいよ。でも聖も何か調べ物？」

「まあそんなとこだ」

そしてその後フェイト、シャーリー、聖の三人は管理局のデータベースに出向きそれぞれの調べ物を開始した。

「あった。やっぱりジュエルシードだったんだ」

「ジュエルシードってたしか……」

シャーリーの声にフェイトが静かに頷く。

「うん。10年前私となのはがかかわった事件の中核だよ。殆どは失われて残存したものは局の保管庫に保存されていたはずなんだけど……」

そこまで言うとフェイトが出ている写真を拡大した。そこに写っていたのは今まさにフェイトがいていたジュエルシードが埋め込ま

れていたのだ。それも損壊したガジェットの中に。

「こんなことをできるのは1人しかいない……」

フェイトがそこまで言いかけたところで唐突に現れた聖が続けた。

「次元犯罪者ドクター・ジェイル・スカリエッティだろ？」

「聖？知ってたの？」

フェイトが怪訝そうに聞くと聖は頷きながら言っ。

「まあ名前だけならな。有名だし。確かにやつならこんな芸当ができるかもしれない」

「うん。それにもし奴ならレリックを集めているのにも納得がいくし」

二人はそれぞれ考え込む。シャーリーは少し悩んでいるようだった。

「今回の事件はアイツが首謀者としてほぼ間違いないだろうな」

「うん。」このことはあとで上層部にも連絡を入れておくよ」

その後あらかたスカリエッティのことを調べ上げた三人が六課に戻ったのは夜遅くになってからだった。

デート？

「たくっ……なんで買出しなんてしなくちゃなんねーんだよ……」

「まあまあ……落ち着いて聖。確かに文句言いたいののはわかるけど」

毒づく聖をフェイトが優しくなだめる。しかしフェイトの顔も若干苦笑いといった感じだ。今二人がいるのは街にある大型のショッピングモールの中だ。

二人はそこにあるベンチに腰掛けコーヒーを飲んでいて。二人の服装を見るといつもの制服ではなく私服に身を包んでいる。

そもそも何故こんなところに二人がいるのかと言うと時間は1時間前に遡る。

聖とフェイトは部隊長室に集められていた。机についているはやては神妙な面持ちのまま語りだした。

「二人に極秘任務があるんよ」

瞬間二人の体がこわばった。はやての真剣なまなざしといつもとは違うトーンのせいだろう。

「極秘任務って……？」

「レリックがらみか？」

はやては首を横に振る。

「いや……」

そしてはやては高らかに宣言した。しかも椅子から立ち上がり天に指を衝きたてた状態で。

「二人には今日の夜新人達の初任務成功を祝つての宴会の買出しを頼みたいんや!!」

その刹那はやての喉元に安綱がつきたてられた。はやてはぎよつとした顔をするがその安綱を持った聖の顔を見た瞬間顔が青ざめる。なぜなら聖は笑っていたからだ。その屈託ない笑みはなにやら不吉な凄みを感じられた。

フエイトもその様子を見て少しビクついたが、聖はそんなことを気にもせず笑みを浮かべたままはやてに聞き返す。

「はやてー。それでなんだってー？お兄さんよく聞こえなかつたなーもう一度言つてくれる？」

口調こそ優しいものの聖の後ろには鬼神が見えた。さすがに焦つたのか手をわたわたさせながら説明する。

「い、いや!?あれちゃん!あのこの前のモノレール襲撃事件のときに新人達活躍したやんか!!それのお祝いをしとらんなーおもたんや!!!」

「ふーん。だったら普通にそう言えばいいんじゃないかねー?なんでこんなことする必要があるのかニヤー」

未だに笑みを絶やさない聖にははやては縮み上がるがおずおずと続ける。

「それはそのー……サプライズ的な？……テヘッ？」

ウインクするはやてに聖はさらに安綱を押し付ける。その様子にさすがにフェイトがフォローに入る。

「ま、待って聖！はやても悪気があってやったわけじゃないんだから………ね？」

必死のフォローに聖は安綱を鞘に収め待機状態に戻す。だがそこで今度は安綱がもらった。

「おや？もう終わりですか？もう少しやっていても面白かったのですが」

「もう！安綱も悪ふざけしちやダメだよ！」

「おや失敬。今度から気をつけます」

若干の含み笑いを残しながら安綱は黙る。その後聖が放心状態のはやてに話を聞いた。

「ホレ。戻ってこーいはやてー」

「はっ。私は一体何しとったんや」

少し頭のねじが飛んだようだったが二人の顔を見ると思い出したように話し始めた。どうやら先ほど言ったことに嘘偽りはないらしく、本当にやりたかったようだ。

「だったらなんで俺たちなんだ？他にいくらでもいるだろ？」

「まあほんとはなのはちゃんなんかと手分けしてやりたいんやけど……。なのはちゃんには教導があるやろ？それにシグナムやヴィータに頼もつ思つても二人は今日おらへんしな」

「それで俺達に白羽の矢が立ったわけか」

頷くはやてに対し聖は溜息をつくとフェイトに聞いた。

「どーするよフェイト？」

「んー……。でも誰も行く人がいないならしょうがないかな。行く」？

「しかたねーかあ。わかったよはやて行ってやる」

渋々と言った感じでした承する聖だが嫌そうな顔はしていないように見えた。

「ホンマか？いやーたすかるわーありがとくな聖君、フェイトちゃん！じゃあメモ渡すからこれだけこつてきてや」

はやてから渡された紙を見た聖はめんどくさそうに顔を歪ませる。

「……もう何もいわねー。いくかフェイト」

「うん。そうだね」

「あ、そうやー二人とも私服で行くんやでー！平日真昼間から管理局員がショッピングしてたなんて知られればシャレにならないからな」

……お前がそうさせてただけだな。

そして二人は隊舎から出るためハンガーに向かった。ちなみに目的地まではフェイトの車で向かった。なぜならばいくら聖のバイクが大型だからと言っても荷物と人を1人乗せるのは危ないからと言うことらしい。

そして現在に至るといっわけだ。

「後買ってないのはー。肉と野菜か？」

「うん。生ものなら多分一階じゃないかな？」

二人は立ち上がると袋を持つが、フェイトが持ったものを聖が奪い取った。

「聖？」

「荷物持つのは男の仕事だ。フェイトは先導してくれ」

両手と両肩に荷物を持った、聖は軽く笑いフェイトに大丈夫ということ伝えるがフェイトは納得していないようだ。

「いいよ聖私も持つから」

言いながら袋に手を伸ばしてきて袋を取ろうとするが聖はそれを避ける。そしてこの前の訓練と同じようにそれを繰り返すうちにフェイトがバランスを崩した。だが聖はそれを冷静に抱きとめる。

「ほら。あぶねーぞ？大丈夫かフェイト？」

「う、うん。ごめん、ありがとう聖」

そういうフェイトの顔は恥ずかしいのか真っ赤になっていた。だがフェイトはそこから離れようとしなかった。

……聖に守ってもらったのってこれで二回目だけ。でも聖の体って結構鍛えてるんだなあ。

「おいフェイト……」

「ふじや!!じや、じやじー」

いきなり声をかけられ焦ったのか素っ頓狂な声を上げたフェイトは聖の顔を見上げる。

「あのさ、周りの目が痛いから離れてくんね？」

聖の言葉に我に返ったようにフェイトは周りを見渡すと周囲には一般のお客がおりフェイトたちのことを遠巻きにチラチラと見ていたのだ。

それに気付いたフェイトは目にも留まらぬ速さで聖から離れるとねじまきが切れ掛かったブリキの人形のようにかくかくとした動きで近場にあるエスカレーターに向かっていった。

「フェイト!!おい!大丈夫かお前！」

「ウン、ダイジョブダイジョブ!!」

……ゼンゼン大丈夫そうに見えないんだけど。

聖はフェイトを追いかけるとその横に並んだ。その後は何とか持ち直したフェイトと共に残りの食材を買いに行った。

メモの内容を買い終わると二人はショッピングモールの中を歩いていた。無論全ての荷物は聖が持つてるが。

「これで買うものは全部買ったね」

「ああ、そだな。つってもまだ時間まで結構あるな。どうする？ ついでに何か他のもんでも見に行くか？」

時刻を見るとまだ新人達の訓練が終わるには時間がある。

「うーん。でもみんなに悪いような気もするけど……」

「大丈夫だろ。それにいざってなったらタヌキ部隊長のせいにするやいっそね」

ニヤリと言う聖にフェイトは苦笑いしながらも頷く。

「まあ少しくらいならね……」

「よし。じゃあこの荷物だけ置いてくっからキー貸してくれ」

車のキーを受け取ると聖はフェイトと別れた。

駐車場に戻った聖はフェイトの車に荷物を積み込んでいた。

早く戻ったほうがいいと思いますよ聖様。レディを待たせてはいけ

ません

「わーってるようっせーな。それにこんなところなんだ変なこと考える奴なんていねーだろっ」と

トランクを閉めると聖は小走りにフェイトの元へと向かった。

ですがそついった輩もたまにはいるものです。ましてやフェイトさんはあのようにとても美人です。そのような人を飢えた男共が放つて置くとお考えですか？

「おまえ……少しは容赦しろよ」

そして聖がフェイトとの待ち合わせ場所に行くとももの見事にフェイトがチンピラ風の男達に絡まれていた。

ホラね？

「……はあ。やーな感じだよまったく」

毒づきながらも絡まれているフェイトを助けるため聖は走り始めた。

フェイトは困っていた。理由は単純明快今の現状にだ。只今フェイトはガラの悪い男に絶賛からまれ中である。

先ほどから男達は安っぽい言葉をフェイトにかけてはいるもののフェイトは断りの一点張りだ。

……どうしよう。勝手に魔力を使うわけにもいかないし。かと

いって組み伏せるのもどうかと思うし……。

だがそのときフェイトの前にいた男が仰向けに倒れこんだ。

その場にいた全員が男の方を見ると男の顔面は誰かに踏まれた。

「たくっ……。ミッドにきてからこの風景に出会ったのは一回目だぞ」

男の顔面をぐりぐりと踏みつけながら言っつのは荷物を置いてきた聖だった。

「聖！」

「なんでお前はこんな簡単にとりかこまれちゃうわけ……」

「しよ、しょうがないよ！だって一般人に手を出すわけにもいかないし」

フェイトはあせつたように言っつが聖は溜息をつくと一言述べた。

「臨機応変な対応をしろよ。なんもしねーでお前が痛い目見たら馬鹿みて だろ？」

未だに男の顔をぐりぐりとしている聖は呆れ顔だった。すると痺れを切らした周りの連中が聖に聞いた。

「さっきから何なんだテメーは!!」

「そこにいる子の彼氏だよボオケ。わかったらさっさと散った散った。俺達はこれから買い物なんだ行くぞーフェイトー」

軽く流した聖はフェイトの腕を引っつかむとずんずんと歩き始めた。男達の方もあっけに取られているのか追いかけることをせず素直に帰っていった。ちなみに顔を踏まれていた彼は気絶していたようで仲間の1人が背負っていった。

「わりと物分りのいい奴らだな。普通なら追いかけてきて喧嘩になるかもしれないんだけど」

帰っていく男達を見ながら聖はつぶやくがフェイトはブツブツと何かを言っていた。

「彼氏……聖が……私の彼氏……いやいや……そんな……でも結構」

「おいフェイトー。もどつてこーい」

数度聖がフェイトの頬を叩くとフェイトははたと我に帰り聖の顔を見ると、先ほどと同じように顔を真っ赤にして俯いた。

「さっきは悪かったな彼氏なんて嘘ついちまって。でもああいった輩にはこっぴどいのが一番効果的なんだよ」

聖は言うものの果たしてそれがフェイトの耳に届いているかどうか怪しいものではあるが。

「って聞いてんのかフェイト？」

「え!? うん。モチロン！」

フェイトが反応したのを確認すると聖はフェイトの手を離そうとしたが今度はフェイトが聖の手を掴んできた。と言うより胸に抱きこんできた。

「お、おい！何やってんだ」

予想もつかなかった行動に聖が焦りの声を上げるがフェイトは力
のこもった声で言った。

「ひ、人がいっぱいいてはぐれちゃいそうだから……ね？」

「……わーったよ。だけどせめて胸に手を抱きこむのはやめてくれ
さっきからその……当たってるし」

聖が言つとフェイトもそれに気付いたのかあわてて手を離すと。

「……聖のえっち」

「……何でそうなる？」

呆れ顔のまま聖は手を出すとフェイトもそれに答えるように聖の
手を握り返し。二人は帰る時間まで手をつなぎながらシヨッピング
モール内を散策した。

六課に変えるとはやてが二人を出迎えた。

「おかえりー！いやーありがとうなー。でもなんやえらい時間かかっ
たなあ？」

「まあ、結構でかかったしなフェイト？」

「う、うん！ちょっと迷っちゃって」

二人の返答に若干ひっかかったような顔をするはやてだったが納得したように頷く。

「まあええわ。ほんなら準備開始やね」

はやての号令と共に新人達初任務の宴会の準備が始まった。まあ準備と言っても六課の敷地のなかでバーベキューをするための準備だが。

そして訓練が終わった新人達を迎え宴会は始まり。みんなでわいわいと食べたり飲んだりした後宴会は終了した。

失敗

ある日の朝聖を含む隊長、副隊長の面々は部隊長室に集まっていた。室内は暗くなっており光を発しているのは大型モニター唯一つだ。

はやてはモニターの脇に立ち説明を始める。

「今回の任務はホテル・アグスタで行われるオークシヨンの警備と人員警護をすることになった。まあその理由は……」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出展されるので、それをリックと誤認したガジェットが現れた時に撃退するのが理由ですー」

はやてが途中まで言ったところを代弁するかのようになりんが続ける。

「ホテルオークシヨンってことは結構でかいよな？となると警備以外にも取引不許可のロストログアが密輸入されないようなこともかねてんのか？」

聖が腕を組みながら聞くとはやては頷くと話を続ける。

「聖君の言うとおりそういったものの警備もするで。シグナムとヴィータは私達が入る前日から入ってもらうことになったとるけどええか？」

その問いにシグナムとヴィータは静かに頷いた。はやては2人がうなずいたのを確認すると今度は聖となのは・フェイトに視線を戻すと三人に告げた。

「まあその三人と私には少し趣向を変えたことをするけどな」

「？」 「？」

何かをたくらんだような顔をするはやてに聖たちは疑問を浮かべるしかなかった。

そして任務当口。

聖は1人苦虫を噛み潰したような顔でホテル内にいた。なぜそんな顔をしているかというとその格好を見れば一目瞭然だろう。

「……なんで俺がこんな格好……」

いいじゃないですか。格好いいですよ？まさに馬子にも衣装ですね

WWW

「お前今絶対笑ったよね？」

聖の問いに安綱はだんまりを決め込む。実際のところ現在の聖の服装は所謂タキシードとなっている。しかしネクタイの方は聖が拒否したのでネクタイはせず、ボタンをはずし少しだけはだけさせるというラフな格好になっているものの聖はげんなりとしていた。

すると聖は不意に後ろから声をかけられる。

「おー聖君も着替えたなー。なんやえらいかつこよくなつとるやないか」

聖が振り返るとそこにいたのはドレスに身を包んだのはたちだった。

その姿に聖も思わず息を呑んでしまった。するとその視線に気付いたのかはやてがにやりと笑う。

「んー？なに見惚れとるんや聖君。まあこんな美少女三人がそろえばそんなことになるのも無理ないかもしれへんな」

「うっせ。でもまあ確かに見惚れたのは事実だなその……三人とも綺麗だったし」

その言葉を聞いた三人の顔が一気に紅く染まった。特にフェイトは三人の中で一番真っ赤だった。

「と、とりあえず会場に行こうか？」

場の空気に耐えられなくなったのかなのはがおずおずと言つと、三人もぎこちなく頷き会場に向かい歩き出した。

会場に着くと聖たちは三方に別れた。分け方ははやてとフェイトが1人で行動。なのはと聖が2人での行動となった。そのときフェイトが若干さびしそうな顔をしたが聖はそれに気付かなかった。

なのはと共に会場の中を歩いている聖は先を進むなのはに声をかける。

「最近大丈夫かなのは？」

「え？」

聖の問いになのははおもわず立ち止まってしまった。

「いや最近のお前見てると結構無理してる感じがするなーって思っただけでさ。……まあ勘違いかもしれないなーけどさ」

「……大丈夫だよ聖君。ホラ！私体丈夫だし!!」

「ならいいけどさ。辛くなったら俺じゃなくても他のやつに相談するなりしろよ?」

それを聞いたなのはうん、とだけ頷くと今度は逆に聖に聞いた。

「ねえ聖君?さっき私達の事綺麗だって言ったけど本当に?」

「いきなりなんだよ」

「いーから答えてー」

若干すね気味の声を出すなのはに聖は溜息をつく。

「本当だよ。つーか嘘言っでどうすんだよ」

「そ、そっだよね。ごめんなに言ってるんだろ私……」

「やっぱり少し疲れてんじゃないかねーの?どね……」

聖は言いつたのはのおでこに右手のひらを添える。

「ひゃひゃひゃ」

それに驚いたなのはも素っ頓狂な声を上げるが聖はそれを気にした風もなく、なのはの「こ」を触り熱を測る。

「んーまあ少し熱いけど熱はなさそうだな……どした？」

「な、なんでもないよ……ちょっとお手洗いに行って来るから待って」

そうつげるとなのは少し足早に会場から出て行った。後姿を見送る聖に安綱が聞こえるか否かの声でつぶやいた。

まったく……。女性に対してあんなことをするなんて聖様も鈍感ですなー……

「ん？なんか言ったか安綱？」

いいえ何も

安綱がそういうと聖も何事もなかったかのように壁に背中を預けるがその瞬間言い知れぬ悪寒を感じた。

その悪寒はなのはが戻ってくるまで続いたが結局なんなのかはわからずじまいだった。

聖たちがホテル内でそんなことをしている最中ティアナは1人考え込んでいた。内容はもちろん六課のメンバー編成についてだ。

……六課の編成は明らかに異常だ。隊長格はみんなオーバーランクでしかも副隊長じゃないシヤマル先生たちもニアSランク。それにロングアーチスタッフもルーキー揃い。

先ほどまでスバルと念話で話をして気にしてはいない素振りをしていたもののやはり気になっているらしい。

……エリオやキャラコだってあの歳でBランクを取得してるし、しかもキャラコは竜召喚というレアスキルもある。エリオだってフェイトさんと同じ魔力変化をもっているし。

そこでティアナは立ち止まり考え込む。

……一番気になるのはあの人。

彼女の脳裏によぎるのは聖の姿だった。

……なのはさん達と同じ世界出身でしかも元本局勤めの執務官、白雲聖さん。ランクははやて部隊長と同じSSランクで近接戦闘ではあのシグナム副隊長と同格。

「やっぱりこの部隊で凡人は私だけ」

1人つぶやくがティアナはすぐに真剣な面持ちになり心の中で決めた。

……だったら凡人の私はここでしっかり力を見せないと。認めてもらえるように！

ティアナは1人固く決意するのであった。

しかしそれから少し経ちティアナたちフォワードにシャマルおよ

びロングアーチから連絡が入った。どうやらガジェットが侵入したようである。

それを聞いた聖ははやくに連絡を入れる。

「俺はどうするはやく？」

「ん。とりあえず中は私達が固めとれば何とかなる。聖君は新人達フォローかガジェットの殲滅にまわってくれるか？シグナムとヴィータ、それにザフィーラもおるから大丈夫やとは思っけど」

「了解だ。……っわけでなのは悪い。ちよっくら行って来る」

「うん。気をつけてね聖君」

なのはの言葉を聞き頷くと聖は勢いよく会場から飛び出し外に向かった。途中走りながらバリアジャケットを纏って外に出ると既に新人達は集まっていた。

「全員集まってるな？」

「……はい……」

「よし。とりあえず遠巻きのカジェットはシグナムさんとヴィータが何とかしてくれてる。お前らは防御の要だ、しっかり守れよ」

聖が四人を一瞥すると四人とも頷いた。

「じゃあ俺も前に出るから。ピンチになったら遠慮なく呼べよ？……
それとティアナ！」

ティアナはその声に背筋を伸ばす。聖はティアナの肩に手を置き静かに告げた。

「無理はするなよ？無理だと判断したらみんなの力を借りろいいな」
「？」

「……はい」

その声を聞いた聖は一気に飛び上がり戦闘が行われているところへ向かった。

シグナムたちが戦っている場所へ向かう途中モニタを確認していた聖は急に止まった。

……妙だ。さっきからガジェットたちの動きがやけに機敏になった。まさか！

聖はあたりを見回すとある一点を見つめる。

「ロングアーチ！聞こえるか？こちらクラウドだ」

「はい…なんでしょっつ」

聖の連絡に答えたのはシャーリーだった。

「ちょっと気になることがあるから少し外れるけどいいか？」

「え？気になることって？」

「さっきから妙にガジェットの動きがよくなってるよな。その元凶

「がわかったかもしれない」

そう伝えるとシャーリーが息を呑むことがモニター越しにわかった。

「八神部隊長に伝えた方が？」

「いや俺1人で行く。他のやつらのフォロー頼む。主にティアナのな」

聖は見つめていた方向に飛び立っていった。

「ぬっ!?気付かれたか……随分と勘の鋭いものがあるようだな」

聖が飛んですぐのこと聖のとんだ方向にいた男ゼストは険しい表情を浮かべた。その隣にいた少女ルーテシアも感じ取ったのか身構える。

その瞬間だった。

聖が空から降ってきたのだ。いや降って来たのではなく急降下してきたという方が正しいだろう。聖はそのままのスピードを保ちながらゼストに切りかかる。

ゼストも焦ることなく冷静に対処する。初撃を受け止められた聖は後ろに後退する。

「今の止めるか……アンタ何者だよ」

「名乗るべき名などない」

ゼストは静かに答えると薙刀型のデバイスを構える。

聖もそれに答えるように安綱を構えなおす。

「こちらも急いでいる身なのでな手早く終わらせてもらっぞ！」

「はっーんなこたあこっちだっていっしょだってーの!!」

ゼストが上段から切りかかると、聖はそれを安綱で受け止めるとその衝撃を流し、またも切りかかるが、ゼストはそれを後退しよける。

聖はさらに追撃を重ねるべく一気に踏み込みを入れるとゼストの懐に潜り込む。

……この男ここでさらに踏み込めるとは！

ゼストは内心で聖のことを賞賛した。だが次の瞬間彼に襲ったのは鈍痛だった。

「ぐっ!?!」

衝撃により後ろに投げ飛ばされるゼストに対し聖は追撃を入れなかった。

「降参した方がいいと思っぜ? いまなら弁解の余地もあるしな」

「フンッ。私に弁解など必要ない」

「そうかよ。だったら気絶させてでも連れてくぜ。アンタもあの子もな」

追撃を入れるべく聖が安綱を納刀し抜刀の姿勢に入った時だった。シャーリーから緊急の連絡が入った。

「白雲執務官！今すぐ防衛ラインまで後退してください!!」

「どうした!?!」

「新人達の防衛ラインがそろそろきつくなってきました！今からじゃあシグナム副隊長もヴィータ副隊長も間に合いません！そこから一番早くいけるのは白雲執務官だけなんです！おねがいします」

モニタの映像を見ると確かにスバルたちが押され気味なのがあった。聖がそれに眉をひそめているとゼストが聖に告げた。

「行ったほうがいいのではないか？仲間が危険なのだろう？」

「……今回は見逃しますが次は捕まえるぜ」

「望むところだ」

ゼストが言うが早いか聖は防衛ラインに全力で飛んでいった。聖が飛んでいったのを確認するとゼストはルーテシアに聞いた。

「どうだルーテシア？」

「……ドクターの探し物いまからガリユーが持って来るって……ゼストは大丈夫？」

「心配はいらんそれほど大きな傷でもない」

ゼストの答えにルーテシアは静かに頷いた。

ゼストたちの下から飛び立った聖は全力で空中を飛んでいた。

「シャーリー!! 状況は!？」

「防衛ラインがちゃんと持ちこたえてますけどってティアナ!？」

「今度はどうした!？」

シャーリーの焦る声が聞こえると聖が驚きの声を上げる。

「いえティアナが4発ロードをしようとしてるみたいで……」

「4発ロードだあ!? アイツ本当にできんのか?」

聖の声にシャーリーは声を詰まらせる。状況を知った聖も眉をひそめるとティアナに通信を入れた。

「ティアナ! 聞こえるか!? 4発ロードはやめろ!」

だがティアナは聖に大声で答えた。

「大丈夫です! 絶対当てますから!!」

「当てる当てないの問題じゃない! もしそれでスバルがけがしたらどうすんだよ」

何とかティアナを止めようとする聖だが遅かった。すでに通信は

切れティアナと話すことはできなくなってしまったからだ。

「ちっ!!あの馬鹿!」

聖が毒づいた瞬間だったティアナの魔力光であるオレンジの弾が次々にガジェットを撃墜していった。だが、その中の一つがよけられスバルに迫る。

「くそ!!……しかたねえ、安綱!!フォルムセカンド!」

了解

聖の言葉と共に彼の体が閃光に包まれたかと思うとその光は一瞬にして消えた。

そしてティアナの打ち出した弾がスバルに直撃する瞬間。一瞬にして現れた聖がスバルと弾の間に割って入りそれをガジェットに向けて打ち返した。ガジェットもそれに対応する術がなく一撃で撃墜される。

後に残ったのは異様な静けさと機械の燃える匂いだけだった。

そしてティアナはただ呆然と立ち尽くすのみだった。

ちなみに……聖が感じた悪寒はフェイトが聖を睨んでいたかららしい。(はやて談)

苦悩

呆然と立ち尽くすティアナの前には、いつもとは打って変り冷徹な視線を送る聖の姿があった。その様子に聖の後ろにいたスバルも少しじろいだ。

すると聖はゆっくりと地上に降りると、まっすぐティアナの元に向かった。ティアナの目の前まで来ると静かに告げた。

「お前は後ろに下がってる。これ以上いると邪魔になるだけだ」

「っ!!……わかり……ました」

体を震わせながらティアナは言うつと踵を返し、ゆっくりとした足取りでその場から下がっていった。それが心配になったのかスバルも地上に降り、ティアナの後を追おうとするところまで聖が声をかけた。

「スバル。……ティアナのことちゃんと見といてやれ。お前はアイツの相棒だしな」

「はー..」

スバルが行くのを見送ると聖はまた空に上がり、残りのガジェットの殲滅に向かった。

全てのガジェットを殲滅し終わり、皆が事後処理に追われている中、聖はティアナのもとにいた。ティアナは先ほどからずっと俯いている。それだけ先ほどのミスがショックなのだろう。

「ティアナ。まあさっきのミスについてはもう自分で大体わかってると思うから、追求はしない。だけどいつまでも引きずるな。失敗は次につなげればいいわ」

「……はい。わかりました」

ずっと俯きながら言うティアナに少し心配を抱きながらも、その場を離れることにした。だが聖がその場を離れよつときびすを返した時、前方になのはの姿が見えた聖はそのまま進むと、

「……ティアナのことちゃんとフォローしてやれよ？」

すれ違いざまになのはだけに聞こえるように小さく言うと、なのも少し笑みを見せながら頷いた。

その後なのはとティアナは2人で話しをするため茂みの中に姿を消した。聖も残してきた事後処理をするため、他の皆がいるところに向かった。

事後処理も終盤に近づいた時はやてが一人の男性を連れて聖の元に戻ってきた。男性は長い緑色の髪が特徴的で、服装は白いスーツだった。

「聖君。今暇か？」

「あらかた事後処理は終わったしな。暇といえば暇だな、そちらは？」

聖が男性の方に目を向けると、男性の方から挨拶してきた。

「君がクロノくんの元部下だった聖くんだね？ 査察官のヴェロツサ・

アコースだ。よろしくね」

握手を求めてきたヴェロツサに聖は応対し自らも自己紹介をした。

「白雲聖だ。よろしくなヴェロツサ、クロノ提督のこと知ってるってことは本局にもいたのか？」

「うん。でも僕が行った時は大体君は非番か、外にでていて会うことはなかったけどね」

「はいはい。その話はまた今度にしてくれへんかなロツサ」

言葉をさえぎるようにはやてが口を出してきた。そして聖に向き直る。

「聖君。戦闘中にガジェットを召喚した魔導師を見て交戦したってホシマか？」

「ああ。正確にはガジェットを召喚していた子の近くにいた男の方と交戦した、だけだな」

聖の訂正にはやては少し考え込む。そのはやてに変わりヴェロツサが聖に問う。

「その男や召喚師の子の特徴とかは覚えているかい？」

「男の方はフードを深くかぶっててあまり顔は見えなかった。召喚師のこの方はまだ女の子だったな、薄紫色の髪にで黒い服を着ていたな」

「なるほどだね。はやてはほいし思ひっ」

ヴェロツサは考え込んでいたはやてに話を振る。結論がでたのかはやては大きくなずいた。

「その2人がスカリエッティの協力者であることは間違いなさそうやな。……とりあえずこの事はまた上層部に伝えとく必要があるな」

はやての言葉に2人は頷いて同意する。するとそこへフェイトとなのは、そしてまた1人の男性が現れた。

男性の方は深い緑色の服に身を包み、眼鏡をかけていた。

「はやてちゃん。」「っちは終わったよー」

「うん、」苦労様や。じゃあ聖君他にあつたら報告書にまとめといてやっ」

「あいや」

そういつとはやてはヴェロツサと話があるそうなので席をはずした。はやてがいなくなった後なのはが聖を呼んだ。

「聖君。紹介するね、こちらユーノ・スクライアくん。本局の無限書庫の司書長さんで私達の友達なんだ」

なのはが紹介する中聖は少しだけ笑うとなのはに告げた。

「ああ、知ってる。久しぶりだなユーノ」

「うん、そうだね聖」

「あれ？2人とも知り合いなの？」

2人がまるで昔からの友人のように離す様子を見て、なのはが首をかしげる。なのはの様子に聖がため息をつく。

「あのな……もともと本局にいたんだ。知らないわけないだろ？」

「あ

「忘れてたのかよ……」

あきれ気味に言う聖になのは若干苦笑いで返した。それを見ていたフェイトやユーノも若干というよりかなり苦笑いだった。

「でも2人はどうして知り合ったの？」

場の空気を変えようとフェイトが聖に聞く。

「えっとな、あれだ俺が古代ベルカの歴史について調べ物してるときに少し手伝ってもらったのが始まりだな。その後もたまに本借りにいってたりしたし」

「そうなんだ。でもなんで古代ベルカのことを調べたの？」

「ん？いやただの趣味。他のもともと歴史とか好きだからな」

聖の説明を納得したようにフェイトが頷くとユーノが補足する。

「まあ本当に熱心に勉強してたよ聖は。ただ……返却は遅かったけど」

「それをいうなってーの」

ユーノの頭を軽く小突いた聖は若干ムスツとするがそこをフェイトがしかる。

「もつだめだよ聖。ちゃんと期日は守らないと……」

「へーへー。わかりましたよー」

頭をかきながら言う聖にフェイトは呆れ顔だ。まあ10代も後半になって期日を守らないのを呆れるのはしかたないことだとは思うが。

その後もユーノのおかげで、聖の本局での失敗談が次々にばらされていったのであった。

アグスタでの事後処理を終え六課に皆が戻ってきたのは、夕方だった。しかしその後も報告書などもまとめたおかげで、全ての仕事が終了したのは深夜になってからだだった。皆その激務で疲れたのか殆どはすぐに眠ってしまった。

しかし聖はまだ起きていた、仕事は既に終わりにしているため読書をしていたので。読書をいい感じに進めていると安綱が不意に声をかけてきた。

読書中失礼します聖様

「んー？どうかしたか？」

ページをめくりながら応答する聖に安綱が続けた。

いえ先ほどから外の方で微弱ながら魔力反応があるので、小耳に入れておいたほうがいいのかと思ひまして

「魔力反応？」

聖がベッドから起き上がり外を見ると確かに外で何か光っている物見える。時折点滅するその光に照らされ1人の少女が浮かび上がった。

「ティアナ？」

そのようです

「……ったく。何やってんだかアイツは」

あきれた声を漏らしながらも聖はティアナの元に行くべく、自室を後にした。

ティアナが見えた近くまで行くと、聖は見知った男に遭遇した。その人物とは、

「ヴァイス？何やってんだこんなところで」

「うお!?……なんだ聖かよ脅かすんじゃないよ」

「わりーわりー。それでやっぱりお前もか？」

聖が問うとヴァイスは木にもたれかかりながら頷いた。その木の向こうには先ほど見えたティアナの姿があった。

「俺がヘリの整備始めた時ぐらいからずっとだからな……もう五時間はぶっ通した。休憩もとらずにな」

嘆息混じりに言うヴァイスに聖も顔を曇らせた。そして少しすると隠れていたところから出てティアナに声をかけた。

「おいーティアナー！」

「っ!?……白雲隊長」

急に名を呼ばれ若干体をビクつかせたティアナだったが、聖を一瞥した後またすぐにトレーニングを再開した。

その様子に聖も思わず溜息を付いてしまった。

「ヴァイスから聞いたけど……もう五時間も続けてるみたいじゃねーか。いい加減部屋戻ってさっさと寝ろ」

「いえ。もう少しやっていきます。凡人なものでもっと努力しないと……」

トレーニングを続けながらティアナは答える。その目は真剣であるもののどこか焦りが見えた。

「凡人って……。お前ら新人はみんな同じだと思うぜ俺は」

「そんなことありませんー！」

聖の言葉をさえぎるようにティアナは声を荒げた。聖はそれに驚くことなく言葉をつむぐ。

「そうかい……。じゃあ好きにしな」

「……ありがとうございます」

「ただし！条件を守れ」

俯いているティアナに聖は近づくと告げた。

「深夜12時以降は訓練をするな、睡眠もとらねーと次の日の訓練に響くからな。いいな？」

「はい！」

大きく返事をしたのを確認すると、聖は踵を返しヴァイスのところまで戻る。そこでヴァイスが聖に問うた。

「いいのかよ？聖。あんなこと言って」

「ああ。だけど守らなかつたら俺がじきじきに、しごいてやるから大丈夫だ」

「……そいつあおつかねーな」

引きつった笑みを浮かべながらヴァイスは答える。

聖は肩をすくめるヴァイスに言葉をつむぐ。

「ヴァイス。頼みがあるんだが……」

小声で告げられたそれにヴァイスは快く承諾した。

「ああ。別にかまわねーぜ」

「世話かけるな」

「いっせ」

どこかの怪異専門家と吸血鬼モドキの少年のような台詞をかわし、聖はその場を後にした。

そしてそれから約一週間後、今日は2ON1で模擬戦をすることになったらしい。所謂なのは1人に対し、それぞれの部隊の新人2人が模擬戦をするということだ。

それが開始される直前になり聖はやってきた。

「おう聖、ギリギリだったな。なんか用でもあったのか？」

「ああ、ちょっとな。最初は……ティアナとスバルか」

……ヴァイスの話だと俺が言っという時間の方は守ってたみたいだけど、さてどうなるかな。

聖がヴァイスに一週間前頼んだのはティアナが無理をしないための監視だった、聖自身がやってもよかったのだが、彼は別に調べるものがあつたのだ。それはティアナの家族構成だ、調べたといってもはやてに聞き、そしてティアナの兄のことについて調べただけだが。

ティアナの兄、ティード・ランスターは航空隊の一等空尉でエリートだったらしい。しかし、ティアナが10歳の時、彼は21歳という

若さで殉職している。違法魔導師の追跡と捕縛の任務中、対象との戦闘で破れたのが原因らしい。しかしティアナが今のようにな力を求めるようになったのは、他の理由があると聖は考えた。

それはティーダの死を不名誉であり、無意味と侮辱した心無い上司の言葉にあるということだ。自分のこと優しく育ててくれた兄のことを、そのように侮辱されればティアナの心にはさぞ大きな傷が残ったことだろう、それがおそらく今のティアナが力を欲するようになった原因になったのではないかという結論が聖の中で出された。

あごに手を当てながら考え込んでいるとフェイトが聖の方を叩いた。

「聖、始まるみたいだよ」

「ん、ああ」

フェイトの声に反応しビルの上からティアナたちを見下ろすと、ティアナがクロスミラーージュを構えていた。ティアナの周辺には魔力弾が浮遊し、ティアナはそれを上空にいるのに向けて打ち出した。

「クロスシフトか……」

「ああ、みたいだなだけどキレがねーな」

そうなのだ、普段のティアナのクロスファイアシールドならばもう少し早く、動きもキレがあるはずなのにそれが見られない。

現になのはに容易に避けられているし、先にウイングロードで空に上がったスバルに対しディバインシューターを放たれてしまってい

る。

スバルはそれを防御に徹しながらほぼ強制的に突破した。なのもそれを叱咤するが、スバルはそれをちゃんと避けますからと反論した。

それに対し疑問を抱いたのはなのはただけではなかった、聖もまたその行動に疑問を持つ。先ほどの場合、たとえば完全にやむ終えない状況ならば、ああいった行動もありといえはありだ、しかし今の場面はどう考えてもそんなことをする必要はない。

その行動に聖も顔をしかめながら見ているとティアアナが消えていることに気付く、皆もそれに気付いたのかあたりを見回すと、一つのビルの上にティアアナがクロスミラーージュを構えていた。

「砲撃!?ティアアナが!」

驚愕の声を上げるフェイト。それもそのはずティアアナは本来砲撃型ではなく、射撃型だ。それがアウトレンジからの大威力砲撃を選ぶとは思っても見ないのは当たり前だ。

だがスバルとなのはのほうでも動きがあった。再度、スバルがなのはに突っ込み今度は真正面からなのはのラウンドシールドを破ろうとしていたのだ。

だが新人のスバルの力でなのはのシールドが破れるはずもなく、そこに停滞させるだけがやっとのようだ。しかしそこで先ほどまでビルの上にあったティアアナが消えた。いやそれは最初からティアアナではなく、ティアナの生み出した幻覚、所謂フェイクシルエットだ。

本物ティアナはというと、スバルの作り出したウイングロードの上

を駆けていた。そして、なのはの頭上までやってくるとクロスミラー
ジユで作り出したダガーブレードをなのはに向けて急降下する。

激突の衝撃で周囲に砂煙が舞い一瞬だが三人の姿が見えなくなる。
だが砂煙が晴れたあとそこにいたのは、レイジングハートを待機モー
ドにし、スバルの拳とティアナのブレードを素手で受け止めるなのは
の姿だった。

その光景にその場にいた全員が息を呑む。ただ1人聖だけはじつ
と三人を見つめていた、いや見つめていたというよりは睨み付けてい
たというほうが正しいだろう。

呆然とするティアナとスバルだが、ティアナは不意に後退すると先
ほどの砲撃魔法に入る。それと同時にティアナの悲痛な叫びが吐き
出される。

「私は……！もう、誰も失いたくないから!!だから!!強くなりたいた
んです!!!」

それを聞いたであろうなのはも悲しそうな顔をするが、その手の周
りには魔力が収束する。そして告げられたのは冷たい言葉。

「少し……頭冷そつか……」

そして収束された魔力弾はティアナに打ち出され、ティアナはそれ
を避けることもできずに直撃する。直撃によりふらつく彼女に再度
魔力砲、しかも今回はティアナ自身の技であるクロスファイアシュー
トが放たれる。

が、それはティアナに直撃する瞬間、聖によって切り裂かれた。

聖の姿を見たなのはを含めその場にいた全員が驚愕の表情をする
が、スバルは少しだけ安堵が混じったような表情を浮かべていた。

「どっぴうつつもりなのかな……聖君」

なのはが聞く、その口調はとても冷淡で普段のなのはからは想像が
できなかった、目も聖を睨みつけている。

「……」

対する聖もただ黙ってなのはを睨みつけるだけだ。だがその目は
なのはだけに向けられているものでもなかった。

にらみ合う2人の間には不穏な空気が流れる。

VS なのは

2人の間に流れる沈黙の中、聖の後ろにいたティアナが声をかけようとした瞬間、聖の姿が消えた。だがその瞬間ティアナの意識は暗転した。

見るとティアナの後ろに回った聖が彼女に対し、手刀を放っていた。昏倒したティアナを担ぎ上げると、今度はなのはの前でバインドをされていたスバルの元に行くと、

「聖さん…どうしてティアナを…」

そこまで言いかけたところで先ほどのティアナと同じように、聖はスバルの首筋に手刀を放ち、昏倒させた。

「たくっ……なにやってんだかこいつ等は」

軽いため息をつきながらつぶやく聖をなのはは驚愕の表情で見つめていた。先ほど自分の攻撃からティアナを守ったくせに、そのティアナを昏倒させるなんて思っても見なかったのだろう。だがそこで聖は浮き上がった。

「……どこに行くの？」

「お前は自分の生徒をこの状態のまま放置しておきたいのか？」

聖の言葉にはたと気付いたような表情をするのはだが、聖はそれを無視しフェイトたちがいるところまでやってくると、

「……」

「う、うん」

フェイトは2人を寝かせると、聖に問う。

「なのはと戦うの？」

「場合によってだな」

それだけ告げると聖はまた、なのはの元に戻っていった。

なのはの元に戻った聖は、腕を組みながらなのはに聞いた。

「なのは、一つ聞きたいんだが。お前は以前俺にティアナのことをどう思うと聞いたな、あの時お前はティアナが焦っていることをわかってたよな？その後お前はティアナと腹を割って話したのか？」

「それは……」

「話してないのか」

言葉に詰まるなのはに聖はあきれた声を出す、さらに続ける。

「まあお前は教官だしな、新人達の訓練メニュー考えるのも大変なのは俺も知ってる。……けどな、そこまでわかっていたならなんでアイツの悩みを問い詰めてでも聞かなかった」

「……」

「わかってくれると思ったのか？無理言っちゃいけない、テメエの考えていることなんてテメエが口にしなければ誰もわからねーんだよ」

俯くなのはに聖はさらに言葉をつむいでいく、まるでなのはを責めるように、その言葉の中には明らかに怒りが含まれていたが、わずかながら悲しみも混ざっていた。

だがそれを聞いていたなのはから小さく声が漏れ始めた。

「……黙って」

「あ??」

「もう黙ってよ！聖君!!私の事なんか何にも知らないくせに、私のやり方に口を出さないで!!」

「だから!!お前も人に相談するなりしろってんだよ!!勝手に1人で抱え込みやがって、自分のことをわかってもらいてえならテメエから声を出せよ!!」

2人は声を荒げいいあう、なのはの瞳は涙で潤んでいた。聖はそんななのはを睨みつけると、安綱を抜き放つ。そしてなのはに告げた。

「来いなのは、お前の心に溜まってるもん全部俺に吐き出してみる。俺が全部受け止めてやる」

聖の言葉に溜まった涙をぬぐい、なのははレイジングハートをデバイスに戻し構えを取った。そして2人は互いの愛機をぶつけ合う、戦いが開始された。

初撃からぶつかり合った2人のうち、先に先手をとったのはなのだった。彼女は後退すると共にアクセルシューターを展開し、それを

聖めがけ打ち放つ。だが響もそう易々とくらくらってやるつもりもない、放たれたシューターを切り払う。

「こんなもんで倒せるとは思ってねえよなあ!!」

「思っていない……よっ!!」

切り払いながらなのはに接近し、さらにそこから切りかかる聖の斬撃をシールドで防ぎながらなのはは答える。

だがその顔は少しだけ不敵に笑っていた。

それもそのはず、さきほどなのはが打ち出したシューターの中には、一発だけ他のシューターにまぎれさせわざとはずさせたものがあったのだ。なのははそれ聖に当てるため、シールドを制御しながら操っていたのだ。

シューターが聖の首筋に当たる瞬間、そのシューターが掻き消えた。だが聖は何もしていない、なのはが驚愕に顔をゆがめていると、

「シューターが使えるのはお前だけじゃないんだぜ?」

「!!?」

言われた瞬間なのははシールドを解き、一気に後退する、だが聖はそれを追撃する。

「そらそらあ!!休んでる暇はねーぞーオラア!!」

「!!?っくっく!!」

光速で近づく聖になのははガードが間に合わず、大きく吹き飛ばされ、ビル群に突っ込んだ。

「こんなもんで終わりじゃねえだろ!!なのは!俺はまだお前の気持ちなんてわかんねえぞ!」

なのはが突っ込んだビル郡に対し声を上げると、砂煙の中から一筋の光が聖めがけて向かってきた。それをギリギリで回避しその方向を見ると。

多少バリアジャケットを汚したなのはが力のこもった目で聖を見つめていた。

「行くよ聖君!次は手加減しない!」

「ああ、こっちも手加減する気はねえ!」

なのはは再度アクセルシューターを展開する、聖もまた呼応するかのよつに、自らのシューターを展開する。

2人の魔力が交差した時、聖はなのはに問うた。

「お前は本当は誰かに自分のことをわかってもらいたかったんじゃないのか!?!」

「!!」

「だけど自分は教官だからという固定概念から、皆に心配をかけまいと、弱いところを見せないとただただ自分の中に感情を押し込めてきた!違うかなのは!?!」

「……そうだよ。でも！その何が悪いの！？みんなに迷惑をかけないとする気持ちの何処が悪いの！？自分の中にしまつことが悪いの！？」

互いの愛機をぶつけ合いながら、なのは自分の声を吐き出す。

「悪いに決まってる！！皆に迷惑をかけないとしようとする」とは頷ける！だけどな！！自分の中で完結させようとする」とは間違ってる！！」

安綱を振り、なのはを押していく聖。

それによりなのはは苦悶の表情を浮かべる、攻撃もそうだがおそらく言葉の方もきいているのだろう。

「何のための友達だ！いいかなのは、勘違いしてるようだから教えてやる！友達だからってなテムエの考え全てがわかるわけじゃねえんだ！！ましてや、それが自分の生徒だったときなんてできるはずねえだろ！！そんなことぐらいテムエでも十分わかってたはずだろうが！！」

「それは……」

「迷ってるのに1人でずっと抱え込んで、最後に起きたのが今日みたいなことじゃねえか！それでなんだ？ティアナが自分の考えを理解できなかったからってあの仕打ちか！？」

「違う！！あれはティアナが危険なことをしたから！！」

「じゃあその危険なことをさせないために、お前はアイツと何か話したのかよ！！」

再びなのはは言葉を詰まらせるが、なんとか言葉を搾り出す。

「でも…ティアナならわかってくれると信じてた!!きつと私の……」

悲痛な声を上げるなのはに聖はさらに追い討ちをかけるため、追撃態勢に入る。が、

そこで急激に聖の動きが止まった、なのはがバインドをかけたのだ。聖がそれに顔をしかめていると、なのはの方に魔力が集まっていった。

「収束砲か……!」

毒づくが既に遅かった、なのはの周りには既に多くの魔力が収束し終わり、完全に打ち出す態勢に入っていた。

「……………ゴメンね……………聖君」

悲しげに言うなのはの目からは涙が一筋零れ落ちた。

そして次の瞬間、聖は膨大な魔力の奔流に飲み込まれた。

轟音の後、なのはが聖の姿を確認しようとして砲撃後を見るとそこには、

「……………」

バリアジャケットのところどころが焼け焦げながらも、しっかりと立つ聖の姿があった。その姿に誰もが息を呑んだ、本来であればなのはの収束砲、スターライトブレイカーを直撃すれば大体のものは昏倒するのがセオリーだ。

だが聖はそれを耐え抜いた、頭から多少の血を流しながらも聖は

立っていたのだ。なのはが呆然としていると、聖が消えた。

なのははすぐにスバルと、ティアナが昏倒させられたときのことを思い出すがもう遅かった。一瞬の衝撃の後なのは自身の意識が薄れていくのを感じた。薄れてゆく意識の中でなのはは聖の声を聞いた。

「もっとみんなに自分のことを話せ……この大バカ野郎」

そこでなのはの意識は完全に暗転した。

なのはが意識を失ったことにより、空中から落ちそうになるが聖はそれを抱き上げると、フェイトたちの下に戻っていった。

「聖、なのはは？」

「大丈夫だ、ちょっと強めにやったから夕方ぐらいまでは目が覚めな
いかもな、グッ……！」

頭を押さえながらつめく聖に皆が心配そうに駆け寄ってくるが、

「大丈夫だ、俺よりもこいつ等三人を頼む。エリオ、キャロ。悪かった
な模擬戦なくしちまって」

「い、いえー気にしないでくださいー」

「後でもできますから!!」

二人が言ったのを確認すると、聖はなのはを再度抱き上げ、医務室
に向かった。

なのはが目を覚ましたのは、夕方だった。目を覚ましたのは、一番先に聖の下に向かった。聖は屋上で風に当たっていた。

「聖君…その、今日は……」

「いいさ……俺も悪かったな、お前の考えを完全否定するようなこと言っちゃまって」

「ううん、違うよ。聖君は私のいけない所をわからせてくれたから、凄く感謝してるんだ」

しばしの沈黙が流れた後、なのはが口火を切った。

「私ね……本局に入りたてのころ、事故にあったんだ。任務中だったんだけどね、本当に何の危険もない任務だったんだけどアンノウンが現れてね……撃墜されちゃったんだ。いつもの私なら難なく倒せたと思っただけどそのときは……」

「疲れていた？」

聖の問いになのはは頷きさらに続けた。

「連日の任務任務で体が悲鳴を上げてるのは知ってたんだ。けどね、みんなに迷惑をかけちゃいけないと思って黙ってたんだ。もう本当になんていうか今日のティアナみたいだね」

「だから、ティアナに冷たく当たったのか」

「うん、わかってほしかったんだ。でも言葉が足りなかったね……結

果的に聖君たちにも迷惑かけちゃったし」

俯くなのはの目元は涙だろうか、夕日に反射し光っていた。だが涙ながらもなのは続ける。

「直ったと……思ったんだけどな。でも、ダメだったね、結局みんなに迷惑かけて……私あの時から全然変わってなんかいなかった……」

なのはからすすり泣く声が聞こえはじめた。それだけ自分がやってしまったことを後悔しているのだろう。それを見た聖はなのはを引き寄せ、抱きしめ告げた。

「人間なんてそう簡単に変わるもんじゃない、失敗を繰り返して変わっていけるんだ。今日はそれが気付けてよかったじゃねえか。……いいかなのは、模擬戦のときも言ったけどもっと周りを頼っていいんだ。苦しくなったら誰でもいい、フェイトやはやてでもいい、新人達や他のスタッフの人たちでもいいから自分の悩んでいることをどンドン話せ」

「聖君でも？」

「ああ、勿論」

聖の胸の中でなのはが聞くと、彼は笑顔で頷いた。それに安心してしまったのか、先ほどの睨り泣きではなく、なのは声を上げて泣き始めてしまった。泣きじゃくるなのはを聖はそっと抱きしめる、なのはもそれにすぎるように泣き続けた。

なのはが完全に泣き止んだのは、それからおよそ10分後だった。

その後ティアナが目を覚まし少しすると、六課の館内にアラームが鳴り響いた。どうやら沿岸空域にガジェットが出現したようである。

フォワード陣は全員ヘリポートに集まっていた。今回は空戦という事もあり新人達は全員出撃はしないこととなった。ただ1人ティアナは終始俯いていた。

「ティアナ、思いつめちゃってるみたいだけど……」

「やっぱり、命令を聞かない部下は要らないってことですか」

なのはが声をかけるとティアナはまたもなのはに噛み付くが、先ほどとは違いそれを打ち破るものがいた、それはシグナムだ。彼女はティアナの胸倉を掴みあげるとそのままティアナを殴りつけた。

その場にいた全員が驚きの声を上げるが、聖はいたって軽いので告げた。

「よし、んじゃあなのは、お前は残ってティアナに話をしてやれ。ガジェットは俺とフェイト達が倒してくっから」

ヘリに乗り込みながら聖は言つとフェイトとヴィータに軽く耳打ちした。

「なのはとティアナを仲直りさせるためだ、協力頼む」

告げられると二人は小さく頷いた。それを確認した聖は、

「ヴァイスー！発進してくれー！」

「おっしょー！」

聖たちを乗せたヘリは目標の空域まで飛び立っていった。

「でもあいつらにだけで大丈夫か？」

「ああ、平気だろ。ティアナもきつとわかってくれるさ」

ヘリの中で疑問を投げかけるヴィータに聖は軽く返すと、フェイトはそれに呆れ顔で、

「無責任すぎる気もするけど……いまは2人が仲良くなってくれるところを願おうか」

「だな」

ヴィータが言ったところで操縦席にいるヴァイスが告げた。

「そろそろ目標空域だ、用意してくれ聖」

「りょーかい。んじゃ、俺達は俺達の仕事をちゃっっちゃと終わりにしますかね」

ヘリのハッチが開くと共に、聖は外に飛び出しガジェットを狩りに向かった。フェイトたちもそれに続き外に飛び出した。

ガジェットを全て殲滅し終わり、聖たちが六課の隊舎に戻ると、隊舎前で泣いているティアナをなだめているなのは姿が見受けられた。

聖たちはその姿を見つけると、顔を見合わせ笑いあった。

さまざまなおことがあった一日だったが、最後は平穩無事に終わったようだ。

休日 アラート

なのはとティアナのいざこざがあつてから少したち、二人の関係も元に戻り、新人達は今日も訓練に明け暮れていた。

ある程度訓練が終わった後、なのはが皆を休憩させると、新人たちに告げた。

「じゃあ今日で第二段階の訓練終了なんだけど……私はみんな合格だけど、お二人はどう思います?」

なのはがそばにいるフェイトとヴィータに投げかけると、

「合格」

「合格だな」

「はや!!」

二人の即答に、スバルとティアナが驚愕の声を上げるが、そこでヴィータが付け加えた。

「ま、こんだけ訓練続けてんに合格しない方がおかしいんだけどな」

「「で、ですよねー……」」

ヴィータの補足に若干冷や汗を流す二人。その姿を見ていた聖が苦笑していると、

「聖君はやんし強しっ」

「は？　なんで俺？」

疑問を返してしまう聖だが、それも当たり前の話だろう。なにせフェイトたちは戦闘の為の訓練に参加し、指導をして入るものの、聖はそんなことはしていない。しているといっても、多少のアドバイスぐらいだ。

「だって聖君も隊長だしね、それにみんな的確にアドバイスもしてくれてたみたいだし」

「あー……そういうことか。そういうことなら合格だ」

「うん、……じゃあ今日はみんなこれからはオフってことで」

なのはが言うと、新人達は疑問符を浮かべる。おそらく言われている意味が理解できていないのだろう。

「今日は丸々一日休日ってことだ」

その姿に見かねた聖が代弁すると、新人達は嬉しそうに笑顔を浮かべた。隊員といってもまだまだ遊びたい年頃だろうから、嬉しいのは当たり前だろう。

聖たちは訓練を終え、寮に戻っていった。

スターズとライトニングタッグを見送ったあと、隊舎を歩く聖は後ろから声をかけられた。振り向くとそこにいたのはフェイトだった。

「聖ー、ちょっといいかな？」

「別にいいけどなんだ？」

「えっと……その……」

聖が問うと、フェイトは先ほどまでとは打って変り顔を赤らめ俯きながら、指をいじいじと雨後冒し始めた。

その様子に聖が首をかしげていると、

「聖くん」

また後ろから声をかけられた。聖がそちらを見やるとなのはが駆け寄ってきていた。

「なのはか、どした？」

聖が振り返ろうとした瞬間、フェイトが聖の制服の袖を引っ張った。するとなのはもフェイトがいることに気付いたのかなんとも微妙な表情をする。

三人の間に若干の沈黙が流れる。やがてその沈黙に耐え切れなくなったのか、聖が口を開いた。

「その、なんだ。とりあえずフェイトは俺に何の用だったんだ？」

「えっと、今日はもうこれで私もオフだから……一緒に出かけようかなって思ったんだけど……」

「ふえ!?」

フェイトの声に反応したのは、聖ではなくのはだった。その声に聖とフェイトがそちらを見やるとなのは、しまった、というように口をふさがぐが既に遅かった。

「もしかして……なのはも？」

「う、うん」

フェイトの問いになのははぎこちなく頷く。そしてまた三人の中に流れる沈黙、だがそれは先ほどよりもはるかに重たげなものだった。

「じゃ、じゃあ私とフェイトちゃんと聖くんの三人で一緒に出かけない？」

「お、おう！そつだな……うん、それがいい！じゃ、準備してくるから十分後に隊舎前でな！」

聖はそそくさとその場から去っていった。残された二人はとくと

「はあ………」

とてつもなく残念そうな溜息をついていた。

まったく、なにやってるんですかこのヘタレ

「うっせ、お前あんな状況味わったら誰だって逃げたくなるっての………」

自室に戻るため寮の廊下を駆ける聖に安綱は罵倒した。心なしか声のトーンが下がって聞こえるのは気のせいだろうか。

普通ああいう状況であれば、男性である聖様がどうにかするべきであるのに……なんと情けない

「だーかーら！あんな状況今まで味わったことないのに対処もクソもあるかっての!!」

そこを何とかするのが男の度量が左右されるところでしょうが！

そんな一人と一機の言い合いは聖の自室に到着するまで続いていた。

そして十分後、聖が隊舎前で待っていると、中からフェイトとなのはがやってきた。先ほどのような暗めの顔ではなく、明るさが戻っていた。

電車に乗り、市街まで行くと三人がまず向かったのは大型のショッピングモールだ。以前聖とフェイトが一緒に来たところである。

その中でなのはとフェイトは服を選んでいった。はたから見ると仲のよい友達が買い物に来ている様に見えるが、二人の目は時折互いをけん制しあうような目になっていた。ちなみに聖はというと二人の間に挟みこまれ、大変そうだ。

その後も色々と回ったが、結局服はそんなに買わず基本的にはウィンドウショッピングで済ませていた。

一息つくためベンチに腰掛けていると唐突にフェイトが口火を切った。

「なんだか……私達見られてるよね？」

「あー……それはたぶん男からの視線は俺に対してだろうな」

「どうして？」

「お前らみたいな綺麗でかわいい女の子、しかも二人と一緒にいれば誰だってうらやましくなるだろ？」

その言葉を聞いた瞬間、二人は耳まで真っ赤にし俯いた。

……今更気付いたのか。

溜息をつく聖は、ふと立ち上がる。

「ちよっと待ってろ、あそこでクレープ買ってくるわー、お前らは何がいい？」

「え？いい、いいよ私達も出すから」

なのはが立ち上がるつとめるものの、聖は軽めにデコピンを放つ。

「男なめんな、それぐらい奢れねえと男が廃るってもんだ」

「じゃあ……私はイチゴが入ってるやつで、フェイトちゃんは？」

「……カスタードがいいかな」

「りょーかい、じゃあ行ってくる」

二人の注文を聞くと聖はクレープを買いに向かった。

聖が行ってすぐ後、なのは自分のおでこをに触れると、嬉しそうに微笑を浮かべていた。それを見ていたフェイトは物ほしそうな瞳で、

「……………いいなあ……………」

とつぶやいていた。

数分後、二人は戻ってきた聖と共にクレープを食べていた、するとフェイトが。

「ねえ聖、私の食べてみる？」

「くれるのは嬉しいけど……………嫌じゃねーのか？男が口つけたやつなんて」

「大丈夫！だから……………あーん」

言いながらフェイトはクレープを向けてくる、その目がなかなかの気迫だったので聖が口を開けた瞬間。

「んが!?!」

勢いよくクレープが突っ込まれた。聖が噛み切ったのをフェイトが確認すると、彼女はクレープを聖の口から抜き取った。

「おいおい聖？」

聞かれてはいるものの、その瞳には光がともっていないかった。

「お、おっ」

あまりの恐ろしさから空返事しかできない聖だが、ふとその聖の肩をなのはが叩いた。恐る恐る聖が後ろを振り向くと、

「聖君」

こちらもクレープを構えたなのはがとてもいい笑顔で待ち構えていた。だがその後ろに黒いナニカがちらついているのは気のせいだろうか。

仕方なく聖が口を開けると、先ほどのフェイト以上の速度でクレープが口に突っ込まれた。

……もつやだこの子達。

内心で二人の行動にげんなりする聖だが、結局二人から逃れられることはできなかった。

精神的にも削られた状態で、聖がうなだれていると急にキャロからの全体通信が入った。どうやらエリオと歩いていたところ、マンホールから女の子が出てきたらしい。しかもその女の子はレリックと思しきものも所持していたらしい。

それを聞いた三人は互いに頷きあつと、ショッピングモールを飛び出すと、グリフィスに市街飛行許可を申請してもらい、一気に現場に

飛び立った。

「はやて！今どんな状況だ？」

「今のところヴァイス君にへり出してもらって、シャマルを向かわせとるから大丈夫や」

そこまで聞こえたところで、ルキノから焦った声で全体通信が入った。

「た、大変です！只今市街地上空と地下水路に大量のガジェット反応です！」

「ガジェットってことは狙いは、エリオたちが保護したその子のレリックか……」

……またはその子自身が。

内心で考えているとはやてが言ってきた。

「聞いたとおりや、どうやらガジェットの多くは空におるらしい、せやから聖君たちは空を頼めるか？」

「了解だ」

はやての命令に三人は頷きあつと市街上空に展開するガジェットの掃討に向かった。

上空にはかなりの数のガジェットが展開していた。しかも部隊を組んで飛行していた。

「結構な数だなあおい。これ一機一機潰してたらちがあかねえ」

「でも、少しでも数を減らさないと市街地に被害がでる」

「私達で足止めしないとね」

三人は口々に言うと、三方に別れガジェットの殲滅をはじめた。

およそ二十機ほどのガジェットを破壊したところで、聖はある違和感を感じた。

……おかしい、どう見てもさっきからガジェットの数が減っていない。いくら多いといってもこれはありえない。

そう、先ほどから倒しても倒してもガジェットが減る様子がないのだ。まるで破壊したところから増えていくような感覚が聖に走る。

「まてよ……まさか!？」

……こちら側に六課の主力である二人が来てるこの状況、さらにこちら側には新人達のみ、そしてへりはがら空き。さらにこのガジェットの大群。

頭の中で考えられることを聖はフル回転させる。

「なのは、フェイト！お前らはへりの護衛に行け！」

「え、どっしりして？」

二人に緊急の連絡を入れると、なのはから疑問の声が投げかけられ

ると、聖は可能性の話 시작했다。

「いいか、もしこのガジェットの大群が俺やお前達を陽動するためだったらどうなる？もし、敵の狙いがレリックまたはヘリに乗っている女の子だったとしたら？」

「!!」

二人が驚愕の表情を浮かべる、聖の考える最悪の状況が想像できたのだらう。するとそこへはやてから通信が入った。

「三人とも、そこから離れてええで！今から私がリミッター外した状態でガジェットを一掃する！」

「なるほど、そついやはやては広域殲滅型だったか……なのは！フェイト！急いでヘリに直行しろ!!」

聖の声二人は頷くと、ガジェットの合間を駆け抜け抜けヘリの方に向かっていった。それに対し聖はといつつ、

「はやて！少し気になることがある、遊撃手としての権限を使わせてもらっぜ？」

「うん、ええよ。でも気をつけてな？」

頷きだけ返すと、聖はフ二人とは逆方向に飛んで行った。

聖の飛んで行った方向には一人の女がいた。大きな眼鏡をかけた人懐っこそうな顔立ちをしてはいるものの、その瞳は怪しげな光に満ちていた。

「あらあら、随分早く感づかれちゃったみたいねえ。まあいいわ、ディエチちゃん？」

女が言つと空間モニタに女と同じような服を着ていた少女が、静かに答える。

「なに、クアットトロ？」

「作戦変更ー、さつさとあの目障りなへり落としちゃっていいわよー。そろそろお嬢様も限界だろうし……」

そこまで言つたところで聖はある感覚に襲われその場から後退した。

「ち、いい勘してるな」

やってきたのは聖だった。聖は頭をガシガシとかきながらクアットロに目を向ける。対するクアットロも先ほどから笑みを崩さず聖を見つめている。

「随分荒っぽいんですね管理局の職員さん？」

「ぬかせ、お前らがやってる」とほど荒っぽくはねえよ

「……まあそーですねー。でもいいんですかあ？」

甘ったるい声でクアットロが聖を挑発する。

「へり間に合いますかねえ？」

「間に合うさ、絶対にな」

強気な声で告げる聖にクアットロは若干顔に苛立ちを見せる。そして先ほどのディエチから少し残念そうな声で通信が入った。

「ゴメン、クアットロ。撃墜できなかった」

「……そう、じゃあ仕方ないわねえ」

告げるやいなやクアットロは軽めに指を鳴らす、すると当たりに一瞬にして煙幕がはびこる。

「ちっ！妙な小細工を！」

憎憎しげに聖は魔力を放出し、煙を吹き散らす、そこにはもうクアットロの姿は見えなかった。

「クソツたれが……、しかもさっきのはやっぱり実体じゃなかったか」

毒づく聖は軽めにあたりの魔力を集めてみるが、そこには微量な魔力しか残っていなかった。

「幻惑……シルバーカーテン。やっぱりお前がクアットロ……」

齒噛みをする聖は心底悔しそうだったが、すぐになのは達のほうに踵を返すと、その場から一気に飛び去った。

「とりあえず、レリック、女の子共に無事か……」

「うん、あそこで聖君が言ってくれなかったらもっと危なかったかも

ね

全てが終了し、六課の中ではなのは、フェイト、聖の三人が話をしていた。

「でも、結局捕まえることはできなかったねあの子たち」

フェイトが言うのはおそらくクアットロたちのことだろう。報告によれば、聖の前から姿を消したクアットロはもう一人の女の子ディエチのほうと合流し、逃亡を図りまんまと逃げおおせたらしい。

「まあ、次に捕まえると思っておきや大丈夫だろ、次につなげればいいだけの話さ」

取り逃がしたことを後悔している二人を聖がフォローすると、二人もしっかりと頷いた。それを見届けると聖はおもむろに立ち上がり大きく伸びをした。

「くあー、悪いな二人ともちょっと俺は休ませてもらっわ。あ、そうだなのは。明日今日保護した女の子のところに行くなら俺も行っていいか？」

「うん、いいよ。じゃあ明日の朝十時にね」

「了解」

聖はそれだけ告げると、寮へと戻っていった。

寮へ戻った聖は一人、安綱に問いかけていた。

「なあ安綱よ、やっぱりアレはクアットロだったよな」

ええ、確かにアレはクアットロです。おそらく他にいたという子も新しく奴が生み出したナンバーズ達でしょう

「だよなあ……」

聖様、わかっているとは思いますが手加減などは

「しねえから安心しろ、けどまあ次ぎ会うときは確実に捕まえねえとな」

聖の目には強い決意の炎が灯っていた。

ヴィヴィオ

事件のあった次の日、聖はなのは、シグナムと共に昨日保護した女の子が入院している病院に向かっていた。なのはとシグナムはフェイトの車で移動中だが、聖の方はバイクに乗っている。

最初はなのはと聖だけが行くはずだったが、病院側に聖王教会のシスター、シャツハがいるらしく顔見知りであるシグナムがいた方が良くということ、シグナムがついてきたのだ。そのときなのはが一瞬微妙な顔をしたのは気のせいだろう。

するとシグナムから聖に通信が入る。

『白雲、緊急事態だ。入院中の少女が病室から消えてしまったらしい、少し速度を上げるぞ』

「うっす、まさか逃亡っすかね？」

『どうだろうな、だが今は一刻も早く病院に到着しなくては』

シグナムは告げると一気にスピードを上げた、聖も同じようにスピードを上げ現場に急行した。

病院に到着すると中からシャツハが焦りを見せながら飛び出してきた。

「状況はどうなっていますか？」

「今のところ転移や飛行魔法が使われた痕跡は残っていません。他の

患者の皆さんも今のところは退避してもらっています」

なのはの問いにシャツハは焦りながらもしっかりと受け答えた。

「では四人で手分けをして探しましょう。私とシスターシャツハは中を、白雲と高町は外を頼む」

シグナムの提案に三人は頷きそれぞれ女の子を探しに行く。

「なのは、俺は中庭を探す。お前は外側を頼む」

「うん、わかった」

二人はそのまま別れた。

そして聖は中庭に到着し、辺りを見回しながら少女を探して歩く。だが、少女は一向に姿を見せない。

「いねーな……まさか攫われたなんてことは魔力反応からしてないだろっし」

つぶやきながら歩いていると、近くの花壇から少女が目に見え溜めながら現れた。

普通であれば無事見つかったことに安堵の声を漏らすのかもしれないが、聖の反応はそうではなかった。

「っ!？」

少女の顔を見た聖は顔を驚愕に染めていた。

同時に聖の脳裏によぎる過去の記憶。

だが聖はそれを振り払い少女に声をかけた。

「……探したぞ。ほら、部屋に戻るぞ」

やさしめの声で誘う聖に少女は声を震わせながら聞いた。

「ほら……？」

「い、いや。俺は……」

聖がそれを否定しようとする、少女は悲痛に顔をゆがめ今にも泣き出しそうになってしまふ。それを見た聖は大きく溜息をつく少女に告げる。

「……わかった、パパでいいぜ」

するとそれを聞いた少女が感極まってしまったのか、目に溜め込んでいた涙を流しながら聖の元に駆け寄ってきた。

聖はしゃがむと少女を抱きとめる。少女の方は聖に抱きとめられ泣きじゃくっている。だが聖はそれに動じることはなく、少女の背中を撫でていた。

やがてなのは達も集まり、少女搜索は終了となった。

少女が泣き止み、聖が話を聞くため一旦離そうとするが少女は聖の服をがっしりと掴みまったく離れてくれなかった。仕方ないので聖が抱えた状態で話を聴くことになった。

「どうして君の名前は？」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか……でもヴィヴィオどうして部屋から出たんだ？」

その問いにヴィヴィオはまた目じりに涙を溜めながら悲しげにつぶやいた。

「ママ……いないの……」

ヴィヴィオのつぶやきにその場にいる全員が悲しげな顔をする。だが聖は彼女の頭を優しく撫でながら悲しみを打ち消すように告げた。

「よし、じゃあ俺と一緒に探すか」

「ひそ……」

ヴィヴィオが頷いたのを確認すると、聖はなのはに念話を送る。

『悪いなのは、少しこの子と回って来るからもう少し待っていてくれ』

『うん、いいよ。ちゃんと面倒見てあげてね』

二人はその場から立ち去っていた。

二人の姿が見えなくなると、シグナムが疑問を口にした。

「それにしても、ヴィヴィオはどうして白雲のことを父親と思ったの

だろうな……」

「一番最初に会った男の人だからとかでしようか？」

「もしくは聖君が優しいからでしょうかね？」

シャツハとなのはが首をかしげながらつぶやく、ただなのはの方は若干顔を赤らめていた。

結局聖とヴィヴィオが帰ってくるまでその話は続いたが、結論は出ずじまいだった。

六課に戻ってきた聖は寮の自分の部屋にヴィヴィオ、そしてなのはと共にいった。ただシグナムはまだシャツハと話があるそうなので、病院に残った。

ヴィヴィオは病院で歩き回ったせいaka寮に着くまで眠ってしまっていた。だがその手は聖の服を掴んでおり、離れてくれなかったのでつれてくることにしたのだ。医師によれば容態は安定しているようなので大丈夫だろう。

ヴィヴィオは一度おきてはいたのだが、今は聖の部屋でなのはの膝の上で寝息を立てている。どうやらなのはが気に入ったようだ。

「ふう……」

「お疲れ様聖君」

溜息を漏らす聖になのはが労わる。なにせずとヴィヴィオの相

手をしていたのだから、疲れるのは必然だ。

ちなみにバイクはヴァイスが取りに行ってくれるらしい。

「聖君はヴィヴィオをその……引き取るの？」

「どうだろうな……でもえらく気に入られちゃったのは確かだからな……」

「でも病院で相手してた時は様になってたよ？」

なのは口元に指を置きながら笑みをこぼした。

「んなこと言ったってなあ」

頭をかきながら悩む聖だが、その顔は真剣そのものだ。すると、

「んっ……」

ヴィヴィオが目を擦りながらなのはの膝枕から起き上がった。ヴィヴィオは少し周りを見回した後、聖の腕に抱きついた。

「よく寝たか？」

「……うん」

いいながら聖はヴィヴィオの頭を軽く撫でる。ヴィヴィオも気持ちよさそうに目を細めている。

そんな二人の姿を見つめながらなのはは柔和な笑みを浮かべていたが、ふと何かを思い出したように手を叩くと聖に告げた。

「聖君！　これからはやてちゃんとフェイトちゃん、あと私と聖君の四人で聖王教会に行くことになってるんだけど……」

「…………マジか？」

急な事態に聖は口をあんぐりとあけて驚きをあらわにする。だがそれよりも大変なことが起こりつつあった。

「パパどこかいつちゃうの…………？」

ヴィヴィオがまた目に涙をため泣きそうになっていたのだ。おそらく会話の内容の細かいところまではわからないまでも、聖が出かけてしまうということはわかったのだろう。目に溜まった涙は今にも零れ落ちてしまいそうだ。

「い、いや！　落ち着けヴィヴィオ！」

「そ、そっだよヴィヴィオ！　聖君が行くっていつてもすぐに帰ってこれるだろうしー！」

「ばっ？」

なのはがいつてしまったことに聖が訂正しようとしたが、もう遅かった。ついにヴィヴィオの瞳から涙が零れ落ち、声を上げて泣き出してしまった。

そして泣きながら聖の足に抱きついてしまった。

「いつちややーだー！！」

大きな声を上げ涙ながらに懇願するヴィヴィオになのはと聖はそろってオロオロし始めた。

さらにヴィヴィオの泣き声を聞いたスバルたちも駆けつけ、場はさらに混沌としてしまった。だがそこへなのはに通信が入った。

『えっと……なのは？ それ今どんな状態？』

「あ、フェイトちゃん。それが」

なのはが説明を始める中、聖と新人達は泣きじゃくるヴィヴィオに四苦八苦していた。

なのはがフェイトたちに説明をしてから数分後、はやたとフェイトが部屋にやってきた。

「いやー、それにしても聖君も小さい子には弱かったかー」

クスクスと笑いながらはやてが言うが、聖はヴィヴィオに抱きつかれげんがりとしている。

『笑ってないで助けてくれっての！』

念話を送り懇願すると、フェイトがヴィヴィオの前にしゃがみこみ、ヴィヴィオが落としたウサギのぬいぐるみを拾い上げ、ヴィヴィオをあやす。

少しの間、フェイトがぬいぐるみを使って聖の事情を説明すると、ヴィヴィオもなんとか事情が飲み込めたのか多少ぐずりながらも頷いた。

「ありがとなヴィヴィオ、すぐに帰ってくるからいい子で待っていてくれな？」

「……うん」

「よし、いい子だヴィヴィオ。お前らも悪かったな巻き込んで」

「い、いえ！ 私達も力になれなかったですし」

聖が新人達に謝ると、ティアナが首を振る。

「ほんなら話もまとまったみたいやし、聖王教会いこか？」

はやてが提案すると二人は頷き屋上へと向かった。

「おもしろいもん見せてくれてありがとなー聖君」

「うっせ、うっちは何一つ面白くないわ！」

へりの中でケタケタとはやてが笑うのを聖は多少声を荒げながら返した。

「でもなのはちゃんならまだしも……なんでヴィヴィオは聖君にあらんなになついとるんやろーな？」

「おいコラ、その言い方だと俺がおっかない人みてーじゃねーか」

「まあまあ、聖おさえておさえて」

フェイトが聖をなだめると、聖は渋々といった様子で座りなおす。

「でもまあおふざけはこんくらいにして……実際のところどうなん？
あの子引き取るん？」

「そつだな、とりあえずは引き取るつもりは思ってる……でもいつまでも俺が育てられるとは思えないしな」

腕を組みながら眉間にしわを寄せ難しい表情をしながら聖が返答する。

「でもヴィヴィオ引き取らない方がぐずりそうな感じするけどね
……」

「たぶん聖がそばにいないと大泣きだよ？」

「だよなあ……」

二人の意見にうなだれる聖。実際のところもし聖が引き取らなかったら先ほどの比にならないほどの大泣きが待っていることだろう。

「じゃあ聖君がヴィヴィオを引き取る形でええかな？」

「ああ」

「となると……あとは後見人問題やなあ」

「あ、それなら私がやるよ」

はやてのつばやきに答えたのはフェイトだ。彼女は生き生きとし

たいたい笑顔で手を上げた。

「あー確かにフェイトちゃんならさっきのアレもあるし。それにエリオたちの保護者でもあるしなあ、どっや聖君？」

「どっって……俺はフェイトがいいならお言葉に甘えるしかねーし。いいのか？」

「うん！ 私は全然かまわないよ」

「そうか、んじゃよろしく頼むわ」

フェイトが快諾したのを確認すると、聖はフェイトに頭を下げる。だがふとなのはも手を上げた。

「私も後見人になる」

「は？」

「だって一人よりも二人いたほうがいいよ。ね？ フェイトちゃん」

なのははフェイトのほうを見ながら笑みを浮かべているものの、なぜかその笑みには威圧感が漂っていた。だがそれに気付かない聖はそれを断るため声をかける。

「いや、別の後見人は数に問題は……」

「一人より二人のほうがいいよね？」

「……はい」

声をかけてまではいいものの、威圧感に負け聖は小さくなってしまった。なにせなのは瞳に光が灯っていなかったのだ。怖がるのは当然である。

「ほ、ほんなら保護者は聖君で、後見人はなのはちゃんとフェイトちゃんてことでええかな？」

「もういいからでもしてくれ……」

聖は半ば投げやりにはやてに答えた。

その後はこれからの会議などをして、聖王教会に到着した。

ただ、へりの中でなのはとフェイトが小さくガッツポーズをしていたのは言うまでもない。

聖王教会のカリムの部屋に到着した四人だが、聖はそこで苦虫を噛み潰したような顔をした。それもそのはず、カリムの部屋にいたのは何を隠そう、聖の六課入りを促したクロノだったのだ。

「げ、クロノさん」

「ごういった場では提督とつけてほしいものだがな聖」

紅茶を飲みながら優雅に答えるクロノに聖はげんなりとすると、はやてに軽く耳打ちした。

「ちょっと俺屋上に行くわ。話はお前らだけで聞いていってくれ」

「え？」

「じゃあ頼んだぜー」

「ちょ!?! 聖君!!」

はやての了承を得ずに、聖はスタコラとその場から逃げおおせた。

「まったく……逃げ足の速い」

「まあ彼は前からあんな調子だ。気にしなくてもいいだろうさ」

はやては顔をしかめたまま椅子に座り、フェイトとなのはも苦笑いを浮かべながら席についた。カリムも微妙な表情だったものの、あまり気にはしていないらしい。

「では彼にはあとではやてが連絡してくれるというところで……でははじめまじょうか」

そして四人の会議が始まった。

屋上のヘリポートにやってきた聖は整備中のヴァイスと駄弁っていた。

「にしてもいいのかよ。こんなところで油売ってて、あーちょっとス Pana取ってくれ」

「俺今あんましくロノ提督と顔合わせたくねーの。ホレ」

ヴァイスにスパナを渡しながら聖が答える。

「そりゃまた何でだよ？ 元上司だろ？」

「あの人真面目そうに見えてたまに天然入ってんだよ。そこが苦手なわけだ」

「ほー、そりゃまら難儀なことって」

ヴァイスは面白そうに笑っていた。

その後、会議が終わるまで聖はヴァイスと駄弁っていた。

そして夜、聖とフェイトになのはが部屋に戻るとヴィヴィオが聖に駆け寄って来た。聖はそれをかがんで抱き上げるとヴィヴィオに聞いた。

「いい子にしていたか？ ヴィヴィオ」

「うん」

聖が聞くとヴィヴィオは聖に抱きついた。

「おっ」

「おかえりなさい聖さん」

「ヴィヴィオいい子にしてくれましたよ」

「そっか、サンキューなエリオ、キャラ」

ヴィヴィオの相手を頼んでいたエリオとキャラに礼を言う。エリオとキャラは軽く会釈をし聖の部屋を後にした。

そして聖はヴィヴィオを一旦ソファに座らせる。聖の後ろにいたなのはとフェイトがヴィヴィオの両脇にすわり、ヴィヴィオに告げた。

「ヴィヴィオ、突然でゴメンなんだけど。ヴィヴィオの本当のママが見つかるまで私達がママの変わりでもいいかな？」

「ヴィヴィオはどう？ いやだ？」

二人が首をかしげながら聞くとヴィヴィオはすぐには飲み込めていなかったが、少し涙をため小さく答えた。

「ううん、いやじゃないよ」

「そう、ありがとっねヴィヴィオ」

二人はそっとなヴィヴィオを抱きしめる。

「よかったなヴィヴィオ。ママが二人もできて」

「ひん……」

ヴィヴィオは頷くと同時にまた泣き出してしまった。だが今回のものは悲しいからではなく、嬉しいから泣いているのだから。

ヴィヴィオが泣き止みさして寝るかということになったわけではあるが、ここで問題が発生した。当初はヴィヴィオとなのは、フェイトと一緒に眠るはずだったのだがヴィヴィオが駄々をこねたのだ。

「パパも一緒がいい」

と。

3人は戸惑いながらもヴィヴィオに説明しようとしたが、ヴィヴィオがまた泣き出しそうになったので四人で眠ることにした。

幸いベッド自体はかなり大きなものなので、眠るのには困らないのだが問題はその配置だ。

「どうするよっ」

「どうするっていつでも……」

「やっぱりヴィヴィオの希望に沿った方がいいよね……」

ヴィヴィオの希望はまずヴィヴィオの隣には聖。そしてその隣になのはとフェイトという形なのだ。

自らの好きな人と一緒に眠ることに気が気ではないフェイトなのはだがその顔は若干嬉しそうだった。

結局ヴィヴィオのご要望どおりの寝方で眠ることになった聖たちは、ベッドに入り就寝となった。

ベッドに入り数分後、ヴィヴィオが寝息をたて始めた。それに続くようになのはたちも寝息をたてるが聖だけは眠れずにいた。

それもそのはずである。なにせ自分と同年代の女の子が薄着で密着しているのだ。男子であれば眠る事など到底無理だろう。

だがふとヴィヴィオが聖の服を握っていた手を離れた。

……チャンス!!

聖はベッドから這い出すと、そのまま部屋を後にした。

そのまま洗面所までやってきた聖だがそこで聖は洗面台を叩いた。

「クソツタレが……!!」

もらされたのは怒りを孕んだ言葉だった。

あまり御自分を責めてはいけませんよ。聖様

聖の悔しげな声に安綱が答えるが聖は唇をかんだ。

「わかってる、わかってるさ……! だけど、あの子はっ! ヴィヴィオは……俺のせいで生まれてきてしまったのも同然なんだ……!!」

そうかもしれませんが、すべてが貴方が悪いわけではないのですよ

「でも……」

もし、貴方が自分のせいだと言っているのであれば……聖様。ヤツを……スカリエッティを捕まえることがあの子への罪滅ぼしではないので

すか？

安綱の言葉に聖ははっとする。そして頷いた後安綱に答えた。

「そうだな……。それが俺にできる最善の策なのかもしれないな」

はい。では今日はもう眠りましょう。お体に障りますよ

「ああ、ありがとな安綱」

いえ、主を正しき道へ導くのも私の役目ですから

安綱は満足げに告げた。

部屋に戻った聖はベッドには入らず、ソファに横になり眠りについた。

温泉

「温泉旅行？」

聖が食堂でヴィヴィオ、なのは、フェイトと食事していると、向かいのテーブルに座るはやてが唐突に切り出した。

「これまた随分と急だな。それに今の時期にそんなことしてて平気なのかよ？」

「まあそれもそうなんやけどな。でも使えるときに使っとかないともったいないやないか。幸い今度の休日は皆オフやし」

はやては胸ポケットからチケットを取り出す。

「ほら、団体様ってあるやろ？ スバル達に聞いてみたら行きたがってたし、たまの息抜きぐらいええと思っついで？」

「ふむ……。なのは、フェイトお前らはどう思っつ？」

「聖の言うことはもっともかな、さすがに今の時期は危ない気がするよ？」

「そうだね。もしもってこともあるし……」

なのはとフェイトはそろって難しい顔をする。

確かにスカリエッティやガジェット、ナンバーズたちがまた襲ってくるかもしれないこの状況下で、遊びに行くというのは安易に容認できない。

「だ、そうだが？」

「ぐぬぬ……。あー！ そついえばまだいっくらんかったな。ちなみにこの温泉施設混浴やで？」

混浴、という言葉聞いた瞬間なのはとフェイトが固まった。だが聖とヴィヴィオはそれに首を傾げるだけだ。

「混浴……って本当はやてちゃん？」

「嘘じゃないよね？」

「あつたりまえやないか。で、どうする？ 行きたくないんならええんやで？」

二人の静かな問いにはやてはにんまりと笑いながら答えた。その顔はもうしてやったり感が半端ではないほど滲み出ている。

「おいはやてお前なにを……」「行く!!」「うおい!？」

聖がはやてを嗜めようとした瞬間、なのはとフェイトが立ち上がりながら聖の声を遮りながら言い放った。

ヴィヴィオはそれに驚いたのか、体を跳ね上がらせた。

「何言っただお前らー！ ちつき行くべきじゃない的なこと言っただじゃねえか!？」

「え、えっとそれはその……よくよく考えてみればいいかなーって。ねえなのは？」

「うん、うん！ ほら、スバルたちもがんばってる事だしご褒美的な？
それにヴィヴィオもいききたいよねー？」

しどろもどろになりつつ、フェイトから振られたなのはが今度は
ヴィヴィオに振る。するとヴィヴィオはキョトンとした表情になり、

「おんせんってなあに？」

「温泉って言うのはね、とつても大きなお風呂のことだよ！ ヴィ
ヴィオはお風呂大好きだよね？」

「うん！ おふるだいすきー!!」

ヴィヴィオは万歳をしながら喜びをあらわにした。その様子を見
たはやては聖の方を向くと、

「娘さんは行きたそうにしてるで？ ひ・じ・り・ば・ば？」

「ぐ……。はぁ……。わかったよ。行けばいいんだろ」

「よし！ ほんなら次の休日まで準備しといてやー」

それだけ言うと、はやてはその場から立去っていった。それを見送
るなのはとフェイトに聖が声をかけようとすると、

「ああっと！ そろそろお昼休みも終わりだから午後の訓練に行かな
いよ！」

「わ、私もまだデスクワーク残ってたから早く終わりにしないと!!」

二人はそそくさと食堂から去っていった。残されたヴィヴィオはまだお昼を食べているが、聖は口を半開きにしつつ、小さく呟いた。

「子供使うのは反則だろうよ……」

そして旅行当日。

六課の前にはフォワード陣とロングアーチスタッフ、各部隊隊長、副隊長が集まっていた。その中には当然、聖とヴィヴィオの姿もあった。

さらにそ彼らの前には、大型のバスが二台ほど並んでいた。するのはやてが皆の前に立ちなにやら話し始めたが、聖はというとなのはに耳打ちした。

「なのは、今日俺らがこれから行くところってどの辺だ？」

「えっとね、クラナガンから三時間ぐらいの山中にあるところだって。私も行ったことないんだけどね」

「随分と山奥だな……」

「でもその辺りは温泉地として有名だから何もないうてことはないよ」

なのはとの会話を聞いていたのか、フェイトが補足した。だが彼女の目の下には僅かにクマがかかっている。

「フェイト、昨日遅くまで調べてたまる？」

「え!? な、なんで？」

「目の下クマできてるし、欠伸も結構してたしな」

聖が指摘するとフェイトは慌てて手鏡を取り出して確認する。その様子がおかしかったのか聖は小さく吹き出した。

笑われて顔を真っ赤にして俯くフェイトに聖の手を握っていたヴィヴィオが聖を見上げながら問う。

「パパ。フェイトママぐあいわるいの？」

「んー? いいや具合は平気だよ。ただ少しあつかったんじゃないのか？」

肩をすくめながら聖は小さく笑った。

すると前ではしゃべっていたはやてが皆に号令をかける。

「ほんなら皆出發やー!!」

テンションマックスのままの号令に何人かは引いていたものの、ノリの良いスバル達などはそれにしっかりとのっていた。

「やれやれ……テンション高いっつて」

苦笑しながら聖もフェイトたちとバスに乗り込んだ。

「う、動けん……」

苦しそうな聖のうめきがバスの中でもらされた。

「大丈夫ですか聖さん？」

「お、おう。なんとかな……結構きついけど」

心配そうなエリオが前の座席から覗き込むと、聖は頷きながらかえす。因みに何故聖が動けないかというところ、

「……」

彼の両肩を枕にしてなのはとフェイトが眠っているのだ。しかも膝の上にはヴィヴィオが横になっている。

聖たちが座っているのはバスの一番後ろの席、およそ6人ほどが乗れる座席だ。ヴィヴィオがいるので広い方がいいだろうというはやの配慮で、ここに座ることになったのだがそれがまずかった。

聖の隣に座るのをなのはとフェイトは一步も譲らなかつたため、二人の間に聖が入る形となり、最初にフェイトが眠り、次になのはが眠った。

ヴィヴィオはというと、二人が眠ったあとも起きていたがやがて疲れたのか、現在に至る。

……つかこいつ等めっちゃいい匂いすんだけど!! なんだこれが女の子の匂いってヤツか!?

妄想も大概にしないと殺されますよ？

『わかってるけどしょうがねえだろうが！ めっちゃ近いんだからよ
』!!』

聖の心を読み取ったかのように、安綱が念話を送ってくるが、その声は若干冷たく感じられた。

お二人とも聖様と違い疲れているのです。そこをしっかりと支えてあげなさい

『随分と他人事だなおい!』

他人事ですから

そう告げた安綱は、また黙り込んでしまった。それに齒噛みしながらも聖は固まったまま動くことができなかった。

……早く着いてくれー。

心の中で嘆息する聖だった。

そんな聖から離れ前の座席に座るはやてはその様子を見て、これまたにんまりと笑っていた。

「フッフッフ。やっぱりこれぐらいせんとおもしろくないからなー。がんばりやー聖君」

心底楽しげにくつくつと笑うはやてを見ながら、通路を挟んだ反対

側の席に座るヴィータがシグナムに告げた。

「なあシグナム。はやてかなり楽しんでるよな？」

「……うむ。白雲には悪いが今回は犠牲になってもらうしかあるまい」

「かー……、アイツも大変だなー。でもまあ両手に花状態だからいいのか？」

「どうだろうな」

シグナムはまぶたを閉じながら苦笑交じりに答えた。

「とりあえず手え合わせとくか。南無」

ヴィータは聖の方を向きながら静かに手を合わせた。

六課を出発してからおよそ三時間後、一行は目的地である旅館に着した。

「ほんなら皆、部屋はさっき配ったプリントの通りやから、荷物置いたら好きに過ごしてええでー」

バスを降りた皆の前に立ったはやてが告げると、それぞれ旅館に入っていく。その最後列にはなのはとフェイトに手を握られ、笑顔を浮かべているヴィヴィオの姿があった。

だがその三人の後ろには四人分の荷物を持ち、色々と悟ったような

瞳をした聖がいた。

何せここまでほぼずっと、なのはとフェイト、ヴィヴィオの枕代わりだったのだ。疲れているのだろう。

「なんや……軽い罪悪感に苛まれとるんやけど」

はやての呟きのため息をつく守護騎士一同だった。

部屋に到着した途端、聖は床に突っ伏した。

「つかれた……いろんな意味で……」

その姿を見てなのはとフェイトは苦笑い、ヴィヴィオは心配そうに見つめている。

「つーか随分と日本風な旅館なんだな。部屋も畳だし」

「確かこの旅館の先代の人が地球出身だったらしいよ」

「なるほどねえ。そう考えると結構ミッドって地球と繋がりがあるんだな」

突っ伏すことをやめ、ゴロゴロと転がりながら聖は関心の声を漏らす。すると、

「ゴラ聖、お行儀悪いよ」

荷物を置き終えたフェイトが聖をたしなめた。

「お前は俺の母さんか」

「そうじゃなくて、聖がそういうことをするとヴィヴィオが真似しちゃっつでしょ」

「へいへい、わかりましたよ。まったくフェイトママは厳しいなあヴィヴィオ？」

起き上がりつつ、聖はヴィヴィオを膝の上に乗せながら問う。

「フェイトママきびしいー」

「だつてよ」

「もう！ ヴィヴィオを使うのはダメ！」

抗議するフェイトは頬をぷくつと膨らませる。しかし、二人の姿を見つめていたなのはが口を開く。

「はいはい。二人ともそこまで！ せっかくきたんだから楽しまないと！ まだ夕飯までは時間があるからお風呂に行かない？」

「そつだじゃあ行ってみるか。言っておくが混浴はしないからな」

釘をさすように聖が告げると、

「しそ……でしょ……!?」

「驚愕の言葉をハモらせんな！ つか、当たり前だろ……。さすがに風呂は無理だ」

「一緒に寝てるの？」

「服を着てるからアレは……しかたない」

二人と同じベッドで寝ていることを思い出しつつ、若干顔を赤らめながら聖は告げた。

「むー……」

だが二人は未だに不服そうだ。だが聖は腕を組みながら、

「と、とにかく！ 混浴は無理だ!! 俺がキツイ！」

額に汗をかきつつ、口早に告げた聖はそのまま部屋を後にした。

「あー……、何で体を休めるために来てんのに地味につかれるんだろーな」

それは聖様がへタレだからです

「ぐぬ……」

旅館の廊下を安綱と話しながら歩く聖はうなだれていた。

「前々から思ってたけどお前なんでそんなに俺に辛辣な訳？」

そうですねえ……戦闘面では頭が回るくせに、いざいざいざいざいざになると頭が回らなくなることでしょっか。あとは無意識に女性を意識させるような行動をとる所がイラつくと言っかなんというっか

「……俺そんなことしたっけ？」

はあ……そういつとくるもですな

疑問を浮かべる聖に対し、安綱は心底あきれたような声を漏らしている。だが聖は未だに何のことか分かっていないようである。

それで夕食までどうするおつもりですか？　へたレで天然ジゴロな
聖様

「なんか変な尾ひれが付いた気がするんだが？」

気のせいです

しれっとした空返事を返す安綱に若干の疑問を抱きつつも、聖は口元に手を当て、

「とりあえずは、風呂行くか。男湯に入ればさすがにそんなことはないだろ」

だといいですねえ

聖は男湯に向かった。

「いつとくるか」

聖が立ち止まった前には紺色と赤色の暖簾がかかった戸があった。そこから少し離れた場所にはオレンジ色の暖簾がかかった戸があった。

どつちらあちらが例の混浴風呂のようだ。

「こんなところも日本らしいな」

そうですねえ。あと先ほど見かけたのですが、どつちら混浴をするには予約が必要のようです

「そうか……助かったぜ」

ほっと胸をなでおろす聖だが、その後ろから、

「……………そんな」

呆然と言った感じのなのはとフェイトが声を漏らした。

「うおわぁ!? いつの間に来たんだお前ら!」

二人の突然の声に飛び上がりながら聖は上ずった声を漏らしてしまった。

「まさか予約が必要だったなんて……………」

「聞いてないよ……………」

先ほどの聖以上にうなだれる二人は本当に残念そうだ。だがしかし、

ああでも今夜は特別に事前の予約なしで入れるそうです。先ほど仲居さんが言っているのを聞きました

「ぼっ!？」

安綱が言ったことに対し、なのはとフェイトの目がキラリと光る。

「それ本当!? 安綱!!」

ええ。間違いありません

「「よっしやあ!!」」

「お前らキャラ変わってるぞ!？」

見事なハイタッチをする二人を見ながら聖はツッコミを入れる。しかし、なのはたちはそんなことはお構いなしにヴィヴィオの手を握りながら。

「じゃあ私達はお風呂はいるね! またあとでね聖君!」

それだけ告げて二人は女湯に消えていった。

「なんてこと言ってくれてんだよ安綱!」

「これぐらいは構わないでしょう。それに聖様、お父上も申し込んでしょう? 人生は甘くないと

「ああ、そうですね言っていましたね。だけど親父もまさかこんなことを想定してはいないと思うがな!」

黙りなさい。いい加減覚悟を決めなさいへタレ

「……もついい。どつにでもなれ……」

若干自棄になりながらも聖は男湯に消えていった。

温泉からあがった聖はかなりすっきりとした表情をしていた。

「うん……やはり温泉はいいな。清々しい気分になる」

何言ってるんですか。女湯の二人の会話にヴァイス陸曹と聞き耳を立てていくせに

「……違うぞアレは違う決していやらしい意味ではなく。本当に二人が混浴したいのかと言っのを確認したくてだな」

アア、ハイハイ。ソウデスネー

「完全に軽蔑してるよな!? 違うからね! ヴァイスはどうかしらねえけど俺は本当に違うから!!」

すんじょ

「アレ? 聖さん! もう温泉入ったんですか?」

スバルを先頭に、新人達四人がやってきた。

「よう……元気そうだなお前ら」

「そういう聖さんは随分とやつれてますけど大丈夫ですか?」

「おう……自分のデバイスに軽く軽蔑されただけだ……」

「「「「？」「「「」

聖の様子に首をかしげる四人と一匹だった。

「お前らも温泉か？」

「はい。夕食前には済ませておこうと思って」

「そうか、じゃあまたあとでな。あとキャラ、今回は男湯に行かない方がいいぜ。ヴァイスが入ってるからな。お前らもちゃんとキャラ見張つとけよ？」

「わかりました!!」

ティアナとスバルはビシッと敬礼をし、了解の意を表した。だがキャラの方は首をかしげながら、

「ねえエリオ君。どうしてヴァイス陸曹がいるとダメなの？」

「え!! そ、それはなんていうのかな……。と、とにかくダメなんだよ!!」

あたふたとしながらキャラに説明しようとするエリオを見守りながら、聖は部屋へと戻っていった。

夕食を終えた聖はなのは達と廊下を歩いていた。ある一角に差し掛かったところで、聖は不意に声をかけられた。

「聖君… ちょっとやらへんか？」

声の主ははやてだ。

はやてが持っているのは卓球のラケットだ、そして彼女の前には卓球板がある。すなわちやるつとは卓球のことである。

彼女は浴衣を肩まで捲くり目はやる気に満ち満ちていた。すると聖も、

「いいぜ……やってやるよ」

彼もまた浴衣の袖を肩まで捲くりながら近場にあったラケットを掴むと、はやてに対峙した。

「ルールは1ゲームを先にとった方が勝ちや。ええな？」

「望むところだ」

聖はにやりと笑い構えを取る。対しはやても球を持ちサービスの構えをとる。

そして二人の間にシャマルが入り、

「それでは試合開始です…」

試合開始の合図を告げた。

「そりゃあ…」

掛け声と共にはやてがサーブを打ち込む。球は鋭く聖の打ちづら

いところに入るが、

「あまいー!」

聖は半歩後ろに飛ぶと見事にそれを打ち返す。

「なんのー!」

打ち返された球をはやても難なく捕球するとドライブをかけながら打ち返す。だが聖はそれを読んでいたかのように球の先に回りこむと、

「ふっ!!」

息を強く吐き出し卓球板ギリギリのところ球を打ち込む。鋭く入った球にはやては反応することができず、逃した。

二人の対戦にその場の全員が息を呑む。何せ今までの出来事がほぼ一瞬だったのだ、息を呑むのも頷ける。

「やるやないか聖君」

「お前もなはやて」

二人は互いに小さく笑う。そしてはやてはまたサーブを打つために構える。

「せやけど……」

言った瞬間、球が聖のコートに突き刺さる。

「!?」

「……………本番はこれからや」

にやりと笑いはやてが聖を見据える。だが聖もそれに笑いながら、

「上等…!」

二人の対戦は始まったばかりだ。

「はあ……………はあ……………」

「はっ……………はっ……………」

二人の対戦が始まりおよそ一時間後、二人は肩で息をし汗を流しながらにらみ合っていた。得点は聖のマッチポイント。

「凄いね二人とも」

「うん、卓球でこんなに時間がかかるなんて見たことないしね」

なのはとフェイトは手に汗を握りながら二人の対戦を見守っていた。

「次で終わりにしてやるよはやて」

「どうやるな……………私もまだ諦めてへんで」

聖の宣言にはやてが小さく笑いながら答えると球を浮かせ、サーブ

を打つ。その球はかなりのスピードだが研ぎ澄まされた聖の感覚で捕らえられぬものではなかった。

「はっ…」

またも鋭角に球を飛ばす聖だが、

「その狙いはもう見飽きとるでっ」と!!」

はやてはそれを予測し軽くそれを切り返す。

「そうか……よっ…」

切り返された球も捕球しようとする聖。しかし、スリッパのためか足が滑った。

「しまっ!?!」

足を滑らせながら何とか返したものの、入った球はゆるゆるの超チャンスボール。これをはやてが見逃すわけがなく、

「もらったああああああ!!」

渾身の力をこめて球が打ち出される、だがはやては聖の顔を見た瞬間、背筋に悪寒が走った。

聖は笑っていたのだ、はたから見たら完全に取れないであろうこの状況でも、聖は笑みをこぼしていた。

……まさか、わけと!?!

「気付いたみたいだなはやて！　だがもう遅いぜ!!」

聖はまっすぐに飛んでくる球を見据えると、体勢を低くし、目にも留まらぬ速さで腕を振りぬく。

打球はしっかりとはやてのコートに入り、はやてもそれを打ち返そうとするが、

「その打球……消えるぜ」

聖が告げた瞬間、はやてが捕らえたはずの球が消え、はやてのレシーブは空振りに終わった。

「勝者、白雲聖くん!!」

「っしゃあ!!」

告げられた勝利に聖は大きくガッツポーズをとった。周りからも拍手が巻き起こった。それだけ白熱した試合だったのだ。

「いやー、完敗や。強いなー聖君は」

はやても拍手しながら聖の元までやってきた。その顔に負けた悔しさはなく、清々しいものだった。

「お前もなはやて。久々にいい試合ができたぜ、だけど汗かいちまったな。寝る前にもう一回風呂にでも……」

だがその言葉がまずかった。

風呂と言つ言葉を聴いた瞬間フェイトとなのはの瞳がギラリとひ

かり、

「じゃあお風呂にレッシュコー!!」

聖の手を引いて一気に駆け出した。

「しまったああああ!」

後悔に顔をゆがめる聖だがもう遅かった。あつという間に聖は連れ去られ見えなくなった。因みにヴィヴィオは新人達やザフィーラが相手をしているため今回はいない。

その様子を見送りながらはやてはにやりと口元を歪ませた。それを確認したシグナムは、

「主はやて、これも貴女の作戦ですか？」

「んー？ 何のことやシグナム。そんなことより私達も温泉いこか」

シグナムの問いを軽くあしらい、はやてはにこやかに温泉へと向かっていった。

俺の名は白雲聖。皆さん既にご存知だとは思いますが現在俺は旅館の混浴風呂に入っている。いや、入っていると云うよりは投げ込まれたと言っ方が正しいのかもしれない。

なにせ到着した瞬間有無を言わず例の二人に浴衣を一気に脱がされパンツ一丁で放り込まれたんだ。しかし実際パンツではいるわけにも行かないので、パンツを脱ぎ近くの岩場に現在は置いている。

いや、俺のパンツはどつでもいいんだ。問題なのは現在のこの状況だ、誰か助けてはくれなйдらうか。いや無理だな。

「……………どつすねばいいんだ」

内心で悶々としながら聖は湯面に顔をつけぶくぶくと息を吐く。

そんなことをしていると脱衣所と温泉を隔てる戸が開く音がした。なのはとフェイトが入ってきたのだ。

聖はそれに気付いたものの、顔を上げよつとはしない。

「えっと聖？ 何をしてるのかな？」

「ブクブク（息を何秒止められるか試してるんだ）」

「何を言ってるのかわからないよ……………」

「ブクブク（じゃあ気にするな）」

フェイトの問いに聖は答えているものの、お湯に顔をつけているためブクブクと空気が漏れる音しか聞こえない。

……………いかん、さすがに息が限界だ！

なのが達が入ってくる前から湯面に顔をつけて息を吐いているためか、通常よりも早く限界が来たようだ。

……………だめだ！ もう無理!!

「ばはあ!!」

「うわぁ!?!」「ふえ!?!」

いきなり顔を上げた聖に二人はビクツと飛び上がる。

「はあはあ…………死ぬかと思った…………」

「だったらやらなきゃいいのに…………」

あきれた声をもらすフェイトに視線を送ることはなく、聖はずっと前を向いたままだ。

「あれ? 聖くんなんでまだ目瞑ってるの?」

「あのなあ…………お前らの裸を見ないようにするためにきまってんだろ? それともお前らは同じ年の男に見られてもいいのか?」

「…………別に聖くんなら…………」「私も別にいいのに…………」

二人ともごにょごにょと何か言っているようだったが、聖はそれに気付かない。

「はあ…………じゃあ聖くん。もうちょっと温泉の中心行って貰っていいかな?」

「中心? 別に構いやしないが…………」

聖は言われたとおり、温泉の中心部に近いところに行く。さすがにこの時ばかりは目を開けているが絶対に後ろを振り向かなかった。

「この辺か？」

「うん。じゃあそのまま置いてね」

「？」

なのはの声に疑問を感じていると、不意に聖の背中に二つの軽い重みがかかった。

「これで目を瞑らなくてもいいでしょ？ 背中だから気にすることないし」

「……お前らがそれでいいならいいよ」

嘆息しながらも聖も了承した。そして三人は互いに背を預けたまま温泉につかる。

数瞬の沈黙の後、聖が口火を切った。

「ところで、お前らに聞きたかったんだけどよ」

「ん？」

「何？」

疑問を浮かべる二人に聖は大きく息を吸い、二人に聞いた。

「お前らが大切に思ってる人……例えばはやてや自分達の家族がとんでもない秘密を隠していたらどうする？」

「私は……考えてからもし間違ってたならその人を正してあげたいか

な。それでその人と一緒に解決方法を探してあげたい」

「私も同じかなー。お話すればきっと何か見えてくるだろうし」

「そっか……」

聖は小さく息をつきながら、空を見上げた。

「でも何で突然？」

「いやなんとなくだ。気にすんな……。さて、んじゃあそろそろ髪洗って上がるかな」

聖は腰にタオルを巻きつけ、シャワーを浴びに行く。

その姿を見送る二人は彼の後姿に絶句した。

彼の背中には右肩から左の腰部分にかけ、かなり大きな傷が刻まれている。

「聖！ その傷って？」

「あん？ ああ、背中のヤツか。よく覚えてねえんだけどガキに頃にちよいとあったらしくてな。そのときにできた傷なんだよ」

シャンプーに手を伸ばしながら答える聖は気にしていないのか、あっけからんとしている。

「痛くないの？」

「さすがにもう痛みはねえよ。あー……でもたまにちよっと疼く時が

あるかな。まあそこまで痛くないから大丈夫だろうさ」

ハハツと笑いながら聖は答えた。

聖は気にしていないのだろうが、なのはたちは難しい表情だ。

すると聖は髪を洗い終えたのか、腰にタオルを巻いたまま立ち上がった。

「そんじゃ俺は先に出てるぜ。外で待ってるからなるべく早く上がってこいよ」

振り向くことはせず、後ろ手に手を振りながら聖はその場を後にした。

いいのですか？ さっきのあの質問。一歩間違えればばれますよ？
もしくはもっばれてるかもしれません

『いいえ、どっせ近いうちにはねる』

そうですね……まあ私はあなたに従うだけです

『ありがとうよ』

御氣になさうぜ

なのは達が出てくるのを待つ間、思念で話し終えた聖は目を閉じて昔のことを思い出していた。

目が覚めたのは淡く光る黄緑色の液体の中。

そして最初に見た人間は紫色の髪と金の瞳、そしてにやりと笑う三日月の口元。

時折思い出す、その人間のおそろしいまでの狂笑。

ただただ、野望に満ちた金の瞳はまるでへビのようだった。

「聖！ 起きて!!」

「ん？ ああ悪い眠っちまってたか」

フェイトにたたき起こされ、我に返った聖は椅子から立ち上がり、二人に告げた。

「じゃあ戻りますか」

「だね。ヴィヴィオも待たせちゃってるだろうし」

3人は並びながら部屋に戻った。

深夜。

スカリエッツィは自らのアジトの私室にて、聖の映像及び、資料を拝見していた。資料は地上本部に潜入させているドゥーエから送られてきたものだ。

「ふむ……」この動き見覚えがあると思ったらやはり彼か……」

口元を不適に歪ませながらスカリエッツィは一枚の写真を引き出しから取り出し呟いた。

「まさかまた君と会えるとは思わなかったよ……エシエク……ククク、フフフフ、ハハハハハハ!!」

狂ったような笑い声をあげるスカリエッツィの瞳は心底嬉しそうな輝きを持っていた。

「君が生きていると知れば、ウーノ達も喜ぶだろうね。いやー一番喜ぶのはドゥーエかな?」

魔の手は着実に聖たちに迫っていた。

時間

六課全員での温泉旅行から少し経ち、聖は訓練場にて新人達四人と模擬戦を行っていた。

「はああああっ!!」

スバルが気合を入れながら聖に接近にし、強烈な拳を聖に放つ。だが、聖はそれをシールドで一瞬防御すると、スピードに乗っていたスバルをいなす。

態勢を崩したスバルの腹部に聖は肘鉄を見舞いする。

「くっ!？」

「まだまだ、攻撃が大振りだスバル！」

スバルを叱咤しながら、肘鉄により後退した彼女に追撃を行う聖。

だが、その眼前をオレンジの魔力弾が掠める。

『スバル！ あんたは一旦下がって!!』

『了解!!』

念話で送られてきたティアナの指令に、スバルは頷きつつ聖から後退する。

すると、聖はスバルから目を離し、ティアナに目を向ける。

「ティアナさすがに前に出すぎたと思うが？」

「心配なさらず、これも」

そこまで告げたところでティアナの姿が空気中に溶けるように掻き消え、同時にそこからストライダーを構えたエリオが高速で接近する。

「戦略の一つです!!」

……幻覚をうまく使ってるな。だが、

「それだけじゃ俺は倒せねえぞ！っ!？」

瞬間、キンツ、という鉄を打ち鳴らしたような甲高い音が響いたかと思うと、聖の四肢を桃色の鎖が這い回り、拘束した。

……チェーンバインド!? キャロか!?

聖が動く頭で辺りを見回すと廃ビルの一角からキャロが聖を補足していた。既にエリオは聖の眼前に迫る。

「ストライダー！ ロードカートリッジ!!」

エリオの声とともに、ストライダーから薬莢が吐き出される。

同時にエリオがさらに加速し、聖に光速の刺突を放つ。

普通であれば、この距離でよけることは不可能だろう。

だが、

聖は不適に笑うと、

「はあっ!!!」

気合と同時に全身から魔力を溢れ出させ、自分を拘束していたチェーンバインドを一瞬たわませ、四肢を引き抜くと同時に体を振り、ギリギリでエリオの刺突を回避する。

「なっ!?!」

エリオが驚愕の声を上げるが、聖は駆け抜けたエリオの足を捕まえぶん投げる。速さがついていたためか、エリオはかなりの速度で廃ビルの壁に叩き付けられた。

「やあて……今度はこっちの番だ!!」

聖は反撃の態勢に入った。

数分後。

聖の前には泥だらけになった四人の姿があった。

「四人ともいい攻めだったぜ？　ただまだまだ荒削りな部分が多いけどな」

「……はい……」

四人は頷きながら返事をする。するとそこへ、

「皆お疲れ様ー」

なのは達がやって来た。ヴィヴィオもフェイトとなのはに両手を握られながら嬉しそうだ。

3人の後ろには浅葱色の髪眼鏡をかけた女性と、薄い藍色の長めの髪を後ろで結わいた女性がいた。

皆がやってくると、ヴィヴィオは二人の手から離れ、聖の足に抱きついた。

それを苦笑しながら抱き上げると、ヴィヴィオは満足そうに笑みを浮かべる。

「えーっと、今日の午後の訓練から陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹がしばらく出向になります」

なのはが皆に告げると、ギンガが一步前に出て、

「108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

しっかりとした口調で四人に敬礼した。

「ナカジマってえとスバルの姉ちゃんか？」

「そうだよ。あれ？ 聖知らなかったっけ？」

「まあ会った事はねえな。ヴィヴィオを保護した時に手伝ってくれたってのは知ってるが」

フェイトに耳打ちしながら聞くとフェイトも小声で答える。すると、なのははもう一人の女性に手を向けながら、

「それで、こちらの人が10年前から隊長達のデバイスの調整をしてくれている。本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです。よろしくね」

なのはの声が続くようにマリエルは皆に挨拶した。四人も元氣よくそれに返す。

「じゃあ、とりあえずまずは皆お昼ね。食べた後は午後の訓練がんばるよー」

「はい!!」

一通り挨拶が終わり、なのはが皆に告げると、それぞれ隊舎にある食堂に向かう。聖は抱き上げていたヴィヴィオをフェイトに預けるとマリエルに声をかけた。

「お久しぶりです。マリーさん」

「そうだね聖くん。こっちでも随分うまくやってるみたいだね?」

「まあそうっすね。でも何で急に?」

「うん。はやてちゃん達のデバイスを見ておこうと思ってね。まあ他にもあるんだけど、安綱も見せてあげるよ?」

「じゃあ、後で行きます」

聖はマリエルから離れ、なのは達の元にかけていった。

「聖くんはマリーさんと知り合いなの？」

「ん？ ああ、本局にいたときに結構世話になってな」

私の整備などもしていただきました

なのはの問いに聖と安綱が返答した。するとなのは少し俯きながら、

「……よかったー。マリーさんとは何もないんだー……」

小さくポーズをしていた。

因みにそれを聞いていたフェイトも妙に笑顔だった。

昼食を皆でとった後、スバルとギンガ二人だけでの模擬戦が行われた。

二人は互いにウイングロードを駆使し、空中で空戦と同様な動きをしながら戦っている。

「へえー、うまいもんだな」

「ウイングロードはあの二人の特有の魔法だからね。うまく使えば空戦も可能になるよ」

「まあ実際今も空戦みたいなもんだしな」

すると一際大きな音がしたかと思うと、どうやら決着がついたようで、スバルの喉元にギンガが拳を衝きたてていた。

「はい、二人ともそこまでー!」

なのはの声が響き、ギンガが拳を引いた。

「なのはの訓練受けてても、やっぱり姉ちゃんのほうが強いみたいだな」

「みたいだね。でも、結構いいところまで行ってたよねスバルも」

「それに嬉しそうでもあったな、やっぱり姉ちゃんと互角に戦えるってのは嬉しいもんか」

聖は戦い終わり、笑顔でいる二人を見ながら小さく言う。

二人が戻ってくるとなのはがレイジングハートをデバイス状態にし、小さく笑い、

「さて、じゃあ新人たち四人とギンガもあわせて隊長戦やるっか?」

「へっ?」

ギンガは一人キョトンとするが他のメンバーは皆バリアジャケットを展開し、やる気満々だ。

「ギン姉。油断しないほうがいいよ?」

「隊長たちかなり本気で来ますから。それに今日は聖さんもやるみた

いですし」

エリオの視線の先には既にバリアジャケットを展開し、戦闘準備に入っている聖の姿があった。それ以外にも、フェイトやヴィータ、シグナムも準備を始めている。

最初はそれに戸惑いを見せるギンガだったが、すぐに状況を飲みこむと小さく頷き準備を始めた。

およそ二十分後、新人達とギンガは地面にへたり込んだ。

「ほい、終了。で、いいんだろなのは？」

四人の前に立った聖が安綱を鞘に納めながらなのはに聞いた。

「うん。今日の訓練はコレでおしまい。皆よく動けてたよ」

「まっまだまだダメダメな部分も多いけどな」

寝るものとは対照的にヴィータは辛口だ。それに皆が苦笑いをしていると、ギンガが聖に話しかけた。

「あの、白雲執務官」

「聖でいいぜ、ギンガ」

「あ、はいー！ 聖さんもいつもこの訓練に出てらっしゃるのじゃないか？」

「いや、俺はたまーにだ。いつもは一人での訓練が多いな。でもどうしていきなりそんなことを？」

「えっと、スバルがよく手紙に書いていたので少し気になってしまった」

ギンガの答えに聖はスバルを見ながら苦笑する。

「まったく、何書いてんだかなアイツは」

「とってもいい人だって言ってましたよ？ サポートもしてもらってるみたいで、妹の面倒を見てくれてありがとっございます」

「よしてくれや、そこまで面倒見てねえって。ほんとに偶にしか見てねえから」

聖はギンガの感謝に頬をかきながら聖は照れ隠しをする。だが、そんな聖の耳をフェイトが引っ張る。

「いでででででっ!! なにすんだフェイト!!」

「ギンガに色目を使ってる淫獣な聖を懲らしめてるだけだよ」

「はあっ!! 誰が色目使って!!」

聖の言葉はそこで止まる。なぜならフェイトの先には笑顔を見せつつ、周りに黒いオーラを纏うなのはの姿があったからだ。

「……聖くん。向こうで O H A N A S H I、しよつか？」

「いや、まで。お前等少し勘違いをしてるぞ？ 俺はただギンガと話

をしてただけ」

最後まで言わせてもらえないまま、聖はなのは達に連れ去られそのまま消えていった。

残されたのは、ただただ首をかしげるギンガと、苦笑いを浮かべる皆の姿だった。

数分後、聖が連れ去れた方向から聖の絶叫と、大爆発がしたのは言うまでもない。

その日の夕方、聖は首元を押さえながらげんなりとしていた。

「いてー……ったくアイツらー、容赦なしにぶっ放してきやがって……」

あれはまあ理不尽でしたねー

安綱はそういつているものの、妙に声を楽しそうだ。

「おい、今確実に笑ってるだろ」

なんのことやら

「ったく妙に器用だなテムエは」

毒づきながら聖はマリエルのいるデバイスルームに向かっていた。

「っーっす」

軽めの挨拶をしながら室内に入ると、

「いらっしゃーい。じゃあ二人とも今日の夜にね」

中にいたのはマリエルのほかに、スバルとギンガがいた。

「わかりました」

「では、またお邪魔します。聖さんもまた」

「ん、おう。またな」

二人は聖に軽く会釈をすると、部屋から出て行った。

「二人は何か会ったんスか？」

「んー、まあちょっとね。それよりも聖くんが来た用事は安綱かな？」

「ええ。調整よろしくお願いします。どんくらいかかりますかね？」

「そうだねえ……今日はスバルたちと約束があるから明日の朝までに
はできてるよ」

マリエルの返答を聞いた聖は安綱を渡した。

「じゃあ、しっかりと調整されて来い。ついでにそのへらねえ口も少し
は制限してもらって来い」

お断りです

「アハハ……。相変わらずだね二人は」

二人の言いあいを見ながらマリエルはぎこちない笑みを浮かべる。

「じゃあ、また来ますんで。安綱頼みます」

「はい。わかりました」

聖は部屋を後にした。

「ちて……。安綱もいなくなったしどうするか」

聖は手持ち無沙汰になってしまいあたりを見回してみるが、特にこれといって何かあるわけでもない。

仕事は既に終わっているし、はやてからの呼び出しもない今、聖は非常の暇なのである。

「うーん、飯になるまでヴィヴィオの相手でもしてるか」

思い至ったように聖は自室に戻っていった。

「大分無茶してるみたいだね安綱」

そこまで行っていましたか？

「うん、フレーム自体は大して損傷はないけど……コアのほうにダメージが残ってるよ」

聖のいなくなったデバイスルームでマリエルと安綱は静かに話しをしていた。

……あどどれくらい持ちますか？

「……今のまま使ってれば多分一ヶ月。でも今日整備するからまだ少し延ばせるはずだよ……」

そうですか。……まあそれくらいあれば十分です

安綱の言葉にマリエルは唇を噛む。

安綱のコアには誰が付けたのかわからないが、あるプログラムが組み込まれていた。それは自壊プログラムだ。時が来れば自動的に発動するようになっていて、マリエルの手を持ってしてもそれを解除することは不可能だった。

因みに行っておくと、その自壊プログラムの期限は既に過ぎていて、今は何とかそれを伸ばしているに過ぎないのだ。

「ねえ……やっぱりこのこと聖くんに伝えたほうがいいが!!」

なりません

「どうしていい？」

自らの主に心配事を増やさせるなど私の理念が許しません。それになにより、私如きのことである方を悩ませたくないのです

悲痛な声を上げるマリエルに対し、安綱は気丈に言い切った。その声は機械音声で一定に聞こえるものの、確かな決意がこめられていた。

少しの沈黙の後、マリエルは目じりに溜まった涙を服の袖でぬぐい端末を操作し始めた。

「安綱。確かにこのことは聖くんには言わないけど、安綱を大切にするようには伝えるからね？」

……それぐらいならば構いません

安綱はマリエルの言葉に静かに返答し、そのまま一度も口を開くことはなかった。

ヴィヴィオやなのは達と夕食を終え、時刻は深夜。

聖は木刀を持ちながら六課の屋上で素振りをしていた。最近はずいずいとも聖がいなくても眠れるようになってきたので、聖は時折こうして夜の鍛錬をしているのだ。

「フッ！ ハアッ!!」

気合の声を時折挟みながら、聖は仮想の敵を決め木刀を振る。

「随分と気合を入れているな白雲」

すると、聖の背中の方から凜とした声が聞こえた。

声の方向を見ると、壁に背を預けた状態のシグナムが聖を見つめていた。

「シグナムさん。なんでここに？」

「いや、少し残業が残っていてな。部屋に戻ろうとしたところでお前が屋上に上がっていくのが見えたので付いて来たまでだ」

「そっすか。でもめずらしいっすねシグナムさんが残業なんて」

「今度意見陳述会が開かれるからな。その打ち合わせなどがあつたのよ」

シグナムは片手に持ったスポーツドリンクの入ったボトルを聖に放る。

聖はそれを受け取ると、軽く頭を下げ、ドリンクを一口飲む。

「イメージトレーニングだけでは限界があるだろう。少しだけだが手伝ってやる」

「え、いいんですか？」

「構わんさ。私も体を動かしたかったのにな」

そついったシグナムは何処から取り出したのか木刀を構え、上着を一枚脱いだ。

「さて、はじめるか。今回は相手に膝を着かせたらまけというルールでいいか？」

「ええ、構いませんよ。それじゃあ、よろしくお願いします！」

「ああ、来い！」

聖とシグナムは互いに駆け出すと、木刀を打ち鳴らす。濁いた音を鳴らしながら二人は数度打ち合う。

「ハッ!!」

小さく息を吐き出し、聖はシグナムに逆袈裟斬りを放つ。

シグナムはそれを小さく後退して避けると、隙のできた聖に一気に迫り、上段から一閃する。聖はそれを木刀で受け止めると、そのまま攻撃を滑らせる。

「……だっ……」

聖は一呼吸でシグナムの後ろに回りこむと、シグナムの肩を狙う。だが、シグナムはそれに焦らずに、対応し瞬時に背中に木刀を回し受け止める。

それを払いながらシグナムはまたも聖と正面で対峙する。

「いい狙いだが……今日のお前はどこかおかしいな。剣に迷いが見られるぞ?」

「え?」

「先ほどのところ、もっと早く私の肩に一撃を入れられたらどう? なぜ一瞬遅れた?」

「それは……」

聖は言葉に詰まる。

するとシグナムは小さく溜息をつき、

「仕方あるまい。今日はこれで終わりにしよう。……白雲、悩んでい
るのであれば一人で抱え込むな。お前も高町のようになるぞ?」

「……わかり、ました」

シグナムの言葉に、聖は声を詰まらせながら返答した。それに対
し、シグナムは静かに頷くとそのまま屋上から消えていった。

シグナムが消えた屋上で、聖は大の字に寝転んだ。見上げた空に移
るのは二つの月と、満天の星空だ。

「……時が来ればいずれはれる事だよな。でも」

聖は目の上に腕を乗せながら、

「まだ、言うわけにはいかねえんだよな」

小さくもらされた聖の言葉は、夜風とともに、消えていった。

襲撃

公開意見陳述会の一週間ほど前。聖を含めた六課のフォワードメンバーはブリーフィングルームに集まり、はやてから作戦の指示を受けていた。

「今回は会場の警備任務が主になってくる。なのは隊長、フェイト隊長、そして聖隊長の三人は会場内の警備。スバル達は会場の外の警備をよろしく頼むな」

立体型のモニターに映し出される会場の見取り図を用いてはやては指示を出していく。

「あと、会場内にデバイスは持ち込めへんことになったから、聖くんたちはデバイスをスバル達に預けといてな？」

はやてが聖たちに目を向けると、三人は静かに頷いた。はやてもそれを確認すると、説明を続ける。

「スターズは全員前日の夜から警備任務に当たってもらう。聖隊長もな。エリオやキャロもこれに随伴していくことになってるから頼んだで。その後私とシグナム副隊長、あとフェイト隊長が行くことになっとなるからな」

立体モニターが切り替わり、今度は前日から警護する班と当日に入る班が分けられた図が映し出される。

「大体の説明はこんな感じじゃ。なにか質問のある子はおるか？」

はやてが皆に聞くが、皆特に何もなさそうだ。しかし、その中で一

人、聖が口を開いた。

「質問というよりは素朴な疑問なんだが……。警備すんの中にデバイスが持ち込めねえってのは随分と用心がなさ過ぎやしねえか？」

「うん、それは私も聖隊長と同意見や。せやけど……」

はやては眉間に皺をよせ言葉に詰まる。

するとそんなはやての意見を代弁するようにシグナムが言う。

「確かに、白雲の言うことももっともだ。しかし、これは上が決定してしまっていることなのだ。もし破ってしまえば、六課自体がなくなってしまう恐れもある」

「なるほどね……やっぱりこの世界でもお上の言うことは絶対ってわけか……」

シグナムの言葉に頷きつつも、聖は誰にも聞こえないような声で呟いた。

「まあシグナムの言う通りや。こればかりはどうにも覆らへん。そこは納得してくれな聖隊長」

「ああ。別にはやてを責めてるわけじゃねえよ。ただ疑問に思っただけだから気にすんな」

少し暗い顔をするはやてに対し、聖は微笑を浮かべながら答えた。

「ほんならこれでフリーフィングは終了や。各自、当日まで体調を整えておくように」

はやての号令に皆が一斉に背筋を伸ばし、敬礼をする。

そして意見陳述会前日の夜。

六課のヘリポートには聖たちの姿があった。しかし、どうにも皆困惑した表情を浮かべている。その原因は聖の足元にいた。

ヴィヴィオである。

彼女は聖の足にがっしりとしがみつき、目には涙も溜まっている。

「えっと、なあヴィヴィオ。すぐに帰ってくるから離してくれないか」
「？」

「……いやだ」

「おう……まっすぐな意見……」

聖は苦笑するが、ヴィヴィオの力はましていき彼の足から離れる気配がない。すると、それを見ていたなのはがヴィヴィオの頭にやさしく手を置くと、

「ヴィヴィオ……なのはママと、パパはお仕事終わったらすぐに帰ってくるからいい子にして待っていてくれるかな？ それにほら、今日は

フェイトママもいるし一人じゃないよ?」

ヴィヴィオは聖の足を離し、フェイトのほうを見る。フェイトもそれに答えるように微笑みかける。

「すぐにかえってくる……?」

「ああ。絶対に、約束だ」

その問いに答えたのは聖だった。彼はヴィヴィオの目線までしゃがむと、両手を広げヴィヴィオを促す。

ヴィヴィオもそれを理解したのか、聖の胸に飛び込んだ。しっかりと抱きとめた聖はヴィヴィオの頭を優しく撫でる。

数秒間ヴィヴィオを抱きしめていた聖は、彼女を解放し、フェイトの元に向かわせる。

「うし、じゃあ行くか! ヴァイス! 頼んだ!!」

「おつよー!」

ヴァイスに言つと、ヘリのハッチが閉められ、ヘリは飛び立った。

それを見送りながらフェイトは自らに手を握っているヴィヴィオを促す。

「さ、私達もお部屋に戻るつヴィヴィオ」

「……………うん」

ヴィヴィオは頷くと、フェイトと共にヘリポートを後にした。

「さて、ほんなら私等も残ってる仕事終わらせて早めに休もかシグナ
ム」

「はい、白雲たちには後で交代時間を送っておきます」

「うん、ありがとな」

二人はそのままヘリポートから立ち去った。

ヘリの中ではスバルたちがニヤニヤとした表情で聖を見ていた。

「なに見てんだよ」

「えー。だってもう、聖さんパパしてるなーって思って」

「凄い懐かれ様でしたし」

「まあ……そうだな」

若干気恥ずかしいのか、聖は視線をそらしながら頬を掻く。すると
キャラコがなのはに問うた。

「でも、ヴィヴィオは今預かってる段階なんですよね？」

「そうだね。優しい里親になってくれる人を見つけられたらヴィヴィ
オに説明してわかってもらおうかと思ってるんだけど」

「理解してくれなさそうな気がしますが……」

なのはの意見にエリオが難しそうな表情をする。それはエリオだけでなく、ヘリの中にいる全員がそんな表情だ。

そんな微妙な空気を破るように、ヴィータが軽く咳払いをし聖となのはに言い放った。

「つーかもうお前ら結婚すりゃいいじゃん」

「はあっ!？」

「ふえっ!？」

二人は先ほどまでの難しい表情が何処へやら、一気に顔を赤くする。

「な、なななな何言ってるんだヴィータ！ そんな、お前……なあ！」

「いや、何がなあなんだよ。とちりすぎだろ」

ヴィータの突拍子もない発言に聖はうまくろれつが回っていない。しかし、それはなのも同じなようつで、

「そ、そそそそそつだよヴィータちゃん!! 私と聖くんがそんな…… キャーッ!!」

「だからキャーッてなんだよ。うん? でも待てよ、そうなるってフェイトも入るな。大変だなー聖ー」

なのははもはや後半は何もしゃべれなくなっていて、顔を真っ赤に

したまま俯いていた。だが、ヴィータはというと、悪戯っぽい笑みを浮かべながら聖を見る。

その後は特に暗い話もなく、一同は会場に向かった。

しかし、その中でもなのはと聖は時折視線が会うと、すぐに俯かせていた。

会場に着くと、へりの中での暖かい空気とは打って変り、皆に緊張が走る。

「じゃあ、これから明日の陳述会が終わるまで警備任務に当たります。各自、交代時間をしっかりと把握して置くように。明朝には私と聖隊長は会場内に入るので。外の警備はヴィータ副隊長にお願いします」

「はいー」

「了解」

なのはが告げると皆それぞれの持ち場へ向かっていく。聖もまた単独で自分の持ち場へと歩き出した。

持ち場に着くと、聖は思念通話で安綱に呼びかける。

『なあ安綱』

『なんですか？ さっきの結婚のことなら自分で解決してください

ね。私は知りません』

『そうじゃねえよ。この意見陳述会、やっぱり変じゃねえか？』

『変とは？』

『なんつーか、こつやって一箇所に人を集めて身動きが取れなくさせてるようにも思えるんだよ』

聖は壁に背をもたれ掛けさせながら安綱に聞く。

『確かに不自然ではありません。しかし、この意見陳述会は地上本部の運用方針を決めるものです。その場でクーデターがおきるともわかりません。もし、それが会場の中でおきてしまった場合のことを考えると会場内へのデバイス持込は禁止されるのも頷けます』

『けどよ……』

『はあ……いいですか？ 良く来てください聖様。今の貴方の仕事はこの場の警備です。それをおごそかにしてしまえば、ヴィヴィオ様との約束など到底果たせませんよ？』

安綱の指摘に聖は一瞬苦い表情をする。しかし聖もそれを理解したのか、

『わかったよ、もう気にしねえ。ヴィヴィオにも約束しちまったしな』

『子との約束を守るのは父親の役目ですよ』

『それもそうだ』

最後にそういって、聖は安綱との話を断つ。

もたれかかっていた壁から背を離すと、聖は夜空を見上げながら小さく呟く。

「……出来れば俺の思い違いであって欲しいけどな……」

夜も耽り、六課にいるであろうフェイト達ももう寝静まった頃、交代の時間となった聖は、夜食をとりに向かう。

すると途中で同じく交代の時間だったヴィータと鉢合わせる。

「ヴィータ。お前も交代か？」

「ああ。今からメシだ。お前もなんたる聖？」

「おう。せっかくだし一緒に行こうぜ」

「だな、それに私もお前に話があったしな」

二人は並んで歩くと、夜食が用意されているところに向かう。夜食が入ったトレイと、飲み物をもらって、二人は適当な場所を見つけ並んで食事を始める。

ある程度食べると、聖がヴィータに問うた。

「そんで？ 話ってなんだよ」

「ああ。お前、一週間前この意見陳述会が無用心すぎるって言ってた

よな?」

「そうだな。それで、それがどうかしたのか?」

「あれには私も同意見だ。聖、お前カリムの予言って聞いてるか?」

「ああ。確か預言者プロフェーティン・シュリフテンの著書って言ったか?」

聖の言葉にヴィータは飲み物の入ったボトルを傾け、中身を口に含む。

「カリムは占い程度なんて謙遜してるけど、あれは大規模な災害やでかい事件とかは的確にあててんだよ」

「クロノ提督に聞いた話じゃ、今回は管理局機能の崩壊ってのが予言されてたんだっけか?」

「そうだ。ロッサの調査じゃクーデターってせんはないらしい。となるとだ、残されたのは……」

「外部からのテロ……か」

ヴィータの意見に続くように聖が言うと、ヴィータもそれに頷く。数瞬の沈黙が流れるが、ヴィータは話を続ける。

「けどよ、考えてもみるよ。外部からの犯行からにしたってなんだって管理局を狙う? 管理局を狙うにしたって一体そいつ等に何の特があるってんだ?」

「まだ誰が襲撃してくるか、そもそも襲撃してくるのかもわからねえが。もし、襲撃があるとすりゃあソイツはたぶんスカリエッティだ

る」

「どつしてそう言える？」

「スカリエッティは兵器開発者としても有名だ。だったらその力の証明とかじゃねえのか？」

聖がヴィータを見ながら言うものの、彼女はまだ納得が言っていない様子だ。その証拠に口元に手を当て深く考え込んでいる。

「力の証明って言うてももつとほかでやりゃあいいだろうに。リスクがでかすぎるだろ。いくらスカリエッティと言ったってそれぐらいはわかりそうなもんだけどな」

「まあな。けどよ、今はんなこと気にしてもしゃーねーだろ。襲撃してきたら迎撃ってだけ考えてりゃ大丈夫だ。幸い、こっちにや優秀な部隊長がついてるんだしよ」

「……それもそうだな。変なこと話して悪かった」

「気にすんなよ。けど、始まったら俺達は外に出られねえ。外はよろしく頼んだぜヴィータ」

「おう、まかせとけー」

二人は互いの拳を合わせながら笑いあった。

そして明朝。

朝日が昇り、地上本部を照らしていく。

「さて、あと少しか……」

「今のところは何もなさそうですけど」

「まあ本当はこのまま何もないほうがいいんだけどな」

聖は一緒に外の巡回をしていたティアナに答えつつ、安綱を外す。

「そんじゃ、ティアナ。安綱のこと頼んだ」

「わかりました。聖さんも気をつけてください」

「ああ。何かあったら即連絡よろしくな。あと、無理はすんなよ」

聖はそれだけ言うと、なのは達と共に会場内へと消えていった。

会場内に入った聖ははやてたちと合流した。

「ほんなら、もう一度だけ確認な。私とシグナムはこの後カリムたちと合流して本会場に行くことになってる。フェイトちゃんにはのちちゃん、聖くんはそれぞれ巡回をよろしく頼むな？」

三人は頷くと、共に自分達の持ち場へと向かっていく。同じフロアであるものの、中は一人出回るには広すぎるので、三人はそれぞれ別方向に散った。

持ち場に着いた三人は思念通話を始める。

『開始まであと少しだけど……そっちはなにかある？』

『こっちはないね、聖の方は？』

『こっちも特に問題はなさそうだな』

なのはの問いに、二人は落ち着いた様子で答える。しかし、その中で特に話すことがないのか、皆言葉に詰まってしまっ。

しかし、その沈黙を破るように、聖が話題を持ちかける。

『そういやフェイト。ヴィヴィオは昨日平気だったか？』

『うん、特に泣くこともなかったし。朝も元気だったよ』

『そっか、ならよかった。さっさとこの任務終わらせて帰ってやらねえとな』

『だね。帰ったらいっぱい遊んであげなきゃ』

『二人とも、いつもの倍以上に甘えられちゃうかもね』

他人が聞けばなんと緊張感のない会話だろうかと野次を飛ばしたくなるような話題だが、二人はとても満足げだ。

そんなことをしていると近くの中継モニターに本会場の中が映し出された。

『っと、始まるみてえだな。にしてもこのおっさん……』

『おっさんって……レジアス中将のこと？』

『ああ。シグナムさんから聞いたんだけどよ、このおっさん武闘派で有名なんだろ？ ……体系的に武闘派にはみえねえよな？』

聖が言った瞬間、二人は苦笑いを浮かべた。

『まあ若い頃はそうだったのかもしれないからあながち間違っていないのかもしれないけどね……』

『でも確かに今の状態で武闘派を名乗るのはきついかもね……』

『だろ？ そんなヤツが上に立ってるとか腹立つよなあ……今度喧嘩売ってぶちのめしてくるか』

『それはダメ』

聖の発言を二人は声をそろえて制した。その後も他愛ない雑談や、昨日、ヴィータと話したときのようなことを話しながら、三人は警備を続けた。

「ふあ〜……ねみい……」

「こら聖。警備中なんだから欠伸なんかダメだよ？」

「んなこといったってもう何時間やってんだよ……よくあきねえなあ。さっきから同じような話題ばっかじゃんか。はやてもよくあきねえもんだ」

「じゃはは……まあ確かにちょっと長いなって感じちゃうね」

既に空は茜色に染まっており、開始から四時間以上が経過している。三人は既に合流しており、未だ終わる様子のないモニターでの会議に目を向けている。

いまだにモニターの中では、管理局の上層部の者達がそれぞれの意見を述べている。

「つか中には寝てる奴とかいんじゃないか？」

「さすがにそれは……」

「ないんじゃないかな……」

「でもまあ、日本の国会だってよく寝てる奴いるし。ひでー時はゲームしてる奴だっているぜ？ だから多分こっちにもいるって」

からからと笑いながら言う聖になのはたちはそれぞれ苦笑する。

しかし、彼等がいる地上本部から離れた洞窟では、魔の手が着々とその手を伸ばしていた。

「ナンバーズ、全員ポジションに着きました」

薄紫色の髪と黄色の瞳の見た目からすると秘書を髣髴とさせるイメージの女性。ナンバーズ、ウーノが背後にいるスカリエッティに言

う。

『ルーテシアお嬢様とゼスト殿も準備は整っています。命令が下り次第いつでも作戦開始可能です』

複数開かれているモニタの中の一つの中に映し出されているのは、藍色に近い髪色にウーノと同じように黄色い瞳をした女性。トーレが堂々と言い放つ。

『ディエチちゃんのバレルも特に問題ないようですよ、すぐにでも撃てますよドクター』

甘ったるい声で言うのは眼鏡をかけ、髪を三つ編みにしているナンバース、クアットロだ。すると、それを聞いていたスカリエッティが肩を震わせながら狂ったように笑い出す。

「楽しそうですねドクター」

「ああ。楽しいとも、何せこの手で世界の歴史を変える瞬間を作り出すことが出来るのだからね。研究者として心が沸き立つじゃあないか。そうだろう、ウーノ。我等のスポンサー諸君にも我等の研究成果を特にごらんいただけたことだろう。それだけじゃあない、エシエクにも会えるかもしれないのだからね。楽しくてしょうがないよ。……ククク」

またしても笑うスカリエッティはすぐにウーノたちに向き直ると、腕を振り下ろしながら命じた。

「やあ！！ はじめよう！！」

彼の顔は狂気に満ち満ちていた。

そのとき、聖は窓の外を振り返る。外にはなにも異常がないように見えるものの、聖は確かに何かを感じ取った。

……なんだ、今のピリツとした感じ。

「どうしたの？」

フェイトの問いに聖は答えることはなく、通信でティアナを呼び出す。しかし、つながったかと思った瞬間、通信にノイズが走った。

「通信妨害!? まさかっ!!？」

聖が言ったのもつかの間、次に地上本部を襲ったのは衝撃だった。

「なに、」の揺れ!!」

「一つは中からだ、もう一つは外か!!」

二人がいるところはさほど揺れてはいなかったが、確かに揺れは確認された。同時に全てのモニタにノイズが走り一気に現状が把握できなくなる。

「通信はダメだ。フェイト、一旦なのはと合流するー!」

「……」

二人はなのはのいるほうに向けて駆け出した。

少し走ると、エレベーターが動かなくなっていたり、隔壁がしまっていることに四苦八苦している局員の姿が見えた。

「制御室がクラッキングされてるみたいだね。電力も落とされてる」

「…………クアットロか…………」

「え？ 何？」

「なんでもねえ、急ぐぞー！」

聖からもらされた咳きを、フェイトはうまく聞き取れなかったのか聞き返してみるが、聖は首を横に振って否定した。

数分後、二人はなのはと合流した。

「あちこちで隔壁がしまってるから、多分本会場の方ははやてちゃんたちが閉じ込められてると思う。通信も使えないからスバル達にも連絡は取れない…………でも」

「うん、緊急時に集まるところは支持してある。行くのは地下ロータリーホールだね」

「でも問題はそこまでどうやって行くかな…………」

聖は考え込むが、すぐには思いつかないようだ。するとなのはが思い至ったようにエレベーターに向かう。

「ちょっと危ないけど…………。多分いけるよ。平気？ 二人とも」

「うんー」

「上等!!」

三人はエレベーターに向かう。

案の定エレベーターも電力がダウンしているためか、動いていない。扉も硬く閉ざされたままだ。なのはとフェイトはそれを開けようと扉に近づくが、聖がそれを止めた。

「じじいなのは男の仕事だ」

そういうと、聖は扉の前に立ち扉と扉の僅かな隙間に指をいれ、腕に力をこめる。

「ぶんっ!!」

気合の一声と共に、エレベーターの扉が開いた。フロアから歓声上がるものの、三人はそれを気にしない。

なのはとフェイトはエレベーターの中を覗き込むと。

「うん、これなら大丈夫」

「行くよ聖くん!!」

「は?? ってっおおい!!?」

なのはの声と共に、二人はエレベーターを吊っているケーブルにつかまり、一気にそこから下にすべり下りた。二人の掌は魔力でコー

ティングされており、傷がつかないようになっている。

「かー……。うちの女性陣はなんとも行動的だな。けど、俺も負けてらんねえなっ!!」

聖は微笑を浮かべると、二人と同じように手に魔力を集中させてコーティングを施し、滑り降りていく。

ある程度滑り降りると二人の姿が見えた。

「まったく、ずいぶんとまあ大胆なことするなお二人さん」

「訓練学校でいろんな訓練したからね。これもその一貫だったんだ」

「でも、こんなところで役に立つなんて思わなかったね」

二人はこんな状況でも焦らずに、昔のことを思い出しているようだった。それに聖は小さく笑う。

「じゃあ、このまま一気に下まで行こう!!」

「うん!!」

「おう!!」

三人はそのまま下に滑り降り続けた。

その頃、地下ではスバル達がナンバーズたちと相対していた。實力はほぼ五分といった感じだが、今のところスバルたちが善戦しているようだ。

「ちっ！ ちょこまかと!!」

憎々しげにエリオを睨むのは赤紫色の髪と、同じ色の瞳をした少女ウエンディだ。彼女の操るふろーターマインは、服にかすただけでも爆裂する恐ろしい殺傷能力を持っているが、残念なことにそれらは一つもエリオに当たっていない。

「ウエンディ！ そんな奴一人さっさとしとめるよこのグズ!!」

苛立ちの声を漏らすのは赤い髪の短髪に黄色の瞳の少女ノーヴェだ。彼女は自らのインヒューレントスキル、ブレイクライナーを用いて高速で移動している。その移動方や、ブレイクライナーの形状はまるで、スバルやギングアのウイングロードを思わせる。

「もらったあ!!」

声と共に、ノーヴェが飛び掛ったのはティアナだ。ティアナの反応は少し遅れ、その強力な蹴りがティアナに直撃した。

が、

彼女の姿は攻撃が当たると同時に露と消えた。

「なっ!?!」

「幻影!?!」

二人が周りを見ると、既に周りを大量の幻影に包囲されていた。

そこから少しはなれたところに、ティアナとキャロの姿が見られた。彼女達はその顔を苦悶に矢がませている。何せ、幻術は普通の魔法よりも魔力消費が激しいため、長く維持することは出来ないのだ。

「あたし等のことを騙すほど高度な幻術なんて、この幻術使い。戦闘機人の扱い方を知ってる!？」

「ハン!! 幻術だろうがなんだろうが、ようは全部ぶっ潰しやいいだけの話だろうが!!」

驚愕の声を漏らすウェンディに対し、ノーヴェはイライラとした様子で腕を構える。しかし、そのとき、ジャリツという音が彼女の耳に入り、ノーヴェはそちらを振り向くが、既に遅かった。

「うおおおおお!!」

「ぐあっ?!?!」

スバルがマツハキャリバーを駆り、高速の拳をノーヴェに打ち込み、彼女は大きく後ろに吹き飛ばされる。

「ノーヴェ!? っ!？」

吹き飛ばされたノーヴェの実を案じウェンディが声を上げるが、彼女にもまたエリオがストライダーに雷撃を纏わせていたのだ。

「はあああああ!!」

「ちっ!!」

ウエンディも負けじと応戦するが、弾丸を生成する暇がなく、ライジングボードを構えるだけに終わってしまう。しかし、間一髪で構えることが出来たためか、直撃は免れた。

「サンダー……レイジ!!」

だが、それでも彼女の周りを取り巻いていたガジェットはエリオの技の余波で生み出された雷で無残に破壊された。

その爆風が彼女に及び、ウエンディもまたノーヴェと同じように吹き飛ばされてしまった。

「撤退!!」

その気に乗じて幻術を維持していたティアナが号令をかけ、四人と四人の幻術を含めみな方々に散った。

後に残ったのは恨めしそうな表情のノーヴェと、吹き飛ばされたとき痛めたのか、左腕を押さえているウエンディの姿だった。

すると、二人に通信が入る。

「ノーヴェ、ウエンディ、チンクだ。ちょっとこっちを手伝え。今、もう一機の確保対象、タイプ0ファーストの方と戦闘中だ」

そういう少女は長い銀髪に、黒の眼帯、そして黄色い瞳の少女。チンクだ。

また、彼女のモニタには、スバルの姉であるギンガの姿が映し出されていた。

エレベーターのケーブルを伝って降りてきた聖たちは通路を走っていた。すると、

「高町一尉！」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。三人が振り向くと、シャッハが息を切らしながら三人を追っていた。

「シスターシャッハ？」

「はやてちゃんたちと一緒にじゃ？」

「なんとか会場の扉は皆の力で開けることができました。お二人はまだ中で状況の説明を行っています」

「となると……ひとまずはやてたちの心配はなくなったな」

シャッハのいったことを聞き答えた聖に三人は頷いた。するとまたしても後ろから、足音が聞こえた。今度は一人ではない。

「お、グッドタイミングだな」

聖の視線の先には、スバルたちがこちらに向かっていている姿が映った。

「遅くなりました、お届け物です！」

「いんや、ちょうどいいタイミングだ。サンキューな」

聖たちはそれぞれ礼を言うと、自らのデバイスを受け取る。シャッハもまたシグナムとはやてのデバイスを受け取った。

「よし、じゃあ次は……」

聖がそこまで行ったところで、スバルが焦りをはらんだ声を漏らす。

「ギン姉？ ギン姉!？」

「どうした!？」

「ギン姉と通信がつかないんです!」

場の全員の表情が一気に曇る。

「ティアナ、ここに来る前交戦したか？」

「はい、戦闘機人二名と交戦しました」

「どんな奴だった？」

聖は眉間に皺を寄せ、ティアナに問う。ティアナは一度頷くと、

「えっと、一人はスバルくらいの短髪で赤髪。もう一人は赤紫色の髪に、ボードのようなものを持っていました」

……短髪赤髪にボードを持った奴？ あのヤローが新しく作った

ヤツらか！

「わかった、サンキューな。なのは、お前はスバルたちとギンガの援護に向かってくれ。フェイトはエリオたちと一緒に六課に向かえ。最悪の場合も想定してな」

「聖くんは？」

「俺は制御室に行ってくる。もしかしたら他の戦闘機人がいるかもしれないからね。シスターシャツハははやてたちのデバイスをお願いします」

「わかりました」

聖の指示に皆が頷いた。

「じゃあ各自散開!!」

聖の声と共に皆一斉に駆け出した。なのはとスバル達はギンガの援護に、フェイトとエリオたちは六課に向けて駆け出した。

聖もまた、皆とは別方向にかけてゆく。走っている最中、聖はバリアジャケットを展開すると、空中を飛ぶ。

聖様

「わかってる！ ああクソ!! スバルたちのことをもつと早く知ってればギンガを一人にさせることにはならなかったてえのに!!」

仕方ありません。流石に個人情報まではわかりません

「けどよ」「!!」

止まってください聖様!!

聖の言葉を遮るように安綱が声を発した。それは安綱にしては珍しく大きな声だった。

前方に反応があります。しかもこの反応は

「ナンバーズか……」

はい

聖の問いに安綱は答える。聖もまた空中から降り、地に足を着けると、安綱を構える。彼の全身からあふれ出る殺気もかなりのもので、ピリピリとした空気がその場に張り詰める。

すると、彼等の斜め前の柱の影から一人の女性が現れた。その女性は管理局の服に身を包んではいるが、その手には鍵爪のようなものが装着されていた。

……まさかっ!?

聖の顔が一瞬にして強張った。すると女性はその反応が嬉しいとでも言わんばかりに、甘く、そして妖艶に微笑んだ。

そして、彼女が自らの顔を撫でるような素振りを見せた瞬間、彼女の顔が別人に代わった。しかし、彼女の妖しい笑みだけは変わっていない。

彼女は聖に右の掌を見せながら甘く、纏わりつく様でありながら、

まるで變するわが子を變でる母親のような声音で彼を呼んだ。

「……久しぶりね。私の可愛い可愛いエシエク……」

「……Hーウア……」

覚悟

ドゥーエと対峙しながら聖は頬を汗が伝うのを感じた。それを指の腹で拭くと、ドゥーエを見据えながら聖は問う。

「どっしてテメエがここに……」

「あら、テメエなんて……随分と怖い言葉を使うようになったのねエシエク。でも悲しいわ、あんなに可愛らしかった貴方がそんな目を私に向けるようになるなんて」

「質問に答えやがれ!!」

思わず聖は声を荒げる。眉間には濃く皺がよっており、まさに鬼気迫っている。そんな聖の状態を見てもドゥーエは臆することもせず、話を続ける。

「懐かしいわね、貴方が出て行ってからもう十二年か。髪も染めてるみたいだから最初会った時はわからなかったわ。それに、目の色も赤だけになっているし……カラーコンタクトでも入れているの?」

「最初に会った……? どっいつことだ!」

「ホラ、覚えてる? 貴方ミッドの街中でガラの悪い連中から女性を救ったじゃない。アレは私よ」

言いながらドゥーエは再度自分の顔をなでる仕草を見せる。同時に、顔だけでなく服装までも聖が助けた女性のそれに変わった。

聖はそれに齒噛みしながら舌打ちをした。可笑しかったのか

ドゥーエは元の顔に戻しながらさらに告げる。

「あの時は私もまだ気付かなかったけれど……。ドクターからの連絡で知ってね、貴方だと確信した時は全身に快感が走ったわ」

恍惚とした表情で言うドゥーエから聖は目を離さずに睨みつける。それでもドゥーエは笑みをなくすことはない。もはや笑みと言うよりも彼女からは狂気すら感じられた。

「ねえエシエク。戻ってこない？ 戻ってくればドクターや他の子たちも喜ぶわ」

「ふざけんな。誰があんなところに戻るかよ！ 大体、俺はテメエらを抑まえるために来たんだ」

安綱を振るい、ドゥーエに切先を向ける聖は強く言い放つ。それを聞いたドゥーエは肩を竦ませながら言う。

「そう残念ね。だったら話はこれでお終いにしましょうか。ああ、そうそうこんなところで油を売ってる場合じゃないと思っつわよ」

「何？」

「^{ウイ} ^{ウイ} ^オ
聖王の器 大丈夫かしらね」

その名を聞いた瞬間、聖の顔が蒼白に染まる。同時にすぐさま思念通話でフェイトに連絡をとる。

「フェイト！ 六課にはついたか!？」

『ごめん、今は戦闘機人の子達と戦ってる最中で……。六課にはエリオ

とキャラが向かってる』

「わかった。……ヴァイス！ 聞こえるか、ヴァイス!？」

フェイトとの通話を切り、ヴァイスに通信を送るが聞こえてくるのはノイズだけだった。そして脳裏に浮かぶ最悪の光景。

「クソッ!!」

「どつやら、もう手遅れだったみたいね。じゃあねエシエク。今度会うときは昔みたいにおかあさん”って呼んで欲しいわ」

そう告げたドゥーエはそのまま闇に溶けるように消えていった。

残された聖は唇をかみながら悔しげに毒づいた。

「……………ちくしょっ……………!!」

聖様……………

安綱の心配そうな言葉も今の聖には届いていなかった。

全てが終結したのは夜が明けてからだった。ギンガも攫われ、スバルも重傷を負い、そしてヴィヴィオが攫われた。不幸中の幸いは六課のスタッフに死亡者が出なかったことだろう。ヴァイスも負傷はしていたが命に別状はないとのことだ。

しかし、六課の隊舎は焼け焦げ崩落していた。すぐの復旧は不可能だろう。そのボロボロになった六課の一角で聖は一つのぬいぐるみ

を見つけた。

それはヴィヴィオが肌身離さず持っていたお気に入りのおウサギのぬいぐるみだった。煤に汚れていたそれを聖は拾い上げると、煤を払うとそれを見ながら聖は悔しげに歯噛みをする。

同時に彼の目尻からは涙が流れ始め、聖はその場に膝を付き床に拳をたたきつける。

「クソツタレが……っ!! 俺が……俺がもっと早くに気付いておけばっ!! ヴィヴィオもギンガも……!」

するとそこへ、フェイトとなのはがやって来た。二人は慟哭する聖の姿を見て彼に寄り添い、彼を後ろから抱いた。

「聖くん……一人で苦しまないで。私たちもいるから」

「うん。ヴィヴィオは必ず助け出そう。私たちで」

二人の励ましの言葉に聖は小さく頷いた。聖は流れ出していた涙を拭くと、二人の顔を見やる。二人は泣いていた。大粒の涙をこぼし、目を真っ赤にし声を殺して泣いていた。それを見た聖は、

……俺はなんて情けねえ野郎だ。男の俺が涙こぼしてどうするよ。しっかりしやがれ!

心の中で自らを奮い立たせながら、聖は二人に向き直り、二人の頭を胸に抱きこんだ。

「ごめん、情けねえところ見せちゃった。……ヴィヴィオを助けよう。皆で」

聖の言葉に、二人はそれぞれ答えると、ついに胸に溜め込んでいたものが声とともに吐き出された。

二人が声を出して泣くのを聖は優しく受け止めた。

その日の深夜。聖はスバルたちが入院している病院の屋上に立っていた。

「なあ安綱よ、もう言っしかねえよな」

そうですね。……今回の損害は私たちにも非があります。黙っていたのが裏目に出てしまいましたね

「ああ。……本当に最低のバカヤローだな俺は」

夜天に浮かぶ月を眺めながら聖は自嘲するように呟いた。

それを言うなら私もですよ

「……別にお前は悪かねーよ。俺が未熟すぎたんだ」

まあ過ぎたことを気にしても何も変える事は出来ません。あと、もし皆に聖様のことを言うのであれば、もう少し待った方がいいでしょう。スバル様もあと少しで退院ですし、皆が一箇所に集まった時の方がよろしいかと

「ああ。そうだな」

聖はそれだけ言つと、屋上から消えていった。

翌日、聖ははやての元へと訪れた。

「はやて、いるか？」

「ん、おるよー」

部屋の中からはやての声が聞こえ、聖は部屋の扉を開けた。中にははやてのほかにも、シグナムやヴィータ、なのはにフェイトが集まっていた。

「ちょうどよかった、聖くんも呼ぶところだったんよ」

「何か進展でもあったのか？」

聖の問いにはやてが頷くと、部屋のカーテンが閉められ照明が落とされた。同時に立体モニターが投影され、そこには一隻の戦艦が映し出された。

「管理局保有のL級艦船アースラや。聖くんも見たことぐらいはあるか？」

「ああ、クロノ提督に見せてもらったよ。確かなのは達にゆかりのある船だったか」

「せや、私やなのはちゃん、フェイトちゃんが本局に入りたての頃ずっとこのアースラで仕事をしottaからな。かなり思い出深い船や」

「でも確かアースラはもうなくなるはずじゃ？」

聖の問いにはやては頷きさうに話を続ける。

「確かに、アースラはもうなくなるはずやったんやけどな。今回六課があんな風になってしても復旧は難しいやろ？ せやからクロノクんに頼んで貸してもらうことができたんよ。アースラには休んでるところ悪いけど……最後にもうひと踏ん張りがんばってもらいたいんや」

はやての説明に聖が頷くと、フェイトが口を開く。

「スカリエッティの行動も段々過激になってきてるからね。動きながらスカリエッティの動向を探った方がより早く対応できるしね」

確かに意見陳述会以降、スカリエッティは表立って行動するようになった。既に多数の負傷者も出ている。

「アースラがミッドにくるのは一週間後や。それまでに各自しっかりと体調を整えてな。これ以上スカリエッティの好き勝手させへんように、皆気合入れていくで」

はやての言葉に、その場にいた全員が頷き解散となった。

皆と別れた聖はスバルが入院している病室へと向かった。

数回ノックした後中に入ると、新人達が全員顔をそろえていた。

「スバル、けがは大丈夫か？」

「あ、はい！ 大丈夫です!! もう殆ど治りましたから!!」

腕を掲げ、元気であることをアピールするがまだギンガを攫われたという心の傷は直っていないようで、時折悲しげな表情をしていた。

「わるかったスバル。俺がもっと早く気付いていれば……ギンガも攫われずにすんだのに」

「聖さんが謝ることじゃないですよ！ 私が……もっと速く行っていれば」

顔を俯かせながらスバルは首を振った。しかし、聖はもう一度頭を下げる。

「マツハキャリバーの様子はどうだ？」

「ダメージは大きかったみたいですけど修復できるみたいです。……私が無理させちゃったから」

「いや、あの時はしょうがない。お前も気が動転してた見たいだしな。だけど、後で謝ってやれよ」

スバルの肩を軽く叩き、励ますとティアナに軽く耳打ちをした。

「ティアナ、スバルのことしっかり支えてやんな」

「わかりました」

ティアナが頷いたのを確認すると、聖はエリオとキャロの元に行き二人の肩に手を置きながら、

「エリオ、キャロ。ありがとな、六課のスタッフにあれ以上負傷者が出なかったのはお前達のおかげだ」

「ありがとうございます！ だけど……」

「ヴィヴィオを……連れて行かれてしまって。すみませんでした」

申し訳なさそうに目を伏せる二人の顔を無理やり上げさせ、聖はニカツと笑いながら二人の頭をガシガシと乱雑になでる。

「いいんだよ。過ぎたことは変えられねえ。それに、お前らに無理させちまった俺の責任でもある。お前らが気にすることじゃねえさ」

聖はそういつとスバルたちの病室を後にした。

次に聖が向かったのはヴァイスがいる病室だ。

ヴァイスは命こそ落とさなかったものの、かなり負傷したようで、体のあちこちに包帯が巻かれている。

「ヴァイス……大丈夫か？」

「ああ……なんとかな。それより悪かった……嬢ちゃんを守ってやれなくて」

「気にすんな。ヴィヴィオは俺が必ず救い出す。お前はゆっくり休んでる」

ベッドに横たわるヴァイスに拳を差し出すと、ヴァイスもそれに呼応するよつに腕を出し、拳をあわせた。

「じゃあなヴァイス。ちゃんとおとなしくしてろよ」

それだけ言うと、聖は病室から出て行った。

夕暮れになると、聖は病院の屋上にシグナムとともに佇んでいた。二人の手には木刀がもたれており、互いに見合っている。

「珍しいな、お前から鍛錬を申し込んでくるとは」

「偶には俺から誘ってみようかと思いましたが。ちょっとした気まぐれっすよ」

木刀を向け合っているものの、二人はいたって冷静で、時折笑みもこぼしている。

「ではそろそろはじめるか……。勝負はこの前と同じでいいな？」

「はい。よろしくお願いします」

聖は真剣な面持ちでシグナムを見据える。シグナムもまた、一切の隙を感じさせずに聖を真っ向から見据える。

二人の間に一迅の風が吹き、互いの髪を揺らす。そして、風がやんだ瞬間、二人は息をあわせた様に駆け出した。

「ハアッ!!」

「フッ!!」

木刀と木刀がぶつかり合う小気味よい音が響き、二人は互いの刀身を滑らせるようにして競り合うが、すぐに距離をとると、もう一度ぶつかり合った。

二人とも一進一退の攻防を続け、どちらも一步を譲らなかった。数回の打ち合いの後、シグナムは聖の太刀筋に何かを見出した。

……剣から迷いが消えた。

シグナムは打ち合いながら以前聖と戦ったときに感じた聖の迷いが消えたことを感じていた。今の聖は迷いを断ち、まっすぐな剣をシグナムへ放っていた。

……覚悟が、ついたようだな。

小さく笑ったシグナムは再度強く剣戟を放った聖の木刀を絡めとり、放り投げる。同時に聖の喉元に切先を突きつけた。

「参りました……」

聖が両手を挙げて降参を表すと、シグナムは頷きながら木刀を納めた。

木刀を回収した聖はシグナムに買っておいたスポーツドリンクを渡した。

「ありがとうございましたシグナムさん。鍛錬に付き合ってもらって」

「なに、私もお前の太刀筋が変わったのが見れてよかったよ」

ドリンクの封を開けながらシグナムは笑みをこぼした。一口ドリンクを飲むと、シグナムと聖は近くのベンチに腰をかけた。

「白雲……どっちら覚悟が決まったようだな」

「えっ？」

「以前お前とこのように打ち合った時、私はお前の太刀筋に迷いがあるといったな。しかし、今日やってみてその迷いが消えていた」

聖の方を見ないが、シグナムは聖に向かってしっかりと告げる。

「隠し事を話す覚悟が出来たか」

「っ!? ど、どっしてそれを？」

「やはりな。いいか白雲、これは私やお前のように剣を使うものにかわからないこともかもしれないがな。剣というのはその人物の色々なことを教えてくれる。それは恐怖であったり、悲しみであったり様々だ。勿論お前が抱いていた迷いもそうだ」

シグナムの言葉に聖は声が出せずにいた。しかし、シグナムはさらに言葉をつむいでいく。

「初めてお前と模擬戦をしたときお前の剣から感じられたのは、何かを隠しているということだ。しかし、それは私や主はやてを傷つけるものではなかったものでないままで黙っていた。そして段々とお前の隠すという感情は迷いに変わっていったのだ。それが以前私が指摘したことだ。だが、先ほども行ったようにその迷いが今日は見られなかったのだ。何か覚悟を決めたのかと思ったのだ」

「最初っからお見通しだったってわけですか……流石ですねシグナムさんは」

「褒めるようなことではないさ。私のように長く生きているとなわかってしまうんだよ。古代の時代もそうだった。戦争ばかりで戦う相手の感情をいつの間にか剣を通してわかってしまうようになってしまったんだ」

遠い過去を思い返すように呟くシグナムの瞳は夕日の反射もあってかいつも以上に光って見えた。すると彼女は立ち上がり、

「いいか白雲、私はお前が何者だろうと気にはしない。それは高町やテストアロツサだけでなく、主はやては勿論、六課全員が同じだ。だから気にするな、言いたい時に言ってくれてかまわない。ではな」

シグナムはそれ告げると、木刀を聖に返し屋上を去って行った。

その後姿を見送りながら聖は立ち上がり頭を下げた。

その日の夜、六課の皆はそれぞれの覚悟を決めていた。

「私とティアアはギン姉を」

「絶対に救い出す……」

スバルとティアアナは互いに拳をあわせながら、

「僕とキャロはあの子を」

「ルーちゃんと真正面からお話をするー」

エリオとキャロも手を握りながら誓い合っていた。

ヴォルケンリッターの面々とはやてもそつであるように。

「皆、始まる戦いは今まで以上に過酷なものになるかもしれへんけど、ついてきてくれるか？」

「はい」

「……我ら守護騎士は貴方と共に……」

シグナムの返事を皮切りに、四人ははやてに頭を下げる。しかしはやては皆を一瞥すると、

「せやけど皆、無茶はせんようにな」

「……はい……」

声をそろえながら言う四人の瞳には強い光が灯っていた。

なのはとフェイトも互いに手を取り合いながら、

「私とフェイトちゃん、聖くんが絶対にヴィヴィオを」

「うん、取り戻そう。私たちのヴィヴィオを」

互いに頷き合い、二人は目を閉じた。

そして屋上では聖が夜天に浮かぶ大きな月を眺めながら、

「待ってるよ……ヴィヴィオ。絶対に助け出してやるからな」

拳を握り締め、決意をあらわにしていた。

聖たちが決意をあらわにしている時、スカリエッティの本拠地の一室では椅子に縛り付けられ眠っているヴィヴィオと、それを囲むようにスカリエッティ、ウーノ、クアットロが立っていた。

「ようやく揃った。聖王の器とレリックがこの二つが揃うことにより、いよいよ『ゆりかご』の鍵が生まれる」

「ドクターの夢の達成も間近ですねえ」

「ドクターだけではなく。私たちのものでもあるわね」

スカリエッティの発言に二人は互いに呟く。

告白

アースラがミッドに運ばれてから数日、六課のスタッフはアースラへと拠点を移していた。その中の一室、トレーニングルームでは聖とエリオが互いにぶつかり合っていた。この訓練はエリオが言い出したもので、聖もそれを了承し、既に一時間以上訓練にはげんでいる。

「ハアッ!!」

気合と共にストラーダによる光速の突きを放つエリオだが、聖はそれを安綱の刃で滑らせるとそのままエリオに肉薄し、彼の腹部に蹴りを叩き込む寸前で止めた。

「これで一回お前は吹っ飛ばされたな。訓練だからいいが実際の戦闘だったら大きな隙を作ることになるぜ」

「は、はい！ わかりました」

聖はエリオから足をひきながら言つと、踵を返し壁際に置いてあったスポーツドリンクをエリオに放り投げる。

「少し休憩にするか」

「はい、ありがとうございます」

エリオは言つと聖の隣に腰掛けた。

「聖さんの戦闘スタイルって剣術だけじゃなくて体術も入ってますよね」

「ああ。どっちか一つに偏るよりは二つできた方がいろいろと便利だしな」

「なるほど……。僕もそれぐらい器用だったらいんですけどどうしてもそういことが出来ないんですよ」

エリオは少し肩を落としながら残念そうに呟くが、聖はそんなエリオの肩に手を置きながら告げた。

「別に一つしかできないことが悪いってわけじゃねえ。一つしか出来ねえならそれを極めりゃいい、そうすりゃどんな敵にだって負けることはねえ。つーか、お前はまだ9歳だろ？ だったらこれからいくらでも進化できるぞ」

微笑みながら言う聖にエリオは内心憧れを抱いた。聖はエリオからすれば面倒見のよい兄のような存在だった。このように訓練にも付き合ってくれているし、相談にも乗ってくれていた。

……。僕も聖さんのようになれるのかな。

拳を握り締め、目に強い光を宿しながらエリオは立ち上がると聖に向き直り、

「聖さん！ もうちょっと訓練に付き合ってください！ あと少しでも何かつかめそうなんです……」

「おう、いいぜ。お前が満足するまで何時間でも付き合ってやるよ」

聖も立ち上がると、再びエリオと対峙した。

エリオとの訓練を終えた聖は昼食を済ませようと食堂に向かった。トレイを受け取り席に着いた聖は食堂の一角で一人ぼつんと食事をしているキャラオを見つけた。彼女は若干俯いており、食事があまり手についていないように見える。フリードもそんなキャラオが心配なのかテーブルの上で首をかしげている。

「相席いいか、キャラオ」

「えっ！ あ、はい大丈夫です！」

聖が声をかけるとすぐに顔をあげ、笑顔で接してくるが、どこことなくその笑顔は悲しげな色も孕んでいた。

「何か悩み事か？」

聖が聞くと、キャラオはもう一度俯き暫くとするとポツポツと話し出した。

「……不安なんです。六課の隊舎が燃えていて、エリオ君が傷ついて、自分の感情が制御できなくなってヴォルテールを召喚してしまって、もしかしたらまた同じことをやってしまうかもしれないことが不安でたまらないんです」

「そりゃそうだよな。だけどなキャラオ、一回の失敗で全てがだめになることなんてないんだ。それにお前とエリオには話したい子がいるんだろ？」

「はい。あの子……ルーちゃんは孤独な目をしてました。だから、あの子をその孤独から助けてあげたいんです」

言い切るキャラロは僅かに目を潤ませていた。すると聖はキャラロの手を握りながらまっすぐと彼女の瞳を見つめ、

「いいか、キャラロ。お前はとっても優しい子だ。きつとお前の気持ちもその子に絶対届く。だから絶対諦めるな、何があってもどんなに悲しいことがあっても、どんなに苦しいことがあっても絶対に諦めるな。自分の力を信じて戦いぬけ」

その言葉を聞いたキャラロはハツとした風な顔を見ると、目尻に溜まった涙を払い聖に向き直ると、

「はい！ 私、絶対諦めません!!」

「キユククルー!!」

キャラロの発言に呼応するようにフリードも大きく鳴いた。聖はキャラロとフリードの頭を撫で、その後は二人で談笑しながらの食事となった。

キャラロとの食事を終え、聖は安綱の調整のためデバイスルームへと向かった。中に入ると、そこにはマリエルと、スバルにティアナがいた。

「あ、聖さん。どうしたんですか?」

「ちょっと安綱の調子見てもらおうと思ってな。マリーさんお願いできますか?」

「うん、いいよ。スバルのマツハキャリバーも安定してきたしね」

安綱を受け取りながらマリエルは答え、皆はマツハキヤリバーに目を向ける。確かに、ボロボロだったコアも既に修復が済んでいるのか綺麗になっていた。

スバルはそんなマツハキヤリバーを見つめながら、

「ごめんね、マツハキヤリバー、無茶させちゃって。今度は絶対に傷つかせないから」

悲しげな面持ちのまま自らの愛機を見つめるスバルに聖は後ろから声をかけた。

「スバル……お前とギンガの出生ははやてから聞いた。今から言うのは俺の直感だけど聞いてくれるか？ ティアナもいいか？」

「はい」

「大丈夫です」

二人が頷いたのを確認した聖は真剣な面持ちで切り出した。

「おそらく、ギンガは敵になる」

「っ!？」

「そんなんっ!？」

「ありえない話じゃない。スカリエッティはあの戦闘機人たちを作ったんだ。てことは、それを自分の思っように動かすことも可能だろ」

驚愕に顔をゆがめる二人に聖は冷静に言い放つ。それを見ていたマリエルが、聖に言った。

「聖くん……流石にそれは言いすぎだと思つよ」

「はい、自分でもそう思います。だけど、二人にはわかってもらいたいです。……で、どうだ？ もしギンガが敵になったときお前たちは戦えるか？」

聖の問いに二人は顔を見合わせると、聖をまつすぐと見据え、力強く答えた。

「戦えます。戦って勝って、そしてギン姉を取り戻します！」

「私も、諦めずに戦い抜きます。どんな危機的な状況になっても諦めません」

二人の決意を聞いた聖はニヤリと満足そうな笑みを浮かべ、二人の頭をガシガシと乱雑になでた。

「それだけ覚悟できてりゃ大丈夫だな。だけど忘れんなよ。お前らは一人で戦ってるんじゃない。俺達全員で戦ってるってことを」

「はい！」

力強い返事を聞いた聖はデバイスルームを後にした。

夜になり、聖たち隊長陣はブリーフィングルームに集まっていた。

「スカリエッティ達は地上本部の各拠点を潰して回っているようです。既に多くの被害が出ていますが地上本部はまだスカリエッティ達の拠点はハッキリしていないようです」

シグナムが投影モニタを使いながらはやくてに報告すると、はやくてもそれに頷きながら皆に告げた。

「奴等の拠点探しは今、ロツサとシスターシャツハが組んで探ってくれとる。ロツサの報告からすると、もう少しで割り出せそうなんやけどまだ確証にはいたってないみたいや。他に何かあるか？」

はやくての聞き返しに皆が首を振るが、一人、聖だけが手を上げた。彼は立ち上がると、皆のほつを見据えながらいつもより思いトーンで語りだした。

「スカリエッティ達の報告じゃないんだが……。皆に話すことがある。明日、またここに集まってくれないか？　こんな状況で勝手だとは思つが頼む」

「今じゃだめなんか？　聖くん」

「出来れば新人達や他の皆が聞いてくれる状況がいい。本当に勝手だが頼む」

はやくての切り返しに聖は頭を下げた。はやくてもそれに頷くと、

「……わかった。ほんなら明日の十時頃新人達も合わせて皆ここに集合や。持ち場から動けない他のスタッフにはモニターを通じて配信するけどええか？」

「ああ。ありがとう、はやて」

「ええよ。仲間なんやからあたりまえやろ？」

「そう……だな……」

聖の胸に仲間という言葉が重く突き刺さった。

……俺はこんな風に俺のことを仲間と想ってくれる奴等に隠し事をしてきた……。それ相應の報いは受けるんだろつな。

奥歯をかみ締めながら自分のしてきた行動を呪った。

「じゃあ、今日はこれでお終いや。皆明日に備えてゆっくり休んでな」
「？」

はやての号令に皆従い、それぞれ自分達の部屋に戻っていった。

聖もまた同じように部屋に戻る中、なのはとフェイトに呼び止められた。

「聖くん！」

「どした？ 二人とも」

聖はいつものように返してみるが、フェイトとなのはは顔を見合わせるよ、

「聖、何か無理してない？」

フェイトの問いに聖は笑顔を崩し、俯きながら悲しげな表情になっ

た。

「……どうして、そう思うっ？」

「何か今日の聖くんは笑っててもとっても悲しそうだったから……もしかしてヴィヴィオのことが？」

二人の問いかけに聖は小さく溜息をつく、壁に背を預けながら言い出した。

「確かに、ヴィヴィオのことは心配だ。今にでも助けに言ってやりたいくらいにな。だけどそれ以上に、俺のことを仲間だって信頼してるお前らに隠し事をしてきた俺のことがどうしようもなく情けなくて、悔しいんだ……!!」

壁を拳でたたきながら言う聖は唇をかみ締め、目を手で覆っていた。その様子を見た二人は聖に駆け寄り、

「一体どうしたの？ 隠し事って？」

「もしかしてさっき言ってたこと？」

「ああ……。俺はお前らに隠し事をして、そのせいでヴィヴィオも……ギンガも……!!」

聖の目からは一筋の涙がこぼれ、それは彼の頬を伝った。涙がこぼれたのを見たなのはフェイトは互いに頷き合つと、聖の腕をロックし二人の部屋に連れて行った。

「お、おい！ お前ら何を！」

「いいからー。 聖くんは黙って付いてきて」

なのはに「蹴され、 聖は黙った。

部屋に辿り着くと聖はソファに座り、なのはとフェイトはベッドに座った。 ちょうど向かい合うような感じだ。

「聖くん、 はやてちゃん達にはちょっと申し訳ないけど……。 私達に話してくれないかな、 聖くんが隠してたことを」

「うん。 少しでも心を軽くしないと、このままじゃ 聖が壊れちゃうよ」。二人の心配そうなまなざしに、 聖は首をゆっくりとたてに振った。そして彼はポツリポツリと語りだした。

「……俺がお前らに隠し事をしていたのは最初からだ。 地球出身の魔導師といったが本当はぜんぜん違う」

「それって、 ミッド出身って事？」

「ミッド出身といえばミッド出身なんだろうが……。俺には母親と父親がいない。地球にいるのは義理の父親と母親だ。簡単に言っちゃまうと、俺は人工的に生み出された人間だ」

「それって……。私と同じ……。クローンってこと？」

フェイトの問いに聖は静かに頷いた。それに驚きを隠せないのか二人は口元を手で覆ってしまった。三人の間に沈黙がはびこるが、なのはが意を決したように聖に問うた。

「でも聖くんはその……。一体誰のクローンなの？」

「……ヴィヴィオと同じだ。俺は古代ベルカの聖王オリヴィエのクローンだ」

「聖王オリヴィエの!? でも史実だとオリヴィエは女性だった……」

「ああ。だから俺はアイツ……スカリエッティからこう呼ばれていたよ『失敗作』ってな。本来クローンであるはずなら、俺も女として生まれてきたんだろうがどこかで乱れが生じて俺は男として生まれてきたってわけだ」

自嘲気味に言う聖だが、二人は未だに聖の言っていることがうまく飲み込めていなかった。しかし、自分達には知っておく義務があると感じたフェイトは、さらに聖に問う。

「聖はスカリエッティに育てられたの?」

「いや、正確にはナンバーズの二番、ドウエってやつだ。生まれた頃から常にドウエがいたことを覚えてる。そして、俺は六歳まであらゆる戦闘訓練、実験を受けさせられた」

「実験って?」

「聞くと相当エグイがいいのか?」

聖の切り返しに二人は緊張しながら頷いた。聖もそれに頷いて返すと口を開いた。

「自分を殺させるんだ」

「自分を……殺す?」

「それってまさか!？」

「ああ、そうだフェイト。実験では俺のクローンを何体も作り出してそして俺自身と戦わせ、殺し合いをさせるものだった。これが開始されたのは俺が四歳のころだ。それから毎日毎日一人ずつ俺は俺を殺し続けた」

あまりに残酷な実験に二人は声が出なかった。しかし、なのはは何か口の中に溜まった唾を嚥下する。

「でも、どうしてそんな残酷なことを……」

「さあな、狂ったあいつの考えることなんざわかんねえよ。けど、俺はその日々に段々と恐怖を抱くようになって、六歳の頃研究所から持ち去った時空間転移装置をもって飛び出し、何とか地球に辿り着いたってわけだ。そして気を失っている俺を助けてくれたのが白雲夫妻だった。二人は俺が何者であるかなんて事は聞かずにただ俺を、育ててくれた。とても優しい人達だったよ。白雲の家で半年を過ごした俺は安綱と一緒に二人に俺のことを話した。最初は二人とも驚いてたけど、すぐに理解してくれたよ。だけど、俺が十八歳になるまでは地球にいろって言われてさ、俺は十八になるまで地球で過ごし、十八になると同時にわざと大規模な魔力を使って管理局に見つけてもらおうと思っただ。そして、ちょうど地球に来てたクロノ提督に拾われてそのままあの人の隊にはいったんだ」

長い説明を終えた聖は話す前と比べると若干、憑き物が取れたようにすっきりとした表情をしていた。するとフェイトは疑問に思ったのか聖に聞いた。

「もしかしてなんだけど、ヴィヴィオも聖と同じ実験を?」

「いや、その可能性はない。ヴィヴィオが見つかった状態からして、あの子はまだ生み出されたばかりだ。だけど、あの子は俺と違い本物のクローンであり、しかも成功体だ。おそろく『ゆりかご』を動かす鍵にされちまうだろう」

「ゆりかごって？」

「古代ベルカの聖王家が持っていた戦艦だ。聖王家はその船の中で暮らして、子孫を反映させていったことからその名がついたらしい」

「だけどゆりかごは存在しないって……」

「いや、絶対に存在する。そうじゃなきゃスカリエッティが俺達を作ることなんてしないからな」

真剣な面持ちで言う聖に二人も静かに頷く。

「このことクローノは？」

「知ってる。本局で俺のことを秘密を知ってるのはあの人だけだからな。……お前らには黙ってて本当にすまなかった。俺が自分のことを偽っていたばかりに皆を危険な目に合わせて」

聖はソファから降りると、二人に対して土下座をして謝った。聖のその行動に二人もしゃがみこみ、彼の肩に手を置きやさしく告げた。

「うっん、そんなことないよ。だって聖くんは私達にはなしてくれたじゃない。思い返すのだって辛いことを包み隠さず全部。それに、一緒に働いてるときの聖くんには偽りの感情なんてなかった。私達と真正面から向き合ってくれた」

「うん。聖は私達を騙そうなんて微塵も思ってたよ。もしそんなことをたくらんでる人なら、こんな話してくれないもん。それに聖だっていつも言ってるじゃない、『過ぎたことは変えられない』って。それって過去に縛られるんじゃないかって、未来を自分で切り開けて意味も入ってるんでしょ？」

二人は聖の肩を持つと、彼の上体を起こさせた。そして彼の背中に両側から手を回すと、優しく抱きしめた。

「ありがとう話してくれて。そして言わせて、大好きだよ聖」

「私からも言わせて。私も大好きだよ聖くん」

二人の告白に聖はその双眸から涙をこぼし、二人をきつく抱きしめ言った。

「ああ……！俺も大好きだ、なのは、フェイト……!!」

三人はそのまましばらくの間抱き合っていた。

翌日、宣言どおり、聖ははやてたちを含んだ六課の全員に自分のことを話した。

最初は皆驚いていたが、皆なのは達と同じようにすぐに理解してくれて、大きな問題になることはなかった。

そして、それから数時間後、アースラにアラートが鳴り響いた。スカリエッティ達が動き出したのだ。

開戦

アラートが艦内に鳴り響く中、聖たちはブリッジへと向かった。ブリッジに到着した皆の中からはやてがシャーリーに問う。

「シャーリー！ どないした!？」

「地上、及び空にガジェットが現れました！ その中には例の戦闘機人、ナンバーズ達の姿が見られます!!」

「襲撃か……っ！ 被害は!？」

「まだ明確な被害は出ていません。しかし、ガジェットとナンバーズ達の数人は市街地へと向かっています!!」

その報告に皆が苦悶の表情を浮かべたその瞬間、グリフィスの焦った声が走る。

「森林地帯より巨大な魔力反応!! しかもこれはっ!？」

同時に主モニターに映像が映し出された。そこには森林地帯の地盤が割れ、地面が隆起しながら木々が倒れていく光景が広がっていた。

そして、割れた地面に見える金と藍色の装甲。地面とは全く違う明らかに人工的な構造物。それがゆっくりとした速度で浮上を始めたのだ。

その光景に皆が絶句する中、聖だけが眉間に皺をよせ憎々しげに呟いた。

「……聖王のゆりか」

聖の呟きに皆が息を呑んだ。しかし、主モニターの映像はすぐにノイズによって掻き消された。数秒の後ノイズが晴れたかと思うとそこにはある男が映し出されていた。

肩までかかる程度に伸ばされた紫色の髪に蛇を思わせるような金色の瞳。そして聖の脳裏に刻まれている三日月の笑み。聖はその男を真つ直ぐと見据えながら告げた。

「よお…… 13年ぶりだなスカリエッティ」

睨みを利かせている聖に対し、スカリエッティはその笑みをなくすことはなく彼に答えた。

「やあエシエク久しいじゃあないか。ドゥーエにはもう会ったかい」?

「ああ、相変わらず気持ちわりーヤツだったよ」

「ククク、そう言ってあげるな彼女なりの愛情だよ。……おっと、君と思いつ話をするのもいいがそろそろ君のお仲間達に私の事を紹介しておかねばね。初めまして機動六課の諸君、私が君達と敵対しているジェイル・スカリエッティだ。まあ好きに呼んでくれたまえ」

笑みを絶やさずに皆に言うスカリエッティに皆は顔をこわばらせる。その中でもはやては毅然とした表情のままスカリエッティと対峙する。

「機動六課部隊長八神はやてや。ドクター・ジェイル・スカリエッ

ティ、貴方達に投降する意思があるのならば私達も手荒な真似はしない所存です。どうですか？」

「おおなんという慈悲深い言葉だ。いやはや若いからといって侮ってはいけないようだねえ。……しかし残念なことに私達に投降する気などはないのだよ」

彼ははやてを見つめ笑いながら告げる。それを聞いたはやても真つ直ぐとスカリエッティを見据えながら力強い声で言い放った。

「ならば私達も相応の対応をとらせてもらう。これ以上あんた等の好きにはさせへん」

それに呼応するようにその場にいた全員が頷いた。するとスカリエッティは声を出して笑った。その様子に不信な表情をする皆だが、彼はひとしきり笑い終えると、

「いや失敬。随分といい仲間たちに恵まれたようだねえエシエク。ところで彼女達に君の事は話したのかな？」

「ああ。そして皆は俺のことを信じてくれた」

それに聖がしっかりとした声音で答えると、スカリエッティはまたしても小さく笑みをこぼした。

「スカリエッティ！ テメエに聞きたいことがある、ヴィヴィオはあの中か？」

「そうとも、彼女は大切な聖王の鍵だからね。それも君とは違う完全な成功体だ。彼女を取り戻したいのであればゆりかごの中に行くことをオススメしよう。しかし一筋縄ではいかないよ」

「上等だ。何が来たってあの子を取り戻す。俺はこいつ等と約束したんだ」

聖はなのはとフェイトを見ながらスカリエッティに言い放つ。

「なるほどなるほど。君は本当に面白い成長を遂げたものだねえ。救えるものなら救って見せたまえ。では私はこれで……おおっと君に一つ言い忘れていた。エシエク、君にはこの座標に向かってみたまえ」

そういつとスカリエッティは手元に一つのモニタを出し座標を示した。聖は一瞬怪訝そうな顔をするものの、何かを感じ取ったように答えた。

「わかった、テメエの言い分に乗ってやるよ。だけどな覚悟しとけよ、テメエは俺達が絶対に捕まえる」

「楽しみにしているよ。ではね」

そう言い残しモニタにはまたもノイズが蔓延った。

はやては皆の方に踵を返しながら皆に命令を下した。

「皆、今の聞いたな？ これより私達機動六課は全力を持って奴等を阻止する。なんとしても市街地に被害を出させないようにするんや」

命令に対し皆は頷き返事を返した。

「まず地上におけるナンバーズ達はティアナ達に行ってもらおう。ゆりか

ご内はなのはちゃんにヴィータ。スカリエッツィのアジトへはフェイトちゃん頼む。シグナムは意見陳述会の日に現れた男、元地上本部所属のゼスト・グランガイツ氏をよろしくな。ほんで、聖くんは……さっきヤツが指定したところへ向かうんや。皆これに対して何か意見あるか？」

はやての問いに皆が首を振る。その中で聖ははやてに頭を下げながら告げた。

「ありがとう、はやて」

「なあに気にせんでええよ。せやけど済んだら皆のサポートに向かってな？」

「ああ。勿論だ」

聖が頷いたのを確認すると、はやてはもう一度皆の方に向き直り言い切った。

「これより十分後に全員出撃や。各自準備を整えていくように。……これが最後の戦いや。気張って行くぞ」

それを聞いた皆はそれぞれの準備に取り掛かった。

そして凡そ十分後。聖達隊長陣と新人達は出撃ポートにて顔を合わせていた。なのはは新人達の前に出ると彼等に笑顔で言った。

「皆、今までよくがんばってきたね。今日でこの今までの戦いは終わりになるけど、多分今までで一番激しい戦いになると思う。だけど忘

れないで、みんなは今まで多くの訓練を積んで来た。辛いこともあったけど乗り越えてきた。これから始まる戦いでは自分達がやってきたことを信じて、どんな時でも諦めないで戦い抜いて」

「はい!!」

なのはの激励に新人達は力強く頷いた。その様子を満足そうに見つめるのはだが、ウィータがなのはのとなりに眉間に皺を寄せながら立った。

「いいかテメエらー！ もう現場じゃあたし達はお前らをサポートすることは出来ねえ！ だけどな、さっきもなのはが言ったけどよ、どんな危機的状态でも決して諦めんじゃねえ!!」

怒鳴り声にも似た激励だったが、新人達にはしっかりと通じたようで四人はそれに嬉しそうに頷いた。

「んじゃ、隊長達の激励も終わったことだし……行くか!!」

聖が言うつとシグナムとはやて、ウィータが先に出撃ポートから飛び立った。それに続き新人達がへりに乗り込み出撃した。それを見送った聖はなのはとフェイトに目を向けた。

「二人とも、無理すんなよ」

「聖くんもね。あと……」

なのはが答えると、彼女は不意に聖の頬に顔を寄せ唇を聖の頬に押し付けた。

それに顔を赤らめる聖だが、それに有無を言わせないようにフェイ

トまでもが聖の頬に唇を押し付ける。

「な、ななななな……！」

「えへへ、じゃあ先に行ってるね聖くん！」

「私も」

二人は若干顔を赤らめながら飛び立っていった。その様子を自分の頬に触れながら聖がボーっと見ていると、

ホラ、何してるんですか聖様。余韻に浸ってないでさっさと行きま
すよ

「バツ!? 誰も余韻なんか浸ってねえよ!!」

どーでしょうかねー。内心でヒロイことでも考えてたんでしょう？

この淫獣

「だーかーらー!! ……ハア、ここでお前と言い合ってもじゃあなし
だな」

ええ、そうです。だからさっさと出て下さい

「どっちがはじめたことだよ!!」

聖は毒づきながらもバリアジャケットを展開しながら飛び降りた。

バリアジャケットを展開し終わった聖ははやてたちの元へと向か
う。

「よし、全員集まったな。ほんならさっき言ったとおり、これからは個人で分かれるで。あと、今からリミッターを外すから皆手加減なしで思いっきり戦いや!!」

はやてが言うとはほぼ同時に聖の身体に一瞬軽くなったような感覚が走った。能力リミッターが解除されたのだ。なのは達もそれは同じなようで、なのははすぐさまバリアジャケットの形態を変化させた。

なのはの変化させたこのバリアジャケットのモード名はエクシードモードと言う。デフォルト設定のアグレッサーモードとは違い、高速機動や回避を完全に度外視し、それと引き換えに重装甲と爆発的な威力を誇る形態だ。

「これがなのはの本来のモードってわけか」

「うん。こんな時にしか使わないけどね」

なのはは苦笑気味に答えるが、聖はそれに感心したように頷いた。すると彼も安綱を前に突き出すと安綱に命じた。

「安綱モード転換、ハイリヒモード!!」

聖が告げると同時に彼の体なのはと同じように一瞬光に包まれる。そしてその光が晴れたとき彼の肢体があらわになった。

普段の黒を基調としたバリアジャケットとは違い、今の聖のバリアジャケットは白を基調としており、白銀の装飾が施されている。

そしてさらに変化した点は安綱の長さだ。薄さは先ほどまでと変わらないのだが、刀身が凡そ2mほどにまで伸びている。

「このモード使うのも久々だな」

しみじみと言うものの、聖以外は安綱の変化に驚きを隠せないようだった。

「聖くんのフォームに驚いてる暇はないな。ほんなら皆、それぞれが
んばってや!!」

はやてがいうと、五人はそれぞれの方向へと散開した。なのはと
ヴィータはゆりかごへ、フェイトは地上のスカリエッティのアジト
へ、シグナムは地上本部へと向かった。そして聖もまたスカリエッ
ティが指定した座標へと飛び立った。

皆を見送りながらはやては夜天の書を開きシュベルトクロイツを
掲げた。

「ここは私が食い止める!!」

魔力を纏った状態ではやてが力強く宣言した。

……頼んだでみんな。

皆とわかれた聖はスカリエッティが指定した座標へと急いでいた。
途中飛行型のガジェットが攻撃してくるが、安綱の長い刀身を巧みに
使いながら聖はそれを斬り抜けて行く。

聖様、なのは様とヴィータ様の方にガジェットが集中しています

「チツ！ やっぱりゆりかこの死守が最優先か。……やれるか安綱？」

私を見くびっておいでですか？

「はっ……悪かったよ」

安綱の返答に聖は軽く肩を竦ませると、なのはに思念通話を送った。

『なのは。目の前のガジェットを相手にすんな。今はそこで止まって俺が砲撃した後で行け。道を作る』

『え？ でも……』

『大丈夫だ。目の前のガジェットは俺が一掃する』

なのはの疑問の声に聖はニヤリと笑いながら言った。なのはもその自信を信じたのか速度を落としガジェット群の手前で止まった。

「……安綱カートリッジ三発ロード」

聖が言つと同時に安綱から薬莖が三発吐き出された。そのまま聖は安綱を腰に持ってきて居合いの態勢に入った。

「……斬閃響壊……龍哮ッ!!」

技名と共に振りぬいたその長大な刀身から一迅の斬撃が轟音とともに撃ちだされ、なのは達の前方のガジェットを切り刻んでいく。しかも切り刻まれたガジェットの近くにいたガジェットすらも斬撃の余波なのか細切れにされていく。

『すっ！』……』

『ある意味シグナムの技より凶悪だな……』

なのはの驚愕の声とヴィータの呆れにも似た声が思念通話で漏らされた。しかし、なのは達はすぐさま聖に礼を言いつつ、一気にゆりかごの中に飛んでいった。

その姿を見送りながら聖は指定された座標へと向かった。

その斬撃を遠目で見ていたシグナムも驚嘆の声を漏らしていた。

「凄まじい攻撃だな……」

「はい。目測ですが、恐らくシグナムの飛龍一閃よりも力があると思っ
つです」

シグナムの横にいるリインも同じく驚きを孕んだ声で聖の斬撃を
分析した。するとシグナムは小さく笑った。

「私も負けてはられないか……急ぐぞリイン」

「ハイです!!」

シグナムとリインは共にゼストが向かっているであろう地上本部
へ急いだ。

フェイトもまたスカリエッティが潜んでいる洞窟の前に降り立った。洞窟の前にはヴェロツサとシャツハがフェイトを待っていた。

「アコース査察官、シスターシャツハ、お待たせしました」

「大丈夫です。では……ロツサー！」

「わかってるよ。とりあえず僕の無限ウンエントリヒ・ヤークトの猟犬で探索を試みてくれどここに奴等がいることは確かだ。覚悟はいいかい？」

「大丈夫です、聖やなのは達と約束しましたから」

フェイトの返答を聞いたヴェロツサは無ウンエントリヒ・ヤークト限の猟犬を自身の周りに展開させた。シャツハもまたいつもの修道服からバリアジャケツトを纏った。

3人は顔を見合わせると、洞窟の中へとは行っていった。

なのはとヴィータも無事にゆりかごの中に潜入することに成功したものの、二人は体が少し重くなったように感じた。

「いねって……」

「AMFだな……。しかもかなり濃いぞ、ガジェットとかシャレにならねえ」

なのはとヴィータは顔を見合わせながら苦々しい表情を浮かべるものの、そんなことを気にしてられないといった風にヴィータが切

り出した。

「なのは。アタシは駆動炉を潰してくる。いくら大昔に猛威を振るった戦艦でも駆動炉さえ潰しちまえばなんとかなんだろ」

グラーフアイゼンを肩に担ぎなのはに告げたヴィータに、なのはは「瞬間か言いたそうな顔をしたものの、静かになずくと、

「……わかった。お願いね、ヴィータちゃん。だけど無理しないで」

「……互いにな」

二人は背を向けあった状態で二方向に飛んだ。なのははヴィヴィオがいるであろう玉座の間へ、ヴィータは駆動炉を破壊しに向かった。

地上の旧市外ではエリオ、キャロとわかれたスバルとティアナがそれぞれの敵と対峙していた。

ティアナとスバルは最初二人で行動をしていたものの、ナンバーズたちによって分断されてしまったのだ。ティアナはポロポロになったビルの中で三人のナンバーズと交戦をしていた。

外にでようにも別のナンバーズの力なのかビル全体が結界のようなもので取り囲まれてしまっている。

……最悪な状況ね。あっちは三人こっちは一人。

瓦礫の影に隠れながらティアナは愛機であるクロスミラージユを

構え、大きく息をついた。

「……弱気になっちゃだめ。あの人にも言われた、どんなに危機的な状況になっても諦めるなって」

もう一度大きく深呼吸をしたティアナの目にははっきりとした覚悟の光と、闘志が渦巻いていた。

そのビルより離れること少しの道路上に二人の少女が対峙していた。

一人はスバルであるが、もう一人はギンガだ。しかし、ギンガにはいつもの様な快活な表情が見られない。まるで感情を奪われてしまったかのようだ。

「ギン姉……」

「……」

スバルの呼びかけにも全く顔を動かすことはせず、無表情のまま彼女はゆっくりと構えを取った。その行動にスバルは悲しげな表情をするものの、一瞬目を瞑ると覚悟を決めたように目を開け、ギンガと同じように構えを取る。

……決めたんだ絶対にギン姉を救いだすって。

「待っててギン姉。絶対に助け出してみせるから!!」

宣言したスバルはマツハキャリバーを駆り、ギンガとの戦闘にはいった。

そしてスバル、ティアナと離れたエリオとキャラも自分達が戦うべき相手と相対していた。

「ルーちゃん……」

キャラとエリオは黒い服を纏った召喚師の少女、ルーテシアと共にビルの屋根で対峙していた。するとルーテシアは右腕を前に突き出すと、

「……ガリユー」

言つと同時に彼女から黒い魔力の塊が溢れ、それが人型を形成していく。それは黒い鎧を身につけた人のようにも見えるが、人とは全く違う異質な存在、ルーテシアの召喚獣だ。

ガリユーはルーテシアを守護するように彼女の前に出る。それを見たエリオもまたキャラを守るようにストラダーを構え、ガリユーを見据える。

「ガリユー。君もルーを守るって心があるのなら、こんな戦いは無意味だつて教えてあげないとダメだよ！」

エリオはガリユーに呼びかけるが、ガリユーはそれは出来ないというように首を振り改めて構えをとる。

エリオもキャラもそれに一瞬悲痛な面持ちになるものの、互いにしっかりとしたまなざしで目の前にいる二人を見据える。

「僕たちは君達をなんとしても止めてみせる!!」

「そして絶対にその孤独から救い出してあげる!!」

二人の覚悟が決まり、エリオとガリユーは互いに駆け出し、戦闘を開始した。

聖はガジェットを切り裂きながら目的の座標へと降り立った。

「さて……いるんだろー！ ドゥーエ!!」

大声を張り上げながら周囲に言い放つと、木の影から不敵な笑みを漏らしながらナンバーズの二番、ドゥーエが現れた。

「来てくれたのね、嬉しいわあ」

「その様子じゃ地上本部での仕事は終了したみてえだな……」

「ええもちろん。簡単な仕事だったわ、だから次は貴方の番よエシエク。貴方を捕まえて私は貴方を昔の私好みの貴方に作りかえるわ」

狂気に満ちた表情で言うドゥーエに対し、聖は軽く舌打ちをしつつ、長くなった安綱の切先を突きつける。

「ハンッ！ やれるモンならやってみやがれ、テメエの戦闘向きじゃねえスキルでどうやって俺と戦うつもりだ？」

「そうねえ……確かに私のスキルは他の子達みたいに戦闘向きじゃないわ。……だけど、貴方の相手は『貴方』がしてくれるから気にしないで大丈夫よ」

ドゥーエの意味深な言葉を聴き、一瞬怪訝そつな顔をする聖だが、彼女は決して笑みを崩すことはなく、恍惚とした表情のまま指を鳴らした。すると、彼女の後ろの木陰に三人の人間がいる気配を聖は感じた。

ドゥーエの動向を警戒したまま聖は彼女の後ろに目を向けた。その瞬間、聖は目を見開き顔は蒼白に染まった。

「……まさかッ!？」

聖の驚愕の声に答えるようにドゥーエはその口をスカリエツティのように三日月形に歪めると、ドゥーエは笑いながら横にはけた。彼女の後ろから三人の青年が姿を現した。三人は同じ体型をしており、髪の色も一本一本全て同じだ。背も全て同じであり、同じバイザーをかけている。

何から何まで一緒な三人を目にし、聖はギリッと音がしそうなほど歯と歯をかみ締めた。安綱も目の前に広がる光景に気付いたのか、いらだたしげな声を上げた。

外道が……

しかし、ドゥーエはそれすらも面白いというように笑みを絶やさずに聖に告げた。

「言ったでしょう? 貴方の相手は貴方にしてもらって」

笑顔で言ったドゥーエに対し、聖は彼女を睨んだ。その瞳には確かな怒りと、殺意、そして憎悪がこめられていた。

そう、今現在聖が対峙しているのは、かつて殺し続けた己自身。

聖のクローン達であった。

それぞれの思いと、それぞれの覚悟が入り混じる中、最終決戦が開
始された。

覚醒

各々の戦いが始まってから数分、既に空に上がったゆりかごと、それを守護するように配置された大量のガジェット。それらを市街地に向かわせないために配属された多くの空戦魔導師達の姿が空に見受けられた。

その中には苦々しい顔をしたはやての姿があった。

……ゆりかごの速度からして完全に軌道上に上がるまではあと2時間近く。クロノくん達は間に合うと思っけど、問題はなのはちゃんとヴィータやな。

迫るガジェットを撃墜しつつ、ゆりかごの中に潜入したなのはとヴィータを案じた。しかし、その雑念を払うように首を振ったはやてはシュベルトクロイツを構えた。

……いや、余計な心配は捨てるんや。あの二人なら絶対間に合う。それに

はやてはフェイトが向かったスカリエッティのアジトと、聖が向かった方向を見ながら、

「……がんばってや、フェイトちゃん、聖くん」

小さく告げた後、目の前の敵を真っ直ぐと見据えた。

一方、旧市街の廃墟ではエリオとキャロがそれぞれ、ガリユーとルーテシアと対峙していた。二人のバリアジャケットは所々煤けており、激しい戦闘が行われたことを物語っていた。

「ルーちゃん、お願いだから、少しでいいからお話をさせて！ さっき貴女が言ってた貴女のお母さんも、レリック探しも私達……うっん、機動六課のみんなが手伝ってくれるから!!」

「ガリユー！ 君だって主人であるあの子にこれ以上苦しい思いをさせたくないんだろっ？ だったらもうこれ以上あの子を苦しませちゃダメだよ！ 今のあの子には君が助けにならなくちゃ！」

二人の呼びかけにガリユーは腕を下ろし、ルーテシアは困惑の表情を浮かべる。ルーテシアの心に二人の言葉が僅かだが届いたのだ。

だが、そのかすかな希望を断ち切るように甘ったるく、人を逆などするような声が辺りに響いた。

『あらあらあ？ ダメですよルーテシアお嬢様。戦いの最中に敵の言葉なんかには耳を貸しちゃ、いいですかあ？ 邪魔なモノが出てきたらぶっ殺しちゃえばいいんですよ。だってこれは戦争なんですから』

モニタの中の女性、クアットロは丁寧な口調の中にも暴力的な言葉を交えながら、ルーテシアに説いていく。しかし、ルーテシアはそれでもまだ悩んでいるのか、困惑の表情のままクアットロを見上げた。

「でも……クアットロ……」

『あーらら、悩んじゃってますねえ。まあそうですねえ、お嬢様の純真無垢な心にはそこにいるチビガキ共の言葉は毒ですか……。だったら……ポチッと』

彼女は笑みを浮かべながら自らの周りに展開されたピアノの鍵盤のようなモニタを操作した。それとほぼ同時に、ルーテシアの足元には薄緑色の陣、彼女の前方、そのほかのビルの上に召喚陣が展開された。

召喚陣からはルーテシアの召喚獣が召喚され、ルーテシアはフラフラとした状態で苦しげだ。ガリユーもこれに困惑しているのか、ルーテシアのほうを心配げに見つめている。

『それじゃあ。ルーお嬢様が迷わないようにして指しあげます。ドクターが仕込んでくれたコンシデレーションコンソールで、誰にも耳を貸さないとしても素敵な心をプレゼントです』

クアットロは加虐的な笑みを浮かべながら、端末を操作し、最後のキーを押し込んだ。

ルーテシアはそれによりさらに苦しげになるが、クアットロはその甘ったるい声をやめずに続けた。

『いいですかあお嬢様。目の前にいるのがお嬢様の敵です。全力でぶち殺さないとお母さんに会えませんよ』

そんな彼女の様子にエリオオが怒りのこもった目を向けるが、クアットロは気にも留めていない。

すると、ルーテシアがポツリと呟き始めた。

「……インゼクト、地雷皇、ガリユー……。こいつ等を殺して……」

「ルーちゃん……」

キャラロがルーテシアを呼ぶが、彼女は聞く耳を持たず、自らの召喚獣たちに声を張り上げて命じた。

「殺してえ!!」

その絶叫にガリユーは従い、触手のようなものを出した。キャラロの周りにもインゼクトが多数展開し、彼女を取り囲むが、その中でキャラロはルーテシアが涙を流しているのを見た。そして、彼女の瞳に悲しげな光が灯っているのを感じた。

そこから少し離れた道路にはスバルとギンガが互いを見据えていた。

スバルの方がダメージを受けているのか、エリオ達と同じようにバリアジャケットに汚れが目立っていた。

ギンガは冷徹なまなざしでスバルをじっと見ているが、その顔に感情は見られない。

「ギン姉……」

スバルが呟くものの、ギンガは容赦なく構えを取る。しかし、スバルもそれに負けじと構えを取る。

マスター。大丈夫ですか？

「うん、ありがとうマツハキャリバー。でも大丈夫。聖さんにも諦め

るなって言われてるから、絶対に諦めないよ」

そうですか。ですが、きつくなったら言うてください。私は貴女の相棒ですから

スバルは頷くと拳を構え、ギンガに迫る。

しかし、ギンガもそれにすぐさま反応するとスバルの拳を受け止め、衝撃を流した後、ブリッツキヤリバーを突き出した。

「くっ!？」

苦しげに反応したスバルだが、何とかシールドを張ることに成功した。だが、ギンガのブリッツキヤリバーをひくことはせず、シールドに食い込ませた。

その瞬間、ギンガの手首から前が回転し始めた。スカリエッツィの調節だろうか。回転したことにより、まるでドリルのような力も加わり、スバルのシールドは簡単に突き破られてしまった。

「ぐあっ!!」

スバルはその衝撃で大きく後ろに吹き飛ばされる。その隙を狙ったギンガがウィングロードを駆使し、彼女に蹴りを見舞いしようとするが、ギリギリのところスバルは反応し、自身もウィングロードを展開し間一髪その攻撃を避けた。

ギンガの攻撃から脱したスバルはウィングロードの上で反転し、ギンガに対し構えを取った。

……強い。多分、感情も抑えられてるからだと思うけど、さっきの

アレはまともに喰らったら絶対にダメだ。

頬を伝う汗を肩で拭いながらスバルは先ほどのことを分析した。

「でも……諦めるわけには行かない。どんなに強くたって隙はあるはず！」

スバルはもう一度、ギンガに向かって駆けた。

スカリエッティのアジトではフェイトが二人のナンバーズと戦闘を繰り返していた。トーレとセットだ。以前もこの二人と戦い、互角以上に渡り合ったフェイトだが、今回は違った。

理由は単純明快であり、ここはスカリエッティのアジトなのだ、言わば敵の腹の中と同じだ。

……AMFが重い。この二人を倒してスカリエッティのところまで早く辿り着かなくちゃいけないのに。だけど、ライオットは使えない、アレを使ったらもう後がなくなるし、肝心のスカリエッティのところまで辿り着けなくなる可能性もある。

フェイトがシューターを展開し、二人の動きを観察しながら悩んでいると、目の前にスカリエッティが投影されたモニターが表示された。

『やあ、ご機嫌如何かな？ フェイト・テスタロッサ執務官』

「スカリエッティ……」

憎々しげにつぶやくフェイトだが、スカリエッティはそれを気にした風もなく続ける。

『私の作品と戦っているFの遺産と竜召喚師も聞こえているかな？
あとはエシエクも聞こえているだろうっねえ』

くつくつと笑うスカリエッティの言葉からして、彼の声はエリオとキャロ、そして聖の方まで聞こえているのだろう。

『いやはや、我々の楽しい祭りの序章もついにクライマックスに近づいてきたよ』

「何が楽しい祭りだ！ 地上を混乱させ、多くの命をもてあそんだ重犯罪者が!!」

『重犯罪？ それは人造魔導師や戦闘機人のことかい？ それとも私が根幹を設計し、君の母君であるプレシア・テストロッサが確立させたプロジェクトFのことかい？ まあそのほかにあるとすれば……エシエクの実験のことかな？』

両手を挙げながらヤレヤレと言った様子で告げるスカリエッティをフェイトが睨むが、彼はさらに言葉を続ける。

『まったく、いつの時代も私のような革新的な技術者は周りからわかってもらえないものだから誤解を生んでしまっただろうっねえ』

「誤解……？ 人の命を弄んでいるのによくもそんなことを言える」

『怒らないでくれたまえよ、いいじゃないか私の手で本来価値がなかった「ミミ」のような命が、実験材料という貴重な役割になっ

たんだから。むしろこれは悪行と言つよりも善行だろう』

依然として笑みをなくさずに言うスカリエツティに、フェイトはバルディッシュの刀身に魔力を送り込んだ。

その影響でバルディッシュの刀身が巨大に変化した。フェイトはそれを高く掲げた。

「来るぞセツテ！」

トーレが身構えると同時にセツテも身構えた。しかし、スカリエツティがモニタの中で指を鳴らした。すると、地面に赤い陣が展開され、そこから赤い糸のようなものが伸び、フェイトの足と、バルディッシュを拘束した。

「くっ!? ーこれは……」

フェイトが苦悶に顔を歪ませる。しかし、それを嘲笑うかのように奥からスカリエツティが笑みを浮かべながらやって来た。

すると、バルディッシュの刀身が糸の締め付けにより粉々に粉碎された。それにフェイトが気を取られているとスカリエツティが手に装着したデバイスからシューターを放った。

「ぐわっ!?」

フェイトはそのまま地面に落下すると、その隙を突いたスカリエツティが糸でケージを形成し、フェイトを閉じ込めた。

「君のそのくっ!?とーは本当に母親譲りのようだねえ」

くつくつと笑うスカリエツティは心底楽しげだった。

「フェイト!!」

その様子をモニタで確認した聖は苦々しい顔をしながら、自らのクローンを放った攻撃を断ち切る。

「チィッ!」

「ほらほら、余所見なんてしている暇なんてないわよ?」

ドゥーエが聖の心を逆なでするように言葉を投げかけてくるが、聖はそれを無視し、向かってくる己自身と対峙する。

一人一人の攻撃はたいしたものではない、しかし、彼等の連携が厄介なのだ。一人が責めれば他二人がバインドや、シューターを使った隙を作ってくる。

それらを避けたり、バインドを断ち切っていれば大きな隙が出来る。その隙を一人が突いて来るのだ。一撃一撃はたいしたことがなくとも、聖の身体には確実にダメージが蓄積していった。

「クソツたれ……!」

聖様、このままではジリ貧です。一刻も早く倒さねば

「わかってるっ! だけど……!」

そう言った聖の目尻には涙が溜まっていた。

……この大馬鹿野郎が何今更ビビッてんだよ！ ガキの頃に散々殺してきたつてのに、今更罪悪感を感じてんじゃねえ!!

心の中で己を鼓舞するが、聖の身体はいつものように俊敏に動いていない。

先ほどから倒せる隙は確かにあった。しかし、聖はその手を止めてしまうのだ。同時に彼の脳裏には過去の凄惨な記憶が蘇る。

血に濡れた己の拳と、血の海に沈んでいる自分自身。

それらが今相對している自分自身を攻撃しようとするたびに、フラッシュバックするのだ。

聖様!!

「っ！ しまっ!?!」

安綱に呼びかけられ、雑念を振り払うものの、既に遅かった。

聖の眼前にまで迫ったクローンの一体が、彼の鳩尾を抉るように拳を叩き込み、聖は大きく後ろに吹き飛ばされた。

「ガハッ!!」

しかし、追撃は収まらず、聖の後ろに回りこんだ一体が彼を上を蹴り上げ、それを追うようにシューターを放った。

「な……めんなあ!!」

空中で態勢を立て直し、何とかシューターを掻き消すが、シューターの方に気を取られていたためか、またしても後ろに回りこまれた聖はそのまま、背中に強烈な踵落としを喰らい、聖は地面に叩きつけられた。

肺に貯蔵されていた酸素が一気に排出され、聖は一瞬呼吸が止まる。また、彼がたたきつけられた影響で、地面にはクレーターが出来ていた。

「ゲホッ！ ゲホッ、グッ!？」

数度の咳のあと、聖の口からは血が吐き出された。

それに苦悶の表情を浮かべながら聖は、安綱を地面に衝き立て、何とか身を起こした。

目の前には三人のクローン達が戦闘態勢を取っていた。しかし、ドゥーエが後ろから指を鳴らすと、彼等は構えを解き、背筋を伸ばした。

「どうエシエク、いい加減諦めはついたかしら？」

「ふざけんじゃ……ねえ。誰が、諦めるか……グッ!？ ゴホッ!？」

「そんな状態でまだ強かれるなんて……まあそんなところも好きなんだけれど。でも、いい加減飽きて来ちゃったからもうお終いにしましようか。リミッター解除」

ドゥーエが言うと、彼女の後ろにいたクローン達の装着しているバイザーの色が変化した。先ほどまで緑色に光っていたものが、赤く染

まったのだ。

「やりなさい。但し殺さない程度にね」

ドゥーエが命じた瞬間、先ほどまで以上の速度でクローン達が聖に迫った。しかし、彼等の動きに先ほどまでの連携は見られない。仲間にぶつかれることも承知の上での攻撃だ。

否、もはや彼等に仲間などと言う概念は存在していない。ただ目の前の障害物を排除するということしか感じられない。

尋常ではない殺気を浴びた聖は、後ろに後退し、間一髪初撃を避ける。だが、その後も追撃は続く。しかし、聖も負けじとそれを安綱を振るいいなして行く。

先ほどまでと格段に早さが上がっています。それに攻撃も重くなっています

「んなことあわかってる！ ドゥーエの野郎、何をしゃがった!？」

安綱と話しながらも聖は攻撃をいなし続ける。先ほどまでと違い、連携が取れていないためか一個一個の攻撃を避けるのはたやすくなってきた。しかし、まともに喰らえばかなりのダメージだろう。

恐らく、闘争本能のみを強化したのでしょう。余分な感情は全て排除し、ただ貴方を叩き潰すことのみ執着しています

「…………クソが。どこまで行ってもこいつ等は道具ってわけかよ」

スカリエッティに人間らしい感情などありません。油断すればこちらがやられてしまいます

防戦一方のまま聖はドンドンと追い込まれる。それに苦々しい顔を
するものの、連続攻撃のせいで攻める隙が見当たらない。

しかし、三人目の攻撃が止んだところでほんの一瞬、僅かに隙が生
まれた、聖はそれを見逃さなかった。

「悪いな……。今度は殺させてもらっぞ……」

低く言い放った聖はクローンの身体に安綱を突き刺した。

クローンの腹部から鮮血が舞う。

そして、安綱の刀身を血液が伝い、地面に落ちる。

普通であれば確実にこれで大抵の人物は痛みで動きを止めるだろ
う。

しかし、まだ終わりではなかった。クローンは腹に安綱が突き刺
さっているのにも関わらず、聖に攻撃を仕掛けてきたのだ。

「!?!」

聖はすぐさま安綱を引き抜き後ろに飛び退き、攻撃してきたクロー
ンを見据える。確かに彼の腹部には安綱につけられた風穴が開いて
いる。そこからは血がポタポタと流れ出し、傷の深さを表している。

「ああ、言い忘れたけど。その子たちの痛覚も全て排除してるから。
それに恐怖心もね」

聖の驚きに答えるようにドゥーエがクスクスと笑いながら言うが、

聖は彼女の方を睨みつける。

「どれだけ腐ってやがんだデメエらは!!」

「あーらあ？ 昔アレだけ自分を殺しておきながら全部私たちのせいにするのかしらあ？」

「黙れこの外道が!! 命をなんだと思ってやがる!!」

「命ねえ……別にいいじゃない。クローンでいくらでも生み出せるんだから」

狂気に満ちた彼女の言い分に聖はますます怒りを募らせていく。そして、血を流しながらも攻撃を続けるクローンと、残った二人の攻撃をかわす。

しかし、血を流してまで向かってくる敵に動揺が走ったのか、聖は回避運動が遅れた。

聖様!?

「チッ!？」

聖は咄嗟にシールドを張るが、そのシールドは容易に破られ三人分の拳が聖の身体に叩き込まれた。

「じゃあ……っ!？」

声にならないくぐもった声と、口から大量の血を流しながら聖はまたしても吹き飛ばされる。今度は近場にある岩山に激突し、体が岩に食い込んだ。

頭からも出血しているのか彼の顔面を血液が伝う。すると、クロールたちとドゥーエがやってきて岩に食い込んでいる彼を見上げた。

「少しは頭が冷えたかしら？ もついい加減諦めて戻ってきなさいな」

ドゥーエは言うものの、今の聖にその声は全く聞こえていなかった。

あき……らめる？ こんなところで。まだヴィヴィオも助け出していないのに……？

心の中で自らに問いかけながら聖は虚ろな目を自らの目の前で話すドゥーエに向ける。しかし、彼女はそれに気付かずにいる。

こいつ等を捕まえるんじゃないのか？ そして、ヴィヴィオを取り戻すんじゃないのか？

ドクン、ドクンと心臓の鼓動が異様なまでに大きく聞こえる。同時に体がふつつつと熱くなる。

バカヤロウ。新人共にも言ったじゃねえか。諦めるなつて、だったらこれしきのこと諦めるわけにはいかねえだろうよ。

心の中で自分を奮い立たせ、聖はゆっくりと口を開く。

「……………つな、……………ード。リ……………ース」

途切れ途切れだったが辛うじてドゥーエにも聞こえたのか、彼女は聖を再度見上げる。すると、聖は先ほどまで虚ろだった瞳に光をと

し、高らかに告げた。

「安綱!! モード・リリース!!!」

聖が言うと、安綱が待機状態に戻った。そして、聖も自ら魔力を放出し、岩の拘束から脱する。

「あらあ? 戦闘状態を解いたってことは……いよいよ諦めたのかしら?」

「ハッ!! 誰が諦めるかよ! 言ったら、テメエらを捕まえるってなあ!! やるぞ、安綱!!」

わかりました

彼が命じると、安綱もそれに返答した。

その反応にドゥーエとクローン達は身構えた。

「……安綱、封印解除!! 真名解放!!」

真名解放、了解

それとほぼ同時に彼の体から白銀の魔力があふれ出す。するとドゥーエはクローン達の後ろに下がり、クローン達はそれを守るように壁を作った。

だが聖はそれでもお構いなしに叫んだ。

「安綱改め『クラウン』!! セットアップ!!!」

その瞬間、体から溢れていた白銀の魔力が七色に輝き始めた。そして、聖の身体にも異変がおきる。

黒だった髪の色が塗料がはがれるようにはがれ、ヴィヴィオと同じ色の髪が覗いた。そして、片方の瞳にひびが入ったかと思うと、その下から緑色の瞳が現れた。

その姿はまさにヴィヴィオと瓜二つ。

しかし、彼の表情は苦しげだ。

……痛いな。だけど……こんなもんで音を上げるわけにもいかねえんだよ!!!!

痛みを払うように聖は己を鼓舞すると、詠唱を始めた。

我が腕に宿るは聖なる力

我が胸に宿るは王の魂

不退の力よ今こそ形となりて現出せよ

「じっおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!」

体中に走る激痛を無視しながら聖は全ての詠唱を完遂する。

そして、彼の姿は完全に七色の魔力に包み込まれた。

光の中で聖の身体にバリアジャケットが装着されていた。

素肌を守るように纏われた黒い内着。

腕には鈍い光を放つ黒い色のガントレット。

胸には騎士を思わせる黒い鎧。

脚には同じく黒いグリーヴ。

それらを覆い隠すように纏われる肩から羽織られる白いマント。そして、それと同じように腰から伸びる同じく白いマント。

聖は右の拳を己の顔の前に掲げた後それを一気に横に振りぬいた。

その衝撃で先ほどまで張られていた七色の魔力が四散し、聖の姿があらわになった。

ドゥーエは聖の姿を確認すると驚嘆とも歓喜とも取れるような表情をした。

「ああっ!! まさかそこまで進化しているなんて、貴方は本当に最高ねエシエク!!」

自分の身体を抱き、僅かに頬を上気させながら言っつドゥーエに、聖は別の色の双眸で彼女を真っ直ぐと見据えた。

「さて、仕切りなおしと行くか」

決戦 前

聖が聖王の力を解放する少し前、なのははレイジングハートのストライクフレームを展開しながら、ゆりかこの船内を突き進んでいた。途中何体ものガジェットが道を塞ごうとなのはを妨害するが、なのははそれをお構いなしに突き進む。

レイジングハートの先端部に半実体化している魔力刃は魔力密度がかなり濃いためか、なのは特有の桃色の光ではなく、紅に近い色に染まっている。

ストライクフレームを発動した状態で、ガジェットの間の僅かな隙間を一直線に駆け抜けるなのはの近くにいたガジェット達は、なのはが発動している『ACSドライバー』の影響なのか、次々に破壊、粉砕されていく。

なのはが発動しているこの『ACS』は『加速突撃システム』という意味であり、また、『ドライバー』というのは『突撃突破技術』の一般名称でもある。

魔法とすれば単純であり、防御を固め突撃。敵陣を突破するというものであるが、なのはの重装甲かつ、加速度。そして、ストライクフレームによる攻性フィールド生成能力も相まってか、本来の突破だけではなく、破壊しながら突き進むという凄まじい離れ業を可能としている。

そして、なのはの通り過ぎた後ろには独特の桃色の魔力光が残されていく。

……外はどうなってるのかな？ 聖くんやスカリエツティのアジ

トへ踏み込んだフェイトちゃんや、地上で戦ってるスバル達も気になる……。

心の中でそれぞれの顔を思い浮かべながら、なのはは歯噛みした。しかし、すぐに顔を横に振ると大きく息をついた。

「……大丈夫。みんなならきつと勝つ。私も今は自分がやるべきことをしなくちゃ」

皆を信じ、自らのなすべきことをもう一度再確認するように呟いたのはは、強い光をその双眸にともし、ヴィヴィオの元へと急いだ。

なのはが突き進む道の途中には、イノーマスカノンを構えるナンバーズの十番。ディエチが待ち構えていた。

まだなのはの姿は確認できていないが、既に補足はしており、展開してあるモニタはなのはの現在地を知らせていた。

しかし、ディエチは撃っていいものかと顔を曇らせていた。

現在、玉座の間にはクアットロとヴィヴィオがいる。クアットロの言われたとおりなのはを撃墜するべくやって来たはいいものの、どうしても玉座に座らせられているヴィヴィオの事が気になって仕方がないのだ。

うつごとのように「ママ」「や」「パパ」といった言葉を繰り返すヴィヴィオは見るに耐えないほど痛々しかった。

「私が討つとしてるのは……あの子のお母さん……なんだよね」

俯きながら呟くが、そこへクアットロが見計らったかのように通信を入れてきた。

『はあい、デイエチちゃん？ 準備はいいー？ そろそろ、陛下を取り戻そうなんて考える馬鹿な女がそこに来るからあ。容赦なくぶっ放してぶっ殺しちゃってね』

「……了解」

笑みを浮かべながら言うクアットロだが、今のデイエチにはその笑みが恐ろしくて仕方がなかった。

元からデイエチはあまりクアットロのことを好いてはいない。任務で一緒に行動することは多かったものの、あの何を考えているのかわからない言動や態度が気味が悪くてしょうがないのだ。

デイエチは通信をこちらから断ち切り、イノームスカノンを構えなおす。既に魔力の充填は完了しており、いつでも打ち出せる状態だ。だが、デイエチはまだ迷っていた。

……私達がやっていることは本当に正しいことなのかな？ たくさん人を傷つけて……あんな小さな女の子まで利用して……。

苦悩するデイエチの目尻には僅かに涙が溜まっていた。そして、なのはが現れた。デイエチもそれを迎撃しようと砲門を向けるが、引き鉄を引くことが出来ない。

すると、デイエチは構えを崩し、イノームスカノンに充填されていた魔力を霧散させると、それをなのはの方に放った。

ガランと音を立てて床に転がるそれをデイエチは見つめた後、なのはに両腕を差し出した。なのははその意図を理解したのか、彼女の手とカノンにバインドを施した。

デイエチはその場に膝をつくと、俯いたままなのはに対し、ポツリと呟くように告げた。

「……あの子ならここを真っ直ぐ行った玉座の間にいるよ。私がいえたことじゃないと思うけど……あの子を助けてあげて」

デイエチの言葉になのは頷くと彼女の肩に手を置き、

「ありがとう」

と告げ、その場から去って行った。

なのはが消え、デイエチは壁際に膝を抱えるようにして座った。

「ゴメン……みんな。だけども、私に撃てないよ……」

他の姉妹達へ謝罪しながらデイエチは俯むいた。

「あーらら。まったくデイエチちゃんもお嬢様も使えないんだから。まあいいわ……陛下あ？ 聞こえてますっ？ 貴女はあの子たちみたいにならないでくださいねえ」

デイエチの姿を確認したクアットロは呆れた表情をしつつも、隣に座るヴィヴィオに甘ったるい声で告げる。

しかし、ヴィヴィオはそれに頷くことはせず、ただ小さく「ママ……
パパ……」とだけ呟いた。

時を同じくして、ヴィータは駆動炉への道を進んでいた。何度かガ
ジェットが出てきたが、ヴィータはそれらを全て軽々と撃墜してい
く。

しかし、なにぶん数が多く、さらには高密度のAMFが影響してか、
彼女は少しばかり息が上がっていた。

「ああくそー！ どんだけいんだよ!!」

愚痴をこぼしながらも近寄るガジェットをなぎ倒すヴィータは、前
方に広がる長い通路を見据える。

通路の先はぼんやりと赤い光を帯びており、その先に何かがあるこ
とは明白であった。

……多分あの先にあるのが駆動炉であると考えて間違いないよな。
駆動炉をぶっ潰しやゆりかごは止まるだろ。

あらかたのガジェットを叩き潰したヴィータはそのまま歩を進め
る。

しかし、途中妙なことに気付いた。

先ほどまでアレだけ大挙として押し寄せていたガジェットの猛攻
が止んでいるのだ。その妙な空気に違和感を覚え、辺りを見回してみ

るが、特に変わったことは見られない。

首を傾げながらもヴィータは再び歩み始めようと、第一歩を踏み出した。

その瞬間、凄まじい殺気が自身のすぐ後ろに現れたのをヴィータは感じた。すぐさま回避行動をとり、その場から飛び退くが、敵の刃は彼女の腕を掠め、刃がかすったところからは出血が見られた。

ヴィータは敵の姿を確認しようと後ろを見た。

瞬間、彼女の顔が怒りのそれに変わった。

彼女が目にしたのは、四足で一つ目のガジェットに似た機械だった。しかし、そんなことよりも彼女は十年前のことを思い出していた。

なのは達が本局に着任してから間もない頃、なのはが正体不明の敵に撃墜され、大怪我を負った事件のことだ。

目の前の敵はあの時にヴィータが叩き潰した敵と同じ形をしていたのだ。

すると、ヴィータはギリツと歯をかみ締めると、怒りを露にしながら叫んだ。

「テメエはあああああああああ!!!」

その凄まじい速度の攻撃にガジェットのよような機械は反応することが出来なかったのか、あっという間に潰されてしまった。

ポロポロの状態の敵を睨みつけながら興奮した様子でいるヴィー
タだが、彼女の視界にまたしても嫌な影が移りこんだ。

先ほどまでガランとしていた通路の先に今ヴィータが破壊したも
のと同じ形状の機械が大量に展開し、こちらに押し寄せていたのだ。

ヴィータはそちらを睨みつけると、グラーフアイゼンからカート
リッジを吐き出させた。

「……………いくらでもかかって来いよ……………。駆動炉ぶっ壊す前に、まずテ
メエらから叩き潰してやる!!! 行くぞアイゼン!!!」

了解！

命じられたグラーフアイゼンも声高々にそれに答えた。

ヴィータはグラーフアイゼンを担ぎ、敵の群れの中に入った
いった。

旧市街、一つの廃ビルではティアナが三人のナンバーズ、ウェンデ、
ノーヴェ、ディードとの戦闘を繰り広げていた。

しかし、優勢とは言えずかなりの劣勢の追い込まれていた。脱出し
ようにもビル全体を敵の能力である結界が邪魔をして、脱出すること
はかなわない。現在は瓦礫の影に隠れシューティングシルエツトで
凌いでいるが見つかるとも時間の問題だろう。

右足からは血が流れており、現状の苦しさを物語っているようだった。

すると、クロスミラージユが警告を発した。

発見されました。真っ直ぐとこちらへ向かってきます

「シューターとシルエットは制御。現状維持……！」

多くの幻影を出しているためか、体力の消費がかなりのものであるのか、ティアナは息も絶え絶えだ。彼女は立ち上がると魔法陣を解いた。

……カートリッジも魔力もあと少し。右足も潰されている……。

「……ホント、最悪な状況……」

悔しげに呟いたティアナはクロスミラージユを自身の顔の横に持ってくる。

「……実を言えばさ、結構前から気付いていたんだ。私は隊長達みたいに何でもできる万能型じゃないってことは……。だけどさ……絶対諦めるわけにはいかないよね」

ティアナがそこまで言った所で天井を貫き、砂煙の中からディードとノーヴェが現れた。

最初に攻撃を仕掛けてきたのはディードだ。彼女はツインブレードを振りかぶり、ティアナに斬りかかる。

だが、ティアナも負けておらずクロスミラージユをダガーモードに

した状態でそれを受け止めていた。しかし、ティアナはデイドの後ろからノーヴェが来るのを見た。

「っおおおおおっ!!」

雄たけびを上げ、回転しながらティアナに蹴りが放たれた。

その場にまたしても砂煙が舞い上がり、皆の視界を奪う。

視界が晴れると、段々とそれぞれの顔が露になってきた。ウエンデイはティアナが離脱したときを見計らいシューターを展開させていた。デイドは落ち着いた様子でブレードを構えなおし、ノーヴェは一人、苦い表情を浮かべていた。

その理由は彼女の足に装備されている、ジェットエッジがティアナによって損傷させられたのだ。

一方ティアナはと言うと、クロスミラーシュを両方ともダガーモードにし二つのシューターを展開させている。

その様子に三人はじりじりとゆっくり距離を詰め始める。三人は互いに距離を詰めながら思念通話を送る。

(偽者じゃなさそうっスね)

(ああ。本物だよ)

(慎重に行きましょう。一気に二人で畳み掛ければいけます)

通話を送りあいながら、三人は目配せをする。

ティアナはダガーモード状態のクロスミラージユを構えながら三人のポジジョン取りを確認していた。

……やっぱり、最初と同じ陣形。この三人の連携は確かに厄介だけれど、鉄壁じゃない。一つだけ穴がある。

呼吸を落ち着けながらティアナは確信した。

……この連携の初撃を防ぐことが出来れば、勝機はある。

にじり寄る三人を睨みながら、ティアナは三人の初動に目を凝らした。

地上本部周辺の空域ではシグナムとゼストがぶつかり合っていた。

二人は互いにユニゾンをしており、シグナムはピンク色の髪から薄い紫色の髪に変化していた。ゼストもまたアギトとユニゾンした影響か髪の色が金色になっていた。

数回ぶつかり合った後、二人は対峙した。そしてシグナムがゼストに問う。

「ゼスト殿。貴方に聞きたい事があります」

「なんだ？」

「地上本部を目指すのは、レジアス中将に会うためですか？」

「……どうだろうな。場合によっては殺してしまうかもしれない」

低い声音のままシグナムの問いに答えるゼストの瞳は悲しげだった。

「嘘はやめてください。貴方はレジアス中将を殺すつもりなどないでしょう」

「フッ……。お見通しと言っわけか。しかし、だからと言って道を開けてくれるわけでもないのだらう?」

小さく笑うゼストに対し、シグナムは無言のまま頷いた。するとゼストは、自身のデバイスを構えなおしシグナムに言い放った。

「では、力で押し通らせてもらおうとしよう! すまんがアギト、もう少しだけお前の力を貸してもらおうぞ」

(ア、アタシはいいけどよ、旦那の身体は平気なのかよ!?)

「心配はいらん。その様な柔な鍛え方はしていない」

アギトの心配を何処吹く風と言ったようにゼストは冷静に答えた。

その様子を確認したシグナムもユニゾンしているラインに話しかける。

「あちらも本気で来るな。覚悟はいいか? リイン」

(ハイです! なんとかしてもあの人たちを止めないといけませんから、がんばります!)

「その意気だ。行くぞ！」

シグナムはレヴァンティンを構え、ゼストへと斬りかかる。ゼストもまたそれに反応し、デバイスを構えた。

皆が戦闘を行っている中、ヴァイスは一人病室で戦闘が繰り広げられている空を見上げた。

傷は完治しているというわけではないが、歩くことは出来る。先ほど、妹のラグナがヴァイスの元を訪れていた。

ラグナの左目の視力は数年前、ヴァイスがその手によって奪ってしまったのだ。ヴァイスが故意にラグナの目を狙ったわけではなく、彼の失敗が結果としてそれを生んでしまったのだ。

ヴァイスが起こした失敗とは、単純に言ってしまえば狙撃ミスだ。ラグナを人質に取った立て籠もり犯の腕を狙ったものがほんの少しずれてしまい、ラグナの左目に直撃してしまったのだ。

通常、狙撃手や射撃手をはじめとする魔力弾の使い手たちは、状況に合わせ魔力弾の設定をする。もっとも単純な物理攻撃での設定や、物理破壊を伴わず、生体のみにはショックを与える非殺傷などのスタン設定など、種類は様々であるが、その時ヴァイスが狙撃したのはスタン弾だった。

しかし、たとえスタン弾と言っても、高速狙撃であるためその弾は硬く鋭いものである。それがまだ幼いラグナの瞳の眼球内部の組織を破壊してしまい、ラグナは視力を失ったのだ。

以来、ヴァイスは己の失敗を責めるようになった。当たったのが目でさえなければ、自分の非殺傷設定の魔力弾の生成能力がもつと高ければ、ごく軽い怪我で済んだかもしれない。他にも、狙ったのが腕ではなく他の部位だったならば、タイミングを少しだけずらしてれば。など、いくつもの要因が彼を自責の念に追い込んでいった。

人前では明るく振舞っていた彼も、心の奥では、かなりの精神的ダメージを負っていたのだ。

それがあの燃え盛る機動六課の隊舎で出会った少女、ルーテシアを撃てなかった理由でもあるのだ。

……情けねえ話だまったくよお。

悔しげに歯噛みをするヴァイスはザフィーラが出て行った扉を見つめた。

……旦那はあんな体でもやるべきことがあるって出て行った。じゃあ、俺のやるべきことはなんだ？　……ここでうじうじ縮こまっているのか？　……いや、違う！

ついに決心がついたのかヴァイスはテーブルの上に置いてある愛機、ストームレイダーを掴むと病室を後にした。

決戦 中

ドゥーエと自らのクローンと向き合いながら聖は体の感覚を確かめるように、掌を握ったり、開いたりしている。

……よし、同調はいい感じた。問題は、俺の体が持つかどうか。

自らの体の限界を確認しつつも、聖はドゥーエを真っ直ぐと見据える。彼女は相変わらず笑みを絶やしておらず、その笑みはもはや恐怖すら覚える。

「それにしても……まさか聖王の魔力を使えるようになっていたなんて……。一体どんな手品を使ったのかしら？」

「簡単な話だ。確かに俺は聖王としては完全な失敗作だ。けどな、もともと聖王の魔力、聖王のリンカーコアは存在してたんだ」

「それはそうだけれど、そのリンカーコアは使い物にならないほどに小さかった気がするんだけど？ ……まさか貴方」

「その辺はやっぱり察しがいいな。そうだ、俺は元々あった俺のリンカーコアから少しずつ、聖王のリンカーコアに魔力を与えていたんだ。聖王のリンカーコアには封印を施してクラウンに持っていてもらってな。そして、クラウンの真名を解放することによって聖王の力が解放され、この二つを融合させ、俺は聖王の力を使えるようになってわけた」

ドゥーエから一瞬たりとも目を離さずに告げた聖だが、ドゥーエはただただ驚いていた。

……まさか一つのリンカーコアからもう一つのリンカーコアに魔力を与え続けるなんて。

驚いてはいるものの、彼女は聖の成長に頬を綻ばせてもいた。

すると、聖はドゥーエから視線を外し、目の前にいる三人のクロールたちに目を向ける。その中の一人、先ほど安綱によって腹部に風穴を開けられた一人が、頬に汗を滲ませていた。

感情はないといっても、疲労や体の不調は現れるのだろう。腹部からは血が止め処なく溢れており、それが脚を伝って地面に落ち、その場に血溜りを作っている。

それに対し、聖が唇を噛むとドゥーエが思い出したというように告げた。

「やっぱりその子はもうダメね。まあエシエクの紛い物だし、それに今日だけの命だから死のうが構わないんだけど……戦力が減るのは残念ねえ」

聖に対する挑発。と、取っていいのだろう。彼女はわざと聖に聞こえるように言い、聖の同様に誘っているのだろう。

しかし、聖はそれに小さく笑みをこぼすと、

「……そうかよ。だったら……せめて苦しまないように殺してやらなくちゃな……」

と、冷徹に告げる。ドゥーエはその声に気圧され一歩後ろに退いた。

だが、聖はそれに目もくれず、目の前にいるクローンの内の一人に肉薄すると、彼の左胸に貫手を放つ。

一切の容赦なく放たれたそれは、避ける暇もなくクローンの左胸に突き刺さった。一瞬クローンがその身体を震わせたが、やがて動きを止めた。

胸から手を引き抜きながら彼は自らのクローンに告げた。

「……許してくれとは言わない。だけど、せめて安らかに逝ってくれ」

聖の目から一筋の涙が流れ落ちた。

それでも、聖は他の二人に向き直ると、その二人を見据える。

「行くぞ……」

腕に魔力を集めた聖の下に魔法陣が現れる。それは今までのようなミッド式の魔法陣ではなく、はやてやシグナム達と同じ、古代ベルカ式の魔法陣だった。

魔法陣を展開したとほぼ同時に聖は二人に向かって駆ける。その速さはかなりのものであったが、一人はそれにギリギリ反応すると聖の攻撃を間髪避ける。

しかし、聖王とほぼ同等の力を得た聖にとってそんなことは想定内の範囲内であった。彼は腕に溜めた魔力を撃ちだした。

標的に向かって真っ直ぐに飛び、光の尾を引いて飛んでいく様はなのはのデイベインバスターを彷彿とさせる。

砲撃は一人のクローンの鳩尾に直撃し、一人を大きく吹き飛ばした。だが、聖はそれで終わらせることはせず、吹き飛ばされたクローンを追尾する。

そして、クローンとの距離を一気に詰めた聖は先ほどと同じように、右胸に向けて貫手を放つ。

肉を抉り、骨を砕いた様子を鮮明に腕に感じながらも、聖の腕は手加減をせずに心臓を貫いた。

傷口から鮮血が散り、聖の顔、身体を濡らすが聖は腕を抜き取ると、その場にクローンを寝かせた。

「……眠れ」

すると、聖の隙を狙ってかもう一人のクローンが聖の後ろから彼に對し鋭い一撃を放った。

同時に血が飛び散る。

が、それは聖の血ではなく、クローンの血だった。

放たれた攻撃を身をねじるようにして避けた聖は、すぐさま身体を反転させクローンの胸に貫手を突き刺したのだ。

腕を引き抜くとクローンは膝をガクツと落とし、その場にうつ伏せに倒れかけるが、聖はそれを抱きとめ先ほどと同じように仰向けに寝かせた。

自らのクローン達の亡骸を見つめていると、木々の陰からドゥーエが軽めの拍手をしながら彼に告げた。

「凄いわねえ。さっきまであれだけ劣勢だったのにそれをあつという間に覆すなんて……。流石は聖王の力というべきかしら？」

「……………」

「あらら、だんまり？ でも……変わったかと思っただけど大して変わってないみたいね。殺すことに躊躇もなかったし」

「そうだな……。確かに本質的には何も変わってないかもな。けどよ、もしここで俺が捕まったら俺は今まで俺が殺した俺達にどう顔向けをすりゃあいい？ 結局スカリエッティには負けて、大切に思った仲間を救えませんでしたって言えばいいのか？ 残念ながら俺にそんな風に諦めることはできないよ」

小さく笑いながら告げる聖に対し、ドゥーエは面白くなさげに溜息をついた。

戦力がなくなつた今、貴女に逃げ道はありませんよドゥーエ。諦めて投降なさい

「あら、言ってくれるじゃないクラウン。欠陥品のくせして」

なんとでもいいなさい。しかし、貴女はもう終わりです。もう一度だけ言います。投降しなさい

クラウンが言うも、ドゥーエはクスツと笑う。それに聖は身体を低くして構えを取った。

「そうねえ……。でも、流石におめおめとつかまるわけには行かないから。逃げさせてもらつわ。またね、エシェク」

彼女が言うと、ドゥーエの姿がその場から消え、彼女がいたところには小さな機械が落ちていた。

投影装置……。してやれられましたね

「ああ。でも、にがさねえ!!」

聖は言うと、魔法陣を展開し魔力が出る限り、放出し続けた。そしてある一定の距離まで伸ばした聖はニヤリと笑う。

「見つけた。ここから大して離れてねえな」

聖は飛び上がりドゥーエを補足した場所へ向かう。その速さたるや凄まじいものであり、フェイトであっても追いつくことが至難の業であることが伺える速度だ。

そして、聖はドゥーエの前に降り立った。

「ドゥーエ!! もう逃げ場はない! お前はここで捕まえる!!」

しっかりとした声音でドゥーエに言い放つ。しかし、ドゥーエは声高らかに笑った。聖はそれを警戒するが、ドゥーエが指を打ち鳴らした瞬間、聖の身体に痺れる様な感覚が走った。

「くっくく」

「かかったわねエシエク。私が何の準備もなしに只逃げると思った? 残念、全てはここで貴方を捕まえるためよ。それはドクターが開発したプラズマフィールド。どんな相手であっても確実に動きをとめることができる代物よ」

言いながらドゥーエは聖に近寄る。聖の方はと言うと、苦しいのか顔を苦悶に歪ませる。

「これでお終いな、エシエク。安心しなさいな。記憶を消したら前みたいにかわがってあげるから」

妖艶に微笑んだまま聖に手を伸ばすドゥーエ。

しかし、聖はそこで苦悶に歪ませていた顔を綻ばせた。

それに気付いたドゥーエは彼から距離をとるものの、先ほどまで聖がいた場所に彼がいないことに気付いた。だが、それは探さずともすぐに見つかった。否、見つかったではなく聞こえたの方が正しい。

「お終いなのはテメエだよ!!」

すぐ背後から聞こえた聖の声に、ドゥーエは振り向こうとするものの、次の瞬間、彼女の首筋に衝撃が走った。

聖が手刀を放ったのだ。

それをドゥーエも認識できたものの、体の筋肉が全て眠ってしまったかのように動かず、彼女はそのままうつ伏せに倒れ付した。

同時に、手と足を拘束される感覚を彼女は感じた。聖がバインドを施したのだ。

「五重にバインドを仕掛けた。いくらテメエでも、これは解けねえだろ」

頭上から聞こえてくる聖の言葉にドゥーエは僅かに笑みをこぼした。聖はそれに気付いておらず、少し疲れた様子を見せながら息が上がっていた。

……本当に、強くなったのね……エシエク。ドクターには悪いけれど……少しだけ嬉しくなっちゃった。

笑みを見せるドゥーエだが、それは今までのような何か含みがある笑みではなく、心のそこから微笑んでいるようだった。やがて、意識が遠のいたドゥーエはそのまま意識を手放した。

ドゥーエが意識を失ったのを確認した聖は、その場に四つん這いになった。彼の顔には大粒の汗が滲んでいた。

さらに、一瞬苦しげな顔を見せたかと思うと、聖は血反吐を吐いてしまった。

聖の身体は聖王の力を使うには適しておらず、使おうとする時点で身体に激痛が走り、さらにはこのように吐血もしてしまうのだ。

よって、聖王の力は聖の身体には毒であり、使ってはならないものなのだ。

「ゲホ！　ゴホッ！！……やっぱり、聖王の力はやばかったか……」

聖様、このままでは貴方の体が持ちません。すぐに力の解除を！

「ダメだ……。まだ残ってる」

クラウンの提案に聖は膝を震わせながら立ち上がると、空に浮かぶ巨大な戦艦。聖王のゆりかごを睨んだ。

するとその時、聖の頭上にへりの影が現れた。そこにあっただのは、六課の出撃の際見慣れた深い緑色のへりだった。

へりはそのまま地上に着陸した。

「聖！ 大丈夫かお前!？」

へりから降りてきたのはヴァイスだった。聖は僅かに笑うと、ヴァイスに答えた。

「ああ。なんとかな。それより、お前も大丈夫なのかよヴァイス」

「たいした怪我じゃねえよあんなもん。それより、コイツが?」

「ナンバーズの二番、ドゥーエだ。……ヴァイス、俺はこれからあの聖王のゆりかごに乗り込む。コイツの護送を頼めるか?」

聖が言つと、ヴァイスは快く頷き、

「まかせとけ。これぐらいならおやすい御用だ。……けどよ聖、あんまし無理はすんなよ? なのはさん達が心配なのはわかるけどな」

「ああ。無理はしねえよ。……ヴァイス、ティアナ達のことも頼んだ」

「おうよ! 新人共もきっちり拾ってきてやるから、お前は安心して嬢ちゃんを取り戻して来い!!」

聖は頷くと、ゆりかごへ向けて飛び立った。

……待ってるよ。ヴィヴィオ!!

旧市外ではエリオとガリユー、ルーテシアとキャロの戦闘が激しさを増していた。

ルーテシアは究極召喚を行使し、自身が所持している最強の召喚獣、白天王を召喚しており、キャロもまた自らの究極召喚獣、ヴォルテールを召喚していた。

二体の巨大な召喚獣達は互いにその巨体をぶつかり合わせながら戦っていく。衝撃が対峙する二人の下にまで伝わるが、ルーテシアとキャロは向かい合っていた。

「ルーちゃん！ 目を覚まして!! これ以上やったら貴女が!」

クアットロの介入があつてからもキャロは諦めずにルーテシアに呼びかけていた。しかし、クアットロによって自我を操られてしまったルーテシアはそれに聞く耳を持つてくれなかった。

だが、彼女の瞳からは涙が溢れ出ており、瞳の奥はとても悲しげであつた。

ガリユーと睨みあうエリオは今のガリユーの状態に目を覆いたくなっていた。なぜならば、ガリユーの腕からは鋭い剣が突き出ており、その剣には真っ赤な血がついていた。

四つの瞳からも血の涙が溢れ出し、彼自身も相当辛いのだということが伝わってきた。

すると、キャロからエリオに対して念話が送られた。

(エリオ君)

(うん、わかってる)

エリオはキャロの言葉に頷くと、ストラダーダからカートリッジを吐き出させた。

「行くよ、ガリユー！　これで君を止めてみせる!!」

言ったと同時に、エリオの足元に魔法陣が展開されストラダーダから魔力の放出が始まった。魔力が放出されたことにより、ストラダーダには推進力が追加され、圧倒的な速さでガリユーへと詰め寄った。

「はあああああああっ!!!」

咆哮を上げガリユーにストラダーダを叩き付けるエリオだが、ガリユーもそれを冷静に受け止める。

しかし、建物が老朽化しているためか、その衝撃で屋上の床が砕け落ちた。

瞬間、ガリユーに隙が出来たのをエリオを見逃さず、彼はもう一度ストラダーダのカートリッジをロードした。

「聖さん！　教えてもらった技を使わせてもらいます!!」

叫んだエリオはストラダーダを構えその全身に雷光を纏った。その影響か袖が肩まで吹き飛ぶが、エリオはお構いなしに雷光を纏う。

「白雲流!! 幻瞬間撃!!!!」

本来であれば平地で使い、相手に突きを放つこの技だが、今は落下中でありエリオの全身には雷光が纏われ、さらにはストラーダによる加速もついているため、通常の技とは比べ物にならないほどの突進力と破壊力が生まれていた。

「でやああああああああっ!!!!」

雄たけびを上げながらガリューに突撃するエリオに対し、ガリューは空中であるためなす術がなく、エリオの一撃をモロに喰らった。

そのままガリューは地面に落ち意識を失った。エリオは肩で息をしながらその姿を見つめるが、彼の周りには放出し切れなかった雷光がバチバチと瞬いていた。

エリオがガリューとの戦闘を終えたとき、キャロもまたルーテシアとの戦いを終わらせようとしていた。

頭上ではフリードの放ったブラストフレアと、ルーテシアの二体の地雷王の放った雷撃がぶつかり合っている。

別の場所でも白天王とヴォルテールが互いの砲撃をぶつけ合っている。

「ルーちゃん……」

自らの召喚獣たちがぶつかり合う中、二人も負けじと魔力を送り続ける。しかし、その時ルーテシアのデバイスに亀裂が生じた。

その好機を見逃さず、キャロはもてる魔力を限界まで引き出し最後

の一押しを仕掛けた。それにより、ヴォルテールは白天王に競り勝ち。フリードも地雷王に打ち勝った。

だが、競り負けたルーテシアは仰向けに倒れ、気を失ってしまった。

「ルーちゃん!!」

キャロが駆け寄り、ルーテシアを抱きあげるものの、まだコンシデレーションコンソールの影響が出ているのか、ルーテシアは苦しみだしてしまった。

さらに、主であるルーテシアが気を失ってしまったためか、召喚獣たちが混乱を始めてしまったのだ。

「このままここにいたら危ない……フリード!!」

キャロが呼ぶと、フリードは咆哮をしキャロとルーテシアを背に乗せた。途中、エリオも乗せ三人は召喚獣たちから距離を置いた。

「キャロ、ルーの召喚獣達は……」

「うん。ルーちゃんの状態が不安定になってるのもそうだけど、主からの信号が送られなくなって凄く混乱してる」

「じゃあ何とか止めないと……」

「白天王の方はヴォルテールがとどめてくれるから、エリオ君は地雷王の攻撃を止めて。私とフリードもサポートをするから!!」

「了解!!」

エリオは立ち上がると、ストラーダを構えた。フリードとヴォルテールもまた自身のやるべきことに了解したのか大きく吼えた。

その二人の様子をスカリエッティのアジトで拘束させられた状態で見つめていた。すると、二人の戦う様を見ていたスカリエッティが大きく笑った。

「いやはや、随分と君が育てる子供達は強いじゃないか。まさかルーテシアを負かすとはねえ……ククク」

その隙を狙い、フェイトが自らを囲っていた赤いケージを断ち切った。しかし、フェイトは肩で息をしておりかなり苦しげだ。

「ほう……それが君の奥の手というわけかい？ 確かに凄まじいものだが……かなり消耗するようだねえ。AMFが濃いここで使うには向いていないと思うが」

「黙れっ!!」

スカリエッティの声を聞くまいと、フェイトは怒りを露にしながら怒鳴るが、彼はそれを気にした風もなくデバイスをはめ込んだ右手を動かした。

それによりまたしても床から赤い線が飛び出し、あっという間にフェイトを拘束してしまった。普段のフェイトであればこの程度の拘束ならば、受けることはなくすぐさま抜け出せたはずだろうが、AMFが濃いこの状況下ではそこまでの反応が出来ないのだろう。

「くっ!?」

「フッフ、いい表情だ。……テストロッサ執務官、私と君は似ていると思わないかい?」

「なに……!?!」

「まあ聞きたまえよ。私は彼女等ナンバーズをその他にもエシエクと言つ生体兵器。君は君自身が見付だした自分に反抗することのない子供達。ほら、既にこの時点で共通点が見つかったじゃないか。それを自分の都合のいいように作り上げ、自分の思うように行動するようになっているじゃないか」

スカリエッツィの言葉がフェイトの心に突き刺さる。自分では決してエリオやキャロたちのことをそんな風になど扱っていないと考えていたが、もしかすればスカリエッツィの言ったとおり、エリオ達を自分の思うように作ってしまったのかもしれないという不安が彼女の心に暗い影を落とした。

それでもフェイトは頭の中でそれを否定しスカリエッツィを睨みつける。

「その顔は違つと言いたそうだが……違わないよ。私がそうであるように、君もまた彼等を自らに逆らつたことがないように育て上げ、そして戦わせているじゃないか。今がその言い例だ。これは君の母君もやっていたことだろう?」

「違つ!! 母さんはっ!!」

「そんな人じゃない、かい? ククク、確かに君の母君、プレシアも最初は人々が幸せになるためにと研究をする人物だった。だが、結局は

禁忌を犯し君と言う存在を生み出したじゃないか。そうだね、君の母君が加害者か被害者かと言えばどちらかといえれば彼女もまた被害者だろう。けどね、彼女は結局自分以外の人間は自分が良い様に使える駒だと思っていなかっただろう？ 十年前のジュエルシード事件で君はそれを実感しただろう？」

肩を震わせながら告げるスカリエッティに対し、フェイトは唇を嚙んだ。

母を侮辱された悔しさがこみ上げるが、言葉が出てこないのだ。

「そのくせ君達は自分に向けられる愛情が薄れることに対してはかなり臆病だ。何度も言うが、実の母親がそうだっただろう。そんな彼女から生み出された君なんだから、君もいずれあの母親のようになるよ絶対にね。間違いを犯すことにただ怯え、薄っぺらな友情ごっこにすがりつく……なんとも滑稽じゃないか」

寒気がするような笑みを浮かべながら告げるスカリエッティの瞳は、まるで蛇のようだった。獲物を弱らせ、最終的には飲み込んでしまふ。そんな蛇のようだった。

そんな蛇の巧みな話術と、心を抉るような言葉の数々。それらの影響によって、フェイトの心は壊れてしまっただった。

しかし、

『そうだな。確かに滑稽かもしれない』

そこにいるはずのない、フェイトが心のそこから好いて、惚れこんでる一人の男性の言葉が響いた。

「おや、エシエク？ どうしたんだいその姿は？ まさか聖王の力を使っているというのかい？」

『ああそつだ。ドゥーエも倒した。あとはゆりかごの中にいるヴィウイオを助けるだけだ！』

「ほうほう。ドゥーエが負けたか……それは実に残念だ」

口ではそういつているものの、顔は全くといって良いほど残念そうではなかった。

すると、聖の声を聞いたフェイトが彼の名を呼んだ。

「ひじ……ひじ」

弱弱しい声で彼の名を呼ぶフェイトに聖はそれを見て笑みを浮かべながら告げる。

『なんつー顔してんだよお前は。いいか？ エリオやキャラクがお前のいいように育てられてると思うか？ 残念ながら俺はおもわねえ!! あいつ等は自分の意思でルーテシアと戦うことを選んだ、それはお前に影響されてかもしれない。けどな、それはお前が命じたことじゃない!! あいつ等が選んだことだ!! そうだろ、エリオ、キャラク!!』

聖が言うとフェイトの前に通信画面が現れ、エリオとキャラクがフェイトに告げた。

『聖さんの言ったとおりです。フェイトさん、僕達は自分で自分の道を決めました！』

『フェイトさんは居場所のなかった私に暖かい場所をくれました。そ

して、たくさんのおしよさもくれました!』

『機動六課に入ってなのはさんやヴィータ副隊長、シグナム副隊長、聖さんに鍛えてもらって』

『守るといふことの大切さを教えてもらいました!!』

『『フェイトさんは何も間違っっていません!!』』

二人は声を合わせてフェイトに告げる。フェイトはそれにハツとするがそこへさらに聖が付け加えた。

『いいかフェイト、人間なんてのは間違っって当然の生き物だ!! それをいちいち気にしてたら埒があかねえ!! 間違ったら次につなげろ、二度と同じ間違いをふまねえようにな! もし、それでもテメエが道を踏み外すっつて言うんなら……俺が!! いや、俺達か!! ぶん殴っつてもテメエを正してやる!! だから戦えフェイト!! 自分が信じる信念のままに!!!』

一際大きく言い放った聖の言葉にフェイトは涙を零しながらも、消えかけた光をその双眸に燈した。瞬間彼女の体が金色の光に包まれた。

「ありがとう……。聖、エリオ、キャロ。そうだね……私にはこんなに優しい人たちがついていてくれる。薄っぺらな友情じゃなくて、もっともつと強いものでつながってるんだね」

光の中で三人に礼を言いながらフェイトは愛機であるバルディッシュの名を呼んだ。

すると、バルディッシュもそれに呼応しフェイトのバリアジャケット

トの形を変えていく。

先ほどまでは全身を覆う、防御も考えられたフォームだったものが肌の露出が多くなり、防御を全て度外視したようなフォームへと形を変えた。

このフォームをフェイトは真・ソニックフォームと名付けており、その速さたるや聖王状態の聖以上の速度が出せ、まさにその姿は雷光に等しい。

さらに、先ほどまで一本だったバルディッシュが二本に増え二刀流となった彼女はバルディッシュを構え魔力を霧散させた。

その姿を見たトーレが傍らにいたセツテに告げた。

「セツテ、焦るなよ。あの形状からして防御は完全に無視している。一撃を打ち込めればこちらの勝ちだ！」

「はい」

トーレの指示にセツテは静かに頷くとスローターアームズを構える。トーレもまた自らの武装を構えた。

その二人を見ながらもフェイトはまさに雷光と呼べる速さで駆ける。二人もそれに反応し飛び上がるが、セツテは一瞬で眼前に躍り出たフェイトになす術がなく、スローターアームズを使う暇なく打ちのめされてしまった。

「セツテ!!」

トーレが心配げな声を上げるが、そこへ聖が告げた。

『よそ見してる暇はねえぞトーレ』

「っ!？」

その声にトーレが前を向いたときには既に遅く、フェイトがバルディッシュを振りかぶり、トーレに向かって振り下ろそうとしていたのだ。

「はああああああああっ!!!」

「ぐあっ!!」

何とか武装で防いだものの、衝撃を堪えることが出来なかったトーレはそのまま床に叩き付けられ、数度バウンドした後につつ伏せに倒れた。

そんな彼女達を見てもスカリエッティは顔色一つ変えず向かってくるフェイトを再度拘束しようと糸を出現させるが、フェイトはそれを容易に切り裂き、スカリエッティとの距離を詰める。

その最中、フェイトは二本になったバルディッシュを一つにした。

「バルディッシュ!! ライオットザンバー・カラムィティ!!」

答えるようにコアを光らせたバルディッシュは形を変え、一つの長大な大剣となる。

「せやあああああああ!!!」

気合を込めてフェイトは渾身の力でザンバーを振り下ろした。ス

カリエツティは冷静にそれを受け止めるが、質量や力が違いすぎるためか、彼のデバイスには亀裂が入った。

「ああ、君やエシエクのあの力欲しかったなあ!! だが、私の野望はまだ止まらんよ!!」

最後の最後までスカリエツティは狂気に満ちた笑みを浮かべるも、フェイトはザンバーを彼から離し、それを横から思い切りスイングした。

壁に叩き付けられ埃が舞うが、フェイトは彼のもとまで足を運ぶと、

「ジェイル・スカリエツティ……貴方を逮捕します」

力強く告げたフェイトはスカリエツティにバインドを施した。フェイトは息を整えると、聖に回線を開いた。

「ありがとう、聖。でもその姿は?」

『今は説明してる暇はない。後でゆっくり話す。そっちはもう平気か?』

「うん、大丈夫」

『わかった、俺は今からゆりかごに向かう。そいつ等のこと頼んだぜ』

「了解。……ねえ聖? さっき言ったことって本当?」

『……ああ。ホントだよ。お前が間違えそうになったら何度でも手を伸ばしてやる』

聖は小さく笑いながら言う。フェイトもそれに笑みを返すと聖に告げた。

「じゃあ、ヴィヴィオのことよろしくね」

『任せとけ!!』

そついい残すと聖は通信を切った。

「がんばって、聖」

最後にそう告げ、フェイトは後始末を始めた。

ゆりかごの中にてクアットロがモニタを開きながら残念そうな声を上げた。

「あーららあ。まさかドクターたちも負けちゃうなんてえ。……でもまあいいかしら。何せこっちは聖王陛下がついてるわけだし」

残忍な笑みを浮かべながら言うクアットロのモニタには、聖と同じく聖王の力を身に纏ったヴィヴィオと、満身創痍のなのはの姿があった。

決戦 後

フェイトがスカリエッティを倒し、聖がゆりかごへと向かったその時、旧市街の方でも戦闘がいよいよ佳境に入ってきていた。

ギンガと戦いを繰り広げるスバルは肩で息をしながらも、決して諦めることのない強い意志を持って彼女を見据えた。

すでにスバルの体からはギンガからの攻撃により、所々切れたり、擦れたりしており、血が滲んでいるところも多かった。

大丈夫ですか？

「うん。これぐらいどうってことないよ。それに、体は痛くなくてもギン姉のほづがもっと苦しいと思うから」

相棒、マツハキヤリバーの心配に笑いながら返すが、その瞳は真剣そのものだ。

スバルは大きく深呼吸をすると、自分に対し構えを崩さないギンガを見据える。

……今のギン姉を止めるにはちょっと無理しちゃうかもしれないけど!!

スバルは一度大きく深呼吸をすると、ここにはいないのはに謝罪した。

「ごめんなさいなのはさん、少しだけ約束を破ります!! マツハキヤリバー!!」

スバルが叫ぶと、マツハキヤリバーもそれに答える。その瞬間、彼女の足元には魔法陣が展開し、スバルは高らかに宣言した。

「ギア・エクセリオン!!!」

その声に答えるようにマツハキヤリバーから空色の翼が展開された。

このギア・エクセリオンは、かつてなのはレイジングハートに実装されていた、術者の能力を限界まで引き起こすシステムである、『エクセリオン』と同じである。

スバルは呼吸を整え、もう一度ギンガを見据える。ギンガもまたただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、構えをとった。

「……………いくよ、ギン姉!!」

言うのが早いか、スバルは一気に駆け出した。ギンガもそれに反応しスバルに向かって駆ける。

二人は数度ぶつかり合うが、やはりこの状態でもギンガの方が戦闘の技量が高いのか、押し負けることもあったが、スバルはそれでも諦めずに突き進む。

そして、二人は再び真正面から激突した。

今度は一撃当てての撤退ではなく、二人は肉薄した状態で互いのバリアを展開しながらそれを崩しあっていた。

この局面であっても、ギンガはバリアは右手で保持している。対す

るスバルは手ではなく頭部にバリアを張っており、眼前にはギンガの左手が迫っている。

もしこの状態でバリアが破られれば、スバルの負けは必然であり、最悪の場合死が待っているだろう。

しかし、スバルは一步も退かず勇気を持ってギンガとぶつかり合う。

……絶対に諦めない！　なのはさんとヴィータ副隊長が教えてくれて鍛えてくれたこの防御と、撃ち抜く力だけは絶対に負けない！！
足元だってマツハキヤリバーが支えてくれてる！！

心の中で今までの辛くも乗り切ってきた訓練の日々を思い出しながらスバルは進む。

………聖さんも背中を押してくれた、諦めるなって言った。だから私は　！！
「

絶対にギン姉を助ける！！」

スバルが言い放つと同時に彼女のバリアがギンガの螺旋の一撃に耐え切れずに破れた。しかし、スバルはそれを頭を掠めながらも避ける。

その影響で鉢巻が千切れ飛ぶがスバルは右の拳でギンガのバリアを破壊し、自らの魔力を圧縮して作り出したスフィアと共に、ギンガの身体に零距离からの大威力砲撃を叩き込む。

「一撃必倒！！　デイバイン……バスター！！！！！！」

師であるなのは技を確かに受け継いだスバルの砲撃はまさに『一撃必倒』の名にふさわしく、ギンガを一撃で昏倒させた。

気を失い倒れこむギンガを受け止めながら、スバルは右手を天に掲げた。

「……やりました!!」

ギンガを救うことが出来た嬉しさからか目には涙が浮かんでいたが、同時に笑顔も見られた。

ちょうどその頃、ティアナが閉じ込められているビルの結界の制御をしていたナンバーズ、オットーが一機のへりを確認した。

「あれは……」

その瞬間、オットーを護衛するように展開していたガジェットが緑と灰色の魔力の棘に破壊された。

爆煙が巻き起こる中、オットーはその場から脱しようとするものの、それを二つの緑色の糸が拘束した。

「貴女が地上で戦っている子達の司令塔ね」

煙が晴れ、声の主が露になった。

そこにいたのは、先日機動六課を襲撃した時に相對したシャマルと、ザフィーラだった。

「うまく隠れていたつもりみただけけれど、クラールヴィントからは逃れられないわ」

彼女は指にはめられている二つの指輪型のデバイス、クラールヴィントをオットーに見せながら冷静な声で告げる。

「残念だがここまでだ。諦めて投降しろ」

隣に控えていたザフィーラがオットーに投降を命じるが、オットーは捕まってはなるまいと、拘束を強引に切って逃走しようとするが、

「ウオオオオオオオ!!」

ザフィーラの咆哮が轟いたかと思うと、オットーの眼前に先ほどガジェットを破壊した灰色の棘が突き出し、それがオットーの目の前に壁となって立ち上がった。

同時に、シャマルもバインドを使いオットーを拘束し、ザフィーラは更にオットーの後方にも魔力を展開させ彼女を完全に閉じ込めた。

「終わったな」

「ええ。だけど、まだ……」

シャマルはザフィーラに頷きながらも、ゆりかごの中で戦っているであろうヴィータのことを思っていた。

ナンバーズの三人と睨み合いながら、ティアナは結界が崩れたことに気がついた。

それとほぼ同時に、ティアナの目の前にいたノーヴェが声を上げてティアナに突貫した。

「うおらあああああ!!!」

ノーヴェの動きに続き、後方にいたディードもティアナへ接近し、ウエンディはボードを構え、シューターを打ち出そうとしてた。

それらを見切ったティアナは軽く笑みを零すと展開させていた二つのスフィアをノーヴェとディードに対して打ち出した。

二人はそれを避けるものの、ティアナは銃形態のクロスミラージユからボードを構えているウエンディに対し、弾丸を撃ち込む。

「くっ!?」

ウエンディはそれに苦悶の表情を浮かべるが、既に時遅く、ウエンディのシューターとティアナのシューターがぶつかり合い、それらは大きな爆発を起こす。

爆発の衝撃で砂煙が舞い、皆の視界を奪う。

しかし、ディードは明確にティアナに斬撃を放った。

それでもティアナは冷静に対処し、ディードの攻撃をダガー形態のクロスミラージユで受け止め、そして、小さく呟いた。

「……聖やんが騒いでおいてよかった」

そう呟いたのもつかの間、ティアナはデイドの剣に、クロスミラージユのダガーを滑らせるようにして受け流した。

……刃走り!!

以前、聖にダガーで相手の攻撃を受け流すにはどうしたらいいかとたずねた時に教えてもらった技を、ティアナはこの局面で実行したのだ。

デイドはこのように受け流されるとは思っていなかったのか、態勢を崩してしまう。

その時、彼女の頭に強い衝撃が走った。一瞬何をされたのかわからなそうな表情をしたデイドであるが、すぐにそれを理解する。

……シュー……ター？

デイドは掠れる意識の中で、自分を襲った衝撃が、ティアナが最初に放った二つのシューターのうちの一つであると理解したものの、彼女はそのまま意識を失った。

同時に、先ほどの自爆で吹き飛ばされたウエンディの顎にもティアナのシューターが直撃し、彼女もまた、その場に倒れ付した。

「ウエンディー！ デイドト!!」

二人の名を叫ぶノーヴェであるが、その身体をオレンジ色の魔力が拘束した。

「ぐっ!? くそ!!」

「……貴女達を保護します。おとなしく、投降しなさい」

肩で息をしながらも強い光が灯った双眸でノーヴェにクロスミラーージュを突きつけるティアナに、ノーヴェは悔しげに歯噛みした。

シグナムは、地上本部の中をゼストを探して走っていた。

先程まで外で戦闘を繰り広げていたのだが、ゼストがシグナムの間をつき、シグナムはの地上本部への進行を許してしまったのだ。

現在はリインとのユニゾンを解いており、リインもここにはおらずはやての元へと返した。

ある一角を曲がったところでシグナムは立ち止まった。

「お前は……」

そういうシグナムの前にはアギトが立ちはだかつており、彼女の後ろには魔力で作られた壁が作られている。

「ここから先は通行止めだ……！」

「……お前は確か、アギトと言ったか。安心しろ、もとよりあの方を殺すつもりで戦っているわけではない。ただ、この事件の根幹に関係している可能性もあるからな。話をしたいだけなんだ」

シグナムの言葉に嘘偽りはなく、それは彼女の瞳からも見て取れ

た。アギトはそれを感じ取ると、ゆっくりと頷いた。

「……わかった、けどもう少し待ってくれ。旦那の昔の友達との話が終わるまで」

アギトはそう言うと、壁を崩してシグナムを通れるようにする。シグナムはそれに頷くとこの先にあるレジアス中将の私室へと向かう。アギトもそれに続き二人は先を急ぐ。

レジアス中将の部屋に辿り着いたシグナムは、思わず息を呑んだ。

そこには、血の海に沈むレジアスの姿があったのだ。ゼストは彼の傍らに佇み、下唇をかんでいた。

「ゼスト殿、これは……」

「私が来たときには既に殺されていたよ。おそらく、スカリエッティ達の仕業だろう」

レジアスの胸には、三つの刃物で刺されたような傷跡があり、その形状からしてゼストがやったことではないと物語っていた。

「……まったく、馬鹿なやつだよお前は」

倒れている彼の肩に触れながら小さく溜息をつくゼストは、本当に残念そうであった。すると、ゼストは苦しそくに胸を押さえ、次の瞬間には少量であるが吐血をした。

「ゼスト殿……」

「フフ……やはりもう長くはないか。……シグナムよ、最後に頼みが

ある」

「なんででしょうか？」

「アギトの……ロードとなつてはくれまいか？」

その瞬間、アギトの表情が強張った。

「何言つてんだよ旦那!! アタシのロードはアンタしか!」

「強がるなアギト。残念ながら私とお前では魔力の質が違う。それに、初めてシグナムと対峙した時、お前は内心でシグナムが自分に適していると感じていただろう? お前ももう私に縛られることはない。好きなように生きる」

「……!」

アギトは口を噤んでしまった。

しかし、ゼストの体はもう限界に近いようで、彼はまたしても血を吐いた。

「……すまんが一人にしてくれ。そして、決して戻ってくるな」

「……はっ」

シグナムは静かに返事をする。踵を返し、部屋から立ち去ろうとする。それに従うようにアギトも目尻に涙を溜め彼女に続く。

そして、シグナムとアギトは廊下で真正面から向き合う。

「……私はこれからゆりかご周辺で戦う仲間達の援護に向かう。お前は「れからどつするアギト」

「アタシは……」

アギトは言葉に詰まる。しかし、先程ゼストが言ったことが彼女の背中を押す。

「旦那には好きなように生きろって言われた。だから、アンタと行くよシグナム」

シグナムはそれに頷くと、彼女に手を伸ばす。アギトもそれに答え、シグナムの手に自らの手を置いた。

同時に二人を魔力が包み込み、アギトはシグナムの胸へと吸い込まれるように吸収された。

魔力が晴れると、アギトとユニゾンが完了したシグナムが悠然とそこに佇んでいた。ユニゾンの影響か、シグナムの髪の色はピンクから薄いオレンジ色へ変色し、バリアジャケットの上半身部分も装甲がなくなり薄い内着だけになっている。

……これは。

内心でシグナムはアギトとのユニゾンが完璧であることに驚いた。だが、すぐに彼女は走り出す。

「アギト、早速で悪いが一気に行くぞー」

『ああー！ どんと来いシグナム!!』

アギトの返答を聞いたシグナムは小さく笑うと、窓を切り裂き一気に飛び出した。

ユニゾンしたシグナムの姿が窓から確認できたゼストは、僅かに口角を上げると、

「……………この世界を頼んだぞ。シグナム、アギト……………」

最後にそういい残すと、ゼストは眠るように目を閉じ息を引き取った。

「ハア……………ハア……………。くっそ！ 硬すぎだろこの駆動炉!!」

そう毒づくヴィータであるが、彼女は既に満身創痍であり頭部からの出血も含め、体のいたるところから出血していた。

迫るガジェットをすべて破壊し駆動炉にたどり着いたはいい物の、駆動炉の自己防衛システムやガジェットとの戦闘で疲弊したヴィータは限界を迎えようとしていた。

握っているグラーファイゼンのフレームにも傷があり、戦闘の凄まじさが伺える。

すると、駆動炉の自己防衛システムがまた動き出しヴィータに狙いを定める。

「この自己防衛システムも駆動炉ぶっ潰さなきゃいくらぶっ壊しても無駄ってわけかよ……上等だ」

ヴィータは歯を食い縛ると同時に飛び上がり、ツェアシュテールングスフォルムへ変化させたグラーファイゼンを思い切り振り下ろす。

「どりゃあああああああ!!!」

気合の咆哮を上げ駆動炉にフォルムの、ドリル部分を叩き付ける。駆動炉とグラーファイゼンが衝突し火花を散らす、駆動炉にダメージは見られない。

それよりも、グラーファイゼンの方がダメージが大きいのか、ドリルの部分のヒビは大きくなった。

「くっ!!」

それに気付いたヴィータは苦い顔をするが、その瞬間、自己防衛システムが光学兵器での攻撃を行った。

爆炎が辺りに舞い、ヴィータの姿を一瞬見えなくするが、彼女は肩で息をしながら何とか先程までいた場所へ降り立つ。

先程の光学兵器の攻撃によりダメージを追ったのか、出血箇所は更に増えていた。だが、ヴィータはそれでもあきらめることはせずもう一度グラーファイゼンを構える。

「教えてやるよ……」。鉄槌の騎士に砕けねーもんはねーってことをなあ!!! アイゼン!!」

了解!

ヴィータが言つと同時に、グラーフアイゼンからカートリッジが吐き出される。

……残ったカートリッジ全部だ。本当にこれで終わりにしてやるよ!!

グラーフアイゼンを振りかぶり、もう一度ツェアシュテールングスフォルムに変化させたヴィータはそれを渾身の力で振り下ろす。

「ツェアシュテールングスハンマー!!!!」

全力で振り下ろしたグラーフアイゼンと駆動炉はまたしても火花を散らす。だが、今度は先程とは違った。

ビキツと言う破砕音と共に、グラーフアイゼンのドリルが駆動炉に食い込んだのだ。それを視認したヴィータは更に力をこめた。

割れたところを抉るようにヴィータは攻撃する。

体のあちこちからは無理をした影響から鮮血が舞うが、ヴィータはお構いなしに続ける。

「これで終わりだあああああ!!!!」

途端、駆動炉のヒビが大きくなり、やがてそれは駆動炉全面に広がった。

そして、駆動炉は大きな音を立ててバラバラと崩れ去った。同時に、自己防衛システムもなくなったのか、先程までのキューブ状のものもなくなった。

すると、先程まで中に浮いていたヴィータだが、本当に全ての魔力を使い果たしてしまったのか、

「あ、ヤベ……」

空中から力なく、駆動炉のフロアへと落ちていくが、彼女は笑っていた。

……これで、アタシの仕事は完了だ。間に合ったみてーでよかったぜ。

しかし、その瞬間、ヴィータは誰かに抱きかかえられた。

「お疲れさん。ヴィータ」

「……ああ。本当に疲れたよ、はやて」

ヴィータは駆けつけたはやてによって抱きかかえられており、はやてもまたヴィータに労りの言葉をかけた。

「とりあえず出口まで連れて行くな」

「はやてはどっすんだ？」

「私はヴィータを置いて来たらなのはちゃんの援護に向かう予定や。もう時間もないしな」

はやてが言うと、ヴィータは頷き彼女の胸を軽く叩き告げた。

「なのはの」とよろしく頼んだぜ。はやて」

「うん。けど、そんな心配もないかもなあ」

はやてが小さく笑みを浮かべながら言うと、ヴィータは怪訝そうに首を傾げたが、すぐにそれに気がついたのか、はやてと同じく小さく笑った。

「なるほどな……聖か」

玉座の間では、なのはと聖王と化したヴィヴィオが激戦を繰り広げていた。

一度は追い詰められたなのはであるが、今はヴィヴィオと戦うことが出来ている。しかし、それでも劣勢は劣勢のようで、彼女の頬を汗が伝った。

「はあああああ!!!」

「くうっ」

容赦ないヴィヴィオの拳がなのはを襲うが、なのはそれをぎりぎりのところでよける。

……あと少し！　あと少しで探知が終わる！

なのははここにくる道中で仕掛けてきたサーチャーの探知があと少しで終わることを確信していた。

だが、それにより、一瞬の隙がなのはに生まれてしまった。ヴィオはそれを見逃さず、なのはに強烈な蹴りを放とうとした。

しかし、

『一閃必中!! デイバインバスター!!!』

その声と共に、玉座の間の壁からヴィオと同じ虹色の魔力砲撃がヴィオとなのはの間を貫いた。

「悪いなのは。お前の技使わせてもらったぜ」

壊れた壁の中から出てきたのは、なのはが好いており、辛い時に助けてくれた人物。

「聖……くん?」

終結

ゆりかごの壁を貫いて現れた聖は突然の登場に驚いているのはに念話を送る。

(なのは、ヴィヴィオの相手は俺がする。お前はサーチャーを使ってクアットロを探せ)

(う、うん。わかった、だけど気をつけてね。ヴィヴィオの力は相当上がってるよ)

(心配すんな。きつちりもとのヴィヴィオに戻してやるさ)

なのはと聖は頷き合つと、なのははヴィヴィオから後退しヴィヴィオとなのはの間に聖が割ってはいる。

すると、ヴィヴィオは聖の顔をまっすぐと見て目じりに涙を浮かばせる。

「……………パパ？」

「俺のことはまだ覚えてんのか……………」

どうやらヴィヴィオの記憶の中にはまだ聖の記憶が微かに残っていたようだ。しかし、そんな一縷の希望すらも奪う悪魔の囁きがヴィヴィオの脳内に響く。

『あらあ？ 陛下あ、なあと動揺しちゃってるんですかあ？ そいつも貴女の本当のお父様なんかじゃないんですよ？』

「じゅう……」

『貴女は目の前の二人を倒すことだけ考えてください。その後のことは私がいろいろ考えてあげますからあ』

「ぐう……！ ああああっ！！」

ヴィヴィオは頭を押さえ苦しげにうめく。なのはがそれに反応し立ち上がるつとするが、聖はそれを制する。

「クアットロか……。ヴィヴィオ！ 俺のことを覚えている今だから言っぞ！ 絶対俺が助けてやる、だからお前もお前の中で戦え！！」

「……パ……パ」

その言葉を最後にヴィヴィオから虹色の魔力があふれ出した。その魔力は衝撃波ととなって二人を襲うが、聖はそれを片手ではじく。

魔力の奔流が止むと、ヴィヴィオは光のともっていない虚ろな瞳で聖を見ていたが、彼女の目からはとめどなく涙があふれている。

だが、彼女は態勢を低くして戦闘態勢をとった。

聖もそれに答えるように腰を落とすと、ヴィヴィオではなく恐らくゆりかご内の奥深くでヴィヴィオを操っているであろうクアットロに言い切った。

「クアットロ！ 趣味のワリィテメエのことだ、どうせこの戦いも見てんだろ！！ けどなあ、いつまでもそこが安全圏だと思っなよ！！ すぐにテメエはぶっ倒されるからなあ！！」

聖が言い切った瞬間、ヴィヴィオが殴りかかる。聖もそれに反応すると、自身もフロアを蹴りヴィヴィオの拳に自身の拳をぶつける。

そのぶつかり合いで二人の拳から紫電が飛び散り凄まじい衝撃を生んだ。その影響かフロア全体に亀裂が入り、さらに二人の下のフロアは大きく陥没した。

すると、二人が弾かれた様に後方に飛ばされる。しかし、聖とヴィオは互いに壁を蹴ってもう一度拳をぶつける。

だが今度のぶつかり合いは一つではなく、二人の猛烈な拳のラッシュだった。

「オラァァァァ!!」

聖は気合の咆哮をあげながらヴィヴィオと激しくラッシュを繰り返す。それによって生まれた余波は先程の比ではなく、玉座の間をいたる所に衝撃によって生まれた亀裂や陥没が生じていた。

なのはは二人の戦闘を見て思わず息を吞んでしまった。

……これが聖君の本当の力。

今まで自分達の前では決して出すことのなかった聖王の力を解放した聖の戦闘はかつてないほどの激闘だった。しかし、それを受け止めるヴィヴィオも凄まじかった。

ほんの数秒二人の戦いに目を奪われていたなのはであるが、彼女はすぐに首を横に振り自身が今やるべきことに専念する。

……あと少し、あと少しでサーチャーが最深部までたどり着く！

サーチャーの情報に目をやると、あとは最深部を残すだけとなっていた。恐らくだがあと一分もかからずに終わることだろう。

だが、そこで聖がなのは近くを通り過ぎた。いや、ヴィヴィオに打撃をもらい吹き飛ばされたのだ。

「聖くん!!」

悲痛な声を上げるのはだが、聖は叩き付けられてめり込んだ壁から頭から大量に出血した聖が顔を出した。

「まったく……さすが本物の聖王ってだけはあるな。紛いものの俺とは力が明らかに違う」

そうですね。気を抜けば恐らくすぐにやられてしまつてしょう

「だけどそんな風にやられるつもりもねえ！ 娘に負けたなんて父親として恥ずかしいもんなあ!!」

頭から流れ出る血をバリアジャケットの袖で乱暴に拭いながら聖は追撃をしてくるヴィヴィオの攻撃を避けると、彼女のわき腹に蹴りを放つ。

ヴィヴィオはすぐに返されるとは思っていなかったのか、苦悶に顔をゆがめて吹き飛ばされた。

(なのは！ あとどれくらいだ!!)

(あと三十秒で最深部！)

「上等!!」

聖はヴィヴィオを追ってもう一度彼女と拳をぶつけた。

二人が戦う様子をゆりかごの最深部で妖艶な眼を向けながら観察しているクアットロは先程の聖に言われた言葉をくだらないと思っていた。

「いくら聖王の力を手にしたところで、貴方は所詮ただの紛い物……陛下を倒してここまで来るなんて無理に決まってるわ」

ほくそ笑みながらモニタを見ていたクアットロだが、ふと聖が笑みを浮かべているのが分かった。

しかもただ笑っているだけではない、クアットロが監視用に置いておいた自身のサーチャーに向かって笑みを浮かべていたのだ。

……なに？ サーチャーはシルバーカーテンで見えなくしているはず……まさかそれを見つけたというの？

彼女が疑問に思っていると、モニタの中の聖は声には出さずに口の形だけでクアットロに伝えた。『ミツケタ』と。

瞬間、クアットロの全身に戦慄が走った。同時に彼女は自身の背後に浮かぶ桃色のサーチャーに気がついた。

「まさか……!?!」

クアットロが驚愕の声を上げた瞬間、新たにモニタが表示された。そこにはなのはが移されており、彼女は言い放った。

『見つけた……』

「……ここに来る間にサーチャーを飛ばして進んできて、あの子と戦いながら操作し続けていたと言うの!? ……だ、だけどここは最深部、玉座の間からここまでたどり着くことがそう易々とできるわけ……」

そこまでいったところで彼女の言葉をあざ笑うかのような聖の声が聞こえた。

『おいおいクアットロ。何か忘れてんじゃねえか? ここにいる高町なのは一等空尉なんて呼ばれてる?』

「……エース・オブ・エース」

『大正解。じゃあそのエース・オブ・エースの得意な魔法は?』

「砲撃……ま、まさか!？」

聖はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。そしてなのはは壁の一角まで足を運ぶとレイジングハートを構えブラスターシステムを起動させる。

『あきらめるクアットロ。テメエは終わりだ……なんてったって、うちのエースを怒らしちまったんだからな』

ヴィヴィオと掴みあいながら告げた聖の声はもはやクアットロに

聞こえているのかいないのか。彼女は相当な恐怖を味わっていた。

『ブラスター3!!』

なのはが言うと同時にブラスタービットがレイジングハートの砲身の周囲に展開し、レイジングハートからも合計六枚の桃色の翼が広がる。

同時に砲門にはなのはの魔力が収束し、魔力の塊が形成されていく。

なのははカートリッジを二つ使いすべてをリロードする。それだけで先程まで小さかった魔力の塊が何倍にも膨れ上がった。

『ぶっ放せ、なのはあっ!!』

『……………ディバイン……………バスター……………ッ!!!!!!』

なのはが叫ぶと共に、収束していた魔力が超極太の魔力砲となり玉座の間を貫き、最深部までの壁を破壊し、貫通していく。

クアットロは先程までの余裕は何処へやら。冷や汗を浮かべ、歯をガタガタと震わせ恐怖をその身で体現していた。

「いや……………いや、いやあああああああ!!!!!!」

恐怖の絶叫を上げ逃走しようとするが、足がもつれてしまい思うように動けない彼女を容赦のない桃色の魔力が呑み込み、クアットロはその圧倒的な質量に押しつぶされ、一瞬で意識を失った。

「目標沈黙……!!」

なのはが言うと、レイジングハートから溜め込んでいた蒸気が噴出し冷却された。

すると、聖とつかみ合っていたヴィヴィオがもう一度苦しげにうめくと、彼女の瞳に光が戻り、聖のことを認識した。

「パパ……?」

「目が覚めたか?」

聖が笑顔で掴んでいた彼女の手を離し、拘束を解くが、その瞬間ヴィヴィオが叫んだ。

「ダメッ!! パパ逃げて!!」

「なに? づッ!」

ヴィヴィオが言った瞬間、彼女の声に反して拳が放たれ、聖の肩口に強い衝撃が走った。

「聖くん! ヴィヴィオ!!」

「来るなのは! ……そうか、自己防衛モード」

「自己防衛モード?」

「ああ。聖王が戦意を喪失した場合、その聖王はゆりかごの制御下に

置かれるんだ。そして、自己防衛プログラムが聖王に出す命令は唯一つだ。『侵入者の抹殺』」

聖の後ろでなのはが息を呑む音が聞こえた。ヴィヴィオは涙を流しながら二人に首を振った。

「そつだよ……だから二人とも逃げて……！ これ以上二人を傷つけないよ！」

ヴィヴィオの悲痛な叫びになのはも瞳を潤ませる。しかし、聖の瞳はまだあきらめてはいない。

「私がないのはママ……うっん、なのはさんや聖さんに懐いたのは、傍にいて力を学習させてくれる人」だったからなんだよ……。この聖王の鎧がそうさせたんだよ！ だから私は……存在しなきゃいけない子なんだよ！！ 私ごとこのゆりかごを破壊すればすべてが終わるんだよ！！」

「ふざけんじゃねえ！！」

ヴィヴィオの叫びに対し、聖がその双眸に僅かに涙をためながら恫喝した。

「お前が存在しなきゃいけないだろ!? それ以上ふざけたことぬかしたらぶん殴るぞヴィヴィオ!! いいかヴィヴィオ、声を大にして言ってるよ。お前には生きる意味しかねえ!! 聖王のクローンで存在しなきゃいけねえなら俺だってそつだろつが！」

「で、でも！ 私は二人を利用して……」

「だからなんだ！ 第一お前がただ単に俺たちを利用したって言うん

なら、俺と戦ってるときに涙なんかさがねえだろ!!」

その言葉にヴィヴィオがハツとした様に顔を上げた。聖はそんなヴィヴィオをまっすぐ見据えて今度は打って変って優しげな声で告げた。

「ヴィヴィオ、お前は存在していいんだ。俺たちにはお前が必要だ。……だってよ、お前は俺たちの子供じゃねえか。自分の子供を守ってやれないほうがずっとずっと辛いんだ」

「そうだよ、ヴィヴィオ。貴女は私やフェイトちゃん、聖くんの大切な子供なんだから」

「パパ……、なのはママ」

ヴィヴィオは瞳から大粒の涙を流しながら二人を見つめた。その様子を見た聖となのは互いに頷き合つと、聖がヴィヴィオに告げた。

「ヴィヴィオ、お前を助けるためにちょっとだけ痛い事をする。我慢できるか?」

「……うん、出来るよ……!　だってパパの娘だもん……!」

「いい子だ。……いけるかなのは?」

「うん……」

なのはは頷くと、ヴィヴィオの体にレストリクトロックを仕掛ける。ヴィヴィオは一瞬痛そうな表情をするが、声を上げずに耐えた。

しかし、彼女の意味とは逆にヴィヴィオの体はそれを引き剥がそうとする。

「すごい力……！ だけどこれぐらいで……!!」

ロックを維持しながら苦い顔をするのはは、そのまま聖のほうを見る。聖もそれに頷くと、自身の右手に魔力を収束させる。

……ヴィヴィオの体内にあるレリックだけを取り出して破壊。

「クラウン、やれるな？」

もちろんですよ。ヴィヴィオ様を救わなくては

「ああ。……行くぞヴィヴィオ！」

聖は宣言すると右手の魔力を保持しながら床を蹴ってヴィヴィオの眼前に躍り出ると、彼女の胸部。ちょうど胸の中心に拳を放った。

「貫け閃光!! リヒト・エクスプロード!!!!」

声と共にヴィヴィオの胸に食い込んだ拳から魔力が放出され、ヴィヴィオは来る下に叫ぶ。しかし、その瞬間ヴィヴィオの背中からずるりと音を立てるように赤い宝石のようなロストロギア、レリックが姿を現した。

「ぶっ壊れやがれええええええ!!!!」

聖の声が響いた瞬間、ヴィヴィオの体内から吐き出されたレリックに亀裂が入り、一瞬にして砕け散った。

そして、その砕けた余波で爆発が生まれ玉座の間を光の奔流が襲った。

数秒の後、光の奔流が止むと玉座の間は大きく陥没していた。なのははふらつく足で陥没したフロアの中心に目を向ける。

そこには肩で息をしている聖と、フロアに倒れこんでいる先程までとは違う少女の姿をしたヴィヴィオの姿があった。

「ヴィヴィオ……聖くん……!!」

なのはが呼ぶと、それに反応するよつにヴィヴィオの指がピクリと動いた。聖もそれに気がついたよつで倒れているヴィヴィオに駆け寄りつとすが、

「来ないで……。……だいじょつぶ、ひとりで立てるよ……」

ヴィヴィオはふら付きながらも足をしっかりと立てて立ち上がった。その姿が嬉しかったのか、聖はヴィヴィオに歩み寄り彼女をきつく抱きしめた。

「……パパ。がんばったよ……」

「ああ……。！ よくがんばった！ おかえり、ヴィヴィオ」

聖はヴィヴィオを抱きしめ彼女の耳元で告げた。ヴィヴィオもそれに頷くと、聖の背中に手を回し、彼に身を任せる。

二人が抱擁していると、なのはが駆け寄りヴィヴィオと聖もそれに顔を上げた。すると、なのはは大粒の涙を流しながら顔をくしゃくしゃにゆがめて二人を抱きしめた。

「よかった……本当によかった……!!」

「ああ……本当にな……」

なのはの背に手を回しながら聖も大きく息をつきながら全身の力を抜いた。

救出

ヴィヴィオを抱え、なのはと共に陥没した床から上がると同時に、ゆりかご内部にアラームが鳴り響いた。

なのはとヴィヴィオはそれに不安げな反応を取るが、聖は顔をしかめて舌打ちをした。

「これは魔力封鎖だ」

「魔力封鎖？」

「ああ。聖王の反応が消えたからゆりかご自体が自分を保護するためのプログラムだ。ボヤボヤしてっと区画が封鎖されちまって閉じ込められる。

速く脱出したいところだが、クアットロを引っ張ってこねえとな。なのは、ヴィヴィオ。お前等は少しここで待っていてくれ。たぶんはやても来るはずだ」

聖はそういうとヴィヴィオをなのはに抱かせてディバインバスターで造られた道を下ってクアットロを回収しに行った。

それから少しすると、聖の言ったとおりはやてが壊れた扉からやってきた。

「なのはちゃん！ 無事か？ ヴィヴィオも」

「うん、私は大丈夫。けど聖くんが戦闘機人の子を引っ張ってくるって」

なのはは聖が下っていった大穴を指差した。だが、そこで浮遊魔法を使っていたはやての魔力が霧散した。

「魔力封鎖が効力を発揮し始めたのだ。」

しかし、通信だけはまだ生きている様でなのはのところスバルからノイズ交じりであるが連絡が入った。

『な……は……さん！ スバル……す！ 今……ティアと……ヴァイス……曹にへりで……くってもら……ので、今か……助け……きます』

そこで通信が切れ、スバルの声は聞こえなくなってしまった。しかし、どうやらなのははやてはその意図が理解できたようだ。

「スバルとティアナがこっちむかっとなるみたいやね」

「うん。けど、魔法が使えない状態でどうやって……」

「そこは多分、スバルの戦闘機人としての力を使っただろうさ」

なのはが言いかけたところで、大穴から上がってきた聖が文字通りクアットロを引きずってやってきた。

手足には二重にバインドが施されているため簡単にはほどけないようになっているようだ。

「聖くん。お疲れさんや」

「ああ、それよりも今はスバルたちが発見しやすいようにここから出よう」

はやてに答えた聖は出口の方に顎をしゃくって出口を指したが、そこで出口に格子状のドロドロとした液体のようなものが這い回って、数秒も経たぬうちに出口を完全に塞いでしまった。

それとほぼ同時に聖の後ろでも出口のときと同じようなものが大穴を塞いでしまった。

「くそ……閉じ込められたか。はやて、アルカンシエルの発射までは？」

「まだ少し時間はあるはずや。たぶんその間にスバルたちが助けに来てくれるはずや」

「そうだね。今は動かずに待っていたほうがいいかもしれない」

二人の意見に聖は頷くと、外にいるであろうスバル達に心の中で告げた。

……頼んだぜ、二人とも。

ゆりかごの外ではヴァイスが操るヘリが滞空していた。

その中には、狙撃銃形態のストームレイダーを構えたヴァイスとバ

イクに乗ったティアナとスバルがいた。

「いいかお前等。ゆりかごの中はかなり高濃度のAMFが働いているらしい。中で魔法は使えねえけど外ならギリギリでスバルのウイングロードが届く。だから、俺が道を開けてやる」

ヴァイスはヘリのハッチを開けた状態で目の前でスバルたちの進行を邪魔しようとするガジェットを次々に撃墜していく。

その精密さたるや、射撃を得意とするティアナが息を吞んでしまうほどだった。

「……ほんとはよ、いつまでもうじうじしてる自分に嫌気が差してたんだ」

「え？」

ヴァイスの独白にティアナは思わず声を漏らしてしまったが、彼はそのまま続けた。

「一度の失敗でいつまでも情けなくへこたれてよ。死にたくなるほどなさけねえ思いだっしてきた。それに俺とお前等の隊長たちみたいにエースでも、天才でもねえ。けどよ、一先輩としてバカで無鉄砲なテメエらに道を開いてやる事ぐらいはできらあな!!」

ヴァイスはそういうとストームレイダーの銃口に魔力を溜めて、更にそれを魔力で包み込んだ弾丸を打ち出した。

弾丸は一直線にゆりかごへの進入を阻んでいるガジェットに直撃し、ガジェットは弾丸に貫かれて爆散した。

「行け！ 行って隊長たちを助けて来い!!」

「はい!!」

二人は同時に返事をする、スバルがウイングロードを発動して道を作る。

ティアナもそれを確認するとバイクを走らせる。

彼女等の後姿を見送りながら、ヴァイスは告げた。

「頼んだぜ。お前等」

ゆりかごから少し下の空域では、小型の飛行型ガジェットが地上へと降下を開始していた。

ゆうに四十は超えるガジェットをどう止めるべきか、空戦魔導師たちの無線が飛び交っていた。

アースラ艦内でオペレーティングをしていたルキノもまたどうするべきか焦りを見せていたが、そこで聞きなれた凜とした声音の女性の声が聞こえた。

『ルキノ、聞こえるか?』

「は、はい！ シグナム副隊長!」

『今、私の方でガジェットの機影を確認した。これより迎撃に入るが、構わないな?』

「はい! お願いします!」

ルキノはシグナムに回線を開くと同時に受け答えたが、モニタの中に現れた彼女の姿に小首をかしげた。

「あれ、シグナム副隊長? そのお姿は……」

『心強い増援が来てくれてな』

彼女は静かに笑みを浮かべると、モニタを一旦切って音声だけをルキノに聞こえるように操作した。

飛来するガジェットを見据えながら、シグナムはユニゾンしているアギトに問うた。

「機影凡そ四十……いいや、更に増えているな。行けるか、アギト?」

『ああ、やれるわ』

アギトは答えると、両手を広げ手のひらから火焰を発生させる。

『猛れ、炎熱! 烈火刃!!』

アギトが言うや否や、レヴァンティンが火焰を纏った。ガジェットも敵勢存在だと理解したのか、レーザーやミサイルを放ってくるが、

シグナムはレヴァンティンの名を呼ぶ。

「レヴァンティン…」

Schlangeform!!

炎を纏ったレヴァンティンがカートリッジを吐き出すと、更に火焰が燃え上がり、先ほどまで普通の剣だったレヴァンティンの刀身が別れ始め、蛇腹剣へと変化する。

シグナムとアギトは同じ動きでレヴァンティンを振るう。

蛇腹剣となったレヴァンティンのリーチは各段に伸び、第一陣のガジェットを粉碎した。

そして続けざまにシグナムとアギトは同時に言い放つ。

「剣閃烈火!!」

『火龍!!』

『「閃!!!」』

声と共に放たれた横なぎの剣閃は、中距離にまで達し、迫るガジェットを一瞬にして粉碎して見せた。

『機影五十、い、一瞬で消滅!?!』

回線からルキノの驚愕の声が聞こえた。

シグナムはレヴァンティンを剣の状態に戻すと、アギトに無理がな

いか確認するため彼女に声をかける。

「アギト、大丈夫……」

そこまでシグナムが言った所で、彼女はアギトが泣いているのを理解した。

「……どうした、アギト」

『な、なんでもねえ！ なんでもねえよ！』

恐らく彼女自身、ここまでシグナムとのユニゾンが自分と相性がいいとは思っていなかったのだろう。

自分とじっくり来るロードとの出会いと、自分をシグナムに託したゼストのことを思い出し、アギトの目尻からは止め処なく涙が溢れていた。

シグナムもそれを理解しているのか、顔を曇らせるが、間髪いれずに第二陣のガジェットがやってきた。

「……アギト、続けてで悪いが、行けるか？」

『おう！ シグナム!!』

涙を拭いきって力強く答えたアギトにシグナムも小さく笑みを浮かべると、ガジェットを倒すために空を翔けた。

玉座の間にて、聖は僅かに視界が霞み始めたのを感じていた。同時に、体の節々に走る鋭い痛みと、激しい頭痛も現れ始めていた。

……聖様、もう限界では……

「……黙ってる。この状況であいつ等に心配はかけらんねえ。何も無い風を装え……」

クラウンがささやいてくるが、聖はそれを一蹴して返す。クラウンはそれきり黙ってしまったが、聖は内心で謝罪した。

……わりいなクラウン。俺の体のことを心配してくれてんのはわかる。だけど、これ以上なのは達に心配はかけられねえんだ。

聖は一度深く深呼吸をして体を落ち着かせる。

元々、聖の体と聖王の魔力は適合できていない。ゆえに、長時間の持続は体を破壊し、最悪の場合死に至るのだ。

また、聖王として未完成な聖ではゆりかご自体に聖王として認知されておらず、魔力閉鎖を解くこともできない。

その不甲斐無さに聖は拳を握り締めようとしたが、もう硬く握り締めることも出来なくなっていた。

すると、そんな彼の異変を感じ取ったのかヴィヴィオが声をかけた。

「パパ、だいじょうぶ？」

「ああ、ちょっと疲れただけだ。気にするな、ヴィヴィオ」

聖は優しく笑みを作りながらヴィヴィオの頭を撫でてやる。

けれど、ヴィヴィオはまだ聖のことが心配なのか彼の手を小さな手でギュツと握った。

それをみていたのはとはやても小さく笑みを作るが、ちょうどその時、玉座の間の出口よりも少し上の壁が何者かによって破壊された。

「お待たせしました！」

もうもつと立ち込める砂煙の中から姿を現したのは、スバルとバイクに跨ったティアナだった。

二人の登場に玉座の間にいた全員が安堵の表情を見せる。

スバルはそのまま、穴から降りるとはやてが声をかけた。

「スバル、早速でわるいんやけど……」

「はい！ 任せてください！ 元災害救助隊の威信にかけて隊長たちを救出しますから！」

彼女は皆を安心させるような笑みを浮かべると、まず、ヴィヴィオから運び、そのあとなのは、はやて、クアットロ、聖の順番で救助を開始した。

だが、聖を運ぼうと、スバルが彼の体に触れた瞬間聖の顔が苦悶に歪んだ。

「あ、痛かったですか!？」

「いいや、大丈夫だ。ちょっとさっきの戦いの傷が疼いてな。お前のせいじゃねえよ」

本当は戦闘の傷ではなく、聖王の魔力による副作用なのだが、聖はスバルに心配をかけないために笑みを作った。

スバルはそれにやや心配げな表情をしたものの、今は皆を救助することが先決と判断し、ティアナの元まで戻った。

ティアナの元に戻ると、彼女はゆりかごが軌道に乗るまでの時間を確認していた。

「軌道の上上がるまであと五分弱……。ここから出口までは飛ばせば三分以内につけるはず」

彼女はスバルと視線を交わすと、互いに頷きあい皆に言った。

「それじゃあ、なのはさんとヴィヴィオはスバルにおぶられてください。八神部隊長とその戦闘機人の子と聖さんはバイクに乗ってください」

「それはかまわねえがティアナ、バイクにそんなに乗れるか？」

「少しぐらい定員オーバーでも大丈夫ですよ。それに、ヴァイス陸曹からはどんな風に扱ってもいいって言われていますから」

「聖の心配をよそに、ティアナはそついいきると」「さあ早く!」と急かした。

はやてと聖はそれに頷くと、バイクへと乗り込んだ。

「それじゃあしっかり掴まってて下さいね。行きますよー!」

ティアナはそついうとスバルと共に出口に向かって走り出す。

衛星軌道上に浮かんでいるクラウディアのブリッジでクロノは難しい表情をしていた。

「……ゆりかごが上がるまであと三分か」

そつ言う彼の手にはアルカンシエルのキーが握られており、目の前には発射用の鍵穴型のモニターが浮かんでいた。

「帰って来い。なのは、はやて、聖……!!」

友人達の名を呼ぶと、それに答えるように女性オペレーターが声を発した。

「提督! ゆりかご内の最深部にいた高町なのは一等空尉、ならびに八神部隊長、白雲聖執務官がスバル・ナカジマ二等陸士、同じくティアナ・ランスター二等陸士によって救助されたとの連絡が入りました

「！」

その報告を聞き入れた瞬間、クロノは肩の荷が下りるような感覚に襲われたが、気を緩める事はなく、冷静に言い放った。

「まだ気を抜くなよ。ゆりかごが軌道上に上がり次第、アルカンシエルの正射を始める。他の艦にも連絡を」

「はい…」

「……ここからは、こちらの仕事だ」

クロノは真剣な眼差しでゆっくりと衛星軌道上に上がってくるゆりかごを見据えた。

ゆりかごから脱出を遂げたスバルたちはヴァイスが操縦するヘリに戻った。

ヘリにはヴィータやシャマルの姿もあり、帰ってきたのはやヴィオ、はやてを出迎えた。

ヴィータは血まみれで大丈夫か疑いそうになったが、割と元気そうであった。

聖もクラウンを待機状態に戻し、皆の下に行こうと一歩足を踏み出

した。

が、その瞬間、彼の視界がぐにゃりと歪み腹の底から何かがせり上がってくるのを感じた聖は、口元を押さえる。

「聖くん？」

なのはが聖の異変に気がついたのか、声をかけるが、聖はそのまま覚束無い足取りで開きっぱなしだったハッチの方まで行ってしまった。

「聖くん!? そっちはあぶな……」

なのはがそこまで言ったところで、聖は口から大量の血を喀血した。

その光景に皆が驚愕の声を上げる。

しかし、聖は皆を安心させようと笑みを見せながら皆に言う。

「だい……じょうぶ、だ。……俺なら……へい……き」

瞬間、聖はへりのハッチから落ちた。

一瞬の静寂がなのは達の間に流れたが、次の瞬間、なのはが聖を追うようにへりから飛び出した。

「なのはちゃん!?!」

「ムムム」

はやてとヴィヴィオの声が後ろから聞こえた。しかし、「ごめん」と心の中で彼女達に謝ると、なのはは重力に引かれるまま落下していく聖を掴もうと手を伸ばした。

「聖くん!! 手を伸ばして!!」

なのはの声が聞こえたのか、聖はゆっくりと手を伸ばした。なのはと聖の手は何度かかすったが、やがてなのはが聖の手首をがっちりと掴んで自分の方に引き寄せた。

……魔力は少ないけど、地表ギリギリで放出できればクッションが出来るはず!!

決死の覚悟で迫る地表を見つめるなのはは、聖のダメージが少ないように彼を胸に抱きこむ。

しかし、地表まであと五十メートルほどまで迫った瞬間、彼女の視界の端に金色の閃光が光った。

それを見た瞬間、なのははかけがえない親友の名を呼んでいた。

「フェイトちゃん!!」

瞬間、なのはと聖は地にぶつかるとギリギリでフェイトに抱きとめられた。

「間に合った……!!」

「うん……ありがとう」

なのははフェイトに礼を言い、フェイトもそれに頷くと、ゆっくり

と二人を降ろした。

「二人とも大丈夫？」

「うん、私は大丈夫なんだけど、聖くんが……」

なのはが言うとフェイトも聖の方に視線を向ける。彼の口の周りには真っ赤な血がこびり付いており、胸を苦しそうに押さえては口から大量の血を吐いていた。

「ゲホッ！ う……ぐう……!!」

「聖!! しっかりして聖!!」

「聖くん!!」

二人が呼びかけると、待機状態でいたクラウンが二人に声をかけた。

お二人とも、まずは冷静にシャマル様を呼んでください。あと、病院の確保を

「う、うん！ わかった」

フェイトは言う通通信回線を開いてシャマルと他の医療スタッフに連絡を取った。

遙か軌道上ではアルカンシエルによって撃たれたゆりかごが大きな爆発を起こしていたが、なのは達は聖を助けるのに必死だった。

犠牲

「拒絶反応？」

聖が運び込まれた病院の待合室で、待機状態に戻ったクラウンから説明を受けていたなのははそんな声を漏らした。

あの後、シャマルによって応急手当を施された聖は、そのまま以前ヴィヴィオが入院していた病院に担ぎ込まれた。

最初は呼吸も荒かったものの、段々と落ち着きを取り戻してきたのでクラウンが今の彼の状態を六課の皆に説明していたのだ。

はい。元来、聖様の身体には二つのリンカーコアが宿っています。一つは聖様自身のもの、そしてもう一つはヴィヴィオ様と同じ聖王のもので。しかし、ヴィヴィオ様と違い聖様の中にある聖王の魔力はごく小さな物です。ですので、本来はさほど身体に影響はないのですが、今回の事態は聖王の魔力と聖様の魔力を融合させてしまったことにあります

「じゃあ聖くんは、本来使えへんほど小さな聖王の魔力を自分の魔力でブーストしてるってこと？」

話に疑問をもったはやてが首をかしげながら問うと、クラウンはそれを否定した。

いいえ、それは少々違います。聖様はいつかスカリエッティらを倒すために数年間をかけて聖王のリンカーコアに自分の魔力を送って育てていたんです。しかし、聖王のリンカーコアが大きくなれば身体にダメージが及びます。ですから聖様は私の機能の一つを使ってリ

ンカーコアを来るべき日まで封印していたんです。

そして、今回自分のリンカーコアと封印を施していた聖王の魔力を解き放って体内で融合させた。と言うことです。しかし、聖王の魔力は聖様にとって身体を蝕む猛毒のようなもの、それを長時間維持し続けなければ体への負担は多大なものです。

「じゃあ今呼吸が落ち着いてるのは？」

一時的です。もし、このまま聖様を放置していればあの人は確実に死にます。最高で生きられたとしてもあと三日、最悪の場合あと二十四時間です。

あまりにも残酷な宣告に六課のメンバー全員の顔が苦悶に歪む。同時に、フェイトがクラウンに問いを投げかけた。

「どうにかする方法はないの？」

その問いは六課全員が思っていたことであり、誰もが聖を救うための方法を模索していた。

すると、クラウンは静かに言い放った。

「一つだけあります。これを使えば間違いなく聖様を救えます」

「ど、どんな方法!？」

なのはが声を上ずらせながらクラウンに問うた。クラウンはそれに静かに答えようとした。しかし、

「ダメだよ、クラウン。その方法はあなたが壊れてしまっ」

その声を漏らしたのはマリエルだった。彼女は真剣な面持ちであり、皆もあまり見たことがないマリエルの真剣な様子に疑問を浮かべていた。

マリエル様、いいんですよ。私は既に死んでいてもおかしくはない身………だったらこの命、主のために使うと言っつのがセオリーでしょう

「あなたが言いたい事はわかる。でも！ それでも………！ あなたを犠牲にして助かることを聖くんが望んでいると思っつ！」

「ちょ、ちょ二人とも話が見えてけえへんから説明を挟んで欲しい！ クラウン、アンタがやるっつとしてる」っつてのはなんなんや？」

マリエルとクラウンを仲裁するようにはやてが割って入る。マリエルのほうは「それは………」と口ごもってしまったが、クラウンはいたって冷静に告げた。

簡単です。私のシステムの中『魔力乖離』と言っつものがあります。本来はリイン様のような融合機とユニゾンをした魔導師と融合機を強制的に引き剥がすシステムですが、それを応用して聖様の魔力と聖王の魔力を引き剥がすのです。

しかし、それをするとは私は自身を維持することが出来なくなり、コアからフレーム私に関する全てのものが消えっせます。無論、再生や修復など不可能です

クラウンの宣言に誰もが息を呑み、マリエルは涙を流した。しかし、フェイトが最後の望みを見出すようにクラウンに問う。

「手を借りるのは不本意だけど………スカリエッティならどうにかする方法を知っているんじゃない？ 聖を生み出したのがスカリエッ

テイなら直す方法だって、それにクラウンが消滅しない方法だってあるはず」

ありませんよ

まるでフェイトの言葉を断つ様にクラウンは冷たく言い放った。

いいですか、フェイト様。もとよりスカリエツティは聖様を道具として利用するつもりだったんですよ？ その道具が壊れれば聖様の生態データからまた新しいものを作り出せばいいとも考えていました。そして何より私に自壊プログラムをつけたあの男が私が消滅しないようにするなどするはずがないでしょう

「自壊……プログラム……？」

ああ、そういえばまだ話していませんでしたね。先ほど言ったと思いますが、私は本来であれば壊れている身です。ですがなぜこのようにまだ生き長らえているかと言うと、マリエル様のご助力があったからです。私の中に存在する自壊プログラムは決して解くことのできない古代のもの。しかし、マリエル様のお力によって私は何とか生きていると言う感じです。

そして、それももうすぐ終わります。そうでしたよね、マリエル様？

クラウンが彼女に聞くと、マリエルは目尻に涙を溜めながら悲しげに言った。

「……うん、私の力でも、管理局のどんなに高度な技術を持ったエンジニアでも……クラウンを延命できるのは最高であと少ししかないんだ……」。

でも、だから残された時間を聖くんと過ごして欲しいんだよ……」

「マリーさん……」

なのはも目尻に涙を溜めていたが、そこでクラウンは少しだけ声を荒げたような声音で強く言い放った。

その残り短い命を使って聖様が助かるのなら、私は喜んでこの命をささげます。私だけが犠牲になれば、あの人は助かるんですよ……!! 目の前で死に掛けている聖様を私を使って救うか、このままありもしない別の方法を探し続けて彼を死なせるか……どちらが有意義かなんて皆さんわかっているでしょう

「せやけど、それは……」

はやては肩に乗って話を聞いていたリインを見つめつつ、首から下がっているシュベルトクロイツを握り締める。

彼女自身、過去に初代リインフォースを亡くしている。それも自分を救う形でだ。それは決して忘れることなど出来ない記憶であり、シグナム達も同様であった。

誰もが答えを見出せないまま、俯いたり涙を流す者が出る中、凜とした声が響く。

「私は、クラウンの方法が最善だと思う」

そう告げたのは毅然とした様子のシグナムだった。

「シグナム……」

はやてがシグナムを見やるが、シグナムは彼女に軽く会釈をすると

クラウンに問う。

「クラウン、お前が言う『魔力乖離』を起動するにはどうすればいい？」
簡単です。シグナム様ほどの方であれば私に少量の魔力を注入して
くだされば後は私が進めます

「そうか、わかった」

シグナムは静かに頷いたが、そこでスバルを含めたフォワードメン
バーが悲痛な声を上げた。

「待つてください！シグナム副隊長！確かにクラウンを犠牲にするし
か方法がないのは私たちもわかります……でも！もう少しだけ猶
予を与えた挙げたりとか」

「そうです！もしかしたら聖さんが目を覚ますかも知れないじゃな
いですか！そのときに聖さんに許可を取ったりからでも！」

声を上げたのはスバルとエリオだった。二人はシグナムに懇願す
るよつに前に出てくるが、その二人の肩をヴァイスが掴む。

「ヴァイス陸曹……！」

「……お前等、あきらめるってことをしろ。何でもかんでも万人が幸
せになんかなれねえんだ。いいか？誰かを救うときに別の何かを
犠牲にするなんて事はざらにある。今回お前等が隊長たちを救出で
きたのはたまたま運がよかっただけだ。人を助けるには犠牲だつて
必要なんだよ……!!」

それに、クラウンはもう覚悟を決めてんだ。それに水をさすような
事はここにいる誰にも出来やしねえー！」

ヴァイスの言葉にスバルとエリオは顔を曇らせる。そして二人はそれぞれティアナとキャロの下に戻ったがその二人にクラウンが声をかけた。

スバル様、エリオ様。私のことを思ってくれての発言、本当にありがとうございます。ですが、もういいんですよ。私は十分すぎるくらい楽しい時間を過ごしました

まるで笑いかけるようにクラウンは言った。そしてクラウンはマリエルを呼び彼女に礼を告げる。

マリエル様、短い間でしたが私のメンテナンスなど本当にありがとうございました。貴女には感謝してもしきれません

「……うっん、私も貴女みたいな子の面倒を見られて楽しかったよ。さっきはごめん、覚悟を揺るがすようなことを言っちゃって」

いいえ、貴女はお優しいですから。では、なのは様、フェイト様お二人にはお渡ししたいものがあります。レイジングハート様とバルディッシュ様を前に

クラウンに言われなのはとフェイトはそれぞれレイジングハートとバルディッシュを前に掲げる。

すると、クラウンのコアが光り二機に何かが送られた。

「今のは？」

私の遺書のようなものです。レイジングハート様に預けたものは聖様に、バルディッシュ様に預けたものはお二人かヴィヴィオ様も含め

てごらんになってください

それだけ言うとクラウンはシグナムの手のひらに乗るようになら彼女の手に乗った。

「では、行くか」

はい。よろしくお願いします

シグナムはクラウンを持ちながら聖の病室まで歩を進めていく。その後ろに続くようになのはやフェイト、はやて達も彼女に続く。

やがて聖の病室まで来ると、聖はベッドの上で一定の呼吸をしていた。どうやら呼吸が落ち着いて眠っているようだ。

それを確認したクラウンはシグナムの手を離れ、フワッと浮かび上がって聖の胸のちょうど真上に浮遊した。

では始めます。シグナム様、今から私が陣を展開しますので合図を送ったら魔力を送ってください

「わかった」

シグナムはレヴァンティンをデバイスモードにすると鞘から抜き放つ。それとほぼ同時にクラウンが発光を初め、ベッドを囲うように陣が形成され始めた。

数秒の後、完全に陣が完成するとクラウンがシグナムに告げた。

シグナム様、お願いします

その声にシグナムが静かに頷くとレヴァンティンの切先をクラウンに向け、魔力を注入した。

すると、クラウンが静かにシステムを解放し始める。

他システムをシャットダウン。全ての魔力を『魔力乖離』へ。魔力チャージ二十パーセント……三十五……五十……六十五……八十……九十五……魔力フルチャージ。『魔力乖離』起動

クラウンが告げると、凜の胸元から虹色と銀色の魔力が融合したりリンカーコアが抽出された。

その際聖が一瞬苦しげな顔をしたが、『魔力乖離』は進められ、リンカーコアの前に魔力で形成された一本の刃が現れた。

刃はその切先をリンカーコアに向けており、やがてそれは音もなく振り下ろされた。

瞬間、二つに交わったリンカーコアは真ん中から真つ二つに引き裂かれ、そのうち虹色の魔力は空气中に霧散し、銀色の魔力だけが聖の胸に戻っていった。

全工程……終了……。ご協力……感謝、します。シグナム……様

「礼には及ばないさ。……ゆっくりと休め、我が盟友クラウン」

シグナムに言われ、クラウンは満足げにコアを光らせた。すると、それを見ていたレイジングハートやバルディッシュが声を発した。

おやすみなさい。クラウン

静かに休め、我が友

は…………い、おやすみ、なさい。お一人…………とも

クラウンの音声はノイズ混じりになってきており、フレームやコアにはビシリと生々しい亀裂が入っていく。

それに目を背ける者もいたが、はやての肩に乗っていたリインがそんなクラウンに触れてキスを施した。

「お疲れまでした、クラウン…………」

そう、ですね…………貴女ともたくさん、話すことが…………できて、楽しかった…………ですよ、リイン様…………では、皆さん…………本当におやすみなさ…………

そこまで言ったところでとうとう限界が来たのか、クラウンはその姿をサラサラと砂のように崩れながら消した。

その後には本当になにも残らず、クラウンのかけら一つさえも何も残らなかった。

しかし、なのはとフェイトは最後の言葉の続きを聞いたような気がした。それはクラウンが残した聖に対しての最後の言葉…………。

…………貴方と過ごせて、私は幸せでした。さようなら、聖様…………。

こうして、スカリエッティたちの事件は本当の意味で幕を閉じた。幸い魔導師の犠牲者は出なかったものの、ただ一機。主の命のために己の命を擲ったデバイス『クラウン』が尊い犠牲となった。しかし、これを知るのは六課のメンバー達だけである。

クラウンがその命を犠牲にして聖を救った翌日の夕刻、聖は目を覚ました。

最初は聖が目を覚ましたことになのはとフェイト、ヴィヴィオが涙を流して喜んでいたが、やがて、話はクラウンのことに切り替わる。

しかし、なのはもフェイトもなんとさえばいいものかと悩んでいた。しかし、言わないわけにもいかず二人はおずおずと話し始めた。

「あの、ね。聖くん、落ち着いて聞いて欲しいんだ。クラウンのことなんだけど……」

「ああ……死んだんだろ？ 俺を救うために」

「え？」

「聖、誰から聞いたの!？」

二人が疑問を浮かべていると、聖は悲しげな笑みを見せながら肩を竦めた。

「夢の中でさ、クラウンが『さようなら』って言ってたんだよ。だから、なんとなくなかな。あとはいつもみたいにあかましく声を出してこないからさ。……そっか、アイツ死んだのか……」

聖は天井を仰いだものの、その目尻には涙がたまっていた。それを見ていたなのはとフェイトが顔を見合わせると、なのはは昨日クラウンから預かったものを端末に送信して聖に見せた。

「聖くん、昨日クラウンから預かったものなんだけど聞いてくれる？」

「クラウンから？」

聖は端末を受け取ると画面を見る。画面には音声ファイルを再生していると思しきウィンドウが展開されており、数秒の後クラウンの声が聞こえた。

『どうも聖様、これを見ているという事は私は既に……なんてことは言いません、え？ 何でかって？ めんどくさいからですよ。ありがとうございます？』

まあそんな事は置いといて、どうやら無事助かったようで何よりです。けどあれでしょ？ どうせ私がいなくてなきそうにでもなってるんでしょ？ もしそうならなっさけないですねー、そんなんでなのは様たちとやっていけるんですかねえ。先が思いやられますよヤレヤレ』

すると、聖はそこで再生を止めた。二人が彼の顔を覗き込むと、聖のおでこに血管が浮き上がっていた。

「コイツは……死んでなお俺をおちょくるのか……」

「ま、まあクラウンらしいと言えばらしいからさ、続き聞いてみよう
」
「や」

フェイトに言われ聖はため息をつきつつ再生を始めた。

『あ、今もしかして再生止めました？ どうせ「死してなお俺をおちよくってんのかコイツは」とか思ってるんでしょー。まっ、そんなことはわかりきっているのだから真面目なお話です。』

聖様、今回は私の独断をお許しください。しかし、わかって欲しいのです。貴方を救うために致し方なかったと。あのままでいれば聖様は死んでいましたから、多くの人を悲しませない為の処置だったのです。ああ、あと私の介錯をしてくれた方……多分シグナム様あたりですかね。もし違ったら場合は違う人にお礼を言って置いてください。

はい、ではそろそろ最後にしたいと思います。え？「短すぎじゃね？」って？何を言ってるんですか、こっぴつのは短い方がいいんですよ。私の後継機についてですが……決して私の名をつけないように。間違ってもクラウンとか安綱式式とかにはだめですからね。その理由としてはいつまでも私に執着しないでくださいってことです。私は私、後継機の子は後継機の子です。その子にはその子の生を送ってあげてください。

さて、それではこれでお別れです。ああ、一応置いて置くとこれは聞き終わると五秒後に自動的に削除されますのであしからず。それでは！今度こそ本当にさようならです。貴方と過ごせたこと、私は誇りに思ってますしとても楽しかったですよ。なのは様、フェイト様、ヴィヴィオ様と末永くお幸せに。ではでは何かいいことあったらいいですね、お相手は安綱ことクラウンでした』

若干おちゃらけた言葉を最後に音声はそこで終わっていた。そして、同時に音声の自動削除が始まった。

「クラウン……」

「最後まで明るく振舞ってたね」

二人が言つと、聖は大きなため息をついたあと、背筋を伸ばすように大きく伸びをした。

ずっと眠っていたためか背骨がボキボキとなったが、聖は大して気にせずベッドから跳ね起きた。

「まったく、最後まで人をおちよくっていきやがって。まあアイツらしいって言えばアイツらしいか。さて、それじゃあ皆のところにも行くかね」

「動いて平気なの？」

「ああ、これぐらいどーってことねえよ。つか、いつまで寝転がってたら体が鈍っちまう。それに、過去のことをくよくよしたってしょうがねえ。さあ、皆のところ行くつぜ」

ベッドから降りた聖だが、なのはとフェイトはそれに若干心配そうな顔を見せた。しかし、聖の瞳にいつものような力強い光りが灯っていたのを確認すると聖の横を歩きながら皆のところへ向かった。

その途中、夕日に顔を照らされながら聖はクラウンに心の中で告げた。

……命救ってくれてありがとな、クラウン。お前は俺の最高の相棒だったぜ。

彼はそのまま満足げな笑みを見せながら病院の廊下をなのは達と歩いていった。

その後

事件から一ヶ月ほどたち、六課の隊舎も完全に修復されそれぞれのメンバーが通常の業務に戻っている中、聖はフェイトと共に軌道拘置所内の面会室にいた。

「聖……ほんとに大丈夫？」

「心配すんな。アイツに会ってキレイやしねえって」

フェイトの問いに聖は軽く笑って答えて見せる。すると、強化ガラスで仕切られた面会室の向こう側の扉が開いて目当ての人物であるスカリエッツィが現れた。

「やあ君達から面会があるなんてね」

「うっせ、つか割と元気そうでムカつくぜ」

「おやおや。仮にも管理局員がいつていい言葉とは思えないねえ。そう思うだろう？ テスタロッサ執務官」

スカリエッツィの言葉にフェイトは答えなかった。しかし彼は肩を竦めて不敵な笑みを浮かべるだけで、特に気にした風もなかった。

「そういえば君の目。どちらも赤くなったようだが……何があったね？」

「聖王の力を手放した。俺にはもう必要なくなったからな」

「ほう、自分と残念なことをしたものだね。しかし手放したとなると、

クラウンはもう壊れたか」

「ああ、逝っちまったよ。で？ お前はどうかだよ少しは反省でもしたか？」

聖が言うとスカリエッティは一瞬呆けたような顔をした後くつくつと笑いを漏らした。

「反省……反省ねえ。全く君はおかしなことを聞く。私が反省する意味など何処にある？ 私は私の目的のために行動したまでで、誰かに咎められるなど筋違いだろう？ しかし、こうして捕まってしまっは元も子もないがね」

「そーかい。まあテメエならどうせそういつと思ったよ」

聖も肩を竦めてみるが、更に付け加えるようにスカリエッティは続ける。

「それにこんな牢獄でも研究をしようと思えばできるからね。退屈はしないさ。ああそついえばチンク達は元気かい？ 私達とは別の更生施設に送られたそうだが？」

「元気そつだったよ。あいつ等はまだ不幸中の幸いってヤツだな、お前に汚染されてねえから」

「ククク、言ってくれる。おっと、そんな話をしていたらもう時間のよつだね」

彼が言うとおり、既に面会時間は終わる十秒前だ。聖もそれを確認すると無言で立ち上がって踵を返すが、そこでスカリエッティが彼に声をかけた。

「エシエク……いいや、今は白雲執務官だったか。ドゥーエが会いたがっていたよ？ 会って行ってはいいかがかね？」

「……知るか」

聖は短く答えるとフェイトと共に面会室を後にした。

姿を消した二人を思い出しながらスカリエッティは口元を吊り上げ面白そうに笑った。

「相変わらず君はあまい……しかし、そこが面白い」

拘置所の廊下を歩きながら聖は大きくため息をついていた。

「あー、なんでアイツと話すとこんなに疲れるんだか……」

「まあ同意はするよ。私もあんまり話したくないし」

「アイツ、絶対またなんかたくらんでるな」

呆れたようにもう一度溜息を漏らす聖だが、そこでフェイトが問う。

「ねえ聖、ドゥーエって……」

「ああ、俺がガキの頃、あいつ等に兵器として育てられてた時に一番世話してきたヤツだよ」

「心配だったりするの？」

フェイトが問ってくるが、聖は小さく笑みを浮かべて手をパタパタと振った。

「それはないな。アイツも結構外道だし、心配することなんか微塵もねえ。それよりも、午後からは六課戻って新しいデバイスの相談があるってシャーリーとマリーさんが言ってたから、行くとしよっぜ」

「あ、うん」

フェイトは頷き聖に後に続いた。

六課に戻りデバイスルームに二人が入ると、既にシャーリーとマリエル、そしてリインフォースがいた。

「あれ？　なんでリインが居るんだ？」

「それは私も貴重なスタッフの一人だからです」

リインは小さい身体でえっへんというように胸を張るが、シャーリーが補足を加えた。

「実はリイン曹長にもいろいろお手伝いをしてもらいたくて私達と呼んだんです。いつもなのはさんのレイジングハートやフェイトさん

のバルディッシュ。フォワードメンバーのデバイスの調整の時も来てもらってますから」

「なるほどね。まあいい相棒を作ってくれるんだから感謝しねえとな。サンキュなリイン」

聖が言う通りインフォースも笑みを浮かべる。

「じゃあ早速どういうデバイスにしたいか聞いていくから、そこに座ってくれる？」

マリエルが端末を手に聖に座るように促す。聖もそれに頷くとマリエルに言われた先に腰を下ろした。

「フェイトさんはどうしますか？ 多分一時間くらいかかると思いますが」

「そうだね……じゃあ私はヴィヴィオのところに行くよ。またね、皆」

フェイトはデバイスルームを出ながら皆に手を振った。残された四人はそれぞれ端末を操作しつつ、マリエルが聖に聞いていく。

「それじゃあ最初に待機状態の形だけど、何がいいかな？ ネットレスとかプレスレットとか、ちょっと変わった感じで行けばティアナみたいなカード型もあるけど」

「そうつスねえ……じゃあネットレスをお願いします」

「ん、了解。それじゃあ次はフォームはどれぐらいあったほうがいい？」

「三つ……いや四つでお願いします」

聖は口元に手を当ててマリエルに言うと彼女も頷いて端末に入力していく。

「次はいよいよそれぞれのフォームの形を決めていこうか。とりあえず挙げて言ってくれる？」

「わかりました。じゃあ最初はやっぱり使い慣れてるんで刀、二つ目は双剣で、三つ目は大剣。んで最後はガントレットとグリーヴでお願いします」

「うんうん、なるほどなるほど。というかやっぱりクラウンと被るよねえ」

マリエルは少しだけ意地悪そうな笑みを向け、シャーリーとリインフォースも薄く笑みを浮かべていた。

聖はそれに方を竦めつつも答える。

「そりゃしょうがないっすよ。一番使いやすいのがその形なんだから」

「まあそうだね。さてと、それじゃあこの後はもっと細かい設定をしていくからもう少し聞いていくからね」

その言葉に聖は静かに頷くと、そのあと一時間近くデバイスルームにこもって新しいデバイスについて話し合った。

デバイスルームを後にした聖は少しだけでもよおしてしまったため、トイレに向かった。

トイレに入りようを足した聖は手を洗うが、そこで目の前にある鏡に映った自分の姿を見て少しだけ自嘲とも取れる溜息を漏らした。

拘置所でスカリエッティにも言われたことだが、聖の瞳は聖王の力を手放して以来、どちらも真紅の瞳に変わってしまった。

以前は片方が緑色だったのだが、聖王の魔力が抜けたことにより両方とも同じ色になったのだ。しかし、失った力による影響は髪にも現れ、今は真つ黒な黒髪に変化していた。

「まあ俺的にはこっちの方が似合ってるかな……」

小さく呟き、軽く髪をかきあげると彼は残っている仕事を済ませに行った。

隊舎に設置されているデスクにやってくると、聖は執務官としての仕事を始めた。

事件の事後処理のデータ整理や、被害損失、事件の捜査資料など様々なことに目を通し、文章を纏めているといつの間にか開始してから数時間が経過していた。

「……つともしつゝんな時間か……」

時間を見ると既に時刻は午後五時をさしていた。聖は端末の電源を落として立ち上がってから大きく伸びをした。

長い時間デスクワークをしていたため背骨がグキグキとなったが、聖は特に気にした風もなく大きく息をついた。

「ひーじりくゎ」

「どわぁッ!？」

いきなり声をかけられ思わず飛び上がってしまったが、聖が後ろを向くとなのはが悪戯っぽい笑みを見せていた。

「なのはか……アレ？ 新人達の訓練はもう終わったのか？」

「うん。今日はいつもよりも早く切り上げたんだ。皆がんばってるから褒めみたいな感じかな。それにしても聖くんすごい集中してたね」

「ああ、今日中に纏めなくちゃいけない資料があったな。それでなんか用か？」

聖が問うとなのはは思い出したように手を叩いて彼に告げた。

「ご飯にしようと思ってるさ。まああと一時間したらなんだけど、ヴィオも「パパと一緒にいいー」って言ってたし」

「あー、そだな。最近忙しくて一緒にメシ食えてなかったからな。よしわかった」

彼が言うとなのはも嬉しげに笑みを見せ、二人は寮の部屋に居る
ヴィヴィオとフェオトを呼ぶために寮へ向かった。

道中、なのはは聖の新しいデバイスについて問うてみた。

「デバイスはどんな感じ？」

「今日色々話して方向性は決まったから、再来週ぐらいには出来る
みたいなこと言ってたぜ」

「そっか。新しい子はどんな風にするの？」

「クラウンの時と似たようなもんだな。ああでも一個追加した
フォームがあったな」

「へえ、どんなの？」

なのはが聞くと聖はにやりと笑いながら答える。

「大剣だ、読んで字の如くでっかい剣」

「大剣……バルディッシュのザンバーフォームみたいな感じ？」

「感覚としてはそうだな。後は刀に双剣とガントレットか」

「名前とかは決めたの？」

「いいや、まだだ。名前は出来てっから決めようと思う」

聖の言葉をなのは頷きながら聞いていたが、そこでレイジングハー
トが声を発した。

新しい仲間が増えるのは嬉しいことです

「だね。私もどんな子が出来るのかすごく楽しみだよ」

「ああ、俺もだ。レイジングハート、できた時は先輩としてビシッと
いってやってくれよ？」

わかりました

二人と一機はそんな他愛もない話をしながら寮に戻っていった。

寮の部屋に戻るとフェイトとヴィヴィオがおり、ヴィヴィオは画用
紙にクレヨンで絵を描いていた。

だが、二人が戻ってきたことに気がつくと彼女は聖に駆け寄った。
聖もかがんでそれを迎えると勢いをそのままに彼女を高く抱き上げ
た。

「パパ、おかえりー」

「おー、ただいまヴィヴィオ。今日もいい子にしてた見たいで何より
だ」

聖が笑顔を見せながら言うとヴィヴィオも嬉しげに笑顔を見せた。
前までなら半べそをかきながら彼に抱きついていたところだが、今は
そんな事はなくなりヴィヴィオはないていることよりも笑っている
ことが増えていた。

「おかえり二人とも。聖、デバイスの方はどうだった？」

「再来週には出来るってよ。それよりもメシ行こうぜ、腹減っちゃまった。なあヴィヴィオ」

「うん……」

ヴィヴィオを肩車しながら彼が言つと、なのはとフェイトも頷いて四人は食堂へと向かった。

食堂へ向かう四人の後方にまるで彼等を監視するようにつごめく影が五つあった。

「お、聖くん達ご飯行くみたいやなあ」

そういったのはバツテンの髪留めが特徴の六課の部隊長であるはやてである。更にその後ろに興味津々と言った様子のスバルと呆れつつも少々気になっているティアナ。そして完全に巻き添えを食らったエリオとキャロの姿があった。

「あの、部隊長？　いくらシグナム副隊長達が居ないからって僕達を誘わなくても」

「なに言つとんのエリオ。聖くんは二人に好きって言われとんのにまだ正式にどっちにするのかも決めてへんのよ？　これはどっちが選ばれるのかその瞬間を見るのが皆を纏め上げる部隊長の役目にきまってるやろ」

完全に己の趣味ののような気もするが、スバルははやてと気になることが一緒なのかうんうんと頷いていた。

それをみていたティアナやエリオ、キャロは若干苦笑いだが実のところ彼等も気にはなっている。

「まあミッドって申請さえすれば一夫多妻だろうが一妻多夫だろうが行けるんやけど、どっちが先になるかすごい気になるやん!! それにもしかしたら正妻戦争とかおこりそうやし」

「そんな万能の願望機を求めて争う戦いみたいな風に言わないでください」

ティアナはヤレヤレと溜息をつくが、はやてはそんなことを気にもせず食堂へと向かった。スバルは嬉々としてそれに参戦していたが、三人も一度乗りかかった船なのか仕方なくついていくことにした。

食堂に到着すると四人はそれぞれ自分の食べたいものを注文して席に着いた。ヴィヴィオも三人に頼らずに自分で運んでいた。

食べながら談笑していると、ヴィヴィオが苦手なピーマンとらめっこをしていた。

そこでののはとフェイトが声をかけようとしていたが、聖がアイコンタクトでそれを制するとヴィヴィオはピーマンをスプーンですくって口に入れた。

一瞬顔を苦悶に歪ませるが、何度か咀嚼すると彼女はゆっくりとピーマンを嚥下した。

「お、ヴィヴィオ。ピーマン食べられたか、えらいなー」

「う、うん！ 私がんばった」

「ああ、すごくがんばったな。でもなヴィヴィオ、ピーマンはそれだけで食うから苦いんだ。何かと一緒に食べれば苦さなんか大して感じないかなら、次はそうやって食べてみな」

「わかったー！」

聖の声にヴィヴィオは大きく頷いて食事を再開した。

四人が食事をしているのを影の方で見ているはやては「うーん」と唸っていた。

「なんや、やっぱりこじじゃそついうのはいわへんか」

「さすがに他のスタッフの人も居ますからそれは無理じゃないかと」

キャラも苦笑いで答えると、ティアナとエリオは同意するように頷いた。

「えーでもこういうのってなんだかワクワクしてこない？」

「アンタ、地味に興味悪いわねスバル」

ティアナが呆れた様子でため息をつくとき、彼女はスバルの襟を引っ掴んでずるずると引きずりはじめた。

「ほら、いい加減戻るわよ」

「あー待ってー！ まだご飯食べてないー!!」

「後でいいでしょうが」

ティアナは駄々をこねるスバルを尻目に彼女をずるずると引きずり部屋へと戻っていった。

「僕達も一回戻って後で来ようか」

「そうだね」

「なんや二人も帰ってしまっくん？ そんなら私もどろかなー、そろそろリインも帰ってくる頃やし。なのはちゃん達の監視はまた今度にしよ」

「やめる気はないんですね……」

エリオが溜息混じりに言い、キャラも苦笑いを浮かべてもはやては「当然やー」などと小悪魔のような笑みを浮かべて自室に戻っていった。

深夜。

なのは達が眠るベッドの傍らで聖はソファに座りながら夜天に浮かぶ二つの月を見上げながら小さく呟いた。

「前に好きだとは言ったが……やっぱりどっちかに絞らなきゃだよなあ……」

聖はスカリエツテイ達との戦いの前、二人に自分がどんな存在なのかを説明した際に勢いあまって二人に「好きだ」といつてしまったことを思い出していたのだ。

「……いやどちらもすっげー美人だしかわいいとは思っけど……。なんであそこで言っちゃったかなあ。」

声にならない声で「ぬおおお」とのた打ち回る聖だが、やがて動きを止めてガバツと起き上がり覚悟を決めたように言った。

「よし、決めた。もうちょっとしたら言おう……」

大して覚悟は決まっていなかった。

新しい相棒

聖の新デバイスが開発され始めてから二週間後、予定通りに聖の新デバイスが出来上がったとの連絡が入った。

連絡を受け取り、聖は訓練場へやって来た。

「なぜに訓練場？　つーかマリーさんはどったの？」

「マリーさんなら今外せない用事があるらしくて、もっ少ししたら来てくれるみたいです。」

あと、何で訓練場かというとすぐに性能を試したいじゃないですか。それにホラ、ちょうど手合わせをする人物もいますし」

すこし悪戯っぽい笑みを浮かべてシャーリーが指した方向にいたのは、既にレヴァンティンを鞘に収めた状態のシグナムと、バルディッシュを携えたフェイト、そしてにこやかな笑みを浮かべているなのはがいた。彼女の傍らにはレイジングハートが浮遊していた。

「……………六課の戦闘狂が勢ぞろいか……………」

「何か言ったか？」

「いえ、なにも言ってますん」

顔を逸らしつつ答えると、今度は六課の隊舎の方からはやてや、ヴィヴィオ、スバル達が小走りにかけてきた。

どうやら聖の新デバイスのお披露目を見に来たようだ。

「お前等まで来なくて良いつてのに」

「えー、でも楽しみゃんかー。隊長格の戦闘も見られそうやし、フォードメンバーにもええ勉強になるやろ」

「だったらヴィータもでるんじゃないの？」

「アタシはパスだ。そんなめんどくさいことに付き合ってらんねー」

肩を竦めながら呆れた様子でため息をつくヴィータに聖も内心で同意しつつ、スバルたちの方にも目をやった。

「お前等だって午前中は訓練だったんだから、昼ぐらいは休んで立ってよかったんだぜ？ ヴィヴィオも」

「隊長格同士の戦いなんてあんまり見られませんし。勉強のためですよ。それにヴィヴィオも自分から行きたいって言ってましたし。ねー、ヴィヴィオ」

手を繋いでいるヴィヴィオに笑顔を向けたスバルに、ヴィヴィオもコクンと大きく頷いて答えた。

その様子を見つつ、いずれなのはと同じような性格に育つのではと心配になった聖だが、一応黙っておくことにした。

「まあ何でも良いけど、ヴィヴィオ、これから俺となのはママ、フェイトママは戦つが別に喧嘩はしてないからな」

「うんー… わかってるー」

大きく手を挙げて了解した彼女に苦笑を浮かべていると、マリエル

たちの準備も完了したようで、リインフォースが聖の新デバイスを持ってきた。

「聖さん、この子が貴方の新デバイスですー。仲良くしてあげてください」

「どーも」

彼女から渡されたのは聖の魔力色と同じ白色に、薄い青をいれた様な色をした刀をイメージした形のネックレス型のデバイスだ。

「まだ名前の認証が済んでいないので、最初に『起動』とだけ教えてください。そのまま認証に写ってくれます。フォーム名はデフォルトの刀型の『ユーヴァハル』。双剣型の『ラファール』。大剣型の『アヴァランチ』。そしてガントレットとグリーヴの『アングリッフ』てなってるので、間違えない様にです」

「ああ、わかった。んじゃ……『起動』」

瞬間、彼を囲むようにミッド式の円形魔法陣が展開された。同時に聖の全身を包みこむように魔力光が展開した。そしてデバイスが声を発する。

使用者認証完了。使用者、時空管理局機動六課所属、白雲聖執務官。続いて、名称登録に写ります。名称をどうぞ

「ん、名称は……『シュトラルス』だ。よろしく」

「シュトラルス」……登録完了。では、改めてよろしくお願いします。マイマスター・聖

「おつ、よろしく頼むぜ。とりあえずはデフォルトのユーヴァハルで展開頼む」

それに答えるようにシュトラルスのコアが光り、聖の四肢もバリアジャケットに包まれていく。

手のひらには指先まで包まれていない指出しのグローブ。上半身には黒を基調としつつ、所々に白い金属質の部分が取り付けられている半袖の黒い内着。その上にはなのはのバリアジャケットとやや似た色使いのジャケット。下半身は黒を基調としたカーゴパンツだ。

そして仕上げと言わんばかりに彼の肩にはフェイトと同じような袖のついた純白のマントが展開した。

バリアジャケットの全展開が終了し、今度はシュトラルスがデバイスに変化を始める。

一度コア以外の部品が弾けて消えると、一瞬の後に弾けたパーツは光りの粒子となってまず最初に刀身の形成を始めた。刀身は刃の部分が白銀の輝きを持ちつつ、峰は漆黒だった。

刀身の形成が完了すると、今度は柄とカートリッジが形成される。柄の色は白銀で、カートリッジはシグナムのレヴァンティンを髣髴とさせるものだった。

そして柄とカートリッジ、刀身が繋ぎ合わせられると刀のちょうど鐔にあたる場所にシュトラルスのコアがはめ込まれた。

全ての行程が終了し、聖を包み込んでいた光りが霧散して皆の前に姿が露になった。

聖の姿が明らかになると、皆が息をのむ音が聞こえたが聖はシュトラルスが馴染んでいるか確かめるように軽く振るう。

すると、振るい終わった聖に対しシュトラルスが問う。

いかがですか？

「ああ、軽い手に馴染む。最高だな」

それは良かった。私は貴方の従僕ですので、「ご命令はなんなりと

「従僕って……そんな関係のわけねえだろ、俺とお前は対当の相棒だ。俺が間違っていたりすれば普通に叱責をしる」

はあ……。よくわかりませんがそういうものなのですか？

「そういうもんだよ。まあその辺はお前の先輩達から教授してもらえ。さてっと……待たせたな、それで誰からやる？」

シュトラルスとの会話を終えて聖が既にバリアジャケットを展開して準備万端の三人を見やると、シグナムが静かに前に出た。

「私から行こう。ちょうどお前も剣のフォームでいることだしな」

「のっけからシグナムさんですか……。最初はフェイト辺りが来るかと思ってたんですけど」

「なに、テストロッサは私の上官だからな。上司の前に部下の私が戦ってみてテストロッサに勝利を齎すという物さ」

薄く笑みを浮かべるシグナムだが、彼女の目には明らかに隠しきれ

ていない闘争心が出ていた。

フェイトを見やると、もう、またシグナムは私をからかって……」などとしただけ困った表情をしていた。

そんな彼女に苦笑しつつも、二人は訓練場の中空に躍り出ると互いにそれぞれのデバイスを鞘に収めた状態で向かい合う。

下ではなのはが皆を安全な場所まで下がらせ、シャーリーが訓練場の端末を操作していた。

すると、聖とシグナムの間にモニターが表示されはやての声が聞こえた。

「あーあー、マイクテスマイクテス……こほん、ほんならこれから模擬戦を開始するけど、制限時間は八分でどっちかが参ったをするか、気絶したらそこで終了でええな？」

「はい」

「おう」

「どっちもええみたいやね。では、今から十五秒後に開始や」

はやての声が聞こえなくなると、モニターが切り替わってカウントが始まった。

「こうして模擬戦を行うのは事件の後で初めてだな」

「そうですね。事件の後は結構忙しかったですし、そういったアギトのほうは大丈夫ですか？」

「ああ、問題はない。いずれ私のもう一人の相棒として活躍してくれるわ」

二人が話している間もカウントは減っていき、既に残り八秒ほどだ。

「さて、久しぶりの模擬戦だからな。手加減してやれるかわからないな」

「心配なく。こっちも本気で行かせてもらいます」

互いに自然と笑みが出てくるが、彼等からはすさまじい気迫が発せられていた。そしてラスト五秒。一人はデバイスを手に構えを取る。

「気をつけるよ、シュトラルス。あの人とあの人デバイスのレヴァンティンは超強敵だ」

わかりました

シュトラルスが言い終わると同時にカウントがゼロになり、シグナムと聖は完全に同時に動き、刹那の瞬間には己のデバイスをぶつけ合っていた。そのまま鏖迫り合いが始まるかと思いきや、二人は一度距離をとると、またしても距離をとってからぶつかり合う。

二人がぶつかるたびにそれぞれの魔力光が雷撃のようにほとばしり、二人が動いた後には魔力がほつき星の如く尾を引いていた。

「フッ!!」

短い呼吸とともに放たれたシグナムの一闪に聖は大きく吹き飛ば

され、廃ビルに直撃しそうになるが、空中で身体を反転させると、ビルに衝突するギリギリで魔力で形成した足場を作って一気に蹴り出す。

「ハッ!!」

下段から振り上げた逆袈裟斬りをシグナムに放つが、彼女はそれをレヴァンティンの刀身で滑らせるようにして払った。その際、衝撃で火花が散ったが、二人は気にした様子はない。

そのまま二人はきりもみ飛行をするようにデバイスをひたすらぶつけ合う。

「ほえー……前に見たときも聖くんすごかったけど、今見ると前以上に成長したるなあ……」

「というか、アレでまだカートリッジ使ってないって言うのがすごいといえますか」

そういったのはティアナだった。彼女は苦笑いをしていたが、彼女と同じように思ったのはスバルたちも同じらしい。

けれどそんな彼女達の隣ではヴィヴィオが聖の戦いぶりを見て嬉しそくに笑みを零した。

「ヴィヴィオ? ぶっつけたの?」

「あのね、フェイトママ。今のパパすっごく楽しそう」

彼女の言葉にフェイトとなのはが思わずモニタを見やると、確かに聖の表情は何処となく柔らかかった。

「やっぱり、気にしてないって言っても気にしてたんだねクラウンのじい」

「うん、たまにだけど寂しそうにもしてたし……でも、あの様子ならもう大丈夫そう」

既に何十とぶつかり合って互いに笑みを浮かべる二人は、またある程度の距離をとった。

「ふむ……最初に出会った頃と比べるとかなり腕を上げたな。以前のよつな迷いもない、いい剣だ」

「どーも、まあでも剣術じゃシグナムさんには勝てないこともありますけど」

「謙遜するな。素直に賞賛しているだけだ。さて、戦闘時間ものこり四分半かまだまだ楽しめそうだな」

言いつつレヴァンティンから真紅の弾丸が吐き出され、紫炎が這うように刀身を包む。

それに答えるようにシュトラルスからも弾丸が吐き出されて、レ

ヴァンティンと同じように白銀の魔力があふれ出す。

「ではこれからは先ほどまでの比ではないが……ついてこられるか」?

「はい。いくらでも打ち合つ覚悟は出来てますって」

「いい覚悟だ」

瞬間、シグナムの姿が残像を残して消えると、聖の肩を狙うようにレヴァンティンが振り下ろされる。

けれど聖もその攻撃は予測できていたのか、落ち着いた様子でシュトラルス掲げて斬撃を防ぐ。

レヴァンティンとシュトラルスが衝突することにより、それぞれの魔力が周囲に放出され、二人の肌を擦過した。

「やはりお前との戦闘は心躍るな、聖！」

「そいつはありがとうございますっ!!」

言いながらシグナムを弾くと、彼女は空中で身を翻して聖を見据えるとレヴァンティンを真横に構えた。

「レヴァンティン……」

Schlangeform!

シグナムの意図に答えるようにレヴァンティンのカートリッジが吐き出され、刃の形状が変化し、鞭状連結刃へと姿を変えた。

「お前との戦いで見せるのは初めてだな。以前、テストロツサも苦しめたフォルムだが……果たしてお前に見切れるか？」

シグナムの誘いに聖も小さく笑みを浮かべると、シュトラルスに言った。

「シュトラルス、わかるか？」

はい。あの形状から察するに、恐らく中距離の攻撃が可能かと。同時に、かなりの位置まで伸ばすことも出来ると思われれます

「ああ。けど、アレを突破すれば剣の状態にすぐ戻す事は出来ないから、防御が出来ない。ねらい目はそこだ、だから後はわかるな？」

……アヴァランチですね？

その声に静かに頷くと、シグナムが声をかけてきた。

「相談は終わったか？」

「ええ、じゃあ残り時間も少ないことですからさっさとやりましょうか！」

聖は足に魔力を溜めて一気に蹴り出し接近するものの、連結刃となったレヴァンティンの切先が彼の胸に向けて放たれる。

それを見切れない聖ではなく、切先を避けて見せた。しかし、彼が再びシグナムを見据えると、彼の周囲にレヴァンティンの分かれた刃が球体を作るように展開されていた。

「マジかよ……！」

展開が速いですね

「そんなこと言ってる場合じゃねえってッ！ シュトラルス！」

了解

シュトラルスが答えた瞬間、展開されていた連結刃が一気に束ねられて聖を拘束にかかる。そして、収束されたレヴァンティンの刃が激突し、魔力による衝撃から少量ながらの爆発が発生し、聖の姿は見えなくなった。

遠目から見ていた皆はその攻撃で終了したと思っていたのだが、攻撃を放った本人であるシグナムは怪訝な表情をしている。

……手応えがなかった。ギリギリで回避したか……。

「……だが、不意打ちを狙うなら背後か、真下の方がいいと思うぞ？」

彼女が言いながらレヴァンティンを元の長剣の形状に戻し、上を見上げた。

ちょうど昼時と言うこともあってか太陽は真上にあっただが、それをバックにするように黒い影があった。

段々と落下してくるその黒い影は二振りの短剣、所謂双剣を携えた聖だと言うことがわかったが、彼のバリアジャケットの装いは先ほどまでとは全く違っていた。

先ほどまでジャケットに包まれていた上半身は袖なしの内着と

なっており、首元には白のマフラーのようなものを巻いているという、かなり軽装甲の装いだっただ。

「フェイトの真・ソニックフォームよりは多少速度が劣りますけど、それでもアイツに迫る事は可能らしいッスよ!!」

「そうか、それは楽しみだが……残念ながら時間切れのようだな」

肩をすくめて言う彼女にあわせたように、訓練場のアラームが鳴り響き終了を告げた。

聖もシグナムの前に降り立つと、小さくため息をついた。

「やれやれ、お前との模擬戦はいつになったら決着が着くのだろうな」

「今度は時間無制限でどっちかが気絶したら負けにしますか？」

「そうだな、そうしよう。まあ私もこれで楽しみが増えてよかったよ」

二人は話し合いながら皆が待つベルの屋上に降り立つ。

すると、スポーツドリンクを二つ持ったヴィヴィオが二人の元に駆けて来た。

「はい、パパにしぐなむさん」

「おう、サンキュ」

「すまないな、ヴィヴィオ」

二人に撫でられてヴィヴィオは嬉しそうな顔をする。

「にしてもまあ……二人はホント相性がいいのやら悪いのやら。ようわからんね」

「どういう意味だ？」

「同じタイプのアームドデバイスをつかつとるから、相性的には戦闘面では同じ土俵で戦えとるから相性はいいんやろつけど、いざ戦ってみると勝敗が全く読めへんからね。言ってみたんよ」

「それは仕方のないことです、主はやて。聖と私の力は拮抗していますからどちらが勝ってもおかしくはないでしょう。ようは、場合によっていくらでも勝敗は変わりますよ」

シグナムの説明に納得したのははやてだけでなく、その周りにいたスバルたちもそうだった。

そんな皆を見つつ、聖はシュトラルスに声をかけた。

「で、どうだった？ 初めての戦闘は」

いきなりハードなお相手でしたが……レヴァンティンとシグナム様の関係は確かに最初マスターが言ったように、相棒といった感じでしたね。互いに考えていることがすぐに理解しているといった様子でした

「そうだろ？ まあ今すぐにああなれとは言わないさ。段々理解していけばいい。さて、これ飲み終わったらあと二人残ってるからな」

なのは様とフェイト様でしたか？

「ああ。二人も手ごわいから、覚悟はしとけよ」

わかりました

二人が話していると、その間に割って入るように赤い宝石が話しかけてきた。レイジングハートだ。

あまり緊張しなくても大丈夫だと思いますよ。シュトラルス

そうなのですか？ 戦闘は気を抜いてはいけないものだと思うのですが？

レイジングハート言葉にシュトラルスが問うと、なのはが代弁するように言葉を発した。

「そうだね、確かにシュトラルスの言う事は尤もだよ。緊張したりしないなんてことはありえないけど、あんまり緊張しすぎちゃっても本来の力が出せないし」

なるほど……そういうものですか

「うん。それに今日は模擬戦だからあんまり気を張り過ぎなくても平気だよ。ね、聖くん？」

「……お前の場合は模擬戦でも気を抜けなさそうだけどな……」

「何か言った？」

ボソッと呟いた聖に問い詰めるようになのはが威圧感たっぷりの眼光を向けてきたが、聖は口笛を吹いてそっぽを向いた。

「これから

休憩中に話し合った結果、模擬戦は2on2のチーム戦ということとなった。もちろん聖の相手はなのはとフェイトチームだ。難易度的にはベリーハードだが、決まってしまったものは仕方がない。

そして聖の相棒はというと……

「準備は良いか？ ティアナ」

「はい」

言いながら自身が展開したオレンジ色の魔法陣の上に立っているのは、クロスミラージュを構えるティアナだ。

なぜ四人のフォワードメンバーの中からティアナを選抜したのかと言うと、なのはと相性がよかったからだ。なのはのポジションはセンターガード、チーム戦では所謂固定砲台としての役割を担うポジションだ。

ティアナもまたそのポジションが向いているからこそ、聖は彼女を選抜したのだ。因みに言うと、聖のポジションはガードウィング、フェイトも同じだ。

と言うわけでこの面子なのだが、聖はにやりと笑みを見せると、ティアナに告げた。

「なあ、ティアナ。この場を借りて、前なのはにこっぴどくやられたし返しでもしてみるか？」

「う……。やめてください聖さん、それは私にとってある意味黒歴史ですから」

「ハハハ、そりゃそうだ。あん時の砲撃は流石に死ぬかと思ったなあ」

ティアナは苦笑いを浮かべ、聖はしみじみとあの時のことを思い出す。

すると、そんな二人を現実に戻すように空間モニタが表示された。

『二人とも準備はええかー？』

問ってきたのははやてだ。二人は彼女の問いに頷くと、はやてもそれを確認し、告げた。

『今回もさつき聖くんがシグナムと闘ったときと同じように、制限時間を設けるからなあ。時間内に相手チームを戦闘不能にするか、残った人数が多いほうの勝ちになるかんじでええな』

「おう」

「はい」

『ほんなら、十秒後に開始やからねー』

はやては言い残すと、モニタを閉じた。入れ替わるように二チームの間に制限時間を表示したモニタが現れた。

「まあ、結構キツイかもしれないが、気張れよ」

「大丈夫です。なのはさんからのシューターは全部撃ち落して見せますから」

「その意気だ。お前も気い抜くなよ、シュトラルス」

マスターも気を抜かぬように

若干毒のあるセリフを吐いたシュトラルスだが、聖は嬉しげな笑みを浮かべていた。

そして模擬戦開始を告げるアラームが鳴り響くと、聖が膝を曲げて一気に飛び、フェイトに接近する。フェイトもそれが予測できていたのか、バルディッシュを構えて聖の攻撃を防ぐ。

「やっぱりクロスレンジで来るよね」

「あつたりまえだろ。俺の戦闘上クロスレンジが真骨頂なんだからな」

「それは私も同じだよー」

こちらの攻撃をハーケン状態のバルディッシュで受け流しながら言うフェイトも聖と同じくどこか嬉しげだ。けれど、決して手を抜くようなことはせず、時折髪や頬に金色の魔力が擦過する感覚が伝わってくる。

……さすがに早いな。こりゃ崩すのは骨が折れそつだ。

内心で嘆息していると、視界の端から桃色のシューターが迫っているのが見えた。なのはがこちらを狙ったものだろうが、聖はそれを一切気にせず、目の前のフェイトに斬撃を放っていく。

シューターはそのまま聖の身体目掛けて接近していく。が、聖に触れるまであと数メートルといった所で、オレンジ色の燐光と共に弾けて消えた。

「……………ナイスだティアナ」

小さく呟き、チラリと眼下にいるティアナを見やると、彼女の周囲にはオレンジ色の魔力で構成されたシューターがいくつも浮遊していた。今のはティアナのクロスファイアシューターだろう。

入隊した当初はまだまだ荒削りの操作だったが、なのはの厳しい訓練と、JS事件で培った経験によって、最初のころとは比べ物にならないほど上達している。

「やっぱりティアナはセンタガードのポジションで正解だな」

「そうだね。指令も完璧に出せるし、状況判断能力も四人の中ではずば抜けてる」

「そのうち集束砲もぶちかましそうでごえーよっ!!」

言いながら斬撃を放つものの、フェイトはそれをバルディッシュで防ぎ、マントの死角からプラズマバレットを打ち出してくる。聖はそれをシュトラルスで叩き切り、難を逃れるが、フェイトから視線を離れたせいで彼女の姿を見失ってしまった。

視線を周囲に巡らせていると、左後部から閃光が駆け抜けていった。一瞬影がちらついたおかげなのか、それとも直感的なものなのか分からないが、身体を捻るようになにかわすることができた。

金色の影が駆け抜けていった方向を見やると、バリアジャケットを軽装甲状態にし、バルディツシユを二本に分割した形態、真・ソニックフォームのフェイトが見えた。

あの一瞬で装備を転換し、更には攻撃を仕掛けるとはさすがといったところか。

「真・ソニックフォームまで出してくるとか……大人気なくね？」

「勝負に大人気ないものもないよ！」

「はあ、なのはも大概だが、お前も相当なバトルジャンキーだよなあ」

「ば、バトルジャンキーじゃないってば！　ただ、模擬戦といえども聖相手だと手は抜けないからだよ！」

あたふたした様子を見せるフェイトに聖は思わず笑ってしまったが、確かに彼女の言うことも最もなので、聖もそれに答えるようにフォームを変化させる。

「シュトラルス、アングリッフフォーム」

瞬間、シュトラルスが光を放ち、バリアジャケットを別のものへと書き換えていく。

脚部装備は変わらずカーゴパンツ風だが、その上からは漆黒のグリーヴが装備され、上半身はマントが量子変換され、粒子が腕に移動し掌から肘にかけてまでを光が覆う。そして光が弾けた時、その下には薄手の手甲が装備された。そして上にかぶさるようにしてシュトラルスが一度分離し、彼の両腕に収まると、次の瞬間には漆黒のガンレットに変化した。

ガントレットにはスバルのマツハキャリバーのようにギアが付いているわけではないが、肘の裏にはカートリッジの排出口が装備されているし、カートリッジの直下には白銀色の杭のようなものが装着されている。

全体的にどこか聖王モードを髣髴とさせるフォームを確認していた聖だが、腕に装備されているシュトラルス姿を見て思わず声を漏らしてしまった。

「パイルバンカー……？」

いえ、その武装の正式名称はペネトレイトファングです

シュトラルスは言うてくるものの聖はなんともいえない表情をしていた。チラッとシャーリーを見やると、彼女の顔は何処となくにやけていたので、恐らく確信犯だろう。

「まあこの際なんでもいいや。待たせたなフェイどわあああああ
!!?」

そう言ってフェイトを見ようとした聖の目の前を桃色の太い砲撃が駆け抜けていった。なのはのデイベインバスターだ。彼女を見ると、かなりイイ笑顔を見せていた。

「い、いえー……さすがに今のはびびったぜ……」

冷や汗を書きながら動悸を抑えていると、ティアナから思念通話が飛んできた。

（大丈夫ですか!? 聖さん!）

(ああ大丈夫だ。気にすんなティアナ。それよりも、お前も大丈夫か?)

(私は撃ち落す作業だけなので大丈夫です。でも、なんとなくなのはさんが聖さんと戦いたそうにしている感じがすごいです)

(デスヨネー。なんかヒシヒシとそんな視線感じるもん。でも俺は答えないね。今はチーム戦だし。と言っわけで引き続きシューターの迎撃頼む)

(はい)

二人は通話を切ると、それぞれ自分の相手に戻っていく。聖は戦闘態勢を新たに、フェイトを見据えると、彼女もまた答えるように双剣状態のバルディッシュを構えてこちらをみやる。

「仕切りなおしていくぞフェイト!」

「うん。今度は絶対に当てて見せるよ!」

言つと同時に彼女はこちらに向けて凄まじい速度で接近してくる。さすがスピードを重視したフォームだけあり、一つ一つの行動を追うのは困難だが、攻撃してくる一瞬はスピードが下がるはずだ。

だからこそ、その一点に集中し攻撃を仕掛けるのが最善策といえるだろう。

刹那、フェイトの姿が眼前に現れ双剣が襲い掛かってくる。それを迎撃するように、シュトラルスからカートリッジが吐き出され、パイランカーが引き絞られる。そして聖は身体全体を捻り、腰を落とす

ながら双剣による攻撃を避けきると、フェイトの腹部に重い一撃を叩き込む。

「クルセイドヴァルムンクッ!!」

技名と共に放たれた攻撃は最初に拳た直撃し、それに次いで引き絞られたペネトレイトファングが追撃を打ち込み、生成された魔力弾で対象を打ち抜くというものだ。

さすがのフェイトもここまで肉薄すれば避けられないだろうと、聖は内心で笑うが、その予測は容易に覆されるものとなってしまった。

フェイトは一瞬の判断で上体をブリッジをするように逸らし、そのまま地面に落下する形で攻撃を回避したのだ。

「チッ!」

舌打ちをしつつ追撃を加えようと彼女の後を追おうとした瞬間、聖は自身の両手と両足が動かないことに気が付いた。

まさかと思いつつ腕を見やると、手首の辺りに金色の輪が展開し、雷光がバチバチを煌めいている。フェイトのリングバインドが発動したのだろう。

そして動けないの聖の視線の先には、巨大な桃色の球体と、それに集まっていく無数の星があった。なのはお得意の集束砲だ。しかも周囲から魔力を集めているあの砲撃は、ヴィヴィオを救出する時にも使用したスターライト・ブレイカーだ。

顔を引き攣らせつつティアナを見るが、彼女も見事にバインドに捕まっており身動きが取れない状態にいる。

「え、ちょ、マジ？」

思わず上ずった声が出てしまったが、なのはがそれを聞き入れてくれるわけもなく、次の瞬間には彼女の力強い声が響いてきた。

「スターライト……ブレイカー……ッ!!!」

声と共に放たれた超極太の桃色の砲撃は真っ直ぐこちらに迫ってくる。砲撃に一切の容赦はなく、完全にこちらを昏倒させる一撃だ。いや、一撃と言っているのだろうか？ アレに呑み込まれたら数秒間は魔力の奔流にもみくちゃにされるのだ。

一度アレを経験しているからなんとなく分かる。あの時は結構耐えたものだが、今回は無理だと思う。

けれどそんなことを考えていたら、既に桃色の砲撃は目の前にまで迫っていた。

「あー、これは無理だな」

呟いた瞬間、彼の身体は桃色の魔力の奔流の中に呑み込まれ、一瞬で意識を刈り取られてしまった。

模擬戦結果

所要時間 七分二十八秒。

赤組 生存一名、行動不能一名
青組 両者生存

勝者 青組

模擬戦を終えてしばらくした夕刻、聖はヘリポートでぼんやりと夕日を眺めていた。

なにか考え事ですか？ マスター

「まあ……な。ちょっとばかし、アイツ等に答えないといけないことがあるから、それで悩んでた」

ふわりと浮き上がりながら問うてきたシュトラルスに返しつつ、彼は大きくため息をつく。

……やっぱりハッキリしたほうがいいよなあ。あの時は空気で何とかだったけど、いつまでもなあなあで済ませるわけにも行かないし。

悩んでいるのは、なのはとフェイトに自分の想いを伝えることだ。生まれてこの方、女子と付き合ったことのない男である聖は、どういうタイミングで切り出せばいいのかと悩みに悩みまくっていた。

……しかし告白と言うのはやっぱりロマンチックな方がいいのか？ 夜景が綺麗なレストランとか、ホテルとか？ いやいや待て待て、性格によってはそういうのが嫌いな子だっているだろうし……。

あの、マスター？ さっきから完全に思念がこちらにまで伝わってくるのですが

「え、マジ？」

気付いていなかったようですね……。しかし、随分と悩まれているようです。これが俗に言う恋煩い？ でしたか。なかなか興味深いです

「若干外れているような気もするけど、まあそんなもんかな」

なるほど。そしてマスターの想い人と言うのが、なのは様とフェイト様ですか」

その言葉に聖は軽く頷く。

「あの二人はオレの大切な人になった。守りたいと思ったし、一緒に居たいと思った。それにヴィヴィオはオレのことを父親として接してくれている。そんな三人から離れることは出来ない。いや、したくないんだ」

だったらその想いをそのまま素直に伝えればいいのではないですか？ 場所とか、雰囲気とかそういう考えずに、自分の気持ちに素直になって、思いを伝えれば、きっと答えてくれるはずですよ

シュトラルスの言葉は安定したトーンだったが、その中には優しさが含まれているようだった。どこかクラウンと似た言葉を吐くシュトラルスに聖は苦笑した。

「そつだな。お前の言うとおりかもしれない。いつまでもウジウジしてたら愛想尽かされちまいそつだしな」

優柔不断な男は嫌われるといっていますね

「……お前、そういうの何処で覚えてくんのよ」

妙に年増感溢れるシュトラルスに呆れながらも、聖は覚悟を決めて隊舎の中へ戻っていった。

いつもどおり三人と夕食を済ませた聖は、私室にあるソファになのは達と向かい合うように座っていた。

「話したいことってなに？ 聖くん」

なのはが首をかしげながら問うてきた。それに続くようにフェイトの膝の上に載っているヴィヴィオと、フェイトも疑問を孕んだ視線を送ってくる。

三人の様子に聖は一度大きく深呼吸をすると、口を開いた。

「なのは、フェイト。随分と遅い告白になっちまっけど言わせてくれ。オレは、二人のことが好きだ。だから、その、なんだ……これからはずっと……ずっと……」

そこまでは言葉が出てくるものの、どつにもこつにも最後の言葉が出てこない。二人も顔を真っ赤に染めてしまっていて、こっちもこっちで恥ずかしくなってしまうている。

……ええい！ なにともってんだオレは！ 言えばいいんだよ言えば！ 根性見せる白雲聖！！

心の中で己を鼓舞して、自分を奮い立たせると、聖は声を大にしていった。

「これからはずっと一緒にいて欲しゅい！」

噛んだ。

盛大に噛んでしまった。

告白したことの恥ずかしさも相まって、聖は自分の顔が熱くなり、体全体が沸騰するような感覚に襲われた。

やっちまった、と思いながら二人を見ると、案の定二人はどこか反応に困った様子だ。けれど嫌な表情はしていない。

なんともいえない空気が流れるものの、なのはとフェイトは互いに頷き合つと、微笑を見せながら告げてきた。

「いちばんこそ、これからもよろしくお願いします」

「えっと……それは、OKってことでいいのか？」

「もちろんだよ。私達も聖と一緒にいたいし、ね？　なのは」

「うん。それに聖くんだけにヴィヴィオを任せてもらえないしね」

フェイトの膝の上でキョトンとしているヴィヴィオの頬をつつきながら言うのは、少しだけ悪戯っぽい笑みを浮かべている。

彼女の様子に聖は肩の荷が取れたのか、大きく息をつき改めて二人に視線を向けた。

「そんじゃ、改めまして。これからよろしくお願いします、お二人さ

……」

「おめっときーん!!」

聖が言い終わるよりも早く何か部屋の中に飛び込んできた。見ると、にやにやとしているはやての姿があった。彼女の後ろには、申し訳なさそうな表情を浮かべているスバルたちの姿も見える。

「はやて、お前いつから……!」

「まあまあまあ、細かいことはええやないかあ。それよかやつとプロポーズしたんやねー。このまま何事もなく終わるんやないかと思つて、ほんまひやひやしてたわー」

「おい。ちょっとまてお前、まさか最初っから聞き耳立ててやがったな!」

聖が声を張り上げながら言つと、はやてはなんともいえないイイ笑顔顔を浮かべて頷いた。

「ええ告白だったと思うよー。真っ直ぐで回りくどく言つよりはずっとええ。まあ最後噛んだのは残念やつたけど」

「うっせー! つーか最近妙に視線を感じると思つたらお前ははやて!」

「せやー、こんな面白そんなこと放つておくわけないやんけー。スバルたちも喜んで協力してくれとつたし、なあ?」

はやては視線をスバルたちに向けるものの、彼女らは苦笑いを浮かべるだけだった。

「嘘をつけい！ 道考え立って無理やり間溢れてんだろっが！ とい
うか隊員の部屋に聞き耳を立てるなよ……」

「部隊長権限！」

「世間ではそれを職権乱用という……」

「まあ細かいことはええやないの。ほんなら私はこれで帰るけど、聖
くん。二人のこと泣かせたらアカンからね」

最後だけは真面目な表情で言った彼女は、そのままスバルたちと
去っていった。残された四人はまるで嵐が過ぎ去って行ったような
感覚を味わった。

「アイツのあの性格はなんとかならんのか……」

「まあはやってアレが通常運転だしねえ」

「子供の頃からイベント好きだったからっていつのもあるのかもね」

二人はしみじみと呟いていたが、そこでフェイトの膝の上に乗って
いたヴィヴィオが聖の袖を引っ張りながら問ってきた。

「パパとママ達これからずっといっしょ？」

「ああ。ずっと一緒だ。もちろんお前もな、ヴィヴィオ」

視線を合わせるためにしゃがみながら言うと、ヴィヴィオも嬉し
かったのか頬を緩ませた。

「さてつと、それじゃあこれからの予定を決めないとなあ。まずは二人の実家にこそ挨拶で、いいのかな？」

「そうだね。じゃあ今度私達二人がオフの時に行こうか」

「私も母さんに連絡しておくね」

二人はそれぞれの家に連絡を入れる予定を立て、聖は聖で二人の両親と家族に挨拶するときの言葉を考えることとなった。

それから一週間近く後の休日に、聖はヴィヴィオを含めた四人で挨拶をしに地球へ赴いた。

最初に挨拶したのはフェイトの義母であるリンディだ。彼女とはクロノつながりで何度か顔を合わせているため、緊張せずに挨拶をすることが出来た。ことのいきさつを全て話し、フェイトに抱いている気持ちを素直に話すと、彼女はすんなりとOKしてくれた。

そして挨拶を聞いていたクロノの妻であるエイミィもまた祝福の言葉を述べてくれた。ただ、彼女からは「プレイボーイだねえ、聖くん」などと少しだけからかわれてしまったが。

フェイトの家での挨拶を終えた後は、なのはの家へ向かった。けれど、彼女の実家での挨拶は一筋縄では行かなかった。母親である桃子と、姉の美由希はリンディとエイミィのように祝ってくれたのだが、父親の士郎と兄の恭也は聖のことを簡単には認めてくれなかった。

それはそうだ。なにせ聖はフェイトともそついった関係になろうとしていて。そんな人物を素直に認めることはそう多くないだろう。

というか、地球の文化ならぬはずだ。

だから、二人は聖に勝負を持ちかけてきた。二人は御神流という剣術の師範代で、相当の腕前らしい。恐らくなのは芯の強さと戦闘術は彼等から学んだのではないだろうか。

結果から言うと、聖は二人に勝利した。魔法を使わない戦闘は久々だったため、勘を取り戻すのに苦労したが、勝利することは出来た。しかし、思わぬ話も聞いた。

なんと聖の体得している白雲流剣術を土郎が知っていたということだ。修行の一貫で他流派の剣士と手合わせした時に会ったようだ。

二人に勝利したことで、聖には正式になのはと関係を持つことが許された。そして別れの際、恭也にはなのはを絶対に悲しませるなという使命も預けられた。

両家の挨拶を終えたあと、今度は白雲の家に向かい、家庭を持つことを義父と義母に報告した。義母は素直に祝福してくれたものの、こちらもやはりと言うべきか、父親が立ちふさがった。

義父は聖との一騎打ちを申し出てきたのだ。理由を聞くと、「自分を倒すことが出来ない者が家庭を持つなど、断じて許さん」とのことだった。一日前に土郎、恭也と闘った聖だが、まさか義父からこのような申し出をされるとは思わなかった。

しかし、ここで退いては何の意味もない。だから彼は義父と正々堂々、正真正銘の一騎打ちをした。同じ白雲流を扱うのだから、型で見切られてしまうのはどちらも同じ、勝敗を決するのは、単純な力量差と言っていいだろう。

戦いは少なくとも十分以上は続いた。義父の剣技は凄まじく、シゲナムとも闘えるのではないかと錯覚させるほどだ。けれど、聖も負けることは出来ない。せっかく両家から許しを得たというのに、ここで負けては全てが無駄になる。だからこそ、彼は義父を越えた。

魔法など一切使わない、彼自身が持つ戦闘能力を全開に発揮した、全力全開の攻撃を叩き込んだのだ。結果、義父の剣は折れ、戦闘続行は不可能となり、義父もまた聖を認めてくれた。

こうして、三家の許しを得た三人は正式に関係をもつことになった。

更に時間は流れてその数カ月後、機動六課はその役目を終えて解散。しかし、ただ解散で終わらないのが、機動六課だ。最後の最後でリミッターを解除したフルドライブ状態の隊長達全員と、スバル達との最終模擬戦が執り行われたのだ。

聖は隊長ではあるが、流石に数が合わないので彼等の戦闘をヴィオと共に見守ることにしたが、やはり双方のぶつかり合いは、見ていて楽しかった。模擬戦は約二十四分行われたが、勝敗の結果は公式の記録には記されていない。聖もその勝敗は自身の胸にしまっておくことにした。

そしてフォワードメンバーはそれぞれの道を歩んでいった。スバルは正式に特別救助隊へ転属。災害救助の先鋒であるフォワードトップとして、人命を救助し続けている。その力は「人命救助の為に生まれ育った」とさえ形容されるほどの実力を示しているとまで言われているらしい。

ティアナは一階級昇進扱いで、次元航行部隊に転属、フェイトの補佐官をしながら執務官への道を確実に歩んでいる。聖ともよく話をしている。

エリオとキャラロは自然保護部隊に希望配属し、エリオは竜騎士としてキャラロは召喚師として共に密猟者の摘発、自然保護業務に当たっている。また、エリオはルーテシアとも友人関係になったらしい。

ヴァイスとアルトは共に地上本部のヘリパイロットとして勤務。ヴァイスは返納していた武装局員資格を再取得して、武装局員としても勤務できるようになった。妹のラグナとの関係も回復してきている。

ルキノは本局の次元航行部隊に転属、事務官補としてグリフィスの補佐を務めながら操舵手補として艦船操舵手への道を歩んでいる。

グリフィスはルキノと同じ次元航行部隊に転属し、彼女の上司として艦船の事務業務にあたっているとのことだ。

また、道を歩み始めたのは六課のメンバーだけでなく、ナンバーズのチンク、セイン、オットー、ノーヴェ、デイエチ、ウェンディ、デイードは隔離施設で更正に向かっているらしい。彼女らの更正を促しているのはギンガで、ギンガ自身もまんざらではない様子。噂ではナカジマ家で何人が引き取るという話も持ち上がっているらしい。

ルーテシアもまた隔離施設で更正プログラムを受けていたが、魔力を大幅に封印し、管理局の保護観察の下、第三十四無人世界「マークラン」の第一区画で、意識と取り戻した、母、メガーヌ・アルピーノ、そしてガリユールと静かに暮らしている。こちらも聞いた話によると別人のように口数が増えたという。

アギトはチンク達やルーテシアと隔離施設で過ごした後、八神家の一員となった。新たな「ロード」はシグナムで、役職的には彼女の副官となった。因みに保護者はシグナムではなくて、はやてである。

しかし、更正仕切れていないものもあり、ナンバーズの残りである、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、セツテの五人は危険性があるとして軌道上の留置場で、スカリエッティと共に監視下に置かれている。

そして残った隊長達はどうかと言つと、はやてはその功績を評価され、数多の指揮官職の勧誘を受けたが、それらを全て辞退し、しばらくはフリーの特別捜査官に戻ることを決意し、再び海と陸を歩き来して密輸品や違法魔導師関連の捜査指揮に取り組んでいる。海では捜査のトップである捜査指令を務めることが多く、自分の部隊を持つという夢に向かって邁進している。因みに、はやて曰く「またこのメンバーが必要になるなら 私が絶対集めるけどな」とのこと。どうやら部隊長はまだまだ継続中らしい。

彼女の家族であるヴォルケンリッターの中では、ヴィータがなのはに教導官の道を進められ、回答を保留にしており、現在ははやての下で働いている。シグナムは正式にアギトのロードになったが、時折「保護の先輩」としてフェイトに意見を仰ぐこともあるらしい。エリオへの剣技教導と、聖との模擬戦は続けており、充実した日々を送っているらしい。聖との模擬戦は過激さを増しているようで、模擬戦用の練習場が崩壊したこともあるとかないとか。

リインは新たな家族であるアギトを迎えるものの、喧嘩をしたりもあるらしいが、現在は資格取得に向けてがんばっているとのこと。シヤマルはなのはと聖の主治医として、無理をしがちななのはを諷めている。聖とは聖王の力関連での身体検査が主であるのだが、二人して無理をすることに嘆いている。ザフィーラは陸士108部隊への

出向が多く、ギンガからは捜査に関して師事されている。人間形態でいることも多いらしい。

そして、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、白雲聖、ヴィヴィオの四人はというと……。

なのは、フェイト、聖の三人は六課が解散した半年後に正式に入籍し、結婚。若い三人の結婚は心配事も多かったが、ラブラブ状態であり、心配などいらなかった様子。ヴィヴィオは彼等に引き取られ、聖の娘として聖王教会系列の学校であるSt・ヒルデ魔法学院に入学し、勉学にいそしんでいる。悩みとしては、両親達が心配で学校に覗きに来ることがあるらしく、恥ずかしいとのこと。

それぞれの役職として、なのはは機動六課解散後、昇進提案があったものの、はやて同様に辞退。戦技教導官の空戦魔導師として現場に残っている。フェイトは機動六課でも活動が高く評価され、執務官として名をはせている。

聖は執務官としての活動を続け、妻であるフェイトと行動を共にしたり、単独で次元犯罪者の逮捕など海と陸を忙しなく駆け回っている。時にはなのはの教導に顔を出して、生徒達の育成を手伝ったり、なのはと模擬戦を行って参考資料を作っているらしいが、殆どは使えないものになってしまったらしい。

けれど彼はどんなに忙しくとも、家族への配慮は忘れない。ちゃんと家に帰ってヴィヴィオの勉強や、魔法の手ほどきをし、時には思い切り遊ぶ日々を送っており、父として、二人の妻を持つ夫として、家族へ無償の愛情を注いでいる。

そんな忙しい彼だが、辛いことなどなく現在の生活はとても充実していて、「幸せだ」と述べている。なお、彼は入り婿としてそれぞれの

家族の姓を取り「高町・H・聖」と言う名に変わった。

白雲聖は聖王のクローンだ。これは絶対に変わらない真実であり、だれにも帰られない現実だ。けれど彼は、今、娘を持ち、妻を持ち、多くの仲間を得て日々を幸せに過ごしている。

時には危険な任務に身を投じることもあるだろう。しかし、彼はもう一人ではない。仲間がいて、頼れる人がいる。それだけで、彼の力は何倍にも膨れ上がるのだ。

そして彼は今日も管理局の執務官として仕事をこなす。

「さてっと、今日の相手はなんだったっけか、シュトラルス」

今日は密輸品を扱い利益を得ている者達の摘発ですね。相手は多いですが、貴方にかかれば問題ないでしょう。マスター

「お褒めの言葉どうも。じゃあサクッと終わらせて帰りますかね。今日はなのはの手作りシチューの日だ。ヴィヴィオとも約束があるしな」

すっかりお父さんですね。マスター

「あつたりまえだろ。そんじゃ、行くぜシュトラルス……」

聖はシュトラルスを中空に放ると、叫んだ。

「セツト・アップ!!」

瞬間、彼の身体は光に包まれ、光が晴れたときにはバリアジャケット

トを装着した聖の姿が露になった。

彼はそのまま飛翔した。何処までも続く青い空に。

かつて王の器として生み出された少年がいた。けれど彼は失敗作と揶揄され、本当の王となることは出来ず、兵器として育成されていた。繰り返される非道な実験、やがて少年の心は磨耗し、彼はその世界から逃げ出した。

やがて、成長した彼はその手に光を得た。守りたいと想う人ができ、救いたいと想った少女がいて、彼は過去と対立するために再び闘った。その身が壊れそうになっても、不屈の闘志を持った彼は過去の決別を果たす。

そして今、彼は家族を持ち、幸せの中で暮らしている。無限大の幸せの中で。

魔法少女リリカルなのはStrikers King Season
g clone of another

〈完〉